

あしあと



あしあと

2

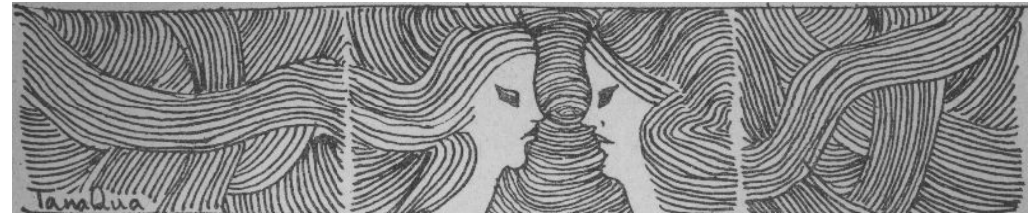
H. Endo

KOFU 1ST HIGH SCHOOL



甲府第一高等学校第二学年

- 1 9 6 5 -



あしおと 目次

同 じ く

美咲二丁目(13)ー40 (甲府一高新町名) 風物寸描

……学年主任 保 坂 忠 信…1

1	組	……4
2	組	……27
3	組	……54
4	組	……75
5	組	……104
6	組	……122
7	組	……147
8	組	……166
9	組	……195
10	組	……211
11	組	……231
12	組	……254



同 じ く

— 美咲二丁目 13 1 40 (甲府一高新町名) 風物寸描 —

学年主任 保 坂 忠 信



第一号に、「あしあと・あしおと・期待」を書いた。第二号も同じくである。学校の生活には、いつも同じような事が繰返され、その繰返しの中に、変化の水車がかすかに廻っている。カリキュラム、テスト、クラスの編成、体格検査、身体検査、健康診断までの経緯など、その変化はささやかで、この二十年間の教育界の変化は大きい、実際には、進み、退き、進みといった具合である。併しこの変化のおこす僅かの歪みが思わぬ爆破力を用意していて、宇宙時代というものに、われわれはいつの間にか入っているのかもしれない。これが結局「進歩」の実態であり、学校生活のあしあと、あしおとは、その変化のあとであり、響きであろう。

北館から中館へ渡り廊下がぬけきろうとするあたりに、梅の花模様、あるいはごたごと斑点がかたまつて、S字を画いている、犬のあしあとがコンクリートの中に刻みこまれているのである。あのあしあと1ある早朝、中館の二階から駆けおりてきた僕は、風のように、茶色の犬がかけぬけていくのを見た。いや見たような気がする。工事中のしめった儘のコンクリートの中を、ごみの焼却場のあたりに餌ものあさりにでかけたのであろう。あの野良犬のあしあとは思いがけなく永遠にコンクリートに刻みつけられてしまったのである。

見知らぬ人間の領土をさけてゆくあのうねった犬のからだの曲線の瞬時の印象は、何か暗くわびしい映像として、僕の心に残ってしまった。その廊下を僕は毎日通る。同僚も、君らも通る、足の波が騒然と、望みにもえて華やかに、又、ささやかなつまづきにひとり悲しげに。ただ僕らのあしあとはコンクリートに残っていないだけである。いつもこの瞬時的映像を人は誰彼の心に投げかけてすぎ去るのである。

卒業生が学校によると、なつかしいですねという。七、八年たっただけでもとても懐かしいようである。学校も随分変りましたね。彼らはなつかしそくにキャンパス風景を見廻す。卒業年代に従って、体育館、図書館、日新ホール、売店の順序に懐しさが身に沁みるらしい。この間の一高新聞に小さな写真がのっていて、音楽室わきのアンズの古木が、今建築中の三階

鉄筋の新校舎の工事のため、切られてしまったと報じていた。うかつにも、始めて知ってびっくりしてそこへとんでいった。植えかえしがきかなかったから切られたのであるが、惜しいものである。百年の樹令を数えるものがきられる時には、宇宙の生命の一部がたち切られるような悲しみがある。数年前、河口湖畔の古木が材木商にうられて、きられることを日本の英字新聞でよんで、それを止めるための運動の基金にと、山梨日日に金一封を送ってきいたイギリス人があった1もはや、殆ど枯死しているのので、切らざるを得ないのです。消防自動車を買うためにその代金をあてます1そんな風の回答がそのイギリスに送られたと思う。あのアンズはもとの甲府中学の「植物園」から昭和五年の移転の時、移した古樹で、何本ものアカシアを根こそぎにした三十四年九月の伊勢湾台風にもよく耐え、少くとも八十余年を鶴城・御崎の生徒たちに憩いを与えてきたのである。ここ二、三年の弱りはひどく、根の周りには木柵がつけられた。鶴城のいぶきをいわばえんえんたる気塊の中にもち続けていたのである。

ああ雄々しきかな傷ましきかな

かの常盤木（ときわぎ）の落ちず枯れざる

常盤木の枯れざるは
百千（ももち）の草の落ちるより
傷ましきかな

このような感慨を感じた。又この老樹の中にウインストン・チャーチルの風貌を思うこともあった。緻密で豪たん、気どりの感じられない紳士、節度と自由が屈託なく彼の中に住み、個人でも国家でも苦難の時には思いだすだけで力となつてくれる風貌は、まさに、さかんな時の巨樹そのものであった。この同じ年の「進学パンフレット」の裏表紙のうらを僕はサー・ウインストンの言葉で飾った。註1 私は楽観論者だ。楽観論者以外であることは大して効能がない。―そして、こう後記に書いている。「今年の春は、進学不振の声をきいた。……一九五三年五月十一日大陸で行ったサー・ウインストン・チャーチルの言葉をかかげた。カンナンに当って、V字を作ってイギリス国民を振起させた閣将である。この守護者よ、常によく戦う老と共にあれ」故チャーチル首相の近影をみるといかにも疲れて痛々しく感じる、悲しい常盤樹であった。註2「私は何もかもあきてしまった」わが国の新聞にも伝えられた彼の最後の言葉といわれるものである。ニューヨーク・タイムズはこれと一所に、この老政治家がなぜ政界を退いて悠々自適しないのですかという質問に対するしやれた返事をあげている。註3「バブ（イギリスの居酒屋）がしまつたら、出てゆくさ」九十才になつて死病にとりつかれた時、バブがしまつ

たとかんねんしたのだろうとタイムズは話を加えている。この政治への執念は正に宇宙生命の一部である老樹の雄々しさである。

今日、二月十七日は予餞会で久しぶりに映画館に入った。二年の生徒会長福田君の・送別の言葉に答えて、三年生代表の小兵の小関君、相変らずにここにこ首をかしげながら、「僕のいつていることは、自分にも何だか分りませんが、皆さんは分

つてくれるでしょう」分つたよと僕は、うす暗いボックスの中で自分にいつてみる、きく者一人一人が、この一高の伝統の

保持と発展とに尽してくれた去りゆく先輩の言葉は、彼の行為と態度を通して理解できますといっている様に思われた。色彩映画は大きな画面で楽しかった。インディアン赤の赤い顔がヨーロッパ人開拓者の家に娘として育てられているが、本人も、兄弟たちもしらない、そだての母だけが知っている。やがて仲間の開拓者にも家族にも分る日がくる、インディアン大来襲、彼女は「部族」へ訣別し、「アメリカ人」となる。オードリ・ヘップバーン扮するインディアン娘で、一種の感動をもつて楽しくみた。数年前、州はどちらの出身ですかときいたら、インディアンですと、あるアメリカの女の先生が答えた。一寸、めんくらつたが、ヘップバーン風のやや角張った顔で、なかなか感じのよい人であった。人種の問題は現代アメリカが今なお苦しんでいる苦悩であり、この映画は、過去のアメリカの歩んだきびしい、「あしおと」にみちていた。最後の画面もよい。インディアン大来襲は夜明けと共に終わり、ほっとして仰ぐ空にガンが群をなしてとんでいく。いつも、人間の心の慰めとなるのは、自然の姿、季節の静かな推移であろうか。去年のこの一号には、二月二十七日のニューヨーク・タイムズの社説、「かすかな春のきざし」(The Subtle Signs)を引用したが、こしは、一月も早く、二月七日の社説(国際版)に、「かすかな春のきざし」(Subtle Signs of Spring)がでている。変転極まりないニューズのかなたで、自然の緩慢な動きが忙しいジャーナリストに、同じ題目を与えているのは、皮肉でほえましい。「春は色々のものの総和で、天気はその一つにすぎない。影もみのがせないし、あのとつと押しよせるような鳥の声も重要である。……もし、唇を忘れて耳をすますなら、ここかしこに春のかすかな胎動がきこえるのである―これがこの論説のくくりなのである。僕らの周りにも、このかすかな胎動はいっぱいである。中庭のポプラの並木も、校門入口のプラタナスもこげ茶の芽を固くしているが、化学室南の日当りのいい花壇は、チューリップ、キンセンカの葉に掩われ、水仙はちよつぱり青さをのぞかせている。マバラの赤い芽が、はちきれそうに大きくふくらんでいる。その隣には、アネモネ、ヒアシンス、ラナケラス(?)などをくるとんだヴィニールがいっぱい汗をかいている。春季特別講習も、君たちの春のきざしの一つとなった。長い間の「コース」選択もどうやら決つて、君達はいよいよ高校生活の最後の年に入る。こしあしあとはどのように印されるであろうか。南ベトナム問題を始めとする不安のあしおとがなくなることを祈る一方、諸君のあしおとが強く、ひるまない、自信にみち、仲よく、明るいひびきをたてるように祈つてやまない。もうそのようなあしおとがきこえ始めているではないか。

註 チャーチルの言葉

(二月十七日)

- 1 "I am an optimist. It does not seem to be much use being anything else."
- 2 "I am bored with it all."
- 3 "I leave when the pub closes."



夢のセールス

組主任 渡 辺 弘

若い血潮の予科練の
七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶ飛ぶ霞が浦にや
でつかい希望の雲がわく
ぼくの中学生の頃であつた。この歌がさかんに歌われた。友人の二人、三人が予科練を志望して教室から去って行つた。七つボタンの制服は凜々しく、あこがれをいだかせた。七つのボタンは七つの海制覇を象徴していたのであろうか。その海を飛行機でとびまわる。歌っているうちにおのずと「でつかい希望」がわいてくるようにおもわれた。その頃、学校へ予科練の指導者らしき人が来て全校生を集めて講演した。弁舌は実にさわやかで、ぼくたちはまんじりともせず、その一語一語を胸におさめた。軍国主義日本の、その中で同じ呼吸を強いられているぼくたち中学生の描きうる最大の夢は「たとえばからしい」ものであつたにせよ、飛行機に乗って世界の海を駆けめぐり、桜の花のごとく

まだまだ未熟で弱いから
人生を素直に力強く生きたく思うから
自身に忠実に生きたく思うから
厳しく誠実に進もうとおもうから
他人の幸福も考えてみたと思うから
そのためにも
もう少しばかり
自身だけに思いをよせるわがままな若者で
いることを許してほしい。
独善主義に生きるわたしを。

そのためにも
浅 香 千 代 子

にいさぎよく散ることであつた。どうせ「散るのが生命」の若者にとつてこれほどにかつこうな夢はなかつた。ぼくたちはこの講演を聞いて大きな夢を抱くことになつたのである。ぼくたちは異常なまでに興奮した。講演が終つて教室に帰つて、君は紅潮した頬を輝かしながら壇上に立つて、微をとばした。クラス全員で予科練に行こうというのであつた。誰も否定はしなかつた。否定できないほどに、興奮のつぼと化し、それは止まるところを知らないといった感じだつた。組主任の先生もただ傍観しているだけで手の下しうはなかつた。「父兄とも相談して明日はつきり返事をするように」とだけおつしやつた。まるで気でも狂つたかのように、予科練の歌を歌い、それは日暮れどきまでつづいた。

翌朝、教室内には妙にそらぞらしい気分が漂っていた。冷ややかに互いの気持をさぐりあつているように見えた。家へ帰つて相談してみると望ましい返答をえられるはずはなかつたのである。血気にはやつた無謀をたしなめられたのであつた。

四、五人の友だちがこのとき志願して行つた。
この夢は一朝にしてついで去つてしまつた夢であつた。さればこそ夢のごとき夢であつたのだが、単純に夢を買いこみ、陶醉したことがその後、長くくやまれた……。

1 縁側の日だまりにうずくまつて、黄梅のみごとに咲いたのを今ながめている。ガラス越しの外は激しい北風が吹きまわっているのだが、ここだけはぬくみもよんで動かない。

ぼくはあの悪夢のセールスマンから、はかない夢を買いこんだときのことを思い出している。六つになる子供が傍で無心にクレパスで黄梅を描いている。わけもわからぬ、絵にもならぬものを真剣に描きつづけている。ぼくは決して容赦しない。「夢は売らない」でながめている。

二年一組の諸君の顔々が思い出されてくる。この諸君たちに、まして「夢のセールス」は安々とできるはずはない。

花に水をそそぐのはぼくの役目ではあつても、花を咲かせるのは花自身にまかせられた心々のことなのである。

陽だまりには、ぼくだけの夢がわく。

砂 漠 幻 想

鶴 田 和 彦

針を打たれて悲鳴をあげた
砂漠の電柱
正三角錐のピラミッドが
泡の中に浮びあがる
くびつしよと絡みあつた海鼠
シースラック
コケティッシュな笑いをあげて
カメレオンが蛇に喰まれる



私の夢 丸山道子

欲張りな私はいろんな夢をみました。

遠足に行つては、「ああ私もバスガイドさんになりたいな。」

素適なお店に入つては「そうだ、こんなお店をひらきたい。」

飛行機が飛ぶのを見上げては「スチュワーデスつていいなあ。」

又、ナイチンゲールの絵本を読んで看護婦さんになりたいと思つたこともありました。

いろいろ変わる、そんな夢と、

私は競争する様に成長してきました。

然とした一つの夢がありました。

幾つだったでしょう。

私はお星様にあこがれました。

大好きなお菓子と、同じ位好きになりました。

高い高い空の広い広い空の、その上で小つちやな私を見おろしてきらきら光る優しいお星

そしてきれいな空をながめては、
誰に頼んだらなれるのかな
そんなことを考えたものでした。
今もお星様と私の夢は、何かしら見えないもので結ばれています。

私の夢は、空のずつと遠く、高い所にいて
きびしい目で私を見つめているかも知れませ
ん

でも、いつもそのそばには、小さくとも力
いっぱい光りつづけるお星様がいて、私を呼
んでいてくれる様な気がするのです。

あの光の神秘的な美しさの中には、はかり知
れない力が潜んでいます。

悲しい時寂しい時、
どんなに暗く曇つた心をも、それは、平和に
澄んだものにしてくれるのです。

そして今夜も、
幼いあの日と遠い未来を思つて、
私はお星様をあおぎます。

夢でなくて良かった

古屋哲雄

太陽のかくれた、冷たいブルの片隅のコー
スで泣いた事を忘れないでいたい。

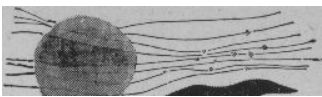
二度と競うことのないであろう、そのブル
の冷たさの中で、こらえても滲んできたあの
涙を忘れないでいたい。

その涙を誰にも見せまい、と水の中に顔をし
ずめていたあの時の事を忘れないでいたい。

『夢であつたら……』と何度も願つてみた
が、やはり落ちて来たあの涙の塩辛さを忘れ
ないでいたい。

ついに勝つ事の出来なかつた淋しさに、自分
の弱さに、そして努力の足りなさに、情なく
て流したあの涙の冷たさを忘れないでいた
い。

そして、それでも、やつとタオルに冷えた体
をつつんで、ふと見上げた時に、ニツコリと
笑いかけてくれた、あいつの真自な歯も、俺
はきつと忘れないでいたい。



はじめに

「夢を語る」1これが
私たちのクラス全員のデー
マである。荘周の夢に胡蝶
となる哲学的瞑想もあり、
黄梁一炊のはかない夢を語
る者もあり、内容はさまざ
まであるが、ここに何らか
の意味で「私たち」が語ら
れていることにまちがいな
い。

夢について

1 遠藤 ひろ美

「夢」国語辞典をひもとくと、一、眠つて
いる時、実際のようにいろいろのものとを
経験する現象。二、はかないこと。たのみに
ならないこと。三、まよい。四、実現はむず
かしいが将来、やりたいと思うことがら。と
記してあった。まあ一は別として、二、三は
思つてみても情けない様な気がする。

「私にはこんな夢があります。」

「どんな？」

「はい、これこれしかじか。」

「まあ／＼はかないこと。」とこんな二言でか
たづけられてしまったのでは、もう生きるの
もいやになつてしまふ。してみると、先生の
おつしやつた「夢」とは、四ということにな
るだろう。さて、夢について述べているうち
に余白が少なくなつてしまつたが、私の夢と
いうと、「悔いなく生きる事。」この一言に
尽きるだろう。でもこんなこと誰でも、何も
私に限らず、思うことだろうが、私のは少し
違う。「悔い」とは後悔ということ。すなは
ち、今が今の行動について、時間の経過の後
自己嫌悪に陥る事。こういうことがなくてほ
しい事だ。でも私はしばしば、この現象にと
りつかれることがある。よしそれが自己嫌悪
というような高尚なものでないしろ、とに
かく、私が過去をふり返つて、いやあな感じ
になるのは事実だ。私の場合、これ一恐れ多
いが仮に自己嫌悪として1は主に言語の上
から来る。「ああ、あの時あんな事を言わなけ
れば良かったのに。私としたことが。」とこ
んな具合に、・いつも後悔ばかりしている。教
科書によると、「自己嫌悪とは、客観的に見
て愛すべきものであり、主観的には苦しい
やなものだけれども、する必要があり、しか
してそれを痛切にすることから、やがて自然

にその境地を脱却するようになるべきもの
だ。」としてある。なるほどと思う。私もそ
れをするたびに、過去のよくない自分をひき
はなし、人間的に成長しているのだとは思
う。がしかし、たまらなくいやだ。おもわず
頭を叩きたくさえる。で私は考えた。要す
るに私は、失敗をしたくないという一念で、
今まですごして来たのだから、これからも、
自己の言語行動について細心の注意を払つて
いたとえそれが原因で、私というものが、消
極的な人間になつても、1生きていこうと思
う。最後に、私は、自分をきびしく見つめる
ことのできない私に次のことばを送ろう。
「待て、而して希望せよ。」1モンテ・クリ
スト伯より1

2 宅間 功

「夢とは人の持つ理想、望みであろうか？
それとも他の何ものかであろうか？」今の自
分にとつて知ろうと思つても、知る事の出来
ぬ事なのかもしれぬ。しかし理想が夢である
のなら、人の生涯においてより大きい夢を持
つ事は、その人をさらに上に進歩させ、向上
させる物ではないだろうか、それ故に夢は、
人の運命をも定める事になるかもしれぬ、故

に、人は自分の許す最大最良の夢を常に自分の胸中に置き、それによって、その人の生の道を歩くような心がける事によって、その人は自分の生涯を最も立派に、美しく生きたと言えるかもしれない。それで人はその生命を断つ時の来る迄は夢を持ち続けて生きて行くのではないのだろうか。

3 小牧 一民

メクラの夢

夢は視覚的なものである。それならメクラは夢を見るだろうか。

先天性のメクラおよび五歳以下でメクラになつた者は、睡眠中に完全な暗黒のなかにばかりいるわけではない。夢を見るには見るがそれは、聴覚的、触覚的なものだそうだ。

たとえば、ある先天性のメクラが見た夢にラジオのかすかな音を聞いたり、電気計算器の響きを感じ、人の声を聞いたりし、又自動車にさわり、これを撫で、木の橋の上では板がこわれる感じがした夢を見たそうである。しかしそれらの夢は断片的だそうだ●

メクラの夢のうちで、ヘレンケラーの夢はとくに興味がある。彼女はメクラであるばかり

りではなくツソボであり、オシである。その上彼女がすばらしい知能をもっているために描写がはつきり行なわれているそうである。彼女は生まれて一年八ヶ月でこれらの感覚を失つたが、教育をうけたため、言葉を理解できるようになった。そして二〇才の時、タイプライターでへ自分の夢をかいたものがある。この夢にも、光、音、触覚、などが大きい影響を与えている。

4 相沢 一徳

夢は本来各人各人の精神の成長や知識、経験の蓄積量で、色々な過程を生ずる。たとえば、幼児が初めて汽車を見て、大きくなったら汽関手になりたいと言う。又小学校には入り、少しばかりの知識を得るとエジソンのような発明家にあこがれ、もつと専門的な事を学ぶと、技術者や大事業家を夢見て、やがて世の中の機構の矛盾や、はかない事を悟ると豪華でなくても人並みな生活と考えるようになる。このように夢は小さいころはだんだん広がっていくが、大人になると知識などによってだんだん限界が生じて小さくなりつやがて現実即したことだけになってしまふ。つまり世の中を知りすぎると夢を満てな

くなるようだ。大人の人人々にあまり夢がないと言うのは第一に世間を知りすぎ不可能らしき事を本当に不可能なありえない事としてしまふからである。そして夢をつまらない意味のない物としか考えたいから、若い者を見てうらやましがる。僕達は大人になつても歌にも歌われているようにいつも夢を持つようにしたい。

5 戸島 雅彦

夢、夢、夢。言葉のニュアンスからは非現実的空想的な感じを受ける、シャボンのような、ほんの少しの衝撃で、はかなくもこわれてしまふ、夢とはそういうものであると思う。なぜならば私の経験を通じて夢はいろいろと展開したので。現在私は読書に対して少々嫌悪を感じているが（ずくがないのである？）幼年時代は父母の影響を多少受けたのか偉人の伝記を多読した。その中で当時夢中になつて読んだのが野口英世の伝記である。これを読んで幼いながらも非常に感銘し、尊敬するようになったと記憶している。この瞬間から医者になり彼のように立派になるのが夢であつた。機会ある事に父母に、親友に自慢して、夢を話したものであつた。しかしその夢

は長くはなかつた。エジソンの伝記を読み終つた時には、すでに野口英世の人間像はかす

んで、医者から科学者へと前に述べたように夢は展開した。しかるに、夢なるものは一時の感激、ショックなどにより、いともかんたんに移行してしまうものである。現在は医学を学ぼうとも、科学を学ぼうとも思っていない。そんな夢は現在の私を見つめれば不可能である。だが私は今でも私なりにささやかではあるが夢を持つてゐる。しかし幼年時代の夢とは、およそ縁のない異質のものである。願望と言つた方が良いかも知れない。現実をすくなくとも知っているからである。夢とは幼年時代の美しい純粹な気持の上で生まれるものであると私は思う。ここでつけ加えておこう。社会を知り、おのれを知つた上での夢は、必ず花咲き実を結ぶことであらう。私は言う「なんじ自身を知れ」と。

6 代 永光春

夢と赤信号

夢が、かたむいている。ふらふらとしてとどめなく脳から流れだし、心からその影が消えていく。おもぐるしい病根のようなものが

心の底から頭をもたげてくる。夢でなんとかおさえようとする。しかし、今のような單調な生活では、夢はかすかになり、病根に染まりそうである。赤信号だ。自転車をとめて、夢の材料を捜そう。

7 堀内 信

人間は何の為に生きているの？と僕が問うと、人々はそんなことを考えても無意味だと答える。それより生きている間、どの道を進んでいくのかを考えると、どの道を進んでいくのかを考えたそれは、後の自分を考えることである。何の為に生きているのかも知らないのに……。

果して、それを見極めようとする時、それは無意味であるか。未来を思索しないで自分の過去を見極めようとするのは無意味なのか。曰く「虚」と。「夢」の中には過去に逆行するそれが在つたのか。曰く「真」と、したがつて「夢」は僕の心の感動を呼び起こすものである。「何の為に生きているか」を見極めることは一種の美を発見することである。「夢」の中には美が存在したのだ。（と思う）。私の美（夢）は過去に立ち向かうそれである。一

8 渡辺 喜宏

「夢について書け」といわれて当惑した。一般にいう「夢」なるものが、どこを探しても自分には、みあたらないのである。自分の理想とする将来の姿が想い浮かべ得ないのである。……自分は「夢」さえ描けぬ空虚なひからびた自分なのであらうか。

いや、どうもそうではなさそうである。自分が夢を持ち得ないのは、自分が現実の重みにおしつぶされ、人間性を疎外された結果というよりは、現在の自己の矛盾に基づいて、「夢」ー理想のあるものが、固定した明確な形をとり得ず常に動いているからのように思える。

すなわち、時に、自分は神のもとに調和統一された、美しい夢幻の自己の内面世界を夢みる。と、心の片隅に、ある暗いかげりがみえる。それがみるみるうちに広がっていく心のニーチェが神を否定し激烈な罵倒を神に浴せる。神の死を叫ぶのである。神の姿が後退する。超人の姿が浮き出して来る。力の超人が猛烈な行動を始め、新しい王国を作ろうとする。ところが、「神の国」を侵された、主宰者は、新たに激しい反撃を展開する。

烈しい柑乱の世界、混沌とした原初の世界それが現実の自分の心の世界なのである。常に矛盾し撞着した世界なのである。何かを求め、模索し続けている自分、「夢」さえも流動している自分なのである。

9 向山 隆

夢と言われても今の僕には何もない。全然ないのである。従ってクラスで決められた夢についての文章は書けないことになる。とはいっても書かないでいると、いろいろな不都合を生じるのでこの際「夢を持つこと」について書くことにする。

●前置きが長くなったが、夢を持つことは良いことと言われている。大きな夢を持つて、それに向かって進む、大変すばらしいことではあるが、さてどんな夢を持つのか？昔だったら総合司令長官と相場が決っていたが。

首相になって国を背負っていく。科学者になって月を目指す。ガンをおおす薬を発明する。・会社の社長・重役になる等々以上幸福な暮らしをする。幸福な暮らしをみんなでするための手段である。ところが以上のような人になるのには、大学を出ないと不可能なのである。ごくささやかな夢をのぞいては大学と

土日。

ここに牛乳ビンを隠しておいたんだがなあ

11 中山 重 雄

一年四カ月後の自分を思う。一年四ヶ月後の自分はどうなっているだろうか。志望する大学に見事合格して回りの人々から祝福され希望に胸をふくらます大学一年生になっているだろうか。又は、どうにかどこかの大学に合格してホッとしているだろうか。それとも毎日満員電車の中で人におされて豆車でも読みながら予備校にかよい、予備校に着いてからも良い席をとるために、人をおしわけていく。そんな事をくりかえしながら暗い気持で勉強をしているだろうか。これらのいずれになるか今の自分にはまだわからない。しかしこれらのいずれになるうとも、その時になつて後悔だけはしないようにしたいと思う。

12 三 井 正 己

広い広い平野のはじに立つ高い高い山の、深い深い山奥で小さな小さな小屋を立て、炭を焼き、白い白いひげがはえて、プカプカとパイプをふかし、毎朝毎朝山の頂きから遠

いう一本道を通らないと夢をみたすことができないことになる。さて現実にもどつて、現在の自分たちの、一番大きな仕事は大学に入ることにらしい。つまり夢の実現をはかるための手段と一致するのである。大きな夢を持つことは、この意味からも望ましいことなのであるが、さて今の僕に夢が持てない理由は一体何であろう。勉強だけの毎日、現在の大人を本などで少しばかり知ってしまったためだろうか。

10 山 田 時 男

夢 (dream) は五臓の疲れという。睡眠中におこる心的現象の一つであるが、ここでいう夢とは自己の力で実現を可能たらしめようとする未来図であり、ビジョンである。

一《Boys be ambitious》、『少年よ大志を抱け』ウイリアム・スミス・クラークの与えたこの

教訓に培われた甲一男児の夢見るところはくの若き而已。

世界人類の一体化や月世界の征服活用は、科学者を目ざす友にゆずり、平等にして不安なき平和な生活の保証は、政治・実業家た

くをながめ、きょうもあすも変化なく悠然と毛皮を敷き、なべのふたを時々あけてひげの中にある口で味をみ、軽くうなづいてまた、しばらく瞑想にふける。そんな生活に魅力を感じずるかい？え、君？。

13 坂 本 佳 寿 子

午前0時庭へ出る／

真黒な巨大なカーテンを破るかのごとくあこがれの無数の星が今夜も輝いている。何という優しさだ。何という荘大さだ。この広い広い宇宙こそ私の行きつく所、幸福の宿る所であると私はいつも信じている。

冬の冷気が名もないこのちっぽけな一微物を襲う。まさに自然力のきびしさの一場面をほのめかす。この静かなハ、ひっそりと静まりかえった瞬間！現在の私の最大の友！身も心も日々の煩雑さの中におかれ各人各人は利欲のみを追求するのに余念がなく、マキユアベリズムの域を脱しようとしれない。この時世に気高く、優しく、私の話し相手になってくれる君達よ／身心の苦痛を取り去ってくれる君達よ／君達こそは最大の友だ。

ああ：私は大空を仰ぐ。

必ず脳裏をかすめる「地球脱出の事」が……

らんとする者に任せ、おれは平凡な一社会人たることを夢みる。

故にえがく夢もまことに稚氣満々、次のごとし。

日曜日

・お金でも落ちていないかなあ。

・早く学校に行つて勉強(?)したい。(高校生)の複雑怪奇な真情)

月曜日

・日曜が早くこないかなあ。(人間の純粋素朴な真情)

・学校の階段がエスカレーターにならんもんなあ。

火曜日

・今日あたり先生が病気にでもなつて、打ち切りにならんかなあ。

水曜日

・どうにかして掃除を、さぼりてえなあ。

木曜日

・もう一度中学にもどりたい。

・テスト中だけ死にたいね。

金曜日

・先生が書取りのテストを忘れねえかなあ。

土曜日

・毎日土曜日と日曜日ならなあ……日土日土

老荘の思想、あの無為自然の境地が……

私は果てしない宇宙、そこぬけに膨大な未来の夢を託した宇宙、そこに行きつくことを願う者なのだ。彼は人間供のいかれた心を清く美しく洗い流してくれる。私にとつてすばらしくりつぽで、尊敬に値する慣儀よ。私は背伸びをしてでも到達したいのだ。

14 中 島 洋 子

k 子さん。

いつかあなたはこんなことを言いましたね。

『夢を持たない人なんて無味乾燥ね。どんなに小さな夢でもいいから、その夢に向かって前進している人ってすばらしいわ。』

私の胸に何かを感じさせるきびしい批判のことばでした。毎日毎日をせわしい中にすごす私は、あなたといっしょに夢を語ることもさえも忘れていました。ごめんなさいね。幼いころから憧れのように持ちつづけてきた夢はいつのまにかつかしい思い出となつてしまいました。そして今、もつと自分の生き方を真剣に見つめていかなければならない時がきたように思います。将来の自分の生き方を推

あり大切なことだと思うのです。そしてあなたは笑うかもしれないこんなさやかな夢が私の心いっぱいに広がってきているのです。

「苦勞をしながらも明るさと真実を失なわな人になりたい。そして常に自分をより豊かな人間に成長させたい。」

こんどはあなたの夢、きかせて下さいね。楽しみにしています。

さようなら
洋子

k 子さん

15 茂手木聡子

私は「……」になりたい。

私は「……」を試してみた。

人はそれぞれ、たとえ、いかにささやかであろうとも夢を持つことが必要だ。夢を持たない。それ以上つまらない事はないだろう。それらの人々は、何の為に人生に生きているのだろうか。ただ漠然と、ただ食う為に生きているのだろうか。

私は未来に大きな夢を描いている。その夢は、はてしなく大きく、遠い。でも私には、それがだんだん現実に近い程、喜びとは異った一種の不安が生まれてくる様に感ぜられ

る。「自分の夢に接近するのだから不安が生ずるはずはない、と誰もが思うかもしれない。しかし私は近づけば近づく程、「夢」が

「現実」に移りゆく不安を感じるのだ。

それはきつと私がまだ未熟なせいだろう。あまりに社会を知らなすぎるからかもしれない。しかし未熟だからこそ、大きく美しい夢が持て、その「現実への接近」の大なる可能性が我々に与えられるのではないだろうか。

この私と同じような、未熟な若者達が、皆、期待と不安とでいっぱいなこの小さな胸を、お互いに語り合いながら少しづつ大人になり不安のない夢に近づいていくのだ。

夢を持たないことほどつまらないことはない。たとえ不安を伴ってもよい。

私達はどんな小さな夢でも心のどこかに宿らせようではないか。

16 古屋美樹子

大きな鈴の音が強く響いて暗い中に消えていった。社の前が明るく、思ったよりずっと多く人が来ていた。十七才のこの年になって初めて元旦の夜暗いうちにお参りしてみた。自分が手を合わせて願ったことをそのまま聞いてくれるはずがないけれども、新年にかけ

18 武川みづち

今日言われている理想とは、ただ欲望にすぎないのではないか、私はそれとは別な精神的人間の理想を持ちたい。理想は高いほどよい。その個人の程度において、しかし世のおとなたちは、社会は、その夢をかならずしも達成させるように協力してはくれない。ある

ときは親という名で一般に普通とされているそういう道、私にとって何の興味もないような人生を歩ませようとする。自力で物事を処理したい私は一度は失敗するであろう。実際今まで何どもつまづいてきた。理想があまりにも高すぎたり、考え方がまちがった方向にいつてしまうこともある。しかし真に理想を求める人間であるならいつかきつと自分というものに気づくと信じている。夢はその過程として、私達をより人間らしい人間にするそういう精神的なものだと思う。だからこそ心から自分だけの理想を描ける人でありたい。その点今の私には具体的なものがない。

ただ、きょうよりもあす、あすよりもあさつてとしいしいに心が成長していき、頂点に達することはできないまでも、社会的、道徳的に自分なりの信念をもちしかもそれに

る自分の夢の唯一のうちあけ場所となった。

他に誰にもうちあけない心の中をその社でうちあけた時、もちろんん口には出さないが、なにか心の落ちつくのを感じた。それとともにそこで話したからには、是が非でもやりとげなければならぬように思った。自分の夢は人からみれば途方もなく大きいらしい。そのためもあって生きている人に話すことがたまにないやだった。それでふと思いついて神社にいったのだけれど、これはよかった。自分の期待したとおりだった。夢をかなえてやるなどとはいわないけれども、自分の氣押をひきしめてくれた。それだけでよかった。あとは自分で努力して達成するようにすればいいのだから。夢、その実現は短期間でなされるものではない。へこたれてしまったらだめだと思う。そのつど社にいったらしかられそうな氣もするが、心の落ちつき場所としていくことぐらい許してもらいたいとも願った。

17 中村光江

理想とその力

理想とは可能な最高限度を心に描いたものであるという。そしてそれに合致するものが

よって他人に批難されるようなこともなく

信頼

され、自分に納得のいく生活が送れるという人間になることが私の理想である。

19 清水茂久

×、×、×

自分が（他人ではない）不幸になるまでは信ずることが出来るもの。

× × ×

人間がその中においてのみ

現実を否定できるいいこの場

、 × × ×

・ 将来において自分がひじょうに幸福になることを前提とし、ひじょうに不幸になることは前提としない。

× × × ×

・ すべての目標の中でもっとも可能性が少なそうなものを、自分で夢となすける。

× × ×

・ 故人曰く「汝、ゆめゆめ夢を失なうなかれ」と。

・ 今人、曰く「汝、ゆめゆめ夢を持つなかれ。ただ社会機構の矛盾と、個人の力のはかなきを知るのみ」と。

社会的因習を輕蔑せよ／汝、”夢を持たむ”と欲するならば。

※
・資本主義の精神的奴隸となすために夢の粉碎を行え。10000審議會答申1

20 名 取 仁 美

私たちの年齢は、夢と希望に満ちあふれた時代だと多くの大人たちは、思っているかもしれないが、意外と毎日を現実に生きていくような気がするのである。夢があってもなんとなくスケールが小っちゃな感じ。あの幼い頃の夢の大きさはどこへ行ったやら。今、一高生の多くが、さしあたって、共通して抱く夢は、それが、各人の夢の何割を占めているかは個人差もあるけれど、「大学合格」ではないだろうか。何だか、目先にぶら下がっているためかもしれないが、実は考えてみれば長い人生の、ごくごく一時的な話なのである。しかし、私の将来の何かへ広がる第一段階も、そこにあるような気がする。それは、少女期のロマンチックな淡い夢とか、果てしない憧憬などとは異質のものであるけれど、私たちが受験を目指す高校生の、心の隅

22 雨宮 千 永 子

わき目もふらず
東京オリンピックは、日本女子バレーチームの優勝で、幕がおろされた。彼女たちは、この瞬間まで、勝つことを信条として、バレーにのみ賭けた、ハードトレーニングの日々を過ごしたと言われる。人間は様々な生きることが許されるが、私は、彼女たちの様な生き方に、とても魅力を感じた。
今の私を考えてみると、あらゆる事の最小限を確保していればよいという考えになり切っている。そして毎日を情性で送っているのだ。少しも生き生きとしていない。彼女たちのように、一つの目的に向かって、わき目もふらずに精進する時、真に生きている価値があると思う。そのためには、私たちはすべてを完全に行う事は不可能であるから、他の事を犠牲にしなければならない。しかし、こんなにもっと大胆に、無心に、ひとつの事に専念できたらどんなによいことであらうか。

23 岩 崎 法 子

に見つけることのできるものである。夢より少々現実的な願いと言う方がいかもしれない。

どうやら、「夢を語る」ということから、ちよつとずれた気がしないでもない。しかし夢といえば、自分の心に秘めておきたいことの方が、私には多いみたいなので……。

将来に可能性を持った若い私たちが、夢を追って行くのは良い事だと思うが、私は現実をよく考える事も必要だと思うし、又、美しい思い出の中に生きる事も大切だと思う。

21 岩 間 一 子

「理想は高く、空想は低く」とは処世の金言である。ではいったい理想とは何であろうか。辞書を引いてみると、「理性にて想像し得る最善の境域」「現実と相對する完全な世界で、意志・感情・知識のはたらきが目ざす最高の状態」と、書いてある。

人は、よく、「私の理想とするところは、誠実、実直……。」と自慢げに語る。語ったことは、まことに立派なことだ。しかし、それが単に理想で終わってしまうことの方が、それが現実になることよりも、はるかに多い。いや、現実にならないと言っても過言で

伊中国もスケールが大きい。私はあまりにも小さく、せせこましい人間になっている。アフリカの大草原に一人で立ったなら、小さな心も、大きく希望に満ちてくるのではないだろうか。生きていくための真の弱肉強食の世界の中に入って、人間の本来のたくましい姿を見出せるような気がする。それとも、自然の大きさに比べて自分の弱さだけが身にしみて寂しく思うだけかも知れない。しかし私はアフリカへ行きたい。未知の世界に対する不安よりも、憧れの方に私は強くひかれる。ナイル川の近くのアフリカの太陽の沈むのが見える所へ骨を埋めてほしいといって、その通年に実現した人がうらやましい。自分の望みを果たせられる人が最も幸福な人だと思う。私も最も幸福な人になりたい。

24 斎 藤 栄 子

私の夢……日本全国を旅すること。日本はたった三十七万平方キロメートルしかないちっぽけな国ではあるが、見て楽しむことのできる場所はそうとうあるのではないだろうか。山路をひとりのんびりとけしきを見ながら歩くのもいいだろうし、水の澄んでいる湖のほとりに座して、スケッチしたり、古くか

ほあるまい。こう言うと、人は、「あくまでも理想なのだから。それでもよいのではないか。」と、反論するだろう。私は、そういう人達のことを、とやかく言おうとは思わない。現に前述のように、辞書にも「理想とは現実と相對する完全な世界で……。」とでているのであるから。が、私は、それと同じにはなりたくないと思う。私のモットーとしている言葉は、「言行一致」という言葉だ。

「言うは易く、行なうは難し。」とは、よく言ったものである。私のモットーも、今までに果たして守られてきたかどうか、考えてみるに、どうもあやしいものである。
私はここで、胸をはって、「私の理想はこうだ。」と述べられる理想を持っていない。また、仮にあったとしても、私はそれを言うのを躊躇するだろう。それは、「言行一致」が私のモットーだからである。言うなれば、このモットーである「言行一致」が、イコール私のささやかなる理想であると言える。このモットーに反しないように、この理想に向かつて、前進したい。

ら言い伝えのある場所へ行ってみたりするものもおもしろいことだろう。そして、それぞれの土地でいろいろな風習を見、知ることができる……写真や話ではなくその土地にその人々にじかに触れ、その空気を吸い、体全体で感じとる……こんな旅を、ひとりで、静かにのんびりしてみたい。

25 杉 山 協 子

私は今まで夢について考えた事は余りない。そんな余裕も可能性も持っていないから常に心にある、はつきり自覚した「一つの大きな夢」なんて考えることはない。漠然と「こういうのいいな」なんて考えることはある。現実的なものでよく考える自分の未来の夢いささか平凡だが何でも相談でき、読んだ本について話し合いますれば、寄宿へも一緒に出かけられ、ある程度頼りになれる人と、平凡で、幸福な家庭を築き、子供の良き相談相手である母親になり、ときには問題も起きて、両親だけで解決すべきものは夫と、家族皆に関係ある事は家族全部で解決し、その事に喜びを見出せる家庭の主婦。

現実離れたものでは畑に手伝いに行き、よく考える事でちよいと単純だが、将来、離

農家が増えたら、その土地を買い、一つにまとめ、機械化された大果樹園を作りたいという事、働いて疲れた時の爽快な気分、早春の若芽の新鮮な緑、開花期に高い所で農場を見渡すと、向こう一面桃の花の赤い色、こちらは、リンゴや李や桜桃の花の白い霞、どこからか、梅の花の芳香がたどよう、もつともこれは一緒にには味わえないが、ふと見つけた卵の入った鳥の巢が、次に来た時、空になつているのを見つけたときの失望と共に胸にわく生命への賛歌、収穫の喜び。何度も味わったけど、これらの感動は、自分の手で作つたものなら、ずっと大きいだろう。

未開地か辺地の医者か教師をしたいと思うことも近頃よくある。素朴な人達と、美しい又、厳しい自然の中で暮す。因習に勇敢にたち向い、文化に恵まれない人のため全力を尽す。それはその人達のためばかりか、むしろ自分のため、自分のなぐさめになるだろう。自分が必要とされ、役立っているという気持、自信は私にとって正に夢。

他に、静かな山中で、動物と共に仙人の如く生きたいとか、心の許せる友とどこかの山に登りたいと思うときがあるが、これは、自分では好ましくからざる現象と思う。現実から

あつてはならない。人に迷惑を与えない範囲においての事である。こんな事が多くなれば日本はさらに発展するのではないかと思うのだが。

28 北村 允

今まで僕は「自由」ということを独立させて考えたことが、しばしばあつた、しかし「規律」という言葉と共に考えたことは一度もなかった。「規律」という言葉自体に、不愉快な感があつた。

最近ある本を読んで、「自由」「規律」を再認識するようになった。そして「規律」ということについて、不愉快な感をもつ必要もなく、かえつて今の自分にもっと徹底させなくてはならないことを知った。これからの生活は「自由」「規律」を共によく考えたうえ、楽しく暮らしていきたいと思う。

29 大 木 勝 彦

私はエイトマンのようなものになりたいた。だれよりも強くてだれよりも速く走り、不屈の正義心を持ったエイトマンになりたい。そして錦生会や流れ星一家ほどの暴力団をこてんこてんにやつつけて二度と、組織が作れな

の逃避で、これが私にはしょっちゅうある。

これらの夢（もしこれらが夢といえるなら）を現実と結びつけようとはできない。一番のはともかく。……困難を克服し実現させる力を自分の内に見出せない。時がたつにつれ深まる自分への不信、力のなさが、夢を夢でおわらせるのだ。少しでも一部でも実現させようという気も起さない情ない私、だからこそ夢なのかもしれないが、「甘い思いや夢でなく今の今をより美しく、つらぬき通して生きる」と歌にあり、私は共感を覚えるが私に実行できているだろうか。粘り強さ、劣等感、無気力の克服、強い意志と決断力、そして自分をいつわらない心などが少しでも自分のものになるような、そうなる努力のできる人間になれる生活、具体的にはいえないがそんな生活が、ある意味では極めて現実的な極めて切実な願いといえよう。

26 小 沢 和 子

夢？雲をつかむような課題であるが、私は二つの夢を持っている。一つは背が高くなること。これは長年（といつても十年位？）の夢ではあるが可能率は〇に等しい。しかし小さいのもいいもので、例えば洋服を作る時等

いようにしてやりたい。また国外では、ベトナムの紛争やその他の紛争を解決し、南北朝鮮、東西ドイツなどを統一したい。しかしそれには忍者部隊にも手つだつてもらわねばならいだろう。以上が私の夢である。幼稚かも知れないが、実際これが私の夢なのだ。

30 長 坂 敏 史

夢よりもすばらしいもの。それはあのフラメンコのリズム。あの情熱。あの熱中を持つことは夢の中に生きること。

美しいものは美しい。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、ぼくにはそれがすべて。悪いこともなけりや、善いこともない。偉い奴もいなけりや、馬鹿な奴もいない。生きること、思う存分に生きること。ああ、あの情熱の中で死ぬことができたら。

31 川 口 雄

今での学生の大部分は将来の夢といつても堅実、平凡な夢が多いにちがいない。ただ一生を平穩無事に過ごす。これでは日本の発展は期待できない。みんながみんな大志を持つてそれに向つて進む。そのような闘志が必要だと思う。青春のエネルギーをその方向に発

布は少なくすむし早く仕上がる。又少しのエネルギーで沢山働く事ができる。つまりは穀象虫ではないという事である。第二は美しく生きる事。「長いものには巻かれる」といった社会の風潮に巻き込まれずに、牧野富太郎、大賀一郎といった人々の歩んだ道を歩んで見たい。

今にも爆発しそうな時限爆弾を抱えた毎日のあわただしい生活から抜け出して人の干渉を受けず、自分のしたいことを力一はいやつてみたい。これが私の夢である。

27 春日宗麻呂

影響されないこと

他人に影響されないようになりたいと思う。自分のもつ考えが他人と違つても、また他人がそれをどう思おうと、言おうとも関係なく固持しましたそれに従う。自分と他人とは人が違うので他人の自分に対する考え方はさまざまあるものである。いずれにしても多かれ少なかれの反対はあるだろう。だから自分がそうすべきであると思つたならば、その考えに自信を持って行動するのがよいと思う。世間を恐れずに。しかしこれが悪い事で

散させれば不良化などという問題も介在する余地はないだろう。もちろんそのためには勉強しなければならなし、努力しなければならなし。もちろん各自の認識も必要であるが一生の内が一番勉強できるのは今の時代だ。勉強できるときに一生懸命勉強する。それが一番よい。社会に出れば今のようには勉強できなくなるだろう。

大きな志を持って精進する。それが今の僕たちには一番よいと思う。

32 坂 口 和 彦

僕は、このごろこの矛盾だらけの世の中にいやけがさしてきた。僕はそんな意味で山を愛する。山は何て自由なんだろう。新鮮なんだろう。もつとも近頃山は俗っぽくなつていくが、とにかくすばらしい新天地だ。

僕の夢はこの世の中から脱出することだ。

僕のような考えの仲間といつしよにどこか人のいない南洋の無人島で生活するという夢である。どこまでも青くすんだ空と海、そこには、果樹が実り、魚がとれ可愛い鳥がさえずっているのだ。ああ、そんなことを想像するだけで胸がワクワクする。人に気がねをすることなく、学歴も関係なく、みんな、自

由にせいいつばい生きる。これは何て人間的であろう。テスト一枚で色々の事の判断がなされる社会とは違い人間の可能性がフルに発揮できる社会……どうしても僕はそんな社会に生活したい。……それでなくともずっと人間らしく生きたい。我々に与えられた毎日はテストにいい点をとるための毎日ののだろうか。大学に入り、会社に入るための毎日ののだろうか。そうは考えたくない。しかし今の社会の現実はそのなのである。誰が真理を求めて学問をするなんていうことをしようか。出世のための勉強、人間の欲望をみたすための勉強……こんな勉強は意味がない。

やめて僕といっしょに南洋諸島にいこうではないか。僕は行く、夢の島に……

33 大沢 隆

普通の人間なら誰でも幸福を願うと思う。特に私達の世代はいろいろな幸福を求めている。私には何か厳しいものが顔一面にみなぎっている。私はその何か厳しい力強いものをいつも持っていたと思う？夢、それははかないものであるかもしれないがしかし実現する可能性もあるのだ。私の夢はまず、より良い大学に入る事に専念する。できれば、T大に

私は生れつき乗物が好きである。小学校の低学年の頃は、この支配者、つまり運転手なことが、最大にしかつ唯一の望みであった。乗物を自分で運転してみたいという気持は、小さい頃には「だれでも持つてであろうが、特に私はそれが強かった。今でも電車で乗った時には、時々、そのような衝動にかられる。

小学校高学年になってからは、この乗物を作る技師になりたいと切に願った。純粋に、乗物を作って自分で乗ってみたいと願いを持った。この願いは、中一時代の終りまで続いたようだ。（余りはつきりしないのだが）

さて中二にもなると望みは一段と高くなった。海外に行つて見聞を広めたいと願ひ、そのためには、外交官が一番都合良いと考え、それを志望した。（この頃私は、海外という言葉に大変あこがれていたものだ。）又その実現のために英語を重点的に勉強した。が中三の三学期になるとその志望はきえた。たぶん英語が、それほど良くなかったからであろう。しかし意気込みだけは、大きかった。

さて高校時代になると望みは、最高頂に上った。それを短くまとめると、将来、日本をいや、世界を動かすような、大政治家になる

入りたい。今の学力ではとても無理かもしれないが、そしてもし仮に入ったら、もちろん苦学だけど最初の二年間ぐらいは猛烈にハツスルして遊びたい。たとえば、かわい子ちゃんをつくり、スキー、スケート、マージャンパチンコ、何んでもけっこう、天のお恵みはとでも苦しいが。さて三年になったらいかに不足している単位をとりもどし、いかにしたらスムーズに卒業できるかを素直に考える。四年になったら卒論をよりよく、しかも出来前は確実に卒業出来る程度でありたい。そして卒業したなら一流会社に入りたい。

入ったならば、男として生まれてきたので、悪くても重役ぐらいまでなるよう努力したい。だから大きな失敗をしないよう忠実に働きたい。少しでも給料が良くなったならば、私は親孝行なので？親に小使いぐらいやりたいと思う。いよいよ給料も安定したところで、長持ちのする女性と結婚し、幸福円満な家庭生活を送ろう。そして二、三年たったなら子供のことを考え環境の良い土地に家建てよう。子供といえ一姫二太郎が良いように思われる。そして家の中いつも顔に笑いがいっぱいでありたい。

という事であった。国際舞台で活躍している政治家は、私のあこがれの的であった。今になってよくよく考えてみると、まあ可能性もなきにしもあらずだが、所詮、とうてい無理である。が、当時は真剣に、実に真剣にそれ考えたものであった。

今の私は、そんな甘ちよるい夢をもっていない。いやもてないのかもしれない。だが、私としては、男一匹この世に生れてきた以上は、どんな仕事をしようとも、どんな環境にあろうとも、他のだれにもできない仕事をやりたい。この仕事だけは、あいつでなければだめだと言われるような「あいつ」になりたいのだ。それでこそ、この世に生きている甲斐があるというものだ。この世に……。

36 早川 正 美

自分は小さいころはどっちかといえばガキ大将であばれ者の方で、よからぬことをしてはたびたび母を泣かせました。そのくせあまりどきょうもなく特にゆう霊とか、病氣などというものに神経質であり、いわゆる原子マダロがはやった時などは、家族のものが食べなくても自分だけは食べないほどでした。しかしだれだって女々しい人間や、神経質な人間は

34 高原 宮 司

私はとほうもなく金持ちになって、そして日本をわすれて、ソ連へ行つて見たい。共產主義かどうか知らないが、そんな事は関係ない。古く陰気臭い金属のような冷たい感じのソ連、全体がまとまって、どんな計画をおしすすめていく、そんなエネルギーシュな、ソ連、そんな所が好きだ。そしてそこを見たい。鉄のカーテンとかで、中を見せないからなお見たい。首脳陣は、そばで見るとどんな顔つきか、色々見たい。そしてちよつとの間そこにおいて、ソ連中を旅行したい。それからフィンランドへ行つて見たい。新聞でこのさみしい湖を見たら、それがほしくなった。誰もいない、大きな湖を買つて、舟に乗ったり、泳いだり好きな事をした。そしてその湖畔に、大きな家を建てて、一人静かに生活したい。それにあきたら、日本へ帰つて来よう。そんなつまらない夢をもっている。

35 織 田 一 夫

夢（望み、願ひ、志望、なりたい）私の夢は、小学校の時から初まつて、今まで、いろいろ変遷してきた。

嫌いです。自分は心がけを直して本当に男らしい人間になりたいと思っていましたので、わざと一人で墓地のそばを通つたり、わざと暗い所へ行つたりしました。いったい夜と言うものは空想の入る余地が多すぎるのです。色彩はよく見えませんし、一つ一つのけじめがはつきりしないのです。これがかえつて、この小さな小心者に不気味な感じを加えたのでしよう。同じ柳の木でも昼間は少しもこわくないのですが、夜見ると何んとなく恐しい姿に見えてしまうのです。こんなことで自分是非常におく病者でした。はずかしい話ですが、今でもゆう霊とかいうものはにが手です。霊魂とか言うものを否定する気持になれないのです。それでも自分は常に強くなりたと思っていますしたので、中学に入つてからは、野球部に入りました。しかし自分自身の実力を知らないほど悲しい事はありません。自分は決して運動ではだれにも負けないと思つていたのですが、自分よりみな、上手でした。いつまでたつてもたま拾いばかりで、試合の時にもベンチを暖めているばかりでした。自分が残念で、情なくて何度泣いたかしれません。それでも自分はぬかりませんでした。ぬかつたら負けだと思つていたのです

そうして結きよくがまんしとうしました。そのおかげでかなり強くなれたと思います。そして自分はこの根情をわすれないで進もうと思いました。もつと強くなろうと思ひました。

37 鶴田和彦

私は、もし大学に入ったら半分遊んで半分勉強して、首尾よく卒業したら三年間ものすごく変った事、例えば東京タワーから落下傘で飛び降りたり、皇居のお堀に飛びこんだり色々変った事をして、世の中に名前を売ってそして国会議員選に立候補して、二回ぐらい落選したのち当選して、それからとんとんぴょうに出世して首相になりたい。それから九州ぐらいの広い土地にユートピアを造って、そして日本とアメリカを継ぐ長い長い橋をつくって自転車で行って見たい。それから首都を甲府に移して、国会議事堂を富士山と同じ位に高くし、甲府一高を富士山の頂上に移転して、身体障害者を皆四国にやつてしまふ。罪人は北海道へ送ってしまひ。そして死刑をなくして住みよい社会にして、国土を拡張してアジア大陸とアメリカ大陸にくつつけてしまひたい。

／大学〃〃大学〃〃と年中言われ、それに追いま

くられている自分である。すべては大学に入ってから決まるのではないか。そんな風に思う。他の人はどうなのだろうか。

〃大学にパス〃

残念ながら今の自分の夢といえ、こんな希望、いや楽しみのないものである。本当に残念である。

40 内田耕三

僕はこの高校生活をなるべく温順にすましたいと思う。そのために勉強だけをしっかりと、よい成績をとって先生にしかられない模範的な生徒となり、両親をよろこばせたい。また社会思想などには目もくれないでいい。なぜなら思想問題などとえらい氣になつてゐるやつは、学校の成績がわるいので、そういうことをいって優越感をあじわつてゐるにすぎないからだ。

一流大学の試験にパスし、学生運動などには参加せず、ただ研究だけに没頭して、思想問題で一流会社に入れないなどというばかりにはなりたくない。まったくデモなどに加わつて重傷を負つたり、そうでなくてもよいなエネルギーや時間を浪費してゐるおろか

38 内田一雄

霜を含んだ土の上に可憐な福寿草の花が顔を出した。あたりが殺風景で、そして寒々しい一月の頃、花らしい色つやのものがすべて消えてしまつたあとのこの福寿草の花はまだ可憐なというより、時によつては、あでやかであるとさえ感じられる。

しかし花はその華やかさや、あでやかさを別に人に見せようとしてゐるのでもなく、それを誇らしげに咲かせてゐるのでもなく、それを誇らしげに咲かせてゐるようにも見えず、ただただ自然の営みを續けているとしか思えないのです。もしこの花があでやかさや、華やかさを誇るのであるとすると、もつと咲き方や、色つやなども考えたことでしょう。全くそうでなしに、太陽と、土とそして水とが花をしてこれほど愛らしく開花させたのかと思うとなお一層驚嘆と感慨の念が増すのです。人間の場合にも同じことが言えるのではないでしようか、みのりを身につけた人は自然にその行為や考えが人に見せるためでもなく、また見てもらうためでもなく、自然のままにじみ出るものなのでしょう。作務的なこと一つなく、全くありのままに自然に、由

ものを輕蔑せざるをえない。心から社会のためになろしと思うなら、そんなドンチャンサワギをしているひまなどないと思う。

そしてしゅびよく一流会社のサラリーマンとなり、重役か社長の令嬢と結婚して、ただ一ずに出世コースをたどらうと思う。会社の重要なポストを得るためには、こうするのが一番よいのであつて、〃恋愛結婚が理想的だ〃などとわめてゐるやつは、そんな高貴な令嬢と結婚する価値がないおろかな者なのだ。

以上のように理想的な生活をおくり、〃ほんとうに有意義であつたなあ〃と思うことができるような一生に幕をおろしたい。

41 丸田啓二

僕の夢は、いつも明確な姿で把握されてゐるわけではない。時により、著しく変化するのである。ある時には〃山のあなたの空遠く〃幸〃住むと人のいふ。〃という詩に示されてゐるような、未来に対するロマンチックな期待と願望とが共存してゐる淡い夢の時もある。

また、きわめて現実的な夢の時もある。一例を挙げれば、近頃のように寒い時には、太

分に誠実に生ることができたらどれほど美しいことでしょうか。そうなればもつともつと人からの信頼と友情とをゆだねられるでしょうし、また自然のままに美しく咲き、そして自然のままに人々を喜ばせ、静かに散つていく。そんな生き方、精神が、心の狭い、不完全全このうえない僕にとつては限りない夢であり希望なのです。

39 高柳幸夫

小さい時に、母からよく〃おおきくなつたら何になる〃ときかれて、〃僕はえらい商人になるんだ〃と迷わず答えたものだ。

が、今はどうだろう。迷わずにはいられない。現在の僕は、あの当時に較べまったく夢のない男である。

今こうしてあらためて考えてみると小さい時の自分がうらやましく思われる。

単純な頭で考えながらも、その時は、しっかりとした夢をもつて〃将来きつとなるんだ〃と楽しかった。

甲府一高に入つて、はや二年。〃一高に來たんだ。大学へも進もう。しかしその大学へパスできるかできないのかわからないのである。そんな自分に夢がもてるであらうか。〃

陽熱の有効利用という夢である。蓄電池は電気エネルギーを化学エネルギーに変化させて保存し、取り扱い易い形にして置き、必要に応じて、電気エネルギーとして取り出して利用するものである。これと類似の原理で、夏期に、あり余る太陽の熱エネルギーの一部を物理的または化学的エネルギーに変化させて、小型な物の中に封じ込めて置き、冬期に活用するのである。一度その器械を作れば、毎年使用出来るので経済的であり、全人類の幸福増進のため計り知れない貢献をする。勿論第一号機は一高に寄付し、教官、生徒が寒さのため、研究、勉学の能率の低下を示すことのないようする。

しかし、いずれの夢でも実現させることは容易なことではない。強い意志をもって、失敗にも負けず大きな夢の實現に向つて一歩一歩確実に歩んでいくつもりである。

42 島津信重

文明が進歩し、あらゆる物が機械化していく今の時代に、私達は人間疎外ということを痛切に感じてゐると思う。学校時代は、よりよい大学に入るために、試験試験で追い回され、やつと大学を出て社会に出てどの分野に

も、機械化が普及しており、その中では自分がその機械の一部品にすぎないのではないかという寂しさに襲われてくるのではないだろうか。そして、その寂しさのはけ口を求めるようにマージャン、。パチンコ等の娯楽の中に自分を隠してしまつて、いるのではないか。それでは人生が余りにもつまらないもの、味気ないものになってしまうのではないだろうか。私は、馬鹿だと言われてもよい。現代を官本武蔵があらゆる苦難に出会いながらも鋭く人生を見つめながら、剣一すじに生きたように、学問に情熱を持つて生きて行きたい。

43 五味 武彦

「夢……現実につながるもの」
今、世間でいわれている「期待される人間像」は、オレの現実につながる夢として、必ずしも満足する人間像ではない。なぜなら、これには「愛」がなさすぎる。将来、オレは「知と愛」（ヘッセ）のゴルトムントまではいかなくても「愛」に生きたい。しかし「知」も必要だ。これを今学び、将来も学ぶ。「知」といっても、実社会で要求するものだ。自分に必要ない、又社会にも必要ないものを勉めては時間の浪費だ。ここで「愛」

ニワワタシワナリタイ。

45 宮川 菊雄

「若い者には夢があるからいいなあ／＼」という言葉をたびたび耳にする。なるほど自分でも幼いころからとりとめもないような夢を色々と想いかけて来た。夢をもつことは若者だけにあたえられた特権のようなものらしい。その夢をいまここで思い出してみようと思う。

十年前

川上選手よりも立派なプロ野球選手になるぞ／

五年前

ロケットの研究をして火星に行き、そこに大きな国を作るぞ／

三年前

このごみごみとした日本を出て大きな仕事をするんだ／

現代

大学に行かなければ
。。。。。。
たしかに現代もこのような夢をもっている。
しかしこれでは数年後には夢もなくなつて

が必要となつてくる。これはどれほどあつても自分にも、社会にも障害にならない。むしろ人間に「人生の良さ」を深く認識してより完全な人間に近づいていく。オレはこういうことを、身をもつて体験するような人間になりたいんだ。愛にもいろいろあるだろうがすべてを感じ、すべてを持ちたい、すべてを我が身から発したい。

ゴルトムンは純粋なもの、不純なものを理性を持つて区別しないで生きていった。オレは理性をもつて純粋なものに生きて、自分が死ぬ時、自分と同じ信念で生きる人間の多くにみとられたい。

人間は「愛」に苦悩する、それゆえに尊いのではないか。人間の個性の表現だ。

「愛とは創造であり、創造とは対象において自己を思い出すことである。愛する者は自己において自己を否定し対象に自己を生かすことである」と何かの本にある。

44 、山本 秀彦

生存競争ニマケズ雨ニモマケズ
風ニモマケズ雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈
夫ナカラダヲモチ、欲ハナク欲ハホドホドニシ、決シテイカラズ、イツモシズカニワラッ

しまうのではないか。これではいけない。私は過去の人間でも現代の人間でもない。未来の人間だ。いつも若々しい夢をもちつづけたし。

46 上田 浩

とてつもなく大きな工場。中には誰もいなしらくガランとして静まりかえっている。とその時、突然けたたましくベルが鳴り渡つた。それから数分後さきほどの静けさはどこへかくれてしまったのか、場内は機械の動く音、人の歩く音、その他のあらゆる音が混り溶けあつて戦場のごとくに騒然としている。しかしそこは戦場ではなく、中では他の何もかまわずに動き続ける機械がある。彼は複雑で精巧な生き物である。にもかかわらず感情なしに働き続ける。しかもそれでいてちゃんとすべきことはする。そこが僕が機械にひかれるところだ。だから僕はそれにむかつて突進したい。なまはんなな投げで、ぐらつかないように正面から正々堂々と四つに組んで相手のまわしを十分に引いて一歩一歩を着実にして、ぐいぐいと押しまくる。何とすばらしいことではないだろうか。

テイル、一日玄米四合ト、一日強化米二合ト、味噌ト、少シノ野菜ヲタベ味噌野菜ト基準ノ栄養ヲトリ、アラユルコトヲジブンヲカンジョウニ入レズ、アルコト以外ハジブンヲ、カンジョウニ入レズニ、ヨクミキワメテワスレズ、野原ノ松ノカゲノ小サナカヤブキノ小屋ニイテ。小ジンマリトシタ日本式ノイエニスミ、東二病氣ノコードモアレバ、行ツテ診察シテヤリ、ショシンリヨウハ二十エンデイトイ、西ニツカレタ農夫アレバ、行ツテ稲ノ東ヲ負イ、南ニ、死ニソウナアレバ行ツテコワガラナクテモイトイ、イツショウケンメイチリヨウヲシ、ザイサンニオウジオカネヲイタダキ、北ニケソカヤソショウガアレバ、ツマラナイカラヤメロトイ、ツマラナイコトダカラト、マルクオサメ、ヒデリノトキハ、ナミダヲナガシ、人工雨ヲフラセ、サムイナツハオロオロアルキ。人工タイヨウテラシ、、、、ミンナニデクノポートヨバレ、ミン
ナニイヒトダナトオモワレ、ホメラレモセズ、苦ニモサレズ、ソウイウモノ：ワタシワ、ナリタイ、アマチュアムセンヲ、タノシミ、ハナヲツクリ、タノシイトザンヲシ、身体

ガ

不自由ナ人ヲ、ナオス方法ヲカンガエ、ナニカ人ノタメニナルコトヲスル。ソウイウモノ

47 あこがれ 飯田登志江

修学旅行で、奈良というところに行つてみると、奈良の里ははじめてみるような穏かな風景だった。それは山が低くてなだらかだったからだと思う。（私がいつも見なれている山は、その一つ一つが大きくて、はちをふせたように丸くて、その中には熱気を含んでいるようなのだ。）

奈良の山は、山々が孤立していないで、一つの輪のようにつづいていた。以前には山というと、けわしくて高い山や、山のような山しか想像できなかったが、奈良の山を見てからはその柔和な姿が心に浮かぶようになった。それとともに、山のすそ野の、大和国原の様子が、稲田やそこに耕作していた人々のかげとともにうす日の中に現われて、私を京都の思いにかるようになった。

48 堀井由美子

1夢のもとなる夢なきもの
三校時の休み時間、購売の。バン売場は生存競争の激しさが端的に表われる。

入口付近にあふれ出た人は、寒さに足をふみ鳴らしながら、のろのろとした列を作り、友達と他愛ない話などをしながらも、何とか早く買おうとする努力を忘れない。

「ブドウパン二つと白三本。」

「コーヒー。二本」

「カステラなの、じゃ生クリームは、ピナツとフルーツ。」

等々、口々に騒ぎたてて、やつとありついたパンをかかえて満足気に購売を去り行く人達を、列のシツ尾は横目で見る。丁度四校時始めの鐘がなり、いらいらとせわしく売場の御姉さん達を急がす人も、少なくなる。

昼休みとなって、再び繰り返しがあるが、騒ぎは日新ホールに移る。優しくおとなしい人は御弁当持参が一番良いという事になる。

割り込みは当然の様に行なわれる上に、やつと、ランチ、カレー、ラーメン、思い思いの皿、井をかかえた人はうろうろと、食事する席を捜す事になる。

おお、人でいっぱいだ。いや口でいっぱい。

眠そうな目などは一つもない。これが私達のエネルギーの源なのだ。

人は食べる為に生きるのか、生きる為に食

べるのかを考える事などナンセンスである。

49 富岡道明

キリストの降誕

地球から遠く離れた名もないある星の小さな惑星に人間が住んでいた。その惑星の中に小さな島国があった。その国ではとても科学が発達していた。にもかかわらず王政であった。そしてあらゆる宗教は認められず、政治活動も許されずただ学問、技術などに能力のあるものだけが王のそばに近づくことができた。そして書物も王にとつて必要のないものはいつさいやきつくされた。しかし能力のないものは安い賃金で長時間の労働に堪えねばならなかった。だからその国の若者はみな必死で勉強にはげんだ。そして考えるということをしだいに忘れていった。こうして国の科学はどんどん発達していった。しかし何から何まで思うとおりに行くはずがなかった。人口の増加、食料不足、資源の不足でついに隣国との間に戦いの火ぶたが切つておとされた。この戦争では原水爆などのような旧式？な武器は使われず鉄砲や刀などだった。そしてその国はどんどん隣国を侵略して行った。

その軍隊の中に一人のみすばらしい青年がいた。彼は何も考えずにただひたすらに戦っていた。ただ王に従い、そのとおりやっていれば良いと思っていた。

彼等の戦いは残酷だった。幼い子供まで容赦なく徹底的に殺していった。みんな何とも思っていなかったのだ。そしてあるとき彼等は平和な山あいの村に軍をすすめた。彼が一步その村に足を入れ、まわりの風景を見たとき何か不思議なものが心の中に現われた。それは王の権力よりもはるかに強く感ぜられた。しかしそんなことはしていられなかった。何の抵抗もしない村人たちをどんどん攻撃していった。そして村はずれに鐘のある建物を見つけた。村人たちはみなそこに逃げこんでいた。彼はその建物に火を放ち爆破した。

その夜かれはその建物のくずれた壁の下に半分やけのこったぼろぼろの書物を見つけた。かれの手は磁しゃくに引かれるようにその本をとり、チラチラもえる火で朝になるまでとりつかれたように読んだ。彼はかつてこんな本は読んだことがなかった。その朝彼の顔は生き生きとしていた。そして戦いはなかったようなとても新鮮な朝に感じられた。しかし彼の仲間はその朝、生き残った人々を広

場で焼き殺そうとしていた。その中には一人の幼い少年がまじっていた。その子はじつと手を合せていた。彼はじつとその子を見つめていた。そして火が放たれた時、彼はその子のそばにかけ寄り助け出し自分が火の車にまきこまれてしまった。しかし彼は火の車から逃げようとはしなかった。彼のむねには一冊の本がしつかりとだかれていた。彼は苦しかなかった。そして彼の息が絶えた時、その火はまばゆいばかりに輝き、天にまじり上った。

その火ははるか地球の上でも見ることが出来た。

そしてその光は、ある田舎の馬ごやのかいぼおけの中にさしこんだ。そしてそのかいぼおけの中に一人の男の子が生まれた。

50 雨宮俊彦

三吉の夢

野上三吉は、市内の杉吉小学校の2年生です。毎日騒々しい自動車の音を聞きながら、学校へ通っています。空はスモッグで灰色、土は全部コンクリートのカヴァアがしてあります。お花は教室の花びんにさしてある、かれた黄色いスイセンしか知りません。

ある暖かい日の晩でした。三吉はテレビを見ながら炬燵でうたた寝をしました。ふと気がつくとき、黄色いじゅうたんを敷きつめた、ような菜の花畑を、一人でとびまわっていました。どこまで行っても菜の花ばかりです。頭上には青い空が果てもなく続いていきます。その中に白い鳥島が二つ三つ風に流れていきます。どこからともなくひばりの合唱が聞えます。その歌声につられて蝶が一匹舞っています。黄色いドレスを着ていました。彼女は一人で居る三吉を見て、「あなたは誰なの。どこから来たの」と言いました。「ボクは三吉、野上三吉です。ずつと向うの遠い国から来たんだよ。君は何なの。ボク、君みたいな初めてだよ。」と三吉は言いました。今度は蝶が言いました。「私は蝶という者です。今お花のみつを集めた帰ります。私達の国に一緒に行きませんか。女王様が喜びますよ」三吉は躍り上って喜びました。三吉は蝶の後に続いて行きました。間もなく菜の花畑の真中にあるお城の前に着きました。門番が重い扇を開けると同時に、三吉の目に赤黄青緑、いろいろな蝶が忙しそうに動いているのが映りました。市場も出ています。女王様の宮殿の前には、七色に輝く噴水がきれいな水

を吹き上げていました。金色の女王様は三吉を歓迎しました。しばらくの間は夢見るような日々でした。しかし、ある日突然、宮殿がぐらぐらとゆらぎ、崩れていきました。三吉は急いで城外に出ると大きなブルトーザが大きな口を開けて、畑を食い荒しています。黄色いじゅうたんは、みるみるうちに茶色いじゅうたんに変わり、アパートが建ち並びました。大きな怪物は蝶の城を呑み込み、続いて三吉も呑み込んでしまいました。三吉は、「アーツ」と叫んだまま暗い谷底に引き込まれて行きました。変なものが目の前に次々に映り、金色の線が走って行きました。気がつくとき、お母さんのあたたかい手が、三吉の肩の上にかかっていた。

51 横塚尚志

ひらひらと、木から一枚の葉が落ちて、くるくるまわりながら、どこかへ飛んでいってしまっった。あの葉端はどこへ行くのだろう。僕にはわからない。誰も答えてはくれない。

○

昔、船乗りは、航海をする時、星をみてその進路を決めた。人間は、人生という荒海を

航海する時、理想という星をみつめながらその進路を決める。人間は常に星を求めている。

厚い雲が、視界をおおう。鈍い、灰色の、大きな鉛の塊が、星の光をさえぎる。一つの星も見えない。受験という厚い雲。

だが、雲がかからなければ、雨は降らない。雨が降らなければ、作物は実らない。

昔、パスカルは「人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。」といった。葦は考えない。葦は動かない。葦はただ自然の為すがまに、じっとただずんでいるだけだ。

だが、人間は考える。人間は動く。人間は自分の人生を自分で切り開く。

52

望月加奈美

雪うさぎと死
降り続いた雪もすっかりやんでしまった。
ある寒い夜の事です。暗い空にゆうと枝を
つきだしたものの木の下に、雪うさぎがちよ
こんとすわっておりました。昼間子どもたち

が作ってくれたのですが夜になると忘れてしまったのです。雪うさぎは南天の赤い目をあけて考えこんでいました。

（もう三、四時間もすると夜が明ける、僕の人生は終わりなんだ。死ぬなんていやだ。むしろように寂しいんだもん）雪うさぎは自分の傍の小さな草に尋ねました。「ねえ草っ子さん、どうすれば死ななくてもいいかしら？」草は答えました。「そんな所で考えていないで歩いてごらんよ。なにか解るだろうか。死にたくないのはねえ、うさぎさん。本当に生きがいのある事をしてないからなんだよ。」（本当にそうかしら。僕は寂しいから

死にたくないんだのに」雪うさぎはそう思
いながらそれでも言われた通り歩きだしまし
た。町は静まりかえっています。だれもが銀
の砂をかけられて、眠りの国に行っているの
でしょう。雪うさぎはなおも歩き続けまし
た。町角まで来て、はっと立ち止まりまし
た。「煙がでている／＼」雪うさぎは急いでそ
こへ行ってみました。たき火の残りがくすぶ
っていて下の方には赤い火が見えます。そば
には新聞紙が重ねてあります。（あぶないな
あ）と思いました。雪うさぎにとつて火は恐
ろしい敵です。雪うさぎはほらはらして見て

おりました。とその時、風のはずみで新聞紙がたき火の上に落ちたのです。新聞紙の端がこげ始めました。このままだとすぐあの新聞紙の束に燃え移るでしょう。そしてそばの家にも、雪うさぎはすつかりうろたえました。「どうしよう」その時あることを思いつきました。（そうだ僕が火の車へ飛びこめば消える）でもそれは雪うさぎの死を意味しました。（僕は死にたくない）雪うさぎはそう思いました。その間にも火は広がって行きそうです。ついに雪うさぎは自分の命を捨てる決心をしました。雪うさぎは今こそあの草のことがわかったと思いました。もう死は恐ろしくありませんでした。ちゅうちよせず火の中へ飛び込みました。火は消えました。一瞬間の間に雪うさぎも消えました。夜の明けると赤い南天の実が二つ灰の中に並んでおりました。

私がこの雪うさぎと同じ気持になれる日はいつでしょう。誰にも知られずに死んで行つたうさぎの美しさを知る日はいつでしょう。



太陽の女神

中沢文明



夜明けの星。

青白く光る、遠い国の星だ

未練の星だ――

――急に心が冷たくなった

後悔の涙で眼がうるみ

目の前の世界がまっ暗に戻ってしまった。

1
1 僕は泣いた。

返らぬものに向つて泣いた。

悔やんでも仕方のないことなのに

ほおをつたう涙が凍つた

胸の大きな風穴を冷たい風がとおり過ぎた

一一ふと

冬の日

塩島文博

冬の日……

田園の白い霜に

太陽が其赤な色をあてる

まるで目のさめきれぬ者に

むちうつように

冬の日……

希望にみちた灰色の一日が

二つの矛盾にもどかしく始まる

時にはたえきれずして反抗し

時には未来を信じて慰む

冬の日……

遠い未来は不毛の地を

北風の中に

あたえてくれる

あざけりにもにたまなざしで

冬の目……

返らぬ世代を

未来のために

ささげる者は優等生
ささげぬ者は劣等生
冬の目……

インクにそまる手

鉄のようにつめたい足

あわれな彼らは

明日を信じてる

山の湖

仲田栄子

山のすそ野に

透明の水の満々とした湖がある

秋だというので

水はつめたく

山をさかさに映している

夕暮れだというので

枯れすすきが

さびしく風にゆれていた。

少女が

ぼんやりとよりかかっていた

ほとりの一本のから松に、

長い長い黒髪が

赤いレンガのお家から

山口憲子

赤いレンガのお家から

ヒョッコリヒョコッて声がした

ヒョッコリヒョコッと二度目の声は

懐しそうに耳元で

「今日は」とささやいた。

チビの時から聞き慣れた

ルビーの様な輝きと、石の様な冷たさが

私の縮んだ感覚を

ヒョッコリヒョコッと呼びさます。

それはいつでもどこでもやって来て

澄んだ流れにしっかりと

得意なステップも軽ろやかに

「どお？」て声かける。

誰にも何にも知られてないで

ヒコツコリヒョコッと背伸びをする

青い小窓の間から

やっぱ見慣れた顔が出た

ヒョッコリヒョコッと二度目の顔は

真面目そうにうなづいて

「がんばってネ」とほえんだ

赤いレンガのお家から
ヒョ・ッコリヒョコツてほえんだ・……。

道

守 星

操

ありの通るほどの道がある。
私は止まる。
振り向くと、うしろに続く道があった。
広く、狭く、曲がりくねった道であった。
大きなくぼみをもった道であった。
日に焼けた道であった。
ありの通るほどの道がある。
私は考える。
この歩みをどこへ進めよう。
道のそばに道があった。
だれかが歩いていた。
黙々と歩いていた。
そのそばにも道があった。
一つの道を、旅人が歩いていった。
一つの道を、物売りが歩いていった。
11だが、どの道も私を近づけなかった。

ありの通るほどの道。
これが私の歩く道だという。
私のうしろに続く道。
これが私の歩いた道だという。
私は聞く。
この歩みをまっすぐに進めなさい。
あなたの手と足で。
汗を惜しんではいけません。
ありの通るほどの道がある。
私は進む。
きのうも、きょうも、あすも。
百の憂いと一の可能を含んだこの道を。
どこまでも、どこまでも続くこの道を。
ありの通るほどのこの道を。

幸福は何だろな

矢 崎 えり子

幸福って何だろな。
楽しく暮す事かな。
楽しくって何だろな。
大金を使って遊び暮す事かな。
それとも、自分の好きな事をする事かな。

わからない／わからない／

人間の心なんてのは複雑なんだから。
ロボットじゃないんだから。
人が見て、かわいそうだと思っても、
本人は幸せに思っている事もあるもん
人が見て、幸せだと思っても、
本人は不幸せに思っている事もあるもん、
人間の心なんてのは複雑なんだから、
ロボットじゃないんだから、
だから、これは、きつと、その人の気持次第なんだよ、
わからないけど、きつとそうかも知れない。
でもわからない／

夢の中

内 藤 静 雄

星はひっそりと光り
海はその光にこたえる
波のささやき合う声もひくい
その中に美しい人が立っている
透きとおるような白い頬の人が
大きく美しい両眼には涙をいっばいため
ハープを弾きながら歌っている
その長い髪は風に吹かれ
悲しい歌声は果てしない海原の彼方に
風につて流れて行く

若さを歌おう

波 羅 栄 次

若い仲間よ
若さの足りない仲間も
若さのあふれてる仲間も
若さを歌おう
若いってことはありがたい
若いってことは大切だ
若いってことは素晴らしい
若い仲間よ
若さの足りない仲間も
若さのあふれてる仲間も
若さを歌おう
若い仲間には（若い） 仲間の考えがある
若い仲間には（若い） 仲間の生きかたがある
若い仲間には（若い） 仲間の情熱がある
若い仲間よ
若さの足りない仲間も
若さのあふれてる仲間も
若さを歌おう

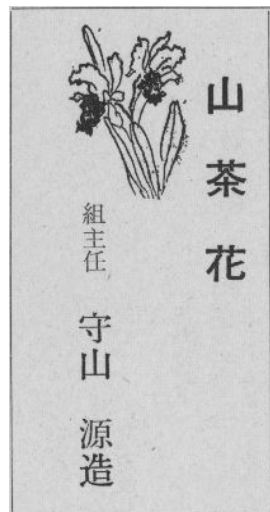
さざんか、さざんか、咲いた道、たき火だたき火だ落葉たき……。落葉の季節になると毎年思い出す童謡で、それまで着ていた、紺の木綿の服の上に、うすい綿入れの羽織を着、裏の裏白な新しい足袋を買ってもらった子供の頃が思い出される。甲府の駅前に生まれ、其処に育った私には、落葉たきの経験はなかったが、此の歌が好きで、なにかひきつけられるものがあつた。林の陽だまりで、落葉たきを一度してみたいと思つたものである。それから又、この寒い時期に咲く、「さざんか」という花は紅い小さい可憐な花で、やがて

くる霜の中に、最後の落葉と共に消えてゆくのだらうと考えてもいた。

其の後、中学の二年生頃になつて「山茶花」という文字を知り、又、茶梅とも書くことを知つた。でも此の花に寄せる感じは子供の頃と全く同じで、かよい可憐な赤い花であると思ひこんでいた。辞典などを見ると、椿

に似て、椿より淋しい感じの花であり、晩秋から冬にかけて咲き、花は自又は淡紅で、四国や九州などには野生が多いと説明してある

ところが、最近になつて、この山茶花を庭の片隅に植える機会に恵まれたのである。一本は春の植木市から買つてきたものであり、他の一本は、母にもらつた小さい植木鉢を土に下ろしたものである。どんな花をつけるのだらうかと、咲くのが非常に待遠しく、水をやするのも楽しみの一つになつた。昨年の夏の陽照り続きのときは一時枯れそうになつたが、どうやらもちこたえて昔がほころび始め



たのは十一月の中頃であつた。背の高い方は、淡紅と白のしほりで、鉢から下ろした小さい方は濃い紅色の花である。冬の時期にふさわしい、可憐な厚味のある花であるが、椿のように散り際は、もろくなく、強い北風の夕にも、霜の凍りつくような朝でも、花びらを撒きちらしながら、次から次へと、精かぎり根かぎり咲き続けているのには驚いた。この強靱さは、花のどこに潜んでいるのだろうかと思ひなくらいである。

高等学校の生活も、二年の三学期を迎えると、大学入試の重圧が増し、いやおうなしに人生の岐路に向つて、ひと押し押し出されることになる。気の弱い生徒は、この精神的な負担に耐えかねて逃避を図り、最小限の努力で、最大の効果をつかもうと、あせるようになる。これから一ヶ年は、寒さの厳しい、風の強い冬の候にも似た日が多いかも知れないが、しかし、この冬の候の中

における日々の営みこそは、若い君らの春へ向つての準備の時期なのである。目立たない地味な日々の生活の中にも、周到な準備と、それをひとすじに貫ぬき通す、強靱さこそ、ほしいものであると、つくづく考える。きょうも、吹き荒ぶ空つ風の中に光るように冴えて連なる甲斐の山々、その青い山脈を青に花びらを落されつつ咲く山茶花をみながら、・負けるなと若い君らに声援を送つて、庭に立つ私である。



雑感

斉藤 久和

最近めだつて、青少年の間に目的意識の欠如した大胆な反社会的行為が見い出される。

そして、そうした行為の後には殆んどが「社会が悪いからだ」とうそぶく、私は同胞としてこれらの青少年に対して遺憾の念を抱かざるを得ない、それは彼らが罪からの逃避のために社会に責任を転嫁する無責任な態度と社会意識の足りなさである。本来「社会」とは人間がそれぞれ対等な立場で構成している集団の共同生活の場を指すのである。その社会が悪いということは結局自分達が悪いと同じことである。「社会が悪い」という社会的風潮に対してこれを以つて自己の正統性を説こうとするなどつまらないことだ。彼らがかか

課した法律に従うことは自由の境界である」と述べている。「自由」とは法律の規制内で許されるのである。現代の青少年はなんの遠巡もなく自由のボーダーラインを越え、一時的快楽(欲望)のとりこになつてゐる。その中で少数の者だけが遠く未来に希望を持ちそれに向つて邁進しているにすぎない。……私は最近ベシミズム的な思想に興味を持つようになつた。社会とは多くの矛盾を含みながらその一つでも解決されそうにないと思えるからだ。結局のところ理想は極限としてのみ存在していて、理想≡現実とはならないのだろうか……しかしまた思う。こうした多くの矛盾を克服してこそ人生をよく生きるといえるのかと。

雑感

小林 正吾

人間というものになつてから一七年あまりになるが、いまだに一生の友、本当に理解しあえる友にめぐり会わない。実は「理解しあえる友」といつても、どの程度のものなのかよくわからない。しかし、目には見えないが、黙つていても

相手に通じるものをもちあつてゐる友人同志、自分のことのように相手のことをよく理解でき、十分に相談相手になつてやれて、又自分のこともよく知つていてくれて、十分に信頼しあつてゐる友人同志——そんな肉親以上のつながりをもつた友にめぐりあえたら、どんなに幸福なことだろう。

僕には現在、中学時代からの友人がいる。彼とは一日のうちに何回となく会つてゐる仲だが、まだまだ完全に理解しあうには、ほど遠い。まして、他の学友など理解されるより誤解される方が多いくらいだ。勿論僕もそれをする方だが……。

となると「理解」しあえる友とは、現実にはあり得るのだろうか。

しめきり日が過ぎてしまつて、編集委員にせかされて書いてゐる状態なので、そんな事まで考へてゐる時間もないので、よくわからないが、ここで考へて見ることは、今まではただ友達と、遊びの対象としてのみつきあつてゐたにすぎないので、この機会に気持ちを改めて、一七才のこの胸にしつかりとした、大人の考へをもつて、一生の友をもつた、しあ

思うこと

三浦道子

私は、毎朝駅に向ってまっすぐな道路を歩いていく。その道を歩きながら、時々こんなことを考える。私は、小さい時からずっと今まで、細い道ではあるが、父母の手によつて平らにされた道を、楽々と歩いてきた。少しの障害はあつたにせよ、楽な行程であつた。しかし、現在、目前の道はとぎれ、川が流れている。その先の道と、今歩いている道をつなぐのには、川に橋をかけねばならない。又この仕事は、父母の力も、姉の力も、友だちの力も借りることはできないのだ。どうしても自分一人の力でやりとげねばならない。だれの力も借りることのできない仕事なのだ。大きな不安と、その仕事をやりとげたいという希望とが入り混じる。自分の能力以上のことを望むのは無理だ。あぶない。しかし、現在の状態に甘んじてしまうのも、何かつまらない。どうすればよいのだろう。心の中が、めちやめちやになつてしまう。だが、こんなことにばかり、心を煩わされていてはだめだ。道はもつと、もつと長く蔵いているの

だ。この先にはどんな道があるのかわからない。穴だらけの道かもしれない。ぬかるみばかり続いているかもしれない。道などわからない草原かもしれない。もつと大きな川が流れているかもしれない。けれども、人間として生まれてきたからには、たとえそれがどんなに悪い道であっても歩いて行かねばならない。だれかが途中で倒れそうになったら、助けてやらねばならない。道は長い。強い意志をもつて、歩いて行かねばならないのだ。

このごろ思うこと

小林好雄

最近の私達には若さ、夢というものがないと思う。よくもう年とつたような口調で「今の世の中は金がなければ」とか「いい大学さえ出れば」というようなことを聞く、私は何か物寂しい感じがして来る。そんな時、この人達はかわいそうだなあ、もう少し自分達の若さ、情熱、そういうものを燃やしてほしいなあ、と感ずる。とかく若さというと、最近の流行のものを着て見たり、サーフィンなどの何だかということをするのが若さだと思ふ人がいるようだ、こんなのは本当の若さとは言

えないと思う。本当の若さとは、流行なんかには左右されず、自分の良いと思つたことを、どこまでも気のすむまでやり通す、又わからない所があつたらわかるまでつきとめる。そういう熱情というものを持つことではないだろうか。そのためには勇氣も大切であると思う。そういう私も、どつちかというところ、若さというものがなくなつては、私の私達には、こういうものがなくては、ならないと思う。そして金銭なんでものは、私達は考えるべきではないと思う。そういうものは親達にまかせて、私達はこの若さでもつと自分自身のために苦勞して見ることが必要

であると思う。大学へ行くことも、良い生活をしうなどということでなく、もつと他の目的があるはずだと思ふ。良い生活をするためには、何も大学へまで行かなくても方法はいくらでもある。かえつて行かない方がいい場合だつてあるのだ。だから私達高校生は、この若さつてものを発散させるのに一番いい時期ではないだろうか。夢を持つにも大学進学という小さな夢ではなく、もつともつと、大きな夢を持つべきだと思ふ。大きな夢を持てば、自然と若さというものが持てて来るの

思つた事

前田 淳

① 修学旅行はただ遊ぶためではない。僕は旅行を意義ある物にできただろうか。観光案内を見ると寺や仏像の説明はそれぞれ十分であるくらい詳しい。だが自分の目で見て自分たちの感想を持ち批判してみるといった態度に欠けてはいなかっただろうか。ともすればうわつた気分になり過ぎたと反省している。又同じ屋根の下で寝起きし共に歌い語り合つた事等どれも学校ではなかなか味わえる事ではない。みんな良い人達ばかりではないか。心から結びつける人達ではないか。毎日の年活はこれから競争だ。きびしいものだ。だが僕達に友情感が与えられているのを思えば何かそこに救いがあるような気がする。

②

物理の答案。僕は悪い点に失望してしまつた。だが自分は高い希望と努力を持っていただろうか。だがいつまでも沈んでいる訳にもゆくまい。すぐ立ち上つて突進し始めねばならない。自分に今必要なのは「若さ」を振り

上げて突き進む若々しい氣風が気が必要なのだ。失望それ自体は悪いものではあるまい。それによつてやる氣を失い、なぜやりになるのが悪いのだ。翌日友と二人、T先生の前にいた。「失敗してもくじけず自己を鍛練せよ」と先生のおことば。毎日絵・書道でも勉強でもよい自己を見つめ鍛練する時間を持つべきだ。「又いつでも来いよ。」二人の背に先生の戸。友は僕の手を取つた。「しつかりやろうぢやあ」「よし」二人の心がひとつになつていくのが感じられた。

③

学校生活において人知れずつくす人が意外と多い。又それが人々に省りみられない事があるのも事実だ。団体生活において各人仕事の割り当てなど少し位の不平等はまぬがれない。もうわがままはよそう。彼は休日に、自分で作つた竹筒の花びんに花をさしてクラスの壁にかけておいたではないか。彼は正しいと思う事のみを実行した。心の要求通り自己を正しく生かした。そして他人からみて無意味に風変りに見えても生き甲斐を感じたにちがいない。良い絵画は画家の感動を我々に伝える。良い人間も又他人を動かすことができるのではないだろうか。

清水 喜美男

「見上げてごらん夜の星を……」何かにこんな文句が出ていた。あの果てしなく無限に広がる宇宙の中にあり、その一つ一つがささやかではあるが充実した宝石の光を発し、あの神秘を秘めた人間の未来への躍進をさそう輝やかしい部分と全体とを形成している要素となつてゐるのだ。さあ僕達も明日を信じて力一杯そして精一杯頑張ろう……とまあこんな意味なのであらう。なるほど僕達の年令は人生の心臓を形成する大切な時期であることに二言はない。それでは一体その細胞を作る栄養をどこで得たらいいのだろうか……学校？、家庭？、友人関係？、しかし僕の思うのには今の学校制度からでは受験々々で満々々々て栄養どころではない。といった風に思える。

今の風潮からでは仕方ないことかも知れないが……。そうかと言つて家庭では接する人、物、環境、が限られてしまつていてこれも又おぼつかないように思える。ところで一口に栄養と言つても、中心になるものはないと言つても「考え方」、すなわち思考力を豊富に

することである。これから社会へ出て、多くの波にもまれ、渦に吸い込まれ、又ある時は潮水をもむこともあるだろう。しかしそんな時に唯一の心の助けとなるものは確実な考えすなはち自分なりに確信の持てる考えだと思う。そのような心のオアシスを持つには、なんとと言っても「書物」に親しむことである。

こんなことを言う僕自身も今迄読書らしい読書をしたことがないのであるが、つい先日たまたまある著名なイギリス作家の作品を何気なく二〇三頁読んでいるうちに、だんだんとその作品に引き込まれ、とうとう夢中で読み通してしまつた。書物にはもともと縁の薄かつた僕をこんなに夢中にさせた。書物とはドエライヤツチャと、その時初めてその偉大さに痛感させられた次第である。今考えてもあの時の感激はなんとも言い難い。同時に何十人、何百人もの友ができたような気持である。遠く離れた他国の人達の言ほんとするところを聞き、又作中人物と喜怒哀楽を共にする。又楽しといった感じである。「ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。」と、遠い昔から書物は心のふるさと、心の支えとなってきたことを、この時初めて実感として受け

とつたのである。これを機会に、これからはどんどん書物に當つて、少しでも心のよりどころ、心のかてにしたいと決心したところである。

勝利の喜び

小林 誠

私達の日常の生活の中で楽しいと思うことも数々あるが、其の中でも努力の結果事を成し遂げた時程、うれしく感ずる事はない。それは全く勝利者の喜びであり酬いられた喜びである。

※

きようは日曜なので、朝から問題集に手をつけたが、常になく身に入つて面白いように進んでいく。おかげで残っている問題もあとわずかである。案外むずかしい。夢中で鉛筆をひねりまわすうちに、さつと一まつ何物かが頭の中をかすめたと思う途端、直線が図を横切りようやく出来た。一瞬、身も心も一緒に軽くなって天地が急に明るくなった気がする。式を書く最後の一行を、思い切つてゆうゆうと大きな字で書いて鉛筆を置く。何とも言えない軽快な気分が全身を包む。今まで

の事が走馬灯のように頭の中に浮かんて来る。この緊張した努力はついに酬いられた。この言い知れぬ喜びに浸つた気分は、丁度高い山をやつと登り極めた時の愉快さと同様である。僕は苦心のノートを手にとつてつくづく見入つた。何となくノートがなつかしく見え、いつも下手な字も整つて見える。一点の雲もなく、あくまで澄みきつた空にヘリコプターの行く音がかすかにきこえて来た。

自己革命と理想社会

望月考之

この一年は、「自己革命」のおこつた年である。「果して今までの自己でよいのであろうか。」という疑問が、自己を客観的に、批判的にみつめることをする自己にと、考えさせたのである。「理想社会」は理想的なものによつて構成されており、理想的なものは「理想社会」に宿るのである。しかしいったい現今の世は理想的なものであろうか。虚偽に満ち、悪は亡びず、不平等、封建的なものが残つてはいないだろうか。果していかなるものが「理想社会」しかは決定できないが、私は、

(理想社会なるものを) 次のごとく定義する。真理、真実、平等、自由、道徳、愛の社会、豊かで平和で超人種的な社会、その他諸条件が満たされた社会、すなわち人類すべてが、幸福な社会である。また私たちの学問は真理、真実、平等、自由、道徳をこのうえなく愛し、理想的な人間をつくり、「理想社会」をつくるべきものである。ところが今の世は「知恵出でて大偽あり」の世ではないだろうか。真の学問こそは「自己革命」をおこすのである。しかしその学問をするときの私たちは、現実深く目を向けず、理想に無関心ではないだろうか。私たち各個人個人が自己革命をくり返し、さらに高い理想を持ち真摯な態度で理想に向かって邁進すべきである。実際、理想はあくまで高く遠いのであつて、絶対的な「理想社会」は実現できずに終つてしまふのである。しかしたとえ「理想社会」に到達できずとも現実に妥協せず、現実の奴隷となることなしに「理想社会」に向かつて邁進しようではないか。そのときこそ、私たちの学問をしている青年時代なのである。そのように個人個人の「自己革命」が、くり返されることによつて、理想像の個人差はなくなり、「理想社会像」が一致して、人

問の内面が新しく生まれ変わつて、「人間革命」がおこるのである。そして科学などの発展と「人間革命」が一致したそのときこそ、「理想社会」が実現可能となるのである。そのときに向かつて、前進をしつづけようではないか。

忘れがちな事

河阪幾代

生活があわただしく、する事が多くなりまして、どうしてもせかせかしてきますが、そんな時こそ、落着く事が、大切だと思ひます。

あわてると、必要以上に急いで、思ひぬ失敗をして大事になります。また、あれこれあれこれした末、どれも未完成という事になりかねません。

しかし、ここである落着くというのは、気持ちの上での事です。動作の上でのそれは、あまり落着きすぎると何もできないという点で、限度を考えなければなりません。それに気持ちの落着きによつて、解決されるものだと思います。

なぜ気再ちが落着くと良いかといいますと

まず、前後を見極めるという事です。この事によつて、計画性が出てきます。つぎにあげられるのは、要領良くできるといふ事です。気持ちのせかせかさせている為に、感情的な面に向けられていた心が、この事によつて、理論的な面にもどるからだと思います。考えて見ると、ずいぶんいらぬ事に、時間は使われているものです。

これらの事はずいぶん分かり切つた事だと思ひますが、忘れがちな事だと思ひます。

眼

望月克充

眼には色々ある。美しい目、菩薩像のような細い目、細い目で鈍く光るのはよくない。

ずるがしこいようで、一点が輝く感じがよい。又、悲しみに濡れている目、喜びで濡れている目、前者はさらに二つに分かれる。一つは悲しみだけであり、他方は怒りを含む場合である。前者は同情的であり、後者とはいささか異なる。例えば天命で死ぬ場合と過失致死による場合や侮辱された場合がある。後者には厳しい輝きがある。喜びで濡れている時はうれしさの光があふれ出て美しい。金剛

力士像のような目、敵に向って石を投げようとしている瞬間のダビデの目、一人考える時の目、埴輪の目のように目には色々ありそれぞれ美しい。眼は時には愛情の表現にもなるし、あまりじろじろ見るとインネンをつくれることもある。軽蔑のまなざしはよくない。

目には心、感情が入る。だから谷崎潤一郎の台所太平記の中に、主人公千倉宗吾の妻讀子が女中の鈴のことを「あの児は美人には違いないけれども惜しいことに眼に光がない。あれで眼に一種の鋭さがあって、キラツとした閃きのようなものがあつたらほんとうの美人になれるんだけど、……教養を積ませたら、きつとあの眼に輝きが出て来るんだがなあ」といつているように……。知的な輝きが美しいのである。だが東郷育児の画く眼も心を引きつける。男でも知的な輝きの眼をもちたいものである。それには考えることをしなければならぬ。考えるとは根本的な問題に立ち向うことであつて、現象に触発されて「けしからん」と思うことではなく、つまり実利実益を離れ、純粹に推理推論によつて、人生の、人間の根本に迫ることであると思う。限り無い輝きを身につけたいものである。

或る「青」

斉藤遼子

何年か前から、私の部屋の壁に一枚の絵がかかっている。モジリアニの「ヴァソ夫人の肖像」という作品で、何か大きなカレンダーの一部であつたと記憶している。

例のモジリアニの曲線や、角度のずれた様な至みは云うまでもなく美しいが、私が魅せられたのは、その夫人の背景となつてゐる或る青い色であつた。暗く沈んだ藍と紫とで、不思議な雰囲気をかもし出しているのである。どこか虚無的で冷たいが、幻想的な魅惑が、それに一種のやわらかさを与えている。私は思った。そして、何年１と云つても三年位だと思つて三六五日毎日毎日この絵と向ひあつて暮しているうちに、いつかこの色調が私の眼の中に住みついてしまつたらしい。考えてみれば、机の真正面に、私と一メートルとは離れずに、人物大の顔が、しかも正常な神経の持主なら、あまり見ていると気が変になりそうな顔が存在しているのだから、私の眼が「色眼鏡」になつたとしても、不思議はないと思う。霧雨にけぶる海の沖よ

東京オリンピック

土屋 裕
によせて

去年をふり返つてみるとなんと言つても、オリンピックのことを第一にあげなければならぬでしょう。あの「世紀の大祭典」は、いまだに僕の心に強く残つてゐます。世界一流の人々が行なう全ての種目に僕はもちろん日本国民、いや世界の大人が注目したことはいうまでもありません。なぜなら皆が彼ら若人の純粋な心から生まれるプレーにひきよせられたからです。人種の差別なく行なわれたことは本当に尊いことです。僕は大晦日の「東京オリンピックをふりかえつて」をみて最後の閉会式の場面で尚一そう世界は一つという感を深めました。それは勝者も敗者も勝負を忘れてしまつた後に全力をだし尽くしたという喜びから皆心が晴々としてゐるからです。僕ら若人も健全な心身をつくるのが大切です。それは勝負に生き、その度に全力をだしきることです。それこそ人生に必須な条件でしょう。

りもはるかに鮮明だが、それでいて、とらえ所の無い或る影響だつた。

私は、生活のほとんどの物を、この色つきガラスを通して見ていたように思う。それは生活に恐るべき諦めと、そして貰つた事を後悔しなければならぬ様な希望とを与えてくれた。「ヴァソ夫人」とその美しい色調とは私の絶望を絶望で救つてくれた。

それは時には哀しみとなり、又陰惨な喜びとなつて、私というものを作つていつたように思う。

ふと鏡をのぞいてみて己が顔にゾツとする事がある。勿論つくりにはない、そんなのは長いつきあいだから。ゾツとさせられるのは目を中心とした全体の印象である。いろいろな悩みや苦しみでポーツとかすんでしまつたガラスの外は雨。

離れようと思ひながら、なお魅せられて思わず振向く私１１１。

信念について

山下晴夫

信念とはその事を堅く信じ込む事だといふ。寺田寅彦の隨筆の中に次の話がある。昔

「言葉」のしおり

西山正樹

我々が日常何気なく使つてゐる言葉には、気がついてみるとおもしろいものがある。

「ずいぶん遅かつたね。どこで油を売つていたの」などという「油を売る」は、実際に人に油を売るわけではなく、用事の途中でむだ話などをして時間を費やしてしまう意味に使われているのは御存知の通りである。江戸時代の川柳にも、

江戸の水のむと油を売りがり
というのがある。地方から出て来た小僧などが江戸の暮しに慣れてくると、とかく用事の途中で怠けがちだといふのである。いったいなぜ、又いつごろから「油を売る」がこのような意味に使われ出したかという、江戸時代、髪池を売る商人が、婦女を相手に、ゆつくり腰を落着けて商売したからだといふ説がある。

隣にまだ声のする油売
という児童の句の「油売」はこの髪油を売る商人のことであろうか。

又江戸時代には灯明に使う油種の類を売り



ワラにある薬品を加えて煮るだけでこれを真綿に変ずる方法を發明したと称して若干の資本家をだました男がいた。その男はすぐ検査されて警視庁の役人の前でその実験をやつてみる事になつた。当然実験は失敗した詐欺という事になつたが問題とする結果ではなくして実験をやりつつある男の頭にどんな考えが動いていたかという事である。やつてゐる内にもかすればワラが真綿に変わりはしまいかという不思議な気持が頭に浮ばなかつたか。ピーカーをかき回している間にそれを期待してゐたのではないかと疑問である。この話に僕は思い当る事があつた。それは自分の経験からある物をこうだと想像してゐる内にそれを信じてしまふという事だ。うそもいつもついていると信じるようになるというのはよく知られた現象である。以上の事と一般に言われる信念とは当然その質を異にしなければならぬが僕にはその信念の中にこのような要素も含まれてゐるように思えるのである。

歩く油売もあった。種油などを計って他の容器に流し込むのは、水や酒とは違ってかなり時間がかかる。そこから「油を売る」という表現が生まれたのだともいわれている。

話は変わるが間違って読まれている漢字が案外多いのはこれやおもしろい。「消耗」

これは正しくはショウコウであってショウモウは慣用読みだそうである。といっているから「消耗品」をショウコウヒンと読んでおかし。第一テストでは×をもらうのが関の山だ。(おおかた御賛同を得て：)のおおかたは正しくはタイホウで「名目」はメイモクではなくミョウモクである。こういうぐあい

に国語正統派の人々につつまれたら国語の先生もさぞ腕をこまねく！おっとこれもー腕をこまねくだろう。

おもしろい「言葉」といえば「流行語」が思い出される。我々若人は品のよいユーモラスな流行語を選んで大いに使おう。それもタイムミングよく、それが一番いいと思うよ。

(朝日新聞より)

僕の目に映った先生

中村達雄

この文章を諸先生方は寛容と忍耐をもって読んでもらいたい。

八田先生・石和町出身、現在甲府緑ガ丘に住んでいらっしゃる。何事にも顔をつつ込む先生で物知りである。(浅いか深いかは御想像にまかせ)まだ若年の美青年である。

保坂先生・無口だが授業は厳しく敏速である。ある人の話によるとしゃれらしいしやれはエイトマンといったにすぎないそうだが秋山先生・人よんでカメ。英語でトータス、少し上品に聞こえる。駄ジャレと皮肉の名人。

家で考えてくるのかなあ？どお

守山先生・Eの担任であり数学の大家。僕達がわかるまで教えてくれる。スケートがうまいとは意外、何事にも熱心である。

舟山先生・大声でありかつ美声、まことに授業熱心で国語一筋の文学者ハダ。

小沢先生・いい車をもっている。みだし並のいい紳士である。暗記力が良い、ホントかな？

ノートの中から

斉藤妙子

二期から日記の代りのノートをつけ始めました。共感したことや精神状態や詩などを書きました。いま、それを読んでみると一週間たつたくらいでも、ずいぶん考え方が変わっていると思います。

ある時『ふくらんだゴム風船のように内がからっぽになってしまった私。もう疲れてしまった。だが、どうしようとも思いません。何もする気がない。絶望という語になるのだろうか。』と書きました。そして八日後『自分の絶望したというのはうそだろう。努力するということの永遠性、永続性の放棄なのである。』ということになりました。

でも十二月からは書いてありません。自身身の心に触れるのが怖くなってしまったからです。いい傾向ではありませんが、時を待とうと思います。明日になれば気は変わるかもしれません。

老演奏家と私

石原澄恵

太陽が彼の背中を快よく暖める春の目に、

老演奏家は小さな楽団を去って大きな楽団の門をくぐった。大きな希望の中に身を埋め自分を純白のバラで飾り立てていた日々は、夏の日光に淡雪が解けるように速く過ぎていった。ある日、彼は自分の身の困りがどこか他の演奏家と違っていることに気がついたがそして、そのために自分がこの大きな楽団にうち解けられないのだ、ということもわかった。その原因はすべて、彼のバイオリンにかかっていた。彼のバイオリンは音色こそ誰の物にも勝っていたが、その表面はあちこちがはげていた。他の演奏家は、表面にいろいろな模様が描かれている見るからに素晴らしいバイオリンを持っていた。このバイオリンを捨てなければ自分はこの大きな楽団で過ごすことはできないだろう、と彼は悟った。もしこの大きな楽団にとどまるならば、自分の名前が世の中に永遠に残り、尊敬するベートーベンと肩を並べるくらい有名になるかもしれない！。彼はレンガ造りの家々が立ち並

ぶつめたい冬の巷をさまよい歩いた。そんな時でも彼の右手には、自分をこんなに苦しめているけれども捨てることのできないあのバイオリンがつるされていた。1 数日して、彼は凍りついた冬の夜道を小さな楽団の方に向って歩いていった。掌に乗った粉雪を見つめながらうれしさとさびしさの変った表情で、

「わかっていたんだよ、わしにはその方が適しているんだよ。」とつぶやいた。

考えてみるに、老演奏家は私であり、小さな楽団は家庭である。そして、バイオリンは環境に、大きな楽団は大学に等しい。未来に豊かな理想像を描き、現在に有頂天になっていたのも私、「大学」と「環境」の間で根無し草のようにさまよい、途方に暮れ、思い悩んだ結果、環境を顧みて、「家庭」にもどったのも私である。老演奏家が彼のバイオリンを手放すことができなかったように、私も自分の貧弱だけれど愛着のある環境を捨てることはできなかった。家の人は、長い間さまよっていた私の心を慰め力づけてくれた。悲しみの足で一步一歩踏みしめて来た茨の道のこちらにも、やはり喜びは宿っているということ

を教えてくれた。長い放浪の後の深呼吸は、

頭と手

古屋哲子

たしか小学校四年の時だったと思う。「明日一人づつ、どんな話でもよいから、みんなの前で話してもらいます。」と先生に言われて、ある本から探し出したのが、「頭と手」という題の短い話だった。

昔、二人の兄弟が農業を始めることにした。秋、麦を蒔く時、弟は畑にいっぱい水を入れて蒔いた。兄は「農業を研究するのだ」と言って本を読んでいて蒔かなかった。もちろん麦は実らなかつた。夏、弟は前に水を入れて失敗したので今度は全然水を入れなくて田植えをした。兄は相変らず本ばかり読んでいた。結局この二人は一年の間、一粒の米も麦も作れなかつた。こんな話だったと思う。その時はよく意味も考えずに、暗記してみんなの前で話したのだろう。

研究、計画が頭であり、実践が手である。

他人の行為を批判ばかりしていて、自分では何もしない人。こんな人は頭ばかりの人。何の計画もなしに行動して失敗する人は手だけの人。二人共、完全な人間ではないのだ。このように、計画と実践はいつもいっしょにあるもので、決して離れるものではない。簡単なことのようにだが、なかなか実行出来ない。長い休み中によくある計画倒れ。試験前日の一夜潰け、等々。頭と手が離れてしまった例はいくらでもある。これからは頭と手を備えた完全な人間になるよう。心掛け、努力していきたいと思う。

夢を持つ

淡野元裕

とかく我々の周囲は、陰気なベールでおおわれている。そうした中で時を過ごすのは、何かとても惜しいような気がする。しかし、それは考え方一つかもしれないが、自分のように生来、腰をすえて立ち向かうのは苦手の性分から来るのかも知れないが、自分はいつだったか、少しかぶれている親せきのおじさんに言われた。 1 とにかく、自分はもうこんなに年をとってしまったが、まだいくつ

夢を持っている。だから、まだ借金が出るほど若々しく働らくことが出来るよ。だから君も、1-1と続いた訳だが、それ以来、そういうものかと、いやに、頭にこびりついて離れない。しかし、忘れるべきものではないような気がする。目先のことに、とらわれがちになる現代に、一層必要のように思われる。

未来へ

後藤節子

高校生活の三分の二が過ぎようとしている。時々は既製の道を切換えて独自の道を築こうとして悩み苦しんでいるひとつの魂を氣にかけるはずもなく、忙しそうに去っていく。ひそかに涙して、星に自分の無力を嘆いたところで何の進歩もあるまい。心を新たにしていきたい。自然の厳しさ、人の世の無常。今までの涙は、かえって励ましになるかもしれない。理想にむかつてまっしぐらに進もう。目的のみで結果がどうなるかは問題外である。

みち

木原悦子

でこぼこしている。石ころだらけである。田舎の土手道。自分は歩いている。行き着く所もわからず、何の摩擦も生ずることなく：。富士は、傾いた弱い日の光をただ一人道を行く私に投げかけている。すぐ近くの山のふもとの小屋から立ち昇る白煙は、夕空に大胆な曲線を描きながら消えてゆく。左手に悠々と絶えることなく流れ行く富士川。そして足もとには、夏のあの生き生きとした緑草の姿はない。自分はその流れと共に枯草をふみながら、歩き続けている。過ぎ去った日々の事をそしてやがて来たるべき未来の事を考えながら、左手をポケットに突っ込んだまま、堂々たる河の魅惑に引きこまれつつ、足はゆつくりと、一歩一歩運ばれて行く。

と、その時、燃え広がる炎が眼前に、それを二人の少年が追っていた。芝焼きのいたづらであろう。火を恐れおののく猛獣の様な私の驚き。勢い良く赤々と炎は広がってゆく。すっかり枯れ、何の力も失せてしまった草達。彼らは、それを待っていたかのように炎

の中に飛び込んで行く。いかにもうれしそうに。苦しくはないのか。なぜ逃げのがれようとしなの。自分は彼らに問おうとする。

だが、その時、二人の少年の語り合う声が入って来る。「もう少し時期を早く燃せばいいね。三月には芽が出るんだからな」。そうだ。枯れ草達は、采たるべき春のために、はなやかな時を迎えるために、こうして熱い炎の中へ走りよって行くのだ。自分は芝焼きの目的くらい知っている。それなのに、なぜ苦しいだの、逃避だのという事を考えたのであろうか。火は、すぐ私の足もとまで領域を拡大しつつある。

甘かった。実に甘かった。私の考えは：。自分が情ないと言うより残念でたまらない。これが草というものの「歩むべき道であるのか。炎の赤がいっそう強く目に映る。遠くに電燈が、ぼんやりと小さくともされ始めた。家路につく私の足は軽くはない。ごろごろとした石ころは、私のためによけてはくれない。さつき見た東の富士も、西の山のみとの小屋も、薄暮の中にただその輪かくのみを残している。後には、今ままで、私の歩いて来た「道」が、途中で大きなカーブをしながら細く続いている。

それらはすべて快よい夕暮れのひと時となつた。

時は、正月二日であった。

私の汽車は走る

佐久間 文子

私は汽車に乗るのが好きである。それも普通列車で一駅々々止まっていく方がおもしろい。ただ乗ってあのガタンゴトンという音を聞くだけで楽しい夢の世界に入る事ができる。昼間の汽車ならば外の景色をながめるのがよい。一番の汽車に乗る時はまだまっ晴で山々も木々も黒々とした塊にしか見えないのが一時間ほどたつと白々としてくる。線路ぎわのある家では主婦が朝食の仕度をしているし、ある家ではやつと雨戸を開け顔を洗っている。またしばらくするとランドセルをしまった小学校の団や、勤めの人の小走りに歩くのが見られる。これらはごく平凡な事柄であるけれども汽車の窓を通してみるとまるで人生の縮図を見せられているような気がする。通りすぎる数えきれないほどの大きな駅小さな駅—それらはすべて人生の悲しみや喜びを表わしていると考えると、ぼんやりして

りと知らずに通りすぎる駅は、あまりにも小さく平凡なために見落してしまふ幸福や不幸に相当する。私は考える。「私の前に坐っているあの人はどんな過去を持っているのだろうか。私はいつぱしの作家にでもなったつもりで考える。「この人の未来は？もし私が筋書を書くとなればこうなるんだが。」前の人には自分がどんな運命を与えられたのか知るよしもないのでまじめな顔をして坐っている。私はそれを見て時には大声で笑いだしたくなる—人の悪い趣味には違いないが：。

また夜汽車に乗る。楽しみも格別である。何も見えないからつまらないと言う人もいるけれどもけつしてそんな事はない。暗やみにいくつかの灯が輝やく。それは山の上の一軒家であり町の紅や青の灯である。それらは時には孤独な魂の象徴であり時には人の、暖い心の輝きである。ガタンゴトンのリズムもそれに合わせて哀調をおびた響きとなり心を躍らせるマーチともなる。その、時間を超越した響きの中で私は窓ガラスに映る自分自身を見つめる。いや裸の心を見つめる。ほとんど乗客が寝ているこうした時に私は考える。「この汽車にはいったい終着駅があるのだろうか」と。もちろん駅はあるけれども人生の

終着駅はあるのだろうか。「死」？しかし人生の終着駅が死であるという考え方はあまりにもわびしい。なぜならそれはあまりにも容易に手に入るからである。単にこの汽車からおりさえすればいいのである。貴重な人間の生涯が死を目的として進むはずがない。結局人生には終着駅はないのではないだろうか。汽車は常に新しい目的地をさして進んでいく。私は今もそれに乗り続けている。そして考えるーガタゴトの歩調に合わせながら。

次の駅はもう目の前に迫っているのである。

ある劣等生

前田 義明

僕の成績はぐつと低い。席次の数字はいやにでかい。いつもそうだ。小さい方がいいらしいのだが……。それからテストの点の数字は大きい方がいいらしい。もしこの二つの間の関係を反対にしちやったらどうか。僕のだけ忘れて、そうすれば…………。

彼はやっぱり一高の劣等生だった。そのことに今まで気がつかないでいる程すきだらけの劣等生。彼はふとしたこと（ある女の人に

好意を持ったこと）で自分を見詰めることをした。自分が少しつつ分かってきた。すきだらけの彼は悩める劣等生と化した。いろいろと考えた。劣等生脱出の方法も、だが実行力に乏しかった彼は考えることだけで空回りしていた。でも最近どうにかこうにかこれならという方法を発見したらしい……。だがそれは恥ずかしいから秘密の策戦ということにしておくそうだ。

劣等生！劣等生、お前の根をしつかりとろせ。お前は風に吹かれている葦だ。空模様はいつ何時変わるかも知れない。唯しつかり踏んぼっている。それはお前自身の為だ。同時に又……の為だ。うぬぼれるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ。

孤独と私

金原 圭子

一般に「孤独を愛す」。などというのをよく耳にするが、それは若い人々が好んで使う流行語なのだろうか？私はそれは流行語などではないと思う。なぜならば私もその言葉をよく使う仲間の一人なのであるから、孤独とは素晴らしい魅力的な言葉ではないか。私は

孤独になった時、非常に楽しく、時には寂しく、そして悲しくさえなる。かつて、だれもいない萌え出たばかりの新緑の森の中の一木道を一人で歩いたことがある。その時、私はたいへん楽しかった。一人でいることに喜びを感じた。私は自分の思うままに大声で歌い周りの美しい景色に心を奪われてゆつくりと歩いた。その時孤独は私にとって非常に楽しいものであった。しかし、だれかの近づいて来る足音が聞こえると楽しかった孤独は一変して恐ろしさと呼んだ。人に会うのがとてもこわかった。まるで会うのが人間ではなくなにか見たこともないような恐ろしいものにでも出会うような気がした。今、思い出してみると非常にばか気た考えであった。またある時には学校で大ぜいの友だちに囲まれている様な時にも孤独になった。その時私はいろいろなことについて悩んでいた。友の話す言葉一つ一つが私の心をついた。私は「ただ一人である。」と痛切に感じた。大ぜい困りにいるにもかかわらず私は友だちがほしかった。寂しい悲しい孤独だった。この様に私の孤独は多種多様であるけれど、でもやはり私は孤独腹心の友とし続けていこう。なぜならば孤独の友を裏切ることはいらないでしょう。

命中

花野 郁夫

近ごろ榮作は、勉強する気もおこらず、かといつて、はでに遊ぶ気もおこらず、こたつでゴロゴロしているばかりである。そこで、気分を一新しようとして、かつて銃砲店で買求めておいたエア１・ガンを携えて、墓地へ射撃練習に出かけた。（そこは、彼の家のごく近くで、人気はまったくなく、雑草が生いしげり、石塔が陰うつに立っている）。いまにも雪を降らせそうな灰色の雲があたりを圧し、ときおり、尾の長い鳥が竹ヤブの中から飛びたつて、鳴きながら山の方へ向つて飛んでいった。しばらくして、彼はカンカラを捜し始めた。しかし、それはすぐに見つけられた。彼は、カンカラを石塔の上にのせる。標的から二十メートル余りの距離をとる。タマをこめる。銃の端を肩にあてる。ねらいをつける。ねらいが定まる。引き金を引く。プシュ。カラカラソ。１１。思わず微笑が浮ぶ。なんともいえない。いい気持である。胸がスーツとする。！。やがてカンカラを拾いに行き、命中していることを確認す

る。そうして彼は、計分自身の堅剛に自信を持ち、また明日を期待する。灰色の空からはとうとう雪が、がまんしきれずに降ってきた。彼は、明日の雪景色の美しさを楽しみに家へ、帰つていった。

ばか思い

三井 正己

私は近頃自分の回りにあるものすべてから遠離して、どこかまだメカニズムの影響を受けていない山里の古寺に年老いた住職と二人暮らしをしてみたいなどと考えるようになったというのは、一年にたったこれだけという少ない私の読む本の中で、たまたまある一冊が強く私に印象を与えたからだ。元来、特別な感覚能力を持ち合わせていない私であるが、枯淡な渋い味をもったものに對しては、何か引きつけられるものを感じていた。その住職は仏門の中にあつて、さほど細かい事に気を使わないで、常に我が道を堂々と歩んで時には俗っぽい面をみせ、そしてその陰に何か無限の偉大な人間像を想像させるものをもっているのである。彼は茶に親しみ、きまつて一日の起きている時間の半分は岩水が一時停滯

して、小さな幾つもの渦を巻きながらチョロチョロと、爬虫の背のような岩肌を洗っているはなれ（書齋であつたが、今はもっぱら茶室と化している）で過ごした。彼は人の心の中を見透す力をもつていて、夜遅く私が想いを寄せる村の娘のところへ通うのを気付いているのである（１１私はだれにも知られていないと思つていたのであるが、）ほとんど私の為す事に干渉しないで常に黙つて自分の道を進んでいる。17才の私が酒を飲もうと、村にあまりない煙草をふかしていようと……。しかしこの言葉だけは時々私の耳に厳しく吹き込むのである。「これ、正よ、常にかが身の行動には責任を取れよ」……。私は将来山を下る気など毛頭なく、ただ一人自然をうたつていたのである。詩に親しみ出したのは中学の何年頃だったか。もう何年も書き続けてきているが人に見せるわけでもなく、簡単な寺仕事の合間をみては、書いてきているのである。以前に作つたものをいつも読み返してみても、独りで笑つていたりどこをみるともなく杳然と窓越しに立っていたりするのである。時には住職が私を部屋へ呼び入れて茶をたててくれるのであるが、はじめなどさっぱりわからなくてあつたのであるが次第

に好んで頂くようになっていくのである。この山寺の静寂な中に茶をたてる茶せんの躍動的な音が私の若さと野望をよみ返らせることもあるのである。しかしすぐまた閑寂なこの山里で心静かに独り暮らしをしていく喜びに我が身を埋めさせていくのである……。なんてヘンな事を考えるずらあなあー。

ある若者たち

丸山恵子

二組の若者たちのグループは歌った。太くたくましい声と、可憐な高らかな声とは、みごとに合唱を戸隠高原に響かせた。

それはある夏の日のこと……。

一組は松本自衛隊、一組はガールスカウトであった。光々を照らされた大きなキャノン小屋での、それは若者たちの見事な調和であった。制服に身を包んだ隊員たちは吹奏楽を奏で、しばし荘厳の轟きを響かせた。ガールスカウトは自らの歌を歌った。それは美しいソプラノであった。そして踊った。数人の隊員たちも仲間に励まされて踊った。しばし笑いの渦が巻き起った。そして若者たちは又歌い続けた。どの顔も、どの顔も未来に生きよう

とする若者たちの顔である。

「ケガ人運搬訓練を行ないます。」隊員たちは日頃の腕前を見せんばかりの演技を披露したがタンカの底がぬけてしまうというトリック入りで、一同爆笑となった。無邪気な若者たち、それは無心に遊ぶ子供にすぎない。ガールスカウトはあらかじめ用意していた文の空白に隊員たちから形容詞を出してもらい組み合わせ文を作ることを提案した。

「……の可愛いガールスカウト。」すばらしく一致した文が出来上がった。＃可愛い＃という形容詞。それは単なる形容詞ではなく、真の女らしさに触れた隊員たちの心からの絶賛なのではなかったろうか。

夜がだいぶ深けた頃、その集いも終わろうとしていた。つきることがないかのように歌い続ける最後の歌。それは初々しさにも似た甘く清らかな漂いをおわせた。

偶然にも隊員の一人が私の町の近くの人であることを知った時には本当に驚いた。が、すぐにそれは嬉しさに変わった。たくましい若者たちの一人が身近にいたのだと思うと……。

ある夏の日の美しい若者たち
心深く刻まれた若者たち。

清らかな調べと共に、今大きな浮彫りとなって現われてくる。

私は、たった一人の見学者なれど……。

自由なる散策者

の夢想より

加藤清一

あの美しい日々はもうやって来ないのだろうか。湖の岸辺に佇んで静穏な微動だも揺るがない深みに神さびたような気持になつて見入った日々。ちようちよが一つヒラヒラと飛んで来た。僕はすぐに彼女に憧れた。彼女も僕に気を許す、そして仲良く一緒に戯れて、ヒラヒラ彼女は僕のぐるりをめぐり、僕は彼女の後を追って野をかける。それから夢がさめたように彼女は僕の手の届かぬ所へ飛び去った。こ高い山の頂めがけ、息も切れ切れいちもくさんにかけ上り、予言者になったような気で小さな征服者は下界を見はるかす。そしてわが領土の広大さに驚嘆し、満足して帰って行く。無限に広く、無限に青い蒼穹に神秘的な永遠を感じ、思うがままに飛びかう鳥に憧憬する。11ああ魔法の糸もわれらの日々

をたぐり寄すことはできぬのか。

あらゆる自然の抱擁の中で僕は自由に夢想の中を遍歴した。今のように僕のすべてのおとなびたものが想像を束縛することはない、僕の世界は平等であり、また上げる何ものもなかった。どうしてこんなに暗澹とした気持になつてしまったのだろう。子供が初めておとなの世界の悪を知ったときのような悲しい絶望の病が僕の魂に深くなっている。天才の前にひれ伏し、天才の前に恍惚と陶酔した日々の懐しい思い出が潮の如く僕を襲う。もう一度雄々しく立ち上がらねば。僕の生命は生きるように創られたのだ。だが、もしかしたらノアの洪水がもう一度起るかも知れない。神はもう随分立腹しているだろうから。「契約」のために洪水が起せないのかも知らん。もし起れば人間はもう一度やり直すことだろう。全く最初から。そうすれば退廃的な内面生活は改まるだろう。否、それよりも我々は今ここで考える必要がある。どうか現今の社会、及び学校教育のもたらす愚かしい傑作になるのはいとどまりたいものだ。我々は今こそ大きく自覚する時が来た。精神に糧を与える時がやって来たのだ。僕の知る多くの人は、社会の悪習に気付いているのに目

かくしをしている。目かくしが取れても尚も横を向こうとする。そしてこう言う「これは確かに悪い。でも仕方がない。」これではいつでも「仕方がないのだ」。マンネリ化した生命はもはや生命ではなくなっている。そこでは自己の更新も、再発見も何もなされずむしろ自己を喪失するのみである。生きながら死んでいる生命などは全く無に等しい。有つても無くてもいいのなりつそ無い方がいい。我々の賦与された知恵というものはそんなためにあるのではない。諦めるべきものとそうでないものがこの世にはある。諦めるべきものの前では静かに敬うがいい。しかしそうでないものには敢然と戦うがいい。それを見分けためにも知恵の静観はある。そしてこれこそ我々をして幸いたらしめる最大の武器ではなからうか。これが無くなったら人間は存在の理由を全く見失つてしまうであろう。そして今そうなりつつあるように僕には思われてならない。

「空気は我々のまわりに重い……世界がその分別臭くてさもししい利己主義に浸つて窒息して死にかかっている。世界の息が詰まる。もう一度窓を開けよう。広い大気を流れ込ませよう。英雄たちの息吹を吸おうではない

か。

父

森田久子

七年前に父は亡くなった。私はその時のことをはっきりと覚えていた。亡くなる前にベットのそばで兄と一緒に泣いたのを、もちろん幼い私には「死」ということはどういうことを意味するかは知らなかった。ただやつれた母や周囲の人の深刻な顔をみせているとそうせずにはいられなかった。父は不思議そうにトロンとした目で私達を見詰めていた。もうその時は感覚はなかったらしい。

父は真面目で努力家だった。農林省の研究所に勤めていた。だからいつも書斎にとじこもつて原稿を書いていた。又実験のため徹夜をして朝帰つて来ることもあった。兄はいつか「親父はかわいそうだよ。研究研究の苦労のしどろしどろで一生を終つてしまっただろう。楽しみなんてなかったらうな。いくら偉くなくても死んでしまったら何ものもないじゃないか。」といっていた。私は兄のこと

も、もつともだと思ふ。私達を残して死んでいった父を責めたい気持ちもある。でもガンを

いう病気には勝てなかった。父は太く短く生きたのだった。

父は私をとてかわいがってくれた。ある日こんなことを言った。「久子『特に良い』を二〇以上とってごらん。そうしたら金時計を買ってやるぞ。」これは母も知らない父と私のたつた一つの約束だった。私は一生懸命頑張って約束を果たした。でもその時はすでに父は亡くなっていた。

今御座敷に父の写真が壁にかかっている。悲しくなった時そつと写真をみる。父は笑っている。何か言いたそうだ。自然に熱い涙がこぼれる。「そのくらいの事で泣いてどうする。」父は又笑う。私も思わず笑って涙をふく。「ばかね。」と自分にいいきかせる。これから先いろいろな事にぶつかるであろう。でもね、お父さん、私は明るく強く生きていくように頑張ります。

書と友と涙と

大木節子

その時、私は温かいものが、頬を伝わって落ちたのを感じた。ぼんやりとした向う側で友も泣いていた。……………

笑いに包まれたクラブ、単調な一高生活を破って、私に友を与え、勇気づけてくれたもの。それは書道部である。部には、大きな行事として甲一書道展、それに夏休みのキャンプがある。キャンプは、毎年、白樺湖に行き近くの高原を一日がかりで歩きまわる。

白樺の間で、御飯を焚くのも、また楽しい。緑の草原の上に寝ころんで、青い空に浮かんだ雲を見ていたこともあった。夏休みにはそれがすむと、書道展の準備に取掛かる。作品を書き上げること、それは苦しいと同時に楽しい。真夏の太陽が、ひまわりに語りかけている頃、窓は閉じ、友たちは真別に筆を動かす。額から、大きな汗が落ちて作品をだめにしたこともあった。また作品が少しもできず、友と校舎の中を一まわりしたこともある。「頑張れようね。」と言いながら……夏休みが終わると書道展が開かれる。皆の作品の一つ一つに思い出が刻まれていて、とても楽しい。友だちの顔は、ほほえみをうかべていた。……………

そしてその最後の日、私や友だちは、丁寧に作品を壁からはずした。後に残ったのは、其白い壁。私の心もぽっかりと穴があき、そして涙が流れ出てきた。「泣かないで。」と

言い合いながらも……。

「友よ、いつまでも、手を結んでいて。」

と私は、心の中でそう叫んでいた。

古寺めぐりの思い出

五味恵子

学校という一つの社会に住んでいると失うものがずい分多いものです。刺激が強くていろいろ興味深いものが次から次へと目まぐるしくやってきてともすると自分を失ってしまったりまた自然をも失ってしまいがちです。そんな時私たちは修学旅行で紅葉のまつさかりの京都や奈良の古寺を訪れました。

大和の古いお寺はすべてが古びていかにもおくゆかしい印象を与えられましたがその間に私は私達のいつも使っている「美しい」という言葉について具体的にはどんなものだろうとたびたび考えさせられました。ある評論家がほんとうの美しさは常に隠されているもので、いくら説明しようとしても説明しきれないものでありその反対の醜悪なものは決して隠れていないで人の前にいつでものさばり出ているということをその著書の中で言っていたのを覚えていますが、私はこの旅行をき

御坂峠の思い出

小林恵子

私は夏よく御坂峠をこして、山中湖、河口湖方面に遊びに出かけたものだ。御坂峠。あそこはこの辺との温度の差が大変ある。登れば登るほど心よい涼しさを感じる。ここらでなく油ゼミのジンジンという音は聞くたびに汗がにじみ出てくるような熱っぽく感じるがあそこで鳴くゼミの声は全然そんな感じを受けない。それどころかいつそう涼しさをさそうかのように感じられる。道路はいつも工事中で天気がつづいた日などに行くと前の車は全く見えないほどのほこりである。今にこの道路も全く舗装されて快的な気分で走ることができる……。と自動車にしがみつき工事中のデコボコ道を走りながら遠い未来の事を想像するのも楽しい。箱根に行った時は深夜御坂峠を通った。道行く自動車も全く絶えてたまに定期便のトラックが通る位であった。自動車の警笛はあたりに無気味に反響して再び黒い樹木に吸い込まれていった。その時道をさつと横断したものがあつた。野うさぎであつた。御坂峠は動物の良いすみかであつたの

っかけとして二つの古美術の見学のしかたというようなことを学ぶことができました。一つは。パンフレットや解説書にとられないで自分の力だけで隠された「美」を発見しその「美しさ」を自分なりに理解すること。もう一つはこの古寺めぐりとか、あるいは日本の古典文学を読むとかこれらのことを現在の生活から切り離して考えるのではなくてそれらを全部私達の心の栄養分として吸収する必要があるということです。目だたない日常的な小さいものの中に偉大な古典とか古美術を吸収することができたらどんなにすばらしいことだろうかと思えます。

私の十八年間

稲葉一俊

光陰矢のごとしとは、昔の人はよく言ったもので私が生れてから今日にいたるまで早くも十八年間の年月が流れ去った。

私の生れたのは戦後間もない昭和二十二年の秋、十月六日の事で、戦後まだ戦争の爪跡が重々しく人々の心に残っているころ今の中央三丁目のある一室でうぶ声をあげたのである。

そして、生れてたつた二ヶ月程過ぎた幼い私に思わぬ事がおこった。それは、私が当時流行していた風邪にかかり、ヨビヨウを起し、背中に大きなメスを入れ生死の境いをさまよい、どうにか小さな一命を取りとめたのである。今なおよく聞かされる話である。さて一命を取りとめた私は早くも七才となり体重？身長75の小学生となった。北に愛宕山、東に霊峰フジ、南にアルプス、西に八ツ岳を仰ぎながら六年間の学校暮らしも楽しくなりだした頃、桜の花の咲く季節がやって来た。昭和三十五年胸の金ボタンもあでやかに市立東中学校に入学……。史上最高とも言われる受験地獄も何のその、目ざす一高へと進み帽子の白線もとれ、気持ちも新たに高校生活に入りもう二年。民族のスポートの祭典、東京オリンピックの聖火も消え、次期メキシコ大会への努力と希望を胸に秘め、一九六四年に終わりを告げた。新春をむかえると共に、私の未来への限りない欲望が芽を吹き出し、輝しい前途に向って大きく、力強く羽ばたいて行く。我が前途よ、青春よ多幸なれ。

である。そういえばいつであつたかキジやウグイスの声を聞くこともできた。まだほんとうに奥の方まではいった事はないが、この程度でいろいろと夢想する方が楽しい。みんなこの峠は目的地へ行く単なる峠としてスーッと通り過ぎてしまうようであるが、私はいつもここで休む事になっている。頂上よりちょっと手前で絵に良いような太い木のある所、そこには清水がいつもたんたんと湧き出ている。そこを見つけたのはもうだいたい前の事であるがそれ以来そこは通るたびに必ず寄る事になっている。だれも知らない私だけの秘密の場所である。こちらが水不足だとさわいだ時もある泉はたんたんと湧き出していた。最近行つた事はないが、今ごろはすっかり凍りついて鏡のような大きなつららが出来ているかも知れない。あの峠の春は遅い。いつ溶けて再び清らかな美しい水が流れはじめるか。それはまだ遠い事のようにある。

夜行性放浪癖

土橋健治

もう少しで明日が今日になる。目はパッチリとあいたまま……。カチ、カチ、カチ、時

計が午前零時をすぎた！…一九六五年だ。新年だ！。

このまま寝いつてしまうのは惜しい。この決定的な時間をどのようにして過ごそうか。そつと家の鍵をはずし、眠っている家人に気付かれないように、買ったてのオートバイを引き出した。

心のこりな一九六四年だったが、おもいつきりオートバイをとばそう、Lost go.

これにのつてはじめて国道を走つた。白バイも何もとおらないアスファルト舗装の上を無免許運転でとばすこの気持ちのよさよ、交番の前をためらいもせず一気に走りぬける。空に星はなく、夜気はなま暖かい。

駅前に出た。新年を迎えた、いなかのひなびた駅は全然風情がない。去年そのままのような電燈が開札口をうす明るく照らしている。

もつと遠く行つて見よう。

突然向こうから車が一台突つ走つて来た。

道幅はとてもせまい。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。その事は私のオートバイすれれに走り過ぎた。「ホ……。」と一息。

もうかなり遠くまで来てしまった。明りが見えたので伯父の家へちよつと新年のあいさ

が最近はいきつゝま適当に「ケンブスフォードです。」等と答える事になっている。すると相手は首をかしげながら「珍しい犬ですね」なんて言う。こちらは思わず「ウフフ」その他彼女の特長は食物に対し非常に用心深い事。主人である僕ですら彼女のしている所で試食してやらねばならぬ。だから知らぬ人が食物を与えても臭いを嗅ぐだけで食べない。与えた人は嫌な感じになるらしい。又愉快な事は、彼女にビスケット等投げてやると普通の犬は飛びつくのに、彼女は下を向いてどこに落ちるか見ている。だから生存競争が激しかったら彼女は生きて行けないだろう。

そんな彼女であるが彼女はやはり名前の通り「可愛い」。先日も用事のあつた僕を、雪の降る中で二時間もじつと待っていてくれたり、くさくさしているオイラを見ると、慰めてくれるかの様にオイラの瞳を見つめて元氣を出して散歩に行こうと誘ってくれる。そして思いきり飛び回りオイラに生命の存在を教えてくれる。だからオイラも彼女を大切にし可愛がる。時には彼女の医者となり美容師となる。又彼女の姿が見えないと勉強そつちのけで捜す。台風等の時は彼女をまず心配し北風の吹きまくる寒い夜にはオイラの部屋の

つを兼ねてちよつとたち寄つた。

帰りには、あの曇つた空から、雨やら雪やらわけのわからないものが降つて来た。一路爆進！この調子で今年も行きたいものだ。

年明けて

井上直美

「ああ、ことしはいよいよ三年か。」寢床の中の私の口から、ふとこんなことばがついて出た。元旦の朝だ。雨戸をあける。空は曇つていた。私は力いっぱい深呼吸をした。体のすみずみまで新しい空気が行き渡る。こんな日、私はどうしても、どうぞこの一年私にとつてすばらしい年でありますように。と祈らずにはいられなくなる。すばらしい年になるはずはないのだけれども……。ちよつと心が暗く曇る。この暗さはなんであるのか？それを私が知つていても、自分の力ではおつしやることはできない。

雨戸をあけきつた時、外の空気が部屋中にあふればかりに流れこんできた。毎朝かわりもしないことなのに、きょうほ、なぜか私を新しくしてくれる。

主人（任犬カナ）になる。そんな夜は彼女は天国に住んだ様に眠り、オイラが踏んでも目を閉じている、安心してきつているらしい。ソナナ、カワイイ、ダダツコ、ノヨウナ、カノジョガモウゴサイ、トキノタツノハハヤイモノ、ソシテコレヲカクオイラモー！。シツカリシナクチャ。

訪問

竹下清治

東雲の小学校の所を東へ入る道がある。この道は僕のかすかに記憶している道である。

僕が五つの時だから十二年ぶりである。一月一日母と二人で再びこの道を歩いているのである。白くて少し曲りくねりながら続いている美しい道だ。まわりの景色は、ものの枝や葡萄の枝や桑の枝に緑の葉がなく、荒涼としているが日光はうららかである。しばらく歩いて右に曲ると、おさでの家である。葡萄畑の中の大きなお蔵のおだれのある家。確かに僕の記憶の中の家なのだ。そこにはお爺さんとお婆さん二人きりで住んでいる。母の母が生まれた家であるから僕にとつては遠い親戚

題が必要のない話

小林文昭

オイラのマスコットは彼女。但し犬である。彼女の名前は「プティ」フランス語である。身長？約五十センチ、胴回りは大部分の女と同じで彼女も悩んでいる様子？、顔と毛並は雑種だがちよと変わっていて一種独特である。知らない人は「何犬ですか。」等と尋ねる。最初は「雑種です。」と答えていた

だ。「ごめん下さい。珍らしい人が来ましたよ。」しばらくたつてから、「おやまあ、さあさあ、お上りになって珍らしいじやないせんの」とお婆さん、「なあーんだ、なあーんだ」とお爺さんはいかにも嬉しそう。おめでともそこそこ上に上がる。中は暗くて少ししめつばい。柱は太く黒く輝いている。掛軸や襖は黄いろくなって古くさい。部屋のみにある比較的新しい型のテレビがひとときわきわだつて見えて不調和だ。部屋の中央にお蔵の大きくてぶ厚い土のとびらが開いたままである。このとびらは今でも鮮明に記憶している。入り口は石の階段で、ぽかっと大きくまっ黒な口をあけている。何かその口に食われそうな感じがする。十二年前の時はこの入り口が恐くて泣いたので、はつきり覚えていたのだ。母や母の兄がまだ小学校に行っていた頃、よく松里から歩いて遊びに来たそうだ。その時にはこの家も、もっと大きくて多ぜい母の従兄弟がいてにぎやかだったそうだが今はこの大きなお蔵しか残っていないのである。さっきの白い道をもつと奥へ行くと、四つ足門の古くて大きな家がある。お寺でもないのに四つ足門があるので少し変だが、いかにもその家に合っていた。これがおおくぬ

ぎの家である。おさでのお爺さんの兄さんが住んでいるそうだが、勿論僕は初めてだ。日のあたる広い縁側で小さな子供が六人、かるたをして遊んでいた。おさでの家とは対照的に明るく、あたたかい感じがした。

仙人

生 原 尚

切り立った絶壁、底知れぬ谷底、そこからほ霧がもうもうとたちこめてくる。ぼうーとかすんだのこぎりの歯のような山頂に一人の仙人が静かに立っていた。白い髪の毛に白くて長くのびたあご髭、千里四方を見わたす鋭い両眼、同じく千里四方のどんな音でものがさぬ大きな耳、不思議な仙人である。今、二つの目はらんらんと光り、しばらくあたりをゆっくりと見回していたが、やがてある一点でピタリと止まった。そこは大きな森の中で、一人の木こりが仕事にとりかかろうとしていた。

この木こりはその筋肉が岩より硬く、その力は象五匹にも劣らぬほどなのである。一方木こりが倒そうとしている大木は数世紀の間のびのびと成長しその高齡にもかかわらず葉

は青々と茂り、あたりを支配する様子は、何者も寄せつけぬきびしさがあった。この大木に対して力では天下一を自認する木こりも、ともすると圧倒されるのを感じ、今まで手をつけずにいたのである。ところがある日のことこの木こりが力自慢をしている時に一匹の野ねずみに、「いくら力自慢してもあの大木は倒せないだろう。」とからかわれ、怒った木こりは必ず倒してみせると約束したのだった。

「あの木さえ倒せばこの世で俺の力を認めない者はあるまい。」と思った木こりはもういても立ってもいられずさっそくその仕事にとりかかったのであった。木こりの心はいつのまにか、「なんだこれくらいの木、なにも恐れることはない。どうあつても倒してしまおう。」と思うようになっていた。ところがどうであろうか。満身の力をこめて打ちおろしたはずの斧はカーンと、いとも軽い音を残してはね返ってきたのである。こんなはずがない。おかしいと思った木こりはもう一度力いっぱいブーンと音をたてあたりをふるわせて斧をふりおろしたが、同じことであつた。ただ歯のあとがわずかについただけだった。見上げて見れば大木は何もなかったように静かにしかも悠然として木こりを見おろしているで

はないか。木こりは憤然とせずにはいられなかった。顔をまっ赤にし、頭からは湯気をた

てて猛然と大木にたち向つた。今となつては憤りに己をわすれた木こりはただもうめくらめつぼう斧を打ちおろした。やがて二日三日と木こりとの大木の死闘は続いた。木こりには疲れの色がはつきり現われ、あれほど強靱だった大木にも目に見える傷がしだいにつきだした。しかしその悠然としても静かな態度は少しも変りはなかった。とうとう五日目がやつてきた。木こりの体はすっかり弱りはて、口びるは乾き、目はぼうーとかすんできた。そして太陽が昇ろうとしたとき、力尽きた木こりはばったりと倒れそれきり動けなくなつた。そんな木こりを大木は太陽にささえられて静かに見おろすのだった。おりから一本の枝では一匹の小鳥が戦いの終りをつげるかのようにきれいな声で歌つた。

この様子を一部始終見ていた仙人はつぶやいた。「大木は立っていただけだ。自然そのままの姿で、木こりに対してどうしようと思ふことなくただ静かに立っていただけだ。そして大木が勝ち、いきり立った木こりは敗れた。これが真の強さでなくて何であろうか」とそして仙人は霧の中に消えていった。

編集して

岩 崎 洋 一

各人に自覚があつたかどうかはともかく、ここに何か書くとした時、「多数と騒音」からのがれた生活の中に、決して限ってしまつたわけではないことを証明する必要があると、誰もがおそらく感じたにちがいない。果して証明できたかどうか、又そんな証明が必要だったかどうか、判断を第三者に頼らねばならないが同じ感じをいだいた者として僕は編集しながら、その証明にひどい意欲の減退を感じてきた。僕にとつては編集が、またひとつの証明たりえるだろうと期待していたからだ。仮に僕らが多少とも思想らしきものを持つているとするなら、それが活字となり一冊の小冊子となる過程にすら、何かが期待できるはずだと思つていたからだ。編集の反省としては無責任なことだが、さまま失望しながらこの退屈な仕事に耐え、僕はようやくにして終えることができるようだ。他人には理解できないかもしれない、僕がそれほどまで深刻ぶつてみなければならぬ理由が。理由はこういふことだ。昨年度の「あしおと」の

できればえすら疑わしいのに、今年度四月に早々金をおつめたからには二度と同じものをつくらぬつもりでいたのだが11その弁解だ。

ところで、このクラスの編集を反省しなればならない。お粗末ながら11一読してもらえたならその苦心をうかがえよう。幸い豚の主張はなかったし、厄介な狼ぶつたのもなかったようだ。眠つていたのでだろうと考えるのが親切な見方というものかもしれない。が、それでは始めに言う証明は嘘だったことになる。豚でないのをなによりと思えということらしい。豚は眠つてなお「騒音」ではない奴だ。ただ中途半端な奴の目さめたつもりは他人にはひどく迷惑なのだがそれもない（あるとすれば最後の後記がそれにあたるか）、あるいはより少なかったのが安心してよいところか。ブツブツブツブツのページからも聞えてくるような気がする。



友情

小林敏公

あなただが、悲しい時に、心
か、お母さんを、思ひ、け、慰
め、て、く、れ、る、の、は、誰、で、し、

父の死に思う

組担任 秋山 美彦



何時の頃からか毎年正月になると私達兄弟は揃って兄の所に集まり新年の挨拶空父わすことにしている。そしてその翌日はきまつて墓参ということになる。今年も例年のことながら、車を連ねて北巨摩の悪路を走り、小さな丘にある亡き両親兄弟の墓前にぬかついた。霜柱でサクサクと音のする赤土の感触が何ともなつかしい。私は墓参が終ると何かほっとした気持ちになると同時に、亡き父の事をあれやこれやと思ひ出し感慨にふけるのである。

父は昭和三十六年の夏に他界した。丁度その日は夏休みの行事として生徒を引率し横浜の産業見学に行く日であつた。始発の電車にのり、発車のベルがなる寸前であつた。ホームのスピーカーが私の名をよび、父が危篤だから下車するようにとの放送があつた。昨日、いやさなくとも昨夜、父の枕もとを辞するまではまだ元気であつた。それで全く意外な気がしたが、とにかく直ちに同僚の先生に一切をお願いし出札口へと走つた。盆地の早朝は夏でもかなり冷えこむ。その冷たさと驚きとが交錯して思はず全身がふるえたのを今だに覚えている。この時の心境は親の死を経験した人でなければ到底わからないであろう。おかげで兄弟の中で私の家族一

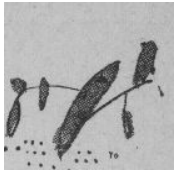
当時まだ一年少々の末っ子まで臨終に間にあつた事を本当に有難く思っている。兄はあいにく出張しており、知らせで東京からハイヤーでかけつけたが父の最後を見とどける事が出来なかつた。

遺体となつた父の顔から白布をとり、「済まぬ、済まぬ」と繰返し云いながら号泣していた兄の姿が今でも忘れられない。父は最前まで意識は、はつきりしていた。かけつけた私に対し生徒を引率してゆく日であるが、まだ時間はよいのかとか、速く仕度をしなくてよいのかといったのには全く頭が下り、並み居る人々を涙ぐませた。呼吸困難になり酸素吸入をしてからでも私の末っ子に目で合図をしたりした。私は八つの時母と死別した。それ以来父は母の愛をも兼ね分かつと、幼ない私達兄弟に何かと心をくだいた。今自分が子を持ち、父の立場になつて初めて亡父の苦勞がわかるような気がする。何かにつけ父は、「母親がないからといって片身の狭い思いはさせたくない。自分が母親にもなつて何でも出来る事ならしてやりたい。」と常々口にしていた。そういえば私達が下宿する時、布団や丹前作り、それに座布団、食器類にいたるまで品質、柄、使い方で気を配り、世間の母親同様あれこれと指図をしてくれたものだ。私にとってはこんなに有難い父も晩年は本当に気の毒であつた。耳の治療にと使つたペニシリンがもとで、耳の神経がおかされ、全くのつんぼとなつてしまった。私達がその医師の処置に憤慨した時も、「善意からした処置の結果が悪いからといって責めるのは気の毒だ。自分ももう行く先短い身だから」といつて寂しく笑つた。本当に何処までお人好しなのかと私達が笑つた事も今は昔話となつてしまつた。

晩年父は更に悪性皮膚病にかかり、これがもとで腎臓病にもかかつて長く入院した事もあつた。結局皮膚病には死ぬまで苦しんだのであつた。この治療には、漢方薬で普通の人には到底飲めそうもない煎じ薬を飲んだり、大好物の餅を絶つたりした。プレドニンという薬の名を覚えてたのも確かこの頃であつたと思う。さて「孝行をしたい時には親はなし」とか昔から云われているが、私は今両親を失つてみて本当にこの諺の意味がわかるような気がする。とに角、今日まで無事に成長できたのは何と云つても親の献身的な愛情以外の何ものにもならないと云えるだろう。例えば病の床にふした時、あるいは入試の時等々、こんな時の両親、なかなかすぐ母親の心労には誰しも頭の下がる思いをした経験をもっていることだろう。両親に何時までも壮健であれかしと祈る事の出来る毎日の一日でも多いことは子として理屈なしで望み得る無常の喜びではないだろうか。

人間的人間……依 田 恒 彦

ガッタン。ガッタン。
今日も人形が作られる。
番町工場、麴町工場、比々谷工場、東京工場。最高級人形の過程。
マスコミという塗料を一杯に吹きつけられボタン一つでどんなにも動く。
そら、それを買え。
人形は電池が切れるのも知らずに電気製品を買うのです。
そら、今度はこうするのだ。
人形は自分がこわされるかも知れない仕事を助けるのです。
ニヤニヤ。誰かが幕のかけで笑っています。でも人形は知りません。ただ命令の通りに動く一個の物体なのです。昔、毛色の違う人がやってきました。私の荷物をちよつと置いて下さい。その人は、横田や板付に沢山の荷物を置きました。
そして今は、その人の変な船がやって着きました。
大丈夫。大丈夫。心配するな。
人形は何もいへません。
その上、その人の危い仕事にまで人形は加担させられようとしていました。しかし、大きな歯車は回っているのです。その人たちの仕事もいつかは行詰まるでしょう。不正な事は、でもある時、一個の人形が現われたのです。
その人形には電池もスイッチもついていません。
でも自由に動くのです。
哀れな同志よ。束縛を離れて私と共に歩もう。そして新しい人形の世界を築こう。
一人、二人。彼と歩き出しました。誰かがあわてました。人形を笑つた奴はあわてました。利用した奴もあわてました。これをくいとめるためにあらゆることをしました。
でも、人形のボタンをおしても、もはや彼らの思い通りには動かなかつたのです。
何千、何万。
人形が一個の人形を指して歩いていきます。ザツ、ザツ。
人形の歩みを阻止しようとした奴はけちらされました。
自由の国へ。我らの国へ。
人形たちの歩みは力強く続くのです。



う。あなたが嬉しい時に、ともに喜び、その喜びを何倍にも増してくれるのは誰ですか。それは父であり、母であり、また兄弟であるかも知れません。しかしあなたに友情というきずなで結ばれた一人の友人があったのなら、彼は誰よりもあなたを勇気づけ、あなたとともに喜んでくれるでしょう。

わたくしたちが生きていく上に最も必要なのは友情だと思います。友人はあなたの欠点を最も良く知るでしょう。そしてそれを卒直に批判してくれます。あなたはそれを受け入れるのも良いし、また友人と論争するのもよいでしょう。論争に論争を重ね、心と心が衝突し、互いに火花を散らし合う、そんなふうにして育てられた友情はきつと素晴らしい友情だと思います。でもそれは、あくまでも友情の上にたった論争であり衝突でなければ、単なる論争であり衝突にすぎないんじゃない

ものはない。そして、日本中の人々が、いや世界中の人々が一つになる時が来た。東京オリンピックだ。すぐ後に迫っている試験のことも忘れて、世紀の大祭典に声援を送ったのも今では忘れがたい思い出だ。十一月このことは修学旅行ということばの置換えである。長い間の夢はここで花と咲いたのだ。冷え冷えとした古都の真髄にはじめて触れることができた。

修学旅行の感懐

高野孝雄

高校生活の中で、大きな行事であり、楽しみである修学旅行。その旅行に行ってきたの後にのこる印象は、どのようなものが残るかと、前からひそかに考えていた。そして、その印象とは、京都市街のあの宝石をちりばめたようなすばらしい夜景、奈良の大仏のあのスケールの大きさ、新幹線のスピード感、などその外いろいろ感じた。だが奈良の大仏、などごく一部をのぞくと、ほとんどは、現代に対する感嘆だった。これは、あるいは、自分だけでなく他の人も感じたことかもしれない。そしてさらに、強く感じ、また同時に最大

でしようか。また他人が見ては欠点だと思われるものの中から良いものを認めてくれるのは友人がいかに誰があるでしようか。自分でも欠点だと思っている中から長所として良いものを見つけてくれるのも友人です。

友人は書物に似ています。友人を選ぶのは一冊の書物を選ぶようなものです。しかしそれはよほど慎重でなければなりません。書物にしても娯楽雑誌から教科書まで、また良書悪書など種々様々があります。あなたが本を買う場合、その本が有名だからとか、また自分がほんとうに読んで見たいからとかいろいろな場合があるでしょう。しかしそれを読んでみてつまらなければすぐやめてしまうでしょう。その本への愛着を失ったのです。けれどもあなたが心から読みたいと思った本ならもう一度読みかえしてごらん下さい。たぶん素晴らしいものだと思いがつくでしょう。書物はあなたに慰めを与え、勇気を与え、またあなたはそれに知識を与えられ、あなたの方針も考え方も変わるでしょう。友人にしてもまた同じです。

だがあなたは、友人とすると同じように、書物と論争することが出来ますか。友人と書物とどちらがあなたを慰め、勇気づけてくれ

の収かくだったことは、勉強からはなれて、星はいろいろな名所をおとすれ、夜は、ゲーム、その他の遊びなど、普通の学校生活とはちがった方面を通じて、クラスの人たちとお互いによく知り合い、友達になれたことだった。

月日のたつのは夢のうち

玉山広明

歌ではないけれど、まったく月日のたつのは早いものだ。一年間というものはあつというまにすぎしてしまう。俺は何をしていたのかわからなくなってしまう。今まで有意義にすごしたことがあつたのだろうかと思をかしげる。今年こそは、今年こそはおもいながら、つい具合がわるくなってしまう。そこで一日を有効に過ごそうと考えた。

富士登山

渡辺良樹

七月十九日、曇るまでは曇っていたが雨

ますか。もしあなたが書物が友人より良いという考えを持つなら、それは孤独の逃避にすぎないのです。

友情は金で買うことはできません。

友情は何と高価で、何と安価なものでしょうか。

友情に親切を求めているいけません。

友情に同情を求めているいけません。

友情に利益を求めているいけません。

友情は友情として受け入れるのです。

この一年

土橋八郎

新学年が始まったのがついこの間のことのように思われる。しかし、春の一万メートルのスタートから冬のそのゴールまで、思えば思い出多いこの一年であった。まず、五月末には富士スバルラインへ行き、霊峰富士のもとで大いに交友を深めた。七月には球技大会で校内が熱狂の渦と化した。十月に入るとすぐに強行遠足が実施された。いつもより早く行われたので、此処彼処に夏の気配が残っていた。心身を強く鍛えておくことほど、これから荒海に投げ込まれる若い僕達に重要な

がふりだした。行くか行かないかでもめたが結局行くことになる。四時半になったので仕度をしていると店から電話がきた。「五時半なので富士急行の所へ行くようにと。」自分の時計が一時間くるっていた。あわてて行くバスがきていてみんなは乗っていた。六時ピッタリバスは出発した。バスが混んだ。八時半河口湖を出てスバルラインを通り五合目に着く。風がひどいのでヤッケを着る。十時五合目を出発、登山道は人間でいっぱい。七合目までいっきに登り、小屋で休む。一時小屋を出る。風が下からふいていたがそのまま進む。霧雨になる。全身がぬれてみんなふるえている。登れば登るほど風と雨がひどい。登頂は不可能なので下ることにしたが風と雨が全身にふきつけるので下るにも時間がかった。やつのことで五合目に着くがひどくあれていた。朝早いのでバスが出ない。観光バスにたのんで乗せてもらうことになり、河口湖まで下った。全員ずぶぬれなので服をかわかし、河口湖で遊んで帰ってきた。



夜空を見て思うこと

河西道明

夜空はわれわれ現代の文明人にとって欠くことのできないものである。われわれは現実にあくせくして目先の事に心身をすりへらし悩み、悲しみ、喜び、憤る。それでも良いといえはいいが、われわれはそれよりもっと無限にひろがる空間を意識して、人生を思い死を思い宇宙の不思議を思わねばならない。有限で端のないものが宇宙の真の姿というのが。おそらく自分がいまもっている常識をこえ、全く新しい根本的な観念がなければ理解しえないであろう。そういったふしぎな恐ろしいような宇宙の流れが過去からずっと存在し、未来もずっと続いていく。その中にあってごく微小な自分のような存在は、やがてはほろび、この不可解な宇宙の流れに消えていくのである。そして自分は再び生命をもつてこの宇宙に存し、その不思議さを考えることはできないのだ。

夜空をみ上げると星が点々と輝いている。その光はわれわれの考えもおよばない遠い昔に発した光なのだ。その光は神秘にみちた光

なのだ。そこ行ききもできなければ通信も不可能なのだ。そこにわれわれとの間には人の力の及ばない偉大な大宇宙の壁があるのだ

夜空はわれわれを勇気づけてくれる。俗世間の煩わしさにつかれた心をいやしてくれ。その不思議さに気づいたとき大きな感動と喜びとある種の恐怖感を感じるであろう。つまらない現実には自分を見うしなうことなく、大きな心と宇宙の不思議なからくりをとこうとする意欲と、人生を深く考える態度を持つだろう。それは一度しかない自分の一生を有意義に過ごすために大切なことである。

思うこと

市川明夫

僕はときどき、人間、生き物について考えることがある。こういうことを考える時は、だいたい、つまらない時である。それはどっちでもいいけれど、どうしてこの宇宙に、地球に、生き物などというものが生まれたのだろうか。生きて、その生というものも偶然、ほんとうに偶然に生まれてきたものだが、そして一生苦勞して、結局死んでいく。僕は毛

ふと思う事

秋山安彦

東京オリンピックは大成功したね。
なにしろ金メダルを十六も取ったんですから世界の一流国家だと大見得切る気持ちも解ります。

でもあのメダル一個にかけたものでは何倍何十億にのぼるでしょう。

メダルと半強制の赤い羽根、街頭の傷痕軍人文化国家日本の悲しき宿命でしょうか。

でもいいでしょう。これで壁の上塗りはできました。「日本国バンザイ」です。

壁って物は下塗りがなくても上塗りができるんですかね。
京都タワーもとうとう完成したとか。

市長さんもうれいでしょう、古都の新名所ですから。

しかしタワー建設に反対の狼煙を上げたのは青い目をしたフランスの人だそうですね。

戦後二十年、ここまで復興したバイタリテ日本人は御立派です。

頭、神というようなものは信じないが、どうして、いや、なんのために、そんな生というものがこの世（この世といつていいかどうかかわからないが）に生まれてきたのだろうか。また生命というものはどうしてできるのか、はつきりとはわかっていないのだが、なんのために生命などというものが生まれてきたのか

おそらく、この地球上の生命にしても宇宙の年代に比べれば、ほんの一瞬くらいしか存在していないだろう。そんなものが、この宇宙となんの関係があるだろうか。どんな意味があるうか。宇宙にとっては存在もわからないような、あってもなくてもいい事ような地球上に、偶然良好な環境ができ、偶然生命がうまれた、それは一瞬の存在である。ほんとうに何のために生命などというものが生れてきたんだろう。生き物が楽しむより、苦しむ時間の方が多いと思う。それならばいつそ生命などというものがなかった方がよいのではないか。そうすれば楽、苦などということも知らず、いや、なくて、ただ感情としては無がある。それは思えば寂しいことかもしれないが生命がなければそう思うこともないのだから。それでそのまま宇宙として存在していた方がいように思う。生命がうまれて一生け

イーが心の宝を次々と破壊するのを黙って見ていられるんですから。

どなたかも言いました。「雄弁は銀、沈黙は金」しかしもう一度ふと思ってみるに今や京都ブームとかで、ミーちゃんバーちゃんが手に手をとって京へ京へと上ります。

だれかさんでなくても言いたくなりまして。『人生またもや不可解なり』と。

ちかごろ

原重昭

クラブ活動は楽しい。しかし二年生が二期、三期となると、多くはクラブから遠ざかる。別にクラブが嫌いになったのではない。ただ勉強の方が大切に思えてくるからだ。時にはそう思うように仕向けられる。そして教室はアカデミックな雰囲気が濃くなつて行く。先生方の「進学、大学」などと言う言葉も使用回数が増加してくる。

しかしそれらに反比例して、徐々に人間性が顧みられなくなり、精神的空白観念が強くなる。好ましくないことと思うが、特に私のような遠距離通学者には、人間的つき合いの時間が少くなつて行く。これらが、一高生は

んめい生きようとしても宇宙の偉大さには勝てず一瞬のうちに滅亡していく、そんなものない方がいい。しかし、「我思う、ゆえに我あり」ではないけれども、現実としてここに人生があり生命があり、すぐそこに大学受験というものがひかえている。しよせん自然に、自然によつて偶然につくりだされた人間が、生命が、自然に、宇宙に文句をいってもしかたないのだろう。

疑問

藤本幸永

寝つかれない夜、頭の中にふとこんな疑問が生じた。自分は生まれてから今日まで何をしてきたのだろう。始終何物かに退いたてられるかのように学問にあくせくしている。今の生活も幾分か自己完成に役立っているのかもしれないが、追求すべき真の生はその学問にあくせくしている生活の裏側にあるのではないだろうか。それを把握することはこれからの人生において僕等にとって必要ではないだろうか。そんな事を考えているうちにうとうと眠ってしまった。

利己主義だ、と言われるゆえんである。そしてこれらを諦観する人も増加してくる。こんなことを考える時、なぜか、オートメーション工場のコンベアベルトに乗せられ、規格化された人間に仕立てられて行くような気がしてならない。

このことから抜け出す方法はどれも皆時間がかかり過ぎる。しかし何とかしなければならぬ。だから、長い通学時間を利用して読書を始めた。頭脳のためではなくて、自分自身の精神のために。

大学入試

伊藤輝夫

「大学入試」こんな言葉が聞かれたのは高校に入っただけだった。中学の時から「高校にさえ入りさえすれば」などと考えていた私にとっては縁の遠い話と思っていた。しかし今となってはそれも目の前である。

この二年間べつに勉強したわけではなし、なんとなくぼんやりすごした二年間だった。この間私の心の中には美術方面に行きたいという希望が芽ばえていた。その原因は一年生の時の成績であった。数学が いいわけでは

し、かといって英語もいいわけではなく美術のぞいてはなんのとりえもないように思われた。しかし才能のかけらもない私にとっては決して楽な道ではない。

父も今の職もながくはないためやたらとせかせるのである。かといって将来の方向からいって大学を出ないわけにはいかないのである。これから何年先大学に入れることだろうか、私の未来は前途多難である。

勉強とクラブ

富永幸大

現在の一高において、大学の進学率は年々上昇しているようだが、その反面クラブ活動特に体育クラブでの部員が少ないのにはおどろいてしまう。この状態ではいつクラブがつぶれてしまうかわからない。一高のような学校では勉強が忙しすぎて、クラブ活動をやるのはばかばかしいと皆が思っているからだろう。しかし、学生の本分は勉強にのみあるのではないと思う。

クラブ活動を通しての友人との交わりということにも深い意義があるのではないだろう。つらい時ははげましあい、うれしい時は

喜びをわち合う仲間の姿ほど美しいものはないだろう。皆、勉強／＼でいそがしいかもしれない。しかし、たとえ三十分でも四十分でもよいからすきなクラブをやれば勉強の能力もあがるだろう。

そして勉強だけでなくクラブにおいても山梨に一高有りといわれるような学校にしたいものだ。

悩み

原田久

人間は多かれ少なかれ「悩み」を持っていると言う。だがその中の何人の人が「ほんとうの悩み」というものを知っているのだろうか。また経験したのだろうか。

「ほんとうの悩み」、この苦しみは無限である。朝起きても、ごはんを食べている時でも、友人と大声で笑っている時でも「ほんとうの悩み」が脳裏の一点にこびりついていたらどうだろう。「ほんとうの悩み」を持っている為に、朝、起きて、ごはんを食べている時でも、友人と大声で笑っている時でも、最後には夢の中にまでも、ある瞬間にはそのための苦しみを感じ、そのためにいつも心の

思いつくままに

佐野公保

この一年もつとみんな考えて見るべきだったと思う。たとえばホームルームはただ単に先生から生徒への連絡事項の伝達だけにとどまり、まったく不活発であった（自分もまたそれをした一員であるけれども）。

その原因としてあげられる一つは多くの人が大学へ入るための勉強についてを初めとして高校生活に多くの疑問をいだき悩むことを忘れているからだと思う。

そういうことが結局は高校生活を、それをほなれて見てみると何も残らないようになるのではないかと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

高校生活というものは、もつとゆとりがほしい。高校時代はスポーツや読書などに大いにせいをだし、入学（方法はいくつかあるという）しさえすれば、ろくに勉強しなくても卒業させてくれるような大学はないほうがよい。そうでない大学でガツチリ勉強すればいい。

思った事

亀井滋

昼、テレビで、「雪の日の円長」という芝居を見ました。名人と言われている話し家円長と、山岡鉄舟の出会いを、安藤鶴雄が書いたものです。円長は客から、「雪」、「月」

「花」の三つの題を出してもらい、それを組み入れてむずかしい即席話しをします。これの名人と言われるだけあり見事な出来です。

次に、鉄舟から桃太郎の話しを望まれます。

「御冗談を」と言った円長、日本の古い童話で誰でも知っているはずの話が出来ないので。ところで、我々は誰にでも出来る事、よって平凡な事、が出来なくとも、誰れにも出来ないような事が出来るのが、偉いように思えば、それよりやさしい問題は、すべて解けるような気になります。そしてやさしい問題をバカにすることもあります。この基礎を飛び越え、いっぺんに難問に飛びつこうとする傾向は、現代の、山に登るにも麓から歩くことはなく、腰掛けていさへすれば頂上に運んでくれ、歩くなど時間の無駄と考えるインス

無題

飯沼喜美夫

この澄んだ清らかな水。未知の大きなものを秘めて、長く苦しい旅を続けなければならぬ宿命を背おって……。だがその影を少しも見せず大きく、ゆったりと流れている。まだ見ぬ世界に大きな期待をかけて……………。

この雄大な、何事も気にせず流れている水のようにはなりたない。

タント時代の風潮に関係あるでしょう。しかし入学試験においては、確実な基礎を持たない勉強は、通じないでしょう。我々は、難関を突破するためには、こつこつと積み上げて行くことが必要なのです。天才でもない限り。受験勉強で、このことの大切さが分かるとするなら、我々の青春を灰色に塗っていると言われる受験勉強にも、いくらかでも価値が認められるべきでしょう。

四匹の侍

鮎川 高
藤 披 明

「紳士の国、イギリスに騒音爆発。」ここまで言えば……………そうです。

「ザ・ビートルズ」です。（「オイッ、ビートルズってなんだ？」なんておっしゃるおかは、トウフのカドに頭をぶっつけて、トウフ代を損すると思うよ。）

僕思うに去年（一九六四年）日本でいや世界中で最も流行したレコードはと言えばもちろん「ザ・ビートルズ」のものでしょう。彼等はいずれも20代の若者の集まりで、電気ギター・ドラム・ハーモニカ等を使って、騒

音を作り出し、女の子を熱狂させ、去年一骨間で、四億ドルものジエジエコをかせぎまくって、イギリスの外貨獲得に貢献した、エライお兄さん方です。自作自演でコラサツちゅうくらいにかせいだのです。何んと言っても発売するレコードはすべてミリオンセラー、これではもうからないほうがどうかしています。

世界中にその名をとどろかした、リバブルサウンドの最高峰です。噂ですが、マーガレット王女と藤波明がビートルズのファンだとか、鮎川高もファンだとか。（およびでないムードですネ。）

ヘアースタイルはごぞんじ、マシユルムカット、つまり三年も床屋に行かないで、散髪代をのこしたような（一高にもうじやうじやいるよね）ヘアースタイルです。

世の中には奇妙な人達がいて、ビートルズが大嫌いだなんて言う人もいますが、その人達は、彼らのセンチションを引き起こす魅力を理解しない方々かと思えます。

ビートルズのあの心のしびれるようなビートルに触れていないからでしょう。

ここであつと「ビートルズ」という名の起源を公表しますと、「Beat all」がこまつて「Beatles」となつたとか、また彼等のヘア

ースタイルから「Beatles」「かぶと虫」というようにしてできたと言われています。

僕なんかは、心のむさくさした時に、このビートルズのレコードをポリリウムを最大にしてかけると、何か心の中の霧がほれて、ホッとした気持にさえます。イヤ本当！……現代の高校生のなやみをふつとばしてくれます。

ビートルズのレコードを聞いて

「ありやあ、騒ぎで歌じゃあねえなあ。」

と言うおじちゃん達がいらつしやいます、彼我はあの体ごとぶっつかあふれるわかさがわからないのでなく、自分には縁の遠いものとして否定しているのでしょうか。うちのおばあちゃんはビートルズも好んで聞くし、三田明のファンでもある。

「若いものは若い力がなくつちやあ。」

とよく言います。おばあちゃん、ビートルズを聞いて気が若くなるのかな？腰もまがらないしピンピンしている。

「若いものは若い力がなくつちやあ。」

ビートルズよ。いつまでも若さをたたえていてくれ、年はとつても。僕等が年をとつてもビートルズをきくたびにあふれるもえるような若さと呼びおこしてくれるために。若さは勝利の女神である。

<詩>



強行遠足

萩原 三男

太鼓がなる。

我々は出発した。人生の門出かのように……

歩いた。ただひたすらに歩いた。

友をばげまし、助けられ、弱き者に勇気を与え、強き者に元気づけられ、高原の細道を歩いた。

友と語り、そして笑い黙々と歩いた。機械的に……ただ歩いた。

千曲川の川辺を、旅人に会い、人々にはげまされ、元氣よく歩いた。あと少しだ。しかし足が思うようにならない。

歩け！がんばれ！見えた！見えた！中込の駅だ。

ついた！ついた！とうとうついた！勝った！勝った！とうとう勝った！

87百もの遠い道を歩きとおした。この足で……。

俺は教えられた。この足に、何かを……。

朝

清水 毅

少年はじつと動かない。

小さな岩の上にこしかけたまま。

その視線は、遙かなたに広がる無限な地平線に注がれていた。

その顔は、夜明けと共に、次第に赤く照り映えていった。

遙かな地平線の一点に、

今、まさに太陽が現われんとした。

瞬間、金色に輝いた大空に、

鋭くシンバルが響いた。

少年は、思わず身ぶるいをした。

高らかに、トラムベットのファンファーレが鳴り渡り、

太陽は、遂にその全部を現わした。

まぶしく照って光る太陽よりも一段と、

輝き光る、その瞳。

ティンパンの連打につられるかのように、

太陽はドンドン昇り始めた。

朝だ。新しい世界だ。

少年は、静かに立ちあがった。

春

北 平 二 郎

川面に映るはたんぽぽか
草木に緑は宿り
大気はなごむ
木立にさえずるはうぐいすか
人々に笑顔は浮び
希望はあふる
野山を歩くは若者か
若い血潮と雄叫びは
胸にこだまする
ああノ希望に満ちた
我等の春だ

こ び と

青 木 晴 秋

まっしろい雪が杉のこずえを歩いている

人 形

太 田 隆 雄

華やかな舞台裏の
小道具置場
板間からさし込む
光の中に
人形がいる。
手、足、首、頭
それらが糸でしぼられている
たれさがついていた糸が張り

人・形が動く

明るい光の中で
人形は涙を隠して踊る
孤独をなげく
一かけらの幸福を求め
踊る。
糸が切れ
人形は板床に落ちる
切れた糸は人形をしぼる
人形は叫ぶ
「神様、幸福ヲ逃サナイデ
昔ノ幸福ヲ……………」
人形は私
人形は私

悪 魔

山 本 裕 二

いつの間にか
俺の心の奥底に住みついた悪魔
お前は俺から
勇気と卒直な気持を奪ってしまった
可れんな花を見た時も
愛らしいと言わせず

冬 の 夜

志 村 義 一

静かな哀しい夜だ。

空には星が大きく、チカチカ震えている
孤独な街燈がぼんやり光を投げかけている
霧にかすんだ道には
だあれも、何にも通らない
静かな夜だ。
遠くを夜汽車が通る。
かすかに聞こえる信号機の音
カンカンカンカン　カンカンカンカンカン
カンカンカンカン　カンカンカンカンカン
それは一瞬の間に
感傷的な余韻を残して消えていった。
あとは前よりもいつそう静かに
いつそう哀しく
冬の夜がふけていく。

苦　　悩

金　丸　光　邦

雨は強く弱く
静かな夜
無限の暗闇
本はめくれ
ペンは動く

草　　花

河　野　拓　人

名もない野に名もない草花がありました。
春になりました。
彼は重い土をおしのけ芽を出しました。
あたにかいうらかな陽に守られて
彼はすくすく大きくなりました。
やがて夏も近い日、恋をしました。
実も結びました。

あした
あさつて
一億年後は
あの時は過ぎさつた
とびあがる
歌う
そして苦しむ
本はとざされ
ペンはとまる
雨は強く弱く
トケイは叫ぶ
静かな夜
我は一人苦悩する

夏になり彼らは自然のおそろしさを知りました。

やけつくような暑さ

くるわんばかりの喝水

しかし、それも手に手を取って勝ちぬきました。

秋になりました。

彼らの子はりつはな実になり大地に飛び出しました。

今は彼らに取って最も幸せな時です。

しかし大自然は彼らに休そくをあたえませんでした。

彼らは自分の体が枯れているのに気がつきました。

彼らは自分が大自然に対する責任を終えた事に気がつきました。

もう冬になっていました。

彼らはただ死を待つだけです。

北風に洗われても、

雪にとざされても

彼らにはちつともあわれさはありません。

そこには使命をほたした偉大さだけしかみられませんでした。

ある吹雪のばん、彼らは、わが子の幸福をいのり、

自分の生涯に満足し、永い永いねむりにつきました。

流

馬　場　富　夫

玉の雫の
クリスタル

新線

満ちて

未見の生命

熱い地上に

ひまわり立ちて

裸の真夏に

燃える力

コバルト色の

無限の深さ

秋の色づき

今さかり

黄金の実り

一年の力

身を切る風や

氷の冷氣

すべての生命

皆ひそみて

地下深く

熱い地熱

来るべき次代を
待ちて

私たちは奴隸です

前島和雄

私たちは奴隸です

鎖で束縛された奴隸です

一日一日を

あえぎながら生き続けます

反抗しようとしても

いっこうに鎖が切れません

勉強します

11 わかってもわからなくても……

会社へ行きます

工場へ行きます

三百三十五日

同じ日課のくり返しです

時には自由がほしくなります

現実から逃避したくなります

自分たちの築いた文明に

征服されているのです

機械による洪水が

いつかこの世を

流し去るでしょう

11 その時まで

私たちは奴隸なのです……

無題

田辺譲二

ある日の寒い朝一人の若者が目を覚ました。その日は氷点下何度だったか、なにしろ非常に寒い朝でした。その若者はしばらくじっとして何やら考え込んでいましたが、何を悟ったのか、さつさと服を着だしました。そして、床からさつと飛びだしました。――

さて若者は今や学校へゆく仕度をしていました。本がいつぱいつまっているためかペンペンにふくらんだカバン、そんなカバンを自転車にくくりつけていました。準備が整うと「行ってくるよ」と一言いうと、元気にペダルをふんで、寒い道路へ飛び出して行きました。

ウー寒い／

ぐんての上の皮の手袋にも

氷の針が突きさすようだ。

霜がふって

畑やたんぼは美白でした。

フレッシュな野菜がひきたっていました。

橋を渡り、土手をつきり。

どこかのだれかと「お早う」といいました。

左手をさつとあげて

時計をみながら進んでいき質した。

後ろのカバンがガタゴトガタゴト、

その若者を元氣付けていました。

「頑張れ、まけるな、正しく進め」と

いつもの道を、同じ姿で、通って行きました

だが、その日は今までと何かしら違うものを感じられました。

僕と自転車

渡辺章

ほら、あの時。ぼくがかけた顔をしてつたっていたら、君は「そんなにしずんでないで、いっしょにさんぽにいこうよ。」って言うてくれたね。ありがとう。おかげで楽しかったよ。

君は「裏道のほうが静かでないよ。」って教えてくれたね。でも、道が悪くてつかれただろう？

途中、元気な子がよこみちからとび出してきた時はおどろいたね。

大分行つて、小川のふちで休んだろう。

子供たちがさかなを取っていたね。楽しそうに遊んでいるのを見ていたら、気持ちがほれ



ばれしちゃった。

僕が「もう帰ろう。」って言ったら、君はつまらなそうな顔をしていたね。

帰りに、君が足にケガをして医者までおんぶしていった時はおもったぜ。君もずいぶんケガをしたね。

君と知り合ってから、もう二年以上になるね。いままで乱暴にあつかってごめんよ。これからもなかよくしていこうね。

光より速いロケット

楠津家久

これは一月二日に見た初夢の内容である。

……西暦三千年、つまり三十一世紀の事である。世界は大混乱、大騒動にまきこまれた。

遠い昔に起きた、つまり人間が初めて空へ乗り出した時興った大騒ぎに匹敵する、いやそれ以上の騒ぎであった。長い間、夢と思われ不可能とされていた『光より速いロケット』が

世界の科学者総動員、一致協力のもとでついに完成に至った。名づけて『The Earth』号とした。この原子力ロケットに乗れば、時間制限のある世界を脱出して第四次元の世界へ行くことができる点で世界に注目されてい

た。進路方向にプラス・マイナスがあり、プラスは未来の世界、マイナスは過去の世界を表わしていた。いよいよ三千年に太平洋上の世界航空宇宙センターから射ち上げられた。ロケットはマイナスの方向、つまり過去の世界へ突入していった。針は紀元前三千年に合せてあり、その時代へ突入するまでまわりは真晴だった。約一年間の年月がたつと急に視野が広がって来た。場所はエジプト・メソポタミアのようで、歴史年表を開けるとエジプト古王国時代に相当し、ピラミッド建設現場に出くわした。奴隸たちがむちで打たれながら二米四方の石を運んでいた。見ていられないほど原始的な方法で、トラックの一台でも送ってやりたい気がした。ここから我々は、さらにマイナスの方向に進行して行つた。やがて近世代も過ぎ、中世代にはいった様子である。外部から、恐竜のわめき声がロケットまで響いていた。全長二十米もの大恐竜がうろろしているのである。びっくりして何も言えなかった。ここから一挙に古生代を過ぎ先カンブリア紀にはいった。ここでは、いたる所で火山活動が活漠で、溶岩がどろどろとけて、海へ流れ込んでいた。突然大災難が起きた。火山から吹き上げられた火山弾が

ロケットに体当たりし噴火口の中に其逆さまに落ちて行つた……。そのとき目がさめた。

宇宙の神秘

田口幹夫

一九六五年。世界の全学者は考えた。無限の遠方が見えるものを考えた。これは難問であつた。しかし、奇蹟的にも一九六五年後の三九三〇年、B・AND博士は発明した。ところがこれまた不思議。それを通して人類の目に映つたものは、木のようなものが二三本立っていて、黄土色をした平らの大地であつた。博士は考えた。黄土色をした平らの大地は砂漠と考えればよい。二三本の木は、オアシスと考えられる。文献でオアシスのある砂漠を探した。しかし、それは地球以外にはなかつた。一体ここはどこであらうか……。またも世界の全学者は考えた。考えても、考えてもわからなかつた。B博士は正体が究明できないまま死んだ。

11それから一九六五年後、つまり西暦五八九五年、オアシスのある砂漠は究明された。それは意外な場所だつた。時の新聞に「目で見える無限の遠方は後頭部であつた。」とい

う記事があつた。

冬の 日

小川 一郎

朝、眼がさめると外は明るくなつていたが、まだ陽は照つてはいない。やがて、弱い一すじの冬の光が障子のすきまをぬつてはいつて来る。固い大気は職場へ通う人々のはく息を白く浮き出す。

徐々にあたたまつてくる大気は、この間ふつた雪が凍らせておいた大地をやわらげ全くひとの活動を停止させる。あちこちの森や林にある、緑を誇っている樹々は、単調な冬の日に何か？そう何かを与える。

あたたまつた冬の日の光は物語などを読む人たち、あるいはまたぼんやりしている人を睡眠へと誘う。

やがて、弱くなつた光は西へ傾きそして沈む。冷たい短い冬の日はおわり、冷たい北風の吹く寒い夜となつていく。



自家用車

森屋 浩二

俺は中学の時から自転車通学だ。五年間、よくもまあ同じような道を、雨ニモマケズ風ニモマケズ雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ悪路ニモマケズに、長い針と細い針とにらめっこをしながら通つたものだ、(あたりまえのこと)愛用の自家用車は二代目だ。愛用といつても掃除はめつたにしないで、乱暴に使うのであちこちがこわれている。ブレーキなどは、音ばかり大きくて利かない。そのために、人や車に当たりそうになつて、寿命の短くなりそうな思いをしたり、また車にぶつつかつて愛用の二輪車から投げ出され、道の中央に滑り込んだこともあつたが、今こうして、死なずに生き延びて、もうすぐ高校三年になるうとしてゐる。これからあと一年間、無事に卒業したいものである。

家 路

丸山 正之

／ 暗くなつた道を自転車急ぐ。道のまわり

山に登つた時

清水 文法

突然こんな事を思い出した。

三ヶ月ばかり前、家の背後の山に登つた。説明のし方のないある期待を持って、単調な学校生活、何かを求めてしかもさまざま自分だった。

東に広く開けた、しかし狭い甲府盆地。

銀色に輝く富士川、青く澄んだ空と、確かに自分が立っている赤黒い土、こんな要素が自分に作用してふと観念的になる。

俺は生きているんだ、頭の上には青い空があり、その上には俺の為すべきなにかがまつてゐると。

三ヶ月前こんな事を思つた自分と今の自分とどれだけ差があるのか？ふとさびしくなつた。

渴える俺

保坂 竹寿

人は生れ、悩み死ぬ、これは人間が認めなければならぬ明白な事実である。あらゆる

の電柱の光が冷たく道路を照らしている。人通りも少なくオーバーのえりを立てて皆急ぎ足で家路に向かっていて。家の数が減ってきた。すごい道だ。自転車が止まってしまいそうだ。ちよつと休んだ。はるか遠くには小さく目ざす家の灯が見えている。「この先にはもつと困難な道があるのだろう。」と思った。寒い風がほおにあたり「おい早く進めよ」といった。「お前がじやまをして早く家に帰れないんだ。」と答えた。風はまた「お前を家に帰さないぞ」と言つて容赦なく吹いてきた。「こんな風になんかまけるもんか。風になんか……」

オレの哲学

桜本安善

俺は不思議な機械だ。俺の心の中に生きている自分は一人や二人ではない、何十人いや数限りなくいるようだ。ある日、テストの答案がかえった。十点余分についていた。「余分についています。」と先生に申し出た。答案を持つていったのは自分の良心からではなく、＼自分も正直なすなおな男だ＼と印象づけたがためであつた。俺は悪い男だ。点数

が減っているとおどろいた様子やニヤニヤした顔で答案を持つて行く。なんと恥かしい行為ではないか／自分はちゃんと計算していたのである。自分はよごれたけがらわしい男だと俺は思っている。ああ俺というものの存在がわからなくなつてきた。生きる価値もわからなくなつた。（そんなとき）何人もの自分が俺をわらつていて、大きな口をあけて、腹をかかえながら。秋の夕暮れ、山々の中腹に灯が一つ二つとつき始めるころ、風が哀愁をおびた悲しい声で木々についている枯葉を静かに落としていく。こんな風景を見ているとなんだか感激して胸にこみあげてくるものがある。そんな時なんん人かの自分が俺に強く生きるとはげます。そうさ、つよく生きるさ、どうせみじかい命だもの。

田舎にも

吉岡義博

私がこの田舎に引越してきたのは一高に入つて間もない頃だつた。通学には時間がかかるし、家へ帰れば友達もいない。いやだなあと思つたものでした。しかし、住めば都、だんだんと土地になれ、時間になれてゆくうち

楽しい毎日になりました。私は町に住む人も教えてあげたい、田舎にはこんなやすらぎもある事を……。

×月○日

朝、いつものようにあの田んぼ道をぼろ自転車急がせる。降り続いた雨も上つて、空は久しぶりに青く澄み、白っぽい太陽がのぞいている。その大きな太陽を呑み込みそうに大きい口をあいて、ほあつと空気を吸い込んだ。空気が青かつた。「今朝は寒いなあ。」一人言である。すずめのたわむれの他はまだ何も目がさめないようだ。いい気持で今度は上を向いてもつと大きく吸い込んだ。

「おや？稲刈りの匂いだ。」この匂い、確か幼い頃つば採りに行つた時に覚えたのだ。

「お姉ちゃん、あつたあつた。」「どれ？わつ大きい。」：「向うへ行つてみよう。」

「うん」小っちゃなバケツを持つて、フフフ。そうか、この匂いだ。稲刈りの匂いだったのか……

田園の素朴にしみ込んだもの。煩雑な日々を忘れさせてくれるもの。単調な田舎の生活の中にこんな親しみを発見する時、しみじみと田舎の良さを感ずるのです。

やるぞ

富田保彦

今度こそやるぞ。今度こそ必ずだ。試験が終わるといつも誓うことばである。答案を返してもらい先生の説明にも耳を傾けず、次回の試験範囲にとりかかるのである。家に帰つても自分で感心するほど熱心に机に向かう。それが三日ほどたつと次第に意欲も薄れ、遊び時間が多くなる。いわゆる三日坊主である。そうなつてくると、どんな科目でも同じで何か一題、難問に当たるとすぐあきてしまい椅子によりかかり、脚は机の上に。また、こたつの時は、うしろへゴロリ天井とにらめっこである。そんな時、いつも考えるのは、「合理的な勉強法はないものか。」「突然変異でも良いから今すぐ頭が良くならないだろうか。」こんなことである。しかし、成績に良いと悪いがあるように、四時間ぐらいい休み時間なしで勉強することがある。そんなになると腹がへつてしまう。そして腹ごしらえに行き家の人たちに顔を会わせると挨拶のように「眠つていたんだろう。」と冷たいことばがかつてくるが、大いに勉強して気を良くしている

ので気にもかからない。家の人たちは、ぼくが長時間二階にいた時は例のことばでぼくを釣るのである。ぼくの頭に血がのぼると眠つていた証拠。変化がないと勉強していた証拠である。ぼくも自分では分っているんだが実際そういう場面になると、単純素朴なぼくはすぐひつかかってしまう。このように変化に富んだ勉強はちよつぱり愉快だが、こんな事ももう言つてはいられない。あと一年だ。一生のうちの一年なんてわずかなものだ。よしやるぞ。毎日毎日が投手の一球一球だ。

今日までの自分とこ

れからの自分

小菅和仁

一高に入学して以来早くも二年過ぎようとしている。僕は学年誌の原稿を書くにあつて今まで二年間の自分とこれからの自分について考えました。今は入学当時の善びや希望も知らぬ間に消え、計画性のない平凡な毎日を送つて、現在に至りました。クラブ活動も勉強も充実したものではなかった。しかし大学受験の夢だけは人並みに持ち続けています。

今日までの自分では夢はとうてい実現不可能であることがわかつてきました。三年になつてからではなく今すぐこれからの自分を考え直していかなければならないと思つた。残された一年間をどのようにして過ごすかで将来がほとんど決まつてしまふと言われています。三年は本当に大事な年として楽しい（？）高校生活最後の年でもあります。これからの自分に残された課題はただ一つ入試突破である。

目的ある人生

古屋伸二

或夜のこと、何気なくあたりの虫の音に聞き入っていると、ふとこんな考えが頭をかすめた。我々は何のために生きているのだろう。我々は未来の街に向こうべく広野に足を踏み入れている。来春の入試を前に悩み苦しんでいるこの灰色の広野からバラ色の街にながなければならぬ。今ここで自分の足跡を振り返つたり、困りのものにあれこれと目をとられてはならない。それはまず街に早くつかなければならぬからだ。だからといって目先のことだけを考えよというわけではな

い。そこには何か目的といったものがあるはずだ。

「地上のものはいつさい、徐々に変化すべきものだし、現にわれわれの目の前で変りつつある。二百年、三百年したら、いやいつそ一千年もたつたら 11 そんな期限なんか問題ではないが 11 新しい幸福な生活がやってくるでしょう。その生活に加わることは、もちろんわれわれはできないが、その新しい生活のために現在われわれは生きているのであり働いているのであり、かつ苦しんでいるのであり、要するにそれをつくりつつあるわけだ 11 このことこそ、われわれの生活の目的もあれば、また言うべくんばわれわれの幸福もあるわけである。」

これはチェーホフの「決闘」の一篇であるが、我々も何のために、大学に入るのか、勉強に疲れたときもう一度、一人静かに考えてみよう。そしてそれに向って、最初の難関である来春の入試日として、あと残った一年一日一日を悔いのないよう、力いっぱい生きよう！

やるだけやる

種田 源正

人はある事を成しとげるためにそれ相当の努力をしなければならぬ。それをしていれば成しとげられないものはないのである。なせば成るのだ。しかしつい先頃まで努力をしてもそれがむだなような気がする時がたびたびあった。それが東京オリンピックの時の日本女子バレーボールチームの貝塚チームの人々の活躍によってその言葉が本当であるという立しうができたような気がする。あれだけの活躍をするまでの彼女らの努力の苦しさを新聞、雑誌などで読むことによって、自分も大学入試のためにいまからでもやれるだけのことはやってやろうという気になった。三年、一年間だけではたいしたことではできないかもしれない。しかしそれだけの努力がいかはむくいられるだろう。

有意義な年を送ろう

細田 晴夫

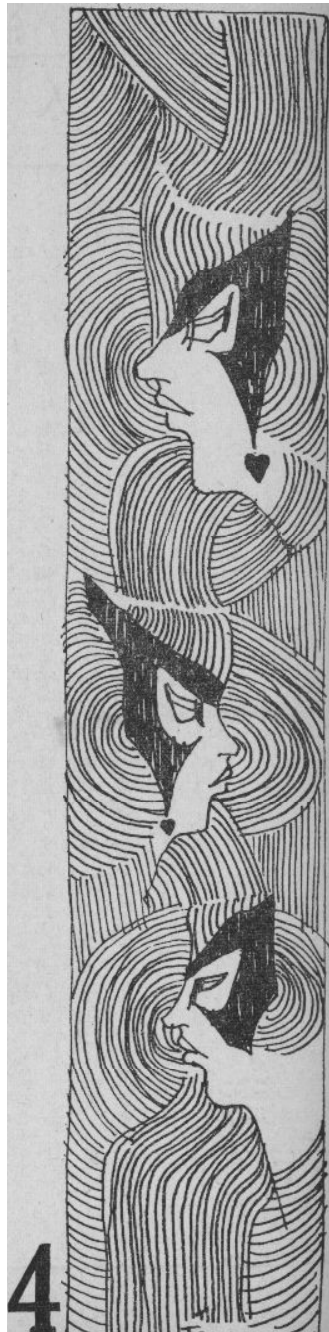
過ぎ去った日々を考えると、物事をやり通

す難かしさと同時に自分の意志の弱さを感じた。高校生活も、早や二年経過し、あと一年となった今、したいことはたくさんあるが、心に決めた事だけは少なくとも一生懸命やり通したい。この残り少ない一年を、活発に若さあふれるものとし、有意義な年を送り、将来のよき思い出となるよう。

感じたこと

橋本 旭

最も強く不愉快に感じたことは、学年誌発行についてだ。一年の時に作って新聞にはめられたからといって、二年の時に作らなければならないというのではないと思う。まして別に生徒から発行しようと言いだしたわけではないから、生徒の気分が盛り上がり、ただ適当にかけばよいということになり、いい学年誌が出来るわけがない。



眞 登 沢 組主任

一月十五日成人の日の朝はやく、となりのおばさんが晴々とした顔で、「息子の成人の祝いですが」といって赤飯をもってきてくれた。

そのたいどにはよろこびと安心感がかんぜられ、私はおもはず「お目出度うございますよかったですね」といいました。おそらくこのお母さんは手しほにかけて育った子供が立派に成長し、親からの独立と社会人としての資格をえられたことに対しての誇りと喜びで胸一杯だろうと推察し、反面心配事も以前とはちがった面においてふえてくるにちがいないだろうと自分勝手に想像してみました。さて目を転じて私の接している高校二年生、丁度十七、十八才の生徒諸君について、後二、三年で、二十才になるのだが、それまでどんな過程をたどるのだろうか、勿論大部分が大学に進学、在学中に成年式を迎えることになるわけですが、彼等にとつては年令よりも学校の卒業ということの方が大切であり意義深いものになるやもしれないと考えました。又彼等自身も、そういうふうと考えていると思います。たしかに二十才というのは大人の資格を与えるにふさわしい年令かもしれませ

成人の日に

んが、むしろ高校卒業、大学卒業という時期こそ、その人にとって大切なときであり、又社会もそれをみとめてやってよいと思います。唯年令のみによる成人というのはあまりに形式的であり、とくに進学者の多い現代に於ては尚更のことだと思います。

又人間的内容からいっても、学校に於てしっかりと学習すればその段階に於ては社会人としての知識も相当身につくはずであるし、とくに現代社会を批判する点においては相当するどいものをもっていると思います。そこで私はよの大人たち又社会全体が、学校卒業ということ成年式以上に大切なものととめ、それを節として青年が更にひやくできるようにしてやる必要があります。又生徒自身もこの高校卒業ということこそ、人生の前進のための一つの大きな関所であると考え、そこにたつするためにつね日頃の研修に最大の努力と情熱を傾けるべきだと思います。学校在学者がこう考えてこそ学生、生徒としての資格があるわけで、そこに学校教育の意義が正しく認識されると思います、後一年で卒業期を迎える諸君にとって、高二時代はすぎ、いよいよ最後の一年、高三時代となるわけで、ギリギリの一年しかないのです。最後のゴールこそ次の段階への登り口であることを十分自覚して、真剣にしかも若々しく前進してもらいたいと思います。

諸君と一つしよにすごしたこの一年間に、私はより多くのことを勉強しましたが、とくに諸君が無限の可能性をもっていることを改めて知り、うれしく又たのもしく思っています。最後に次の言葉をおくって文をおはりたいと思います。

「継続は力なり」

あしおと

岩間敏雄

11 あしおとに我をまかせて歩み行くなりー1

あしおとを耳をすませて聞きながら私は歩く自分のあしおとに特別大きな魅惑を感じながら。あしおとはある時には疲れきった牛のように重かったり、又ある時にはバレーの踊り子のようにリズムカルであつたりする。私は、このあしおとがオリンピックで観衆を驚かせたヘイズのように、ただ目的地まで一直線に、ものすごい速さで走るのを好まない。

途中でわき道へそれ、聞こえなくなつたり、立ちどまってどちらへいくべきか考えたりするあしおとを私は愛する。あしおとは、死を思う時まで続かねばならない。途中でわき道へそれようと立ちどまっていようと、めくらではないのである。必ずまた聞こえ始める。あしおとがそれきり絶えるのは死ぬ時以外ないはずだ。

聖書に『求めよ、そうすれば与えられるであらう、門をたたけ、そうすればあけてもらえるだらう』とある。私は自分のあしおとに何を求め、何を尋ねてきたかと考える。私は

このあしおとが、ただ平凡に同じ重さに求めることをせず進歩しないものである時、憤りをおぼえる。

私のあしおとは、今まで我が人生のほんの一部分を歩んだにすぎない。あと五十年も続くあしおと。私は自分のあしおとが他人のあしおとに共鳴し、感化され、けれども自分自身の誇りを持って歩み続けるものであつてほしいと思う。

あしおとは人間ですから恋もするでしょうし、笑つたり泣いたりもするでしょう。しかし、このあしおとは世界に一つしかない、自分自身のあしおとです。大切にしてい、けつして自ら傷つけてはなりません。私は、この十六年もの間歩み続けている私のあしおとを人より劣っているいやなものだとは思いません私の、私自身のあしおとですから。

修学旅行の意義

鈴木 徹

僕の印象に残っている事を述べ旅行の意義を認識しようと思う。

法隆寺 “日本のほこるべき寺である。金堂

は横に広がりどつしり構えて、柱には西洋建築様式のエンタシスも見える。それに対し五重の塔の縦への伸びがコントラストをなしている。その美しさに奈良時代の仏教精神が伝わってきた。

「薬師寺」冷たい雨にうたれその中に本当に美しくのびている塔、かわらがぬれてひかり感傷的な気分にした。塔はなにを言っているのだろうか……。

「銀閣寺」金閣寺のきらやかさ明るさに対応して質素で古ぼけた感じであるが、そこには日本人好みの雰囲気があり楽しい気持ちになつた。

「広隆寺弥勒菩薩」国宝第一号でありどこからみてもほほえみをうかべていると思われる仏像である。説明をききながら顔をみていると、自分たちの心を和らげるような何かを感じた。

又西芳寺のこけの美しさ、清水の舞台からみた眼下の雄大さ、かわいい鹿の姿が思いだされる。このようにその寺々や場所で自分自身で味い感じた事、これが旅行の意義ではないかと僕には思えるのです。

旅行点描

深沢嘉彦

旅一古都へ

青い空、紅葉した木々、取り入れのすんだ田畑。その中を続く鉄路、その上を走るオレンジとグリーンの電車、ゴオー、カタン、コトン、回転音に混って心はずませるジョイントの響き。ただ一路、古都へ――

薬師の塔

突然の雨は、あたかも俗化された周囲の雰囲気を抹殺するかのごとく激しく降った。その中で塔は、雨の音を先人の槌音を聞くごとく清められていた。見る人は変つても、塔も雨も昔のまま変らず、そのかすんだ姿はまこと「凍れる音楽」だった。雨はあくまで塔のもので、僕達を濡らす雨ではなかった。

東大寺の大仏

あまりにも大きな人でビックリした。大きいと言うより雄大であった。まさにホコリ高い人だった。黒い目、青い目、カメラの目にも快く応じている。全身からは「温和」といえるような、目に見えない光を放ち、神々し

い限りであった。大仏は、あまりにも寛大、雄大であり、僕は、あまりに小さかった。

龍安寺の石庭

広い、広い海。七つの島。秋の陽は白い波に輝き、まわりのものをカメラにさせていた。ただ、心の目はかすんだなかにも広い、白い海を、七つの島を見取った。心の目は、上から、横から、斜めからあらゆる角度で海を見た。11だめだ／全体がハッキリ見通せない／……。

「おい／」突然人の声で心の目はとじ、目が見えるようになった。（団体旅行はこんな時都合悪い）そこには、十五の岩、白い砂、少しの苔、ただそれだけあった。

旅――家へ

陽が沈み、街燈がついた。闇の中に鉄路は続き、その上を赤いライトが消えていった。暖かい光が消えていった。

信濃路を行く

斉藤 斉

今までの単調な路に変わって、急な下り坂になった。靴の中の足が前にのめったり、わ

はいられなかった。時間は八時三十分であった。もう太陽はそうとう高く上っていた。出発の時は雨が降るのではないかと予想していたが、それはくつがえされて、空は気持良く晴れていた。もう前の所を出てから三十分もたっていた。ちょうどその時庭を掃いていた老女に僕は聞いた。「海の口駅までまだ相当距離がありますか」、とその老女は地独特の語で「もうちつとだよ、そこをまがって、真すぐにいくとなあ……」荒々しい言葉であった。老女がいい終るのをまっていたかのようにならばいいと、二十分ときいて僕はきかねばよかったと思った。二十分がどんなに長い二十分であるかを知っていたからだった。

つづいて老夫は「どこから来たんぢや」と聞いた。僕は「甲府からです」と言った。腰に手をやってそばにたっていた老女は再び、「そおか……かわいそうに……」僕は満足であった。そこから少し下った小さい店で、僕はキャラメルを二つ買った。甘いものがむしように食べたかった。若い女の人が出てきて、キャラメルを出してくれた。「足が痛むでしょう。駅までもう少しですよ」その若い女の

だちが足に強く感ぜられてとても痛たい。足を横にする様にしてその坂を下っていた。

双葉町の辺では前進をはばまれる様な人もいまはもうない。前にも後にも誰一人としていない。僕は孤独感におそわれていた。不安であった。それでも時々、その坂を上っていく、馬車や自動車にいき合うこともあった。あたりの山はまだ紅葉はしていないかった。坂を下り出してからどのくらいたったであろうか、見当がつかなかったが、下方に部落が見え出した。ほっとした気持ちになった。部落の間を通じている路は狭く前にも増して急な勾配になっていた。細い道の上に、小石がごろごろしていて、足も一層痛たんだ。その路の両側には家が並んでいた。杉皮の家で、その上を石で押さえてあった。のきには山吹色の唐黍がいつぱいほしてあった。炬燵にあたって外を見ている老人もあった。まだ十月の初めだというのに炬燵をたてるのだからもうそうとう寒いだろう。歩いている者には、足の痛みは感じて、そんなに寒いとは思わなかった。その部落には何か活気がなかった。山村とは何時もこんなものであるうか。老人ばかりが目につくのである。時代の風がここにも強く吹きこんでいるのだと思わずに、

い赤のロベにを塗っていた。その和服がぎなれていないことはすぐにわかった。「おばさんお茶をお願いします。」誰かがそう言った時、その救護所にいた先生が「おばさんではないよ、姉さんだよ……姉さんではだめか、お嬢さんかな」その言葉に女の人は顔を赤らめた何も言わなかった。駅の前には二・三十人の人がいた。ベンチにはみだした人は地に、元氣なさそうにすわっていた。もはや彼らは口をきく勇氣さえ失せているかの様であった。僕もまたそうであった。付近の田では稲をあとちこちで刈っていた。もうこの辺にとつては秋が深いのであった。僕は九時三〇分、海の口発の電車でその地に別れをつげた。ちょうど甲府をたつてから十二時間であった。

奈良の朝

細田 浩

漱石は小説の中に、「詩を作るより田を作れ。」と書いているけれども、しかし今この地に素朴な詩人がいたとすれば、純粋無垢の感動は、彼の感情をゆりおこし、一つの詩ができるのではないかしらと思うほど奈良の朝

はすばらしいものであった。冷気は、こころゆくまでわれわれの腹わたにしみわたり、われわれはやはり現在奈良にいるのだなあと強く思わずにはいられなかった。千数百年前の血なまぐさい争いは、仏師によって平和を祈願する仏像と変わり、その姿は今も朝霧につつまれている。それでもその柔かさを保っているようである。そして古い町並と鹿の群れとの調和は奈良の人々の生活の中に深くしみこんでいるように、われわれにもその幸福さを感じた。そして日本人の町であった。しかし、「古寺の美しさは、それが荒廃のままにくずれんとしているところにある」。といわれているように奈良の日の出とともに、奈良の町がむやみに文明世界の俗臭の中まきこまれないように願わずにはいられなかった。

修学旅行の思い出

名聴 敏也

まだ薄暗いのに甲府駅に行ってみるともうみんな集っていた。

ついたシルエットとなつて十一月のコパルト

色の空にのびている。近づくに従つて私は威圧感を覚えた。巨大なる建築物なるが故のものばかりではないことに気づいた。この時、興福寺に対して観光地奈良を構成する一建築物にすぎないような身勝手極まる観念的評価を与えていた自分を恥じたのである。藤原氏の氏寺として隆盛を極めた時代、たびたびの兵火にかかった時代、仏教の墮落で焼き落とす計画された時代、世の中はめまぐるしいほどに変遷してきた。しかし五重塔は昔とかわらぬ姿でこの広い境内にあるのである。「難難汝を玉にす」は決して人間にだけ諺ではないのである。一〇〇〇年以上の間風雨に晒された柱は、茶色となり、木目が著るしく高くなっている。その木目に触れると無知な私には不思議なほど鮮明な像が興福寺の歩んだ時代に従つて私の頭を過ぎるのである。……おや、いつの間にか鹿が一種異様な物欲しげの眼差しで、（観光客ズレしなせいであろうか）私をながめていた。

東海道本線には初めて乗ったが、汽車から海を臨んだ風景は実に良かった。何とも言えない快い感じをもった。時にはひかり号が越して行く。見る見る間に遠くに過ぎ去つてしまふ。こんな物を車中から見ながら京都駅に着いた。夜の京都は実にすばらしかった。古い都であるのに京都はなぜか新鮮で落ち着いた近代的な感じを与えてくれた。

その夜は奈良にバスで行つてそこに泊つた夜の外出は十時までだからゆつくりと夜の奈良を見物できた。京都と変わつて古いいろいろな歴史を見てきているし、又重々しく古錆びた感じをこの町は押しつけてくれた。

夜、猿沢の池のほとりに立つて水面を見ると何とも言えない奈良ではの感じを受け取つた。五重の塔を薄黒く水面に映し、あたりは赤、緑、黄などのネオンで明るく照らされていた。

一朝はちよつと寒い。だが奈良公園の鹿にせんべいをくれている者もいる。五重の塔を見上げている者もいる。はく息を自くさせながら互いに初めて見るこれらについての話に花を咲かせている者もいる。

奈良は淋しさ、孤独感、冷淡、無常感を与える町だ。近代の発達に遅れている霧のかか

「親友」を論ず

1

村松 賢夫

「親友」とは、ある時にはその人の一部であり、又ある時にはその人のすべてでもある。彼はたとえ遠くに居ても近くに在る、だがそれに対して、しばし懷疑が生ずる。それが昂じると不幸がおこる……。或る人が親友に關してこう定義した、かりにこの定義が正しいとしよう、前者に於いて又或る先輩は「親友をもつことは喜びであり、又誇りでもある彼は常にこの心のかたすみになつて俺の礎の一つとなつて……。と言つていた、だが海には波が立つ如くその心が常に不変なものとは限らない、それが懷疑なのである。要するに、それは思うに、彼のその人に対しての理解、信頼、及び愛情についてのそれであり、又考えられる残りのその中の一つは！人間とは常に利己的な動物である。特に一高生は、相手の利用価値を常に計算に入れようとする。親友に關する限りに於てそれを条件の中に入れるのは多少なりとも酷な事かも知れない、だが、現実とはそんなものである。

つた町だ。そんな感をも受けるひ

奈良駅まで歩いて遊びに行つて見た。狭くて小さい駅で明治時代のような駅らしく思える。甲府駅より小さいと思われる。人々の往来も激しくないような駅だ。ただ昔のおも影のみをとどめているに過ぎない、そんな感じだ。

あたり一面を山に囲まれた奈良盆地、その所々には法隆寺、東大寺、薬師寺、唐招提寺が点在している。国宝に指定されている重要な文化財を持つていて全国各地から見物客を呼び寄せしてくれる奈良は永遠の博物館だ。旅行も終わつてあとに残る物は勉強のみだ。

興福寺五重塔

米山 浅雄

私は旅館を一步出て驚いた。限前に11鹿、五重塔11いわゆる奈良の景色が開けたのである。昨夜、何回か旅館前の往来は通つたはずであったが修学旅行第一夜という特殊条件は私の心から古都に來た実感を完全に抹殺していたようである。苔むしている七、八段の石段を登ると柔かな日差しに五重塔が落ち

それ故、それに際して親友なりと言う關係を続ける為には、そこに媒介となり得る何ものかが必要かつ不可欠なではなからうか。思うにそれはどんなものでもよい、共通性がありさえすれば。しかし不幸にして不安が昂じたならば11、その人は彼をとりまくすべてのものに對し嫉妬に駆られ、そして失望するのである。自我の確立に因る利己心からおのれの非は認めずして。そしてそれが結末なのである。

2

佐野 芳彦

「交友は投資である。」と、ある小雑誌にのつていたことを覚えている。なるほどこれには一つの真理が含まれている。すなわち、投資が少なく、浅いほど将来に対する関心が弱い、破産間近となれば重要視され、又見事建立の際には無視されやすい。あるいは大きく深いほど将来に対する信頼も強いが、一歩誤ると身を滅ぼす原因にもなるし、又思いもよらぬ幸運を得ることにもなる。前者の場合是一般名称としての友であり、ある程度のユーモアと気楽さと温かさを含んでいる。無視された時にもそれほど怒りをおおえず、

幸運の際は期待以上の喜びをえる。後者は親友の交りというべき特別の場合で、信頼と尊敬の結晶した人々の場合である。少なくとも何らかの影響を生涯に与え、精神の発達途上にある我々の心の一部となるべき人々であるそれだけに影響は大きく一度交わった者は二度帳消しできない立場にある。それらが将来において成就したのが管仲と鮑叔との交友であり、その道というよりは失敗した例としてすなわち相手は立派に己の道を達し、自分はその波紋から破滅に陥ったのが、大貫桂岳と原芳泉との交友である。管胞の交りは一点非のうち所のない理想的、互が信頼し合い、互に調和のとれた交友であり、これらは何ら問題のない完璧な同志である。しかるに桂岳芳泉の交わりは互に立派な老同志でありながら交友が進むにつれ、芳泉が桂岳の器量に魅せられ、自らの芸術的才能を放棄し、自滅した非調和的な交友である。男子の交りにおいて最も強調されるのが切磋琢磨ということであるが、芳泉の立場は見事敗北した者の惨めさというべきかもしれない。天才と似而非天才との相異、あるいは持つて生まれた才能の相異というべきか。すなわち一方が他方の総てを吸収した実力以上の傑作を創造した交りで

ある。親友を求めるには己れに対して注意深く、己れの才能と性格をよく知った上で交わり、相手に対して寛大にしかも簡潔に接するべきである。又親友を見極めるには直観に頼るのが最短で最良の術であると思う。意気合わずと見たら付き合うべからずであり、又もし親友として墮落したと思えたら絶交も悪しからずである。しかしその場合は特に考察すべきで、ある程度の危険が伴うことを承知しておく必要がある。又一般名称の友の場合は気楽に、ユーモアを持って何も期待せずに接するべきであると思う。

ある作家は、「友情は読書のごとくあるべし」という。これも又しかりである。我が愛読書の少なかりき、この一冊を携えて歩みださんとす。親友との交わりは、常にどちらかが現状を維持し、機あらはそれ以上に伸びんがためである。底には一巻の書物のごとく不変の真理が存在し、表面には絢爛たる情感を交える。親友の本質は正にこの「常」にあるのではないか。「常」とは何時、いかなる場所、いかなる境遇においてもということである。多くの書を読むことは神経の休養をとるべく、気転を広め、楽しみおかしみを育て、情操を深め幅広い人間を作るに役立つ。その

場限りの付き合いもよいものである。きれいさっぱりと別れる友の交りも又しかりである。要は嫉妬心を持たぬことである。嫉妬からは何も生まれず、何も育たず、総てを破壊するのみである。ある哲学者は「友情は人生最大の喜びである。」という、これも又しかりである。

息子の死 佐藤光一

ジョンが死んでもう二ヶ月もたった。デヴィド氏は、それからというものすっかりと人が変わってしまった。彼は前には、酒一滴も飲まなかったがジョンが死んでからというのは毎日酒びたりになっていた。たとえ飲まない日があったとしても彼はその日一日自分の部屋へとじこもっていた。彼の妻はジョンを生むとすぐ死んでしまつて、それ以来父と子二人で生活してきたのである。それだからジョンに対する彼の愛情は、並みたいていのものではなかった。

二ヶ月前のある日、彼の事務所に電話がか

かつてきたも

「もしもし、おたくのむす子さんが自動車にはねられました……」

「それで、どんな具合ですか。」

「それが、ほんとうにお気のどくですが今しがた息をひきました。かわいそうに最後まであなたに会いたがつていましたよ。」

彼は気が苦わんばかりになった。

「あなたはだれですか。」

「あー私ですか。私は警察の者です。」

「もしもし、私はどこへ行けばいいんですしうか。」

「すぐこちらに来てください。」

彼はいそいで警察へかけつけた。ジョンの死体には、白いきれがかぶせてあった。彼はむすこの死体にとりすがつて大声を出して泣いた。前にいた警官の中にも思わずもらい泣きをした者もいたほどだった。それから、二日後にジョンの葬式がおごそかに行なわれた。

きょうも、彼は一日中自室の中でぼんやりして過ごしていた。あたりに夕やみがせまつた頃、彼は急に公園へ散歩に行きたくなった。途中彼は何人もの知人に会った。しかし彼等は前とちがつて決して彼に話しかけよう

としなかった。ジョンさえ生きていればなあー公園についた頃には、あたりはもうすっかり暗くなつていたので、ほとんど人影が見られなかった。彼はベンチにすわつてジョンのことを考えた。しばらくすると、彼は自分の前に人の気配が感じられたので顔をあげてみた。何とそこにいたのはジョンだったのだ。

「パパぼくと又一諸に住もうよ。」

彼はしばらくの間、口を聞くことが出来なかった。これは夢だろうか。思わず彼は自分の片足をおもいっきりふんで見た。夢ではなかった。彼は喜びと同時に恐怖も感じられたが喜びがあまり大きかったので、しばらくすると恐怖は消えていた。

「うん、じゃあ家に帰ろう。」

「パパ違ふんだ。ぼくの新しい家へパパが来るんだ。」

それから、彼は結局ジョンの言う通りにジョンの家へ行くことにした。ジョンの家というのは、夢のようにすばらしい家だった。ジョンが前にいつも彼に話していた家と真すつくりの家だった。その家の中でジョンとデヴィド氏はしつかりと抱き合った。

「パパぼくとと離れちゃいやだ。」

「うん、パパはもうジョンを話さないぞ。次の朝、ジョンの墓の前で、うずくまるようにして死んでいたデヴィド氏が発見された。」

あるバスの中の出来事 有泉 庸一郎

帰りのバスの中であつたらうか。いつもバイクで通学している僕にとつてひさしぶりのバス乗車であつた。そのバスは小さかったのだ、それでなくても混むバスが、非常に混んでいた。ある停留所にバスがとまった。その停留所にはたくさんの人が待つていた。いつもバスの後に乗ることは知られて前がかなり混んでい五時でも割と後はすいていた、その日のバスも例外ではなかった。車掌がその時後へ詰めてくれるよう再三再四頼んだが乗客は反応を示さなかった。その瞬間、車掌はたまりかねたように荒々しく、とても車掌が使うとは思われないような言葉使いをした。

（この時の車掌は男であつた。）と同時に、後の方からもう五十を過ぎたと思われる男の

人がどなった。「なんだ、その言葉使いは。〇〇に着いたら降りる。制裁を加えてやる。」僕はこれを聞いて憤慨した。どなった男が、後に詰めようとしなかった人だったからだ。車掌の言葉使いも悪かったけれども、それ以上に、その男の態度は悪いと思う。することもしないで、言うことは一人前のことをいう僕達が社会生活を営んでいる以上、自分の立場に応じた行動をしなければならぬ、ある程度束縛されている。仮面をかぶった人間にならなければならぬ。しかし一生このように過ごす人は多くはないだろう。この時の車掌の言葉使いは、自分の立場を知っていただろうけれども、やむおえず、出た言葉使いであろう。もっと違う方法もあっただろうけれど、後に詰めない為に、乗ることの出来ない人を使って出た言葉であると思えば、思うほどあの男を憎くまずにはいられない。

クラスの仲間

加々美 和 明

僕達のクラスは愉快だ。

いつでも楽しそうに、うれしそうにわらった

り。動きまわっている。あつちにひとかたまり、こつちにひとかたまりと、どこへ行っても休み時間などは何かしている。まるい顔、細長い顔、黒い顔、等が入りまじって、本などをしたり、映画の話をしている。あまりさわぎすぎて時々（しよちゅうの方が正しいかもしれない）先生に叱られることがあるが、すぐに笑いが出てくる。僕はこのようなクラスにいて良かったと思っている。皆な気さくでゆかいな連中ばかりである。これくらいだったら他にもあるだろうが、他とちがうことは、クラス全体のふんい気がこのようなのである。だから成績は良くはないが（例外もある）みんなが楽しくかってなことばかり言ったりしたりしてはいるが、ひとりひとりはんなりっぱである。（どっかできいたことがあるようなないような？）だから我々からの楽しみをなくしたら。死んだも同様（スコシオーバだね）なので。どうかゆるしてほしいものだ。しかしそうそうさわりでばかりいるわけにはいかないだろう。そのうちにはなくそろそろまじめになろう／。

自由主義と

社会主義

三谷 正明

俺はこの二主義の相違といったものはよく知らない。自由主義とは資本主義的なあくまでもフリーの、人間が一個人として存在する場合であり、社会主義とは全体の集団であると考えている。そんな簡単なものではないと言う諸氏もいるであろう。しかし理論なんてものはこの際考えないでよいだろう。正月にあるスキー場の宿で青年団体と称する団体の集会にめぐりあつた、この団体は、打倒「政府」を目的とするような、いわゆる「アカ」の団体であつた。しかしこの集団の話し合いを聞くと今の日本の切実な青年問題、労働問題などを真げんに話し合っていた。

今の国会をテレビや新聞などでたまにみると自民党と社会党の対立だけを主として行なっているようにみえる、自民党が意見をだし、それを討論するときまつて社会党が反対をする理由もあるのだろうか、こんな行い方ではないかと思う。国民の指示する党が決めたことにそんなに反対する理由もないだろ

う。その力がうまく行くのではないだろうか。

宿での青年会で、ある労働組合では四万円の給料をもらっている者も一万円の給料しかもらわず残りは組合に収めて、その者はひじょうに愉快にやっているという話を聞いた。

俺はその話をきいてバカらしいと思った。実力のあるものが、それ相当のものを得るといった社会の方が人間がきちんとするのではなからうか。社会主義でも実力のある者は実力を発揮できるということもあるのだろうか、何といつてもその実力が大いに発揮できるのはやはり自由主義の社会である。前に記したような労働問題などを青年会の目的とする所には賛成であるが学生運動などを行なつて目的を行なうことには断固反対である。

抵抗

長沼雄次

人間は何のために善を為すのか？、それは快樂のためである、人々はよく社会のために人のために立ち働くようにしなさいと言う。貧しい人々を救い、悪の道へ走ろうとするものを更生させるような事をなしたとげた場合、

周囲の人々はその人に対して善をなした、徳があるともてはやす、人は何故それをなすのかまさしく自分自身の快樂のためである。

すなわち自己満足をせんがためである。自分のした事をかえりみて良い事をした、人のためにたつたと感じた時その人の心中には自己満足の感情がはつきりと見える。いいかえれば自分が社会的、精神的にあるものよりも優れているとみなす事が自分自身でできる。それにより自分で身分にある身分を与え、それに満足する。あるものとは、つまりその行為をなされた対象である、そのものは自分の望むと望まざるとにかかわらず必然的にその行為をなされた事で自分よりも地位が上（精神的に）のものを作つてしまふ。それは正常な精神の持ち主であるならば大きな苦痛となるであろう。何が彼をしてそのような苦痛をもたらしたか。まさしくそれは、自己満足をせんがために行動した（彼がその行為中に彼の目的をはっきり見定める事がないにして）男のおかげである。

その男は善をなそうとして立ち働いた。その結果が彼に対して苦痛（すなわち不幸）を与えた他に何をしたであろうか。つまり彼は自分の快樂を求めて（動物的な欲求とも言え

る）それを得んがために人を不孝に陥し入れたのである。それがどうして善であろうか。

だから私は人のためになるうなどとは全然思わない。ましてや人の世話になるなどもつての他だ。現代の世の中で利己主義といわれ

て批判されている生活を最も好む。

反省と希望

渡辺 兵衛

今年もまた学年誌発行の時が来た。

あれから一年間、男の中の男の集まりとも言うべき二年四組の一員として歩んだ自分の姿を、ここで振り返つてみたい。

まず第一に心に浮かぶのは、生活にケジメがなかったことの反省だ。特に二期はクラブ活動、その他の学校行事に追われ、じつくり腰をすえた学習に欠けた。このことについては「ふんどしを締め直せ。」と担任の先生から何度か言われ、その度「よし、やったぞ！」と奮起するが、このフアイトも長続きせず、あやふやな生活を送ってしまった。こうして学習面においての二歩三歩の前進は遂げられなかった。が、クラブ活動においては

程極的に活扮した①部の主体となつて後輩の指導や部の運営にあたらねばならない責任と二年のうちに何でもやってやろうという決意とで、この一年間クラブ活動を通して数々の経験を得た。この面での体験は高校生活を有意義なものにするために少なからず役立ったと思う。そして強行遠足で自己の精神を鍛え、修学旅行では古都の香をかき、それに東京オリソピックによつて世界平和の誓いをこの目で見た一九六四年。この過ぎ去つた一年は、欠けた面も数々あったが、自己の人間形成の上でわずかながら「成長」のあつた年だと思ふ。

さて、高校生活もあと一年だ。そしてすぐあとに受験という難関が迫っている。今年こそ、生涯において二度とない年だ。全力を尽くし、頑張つて行こう！……

鶴田 洋

僕は小心者である。たえず周囲を気にして自分で自分をなぐさめている。体格のいい奴自信に満ちた奴を見るとうらやましくなってくる。必要以上に他人を気にして、一人でもんもんとしている。

の期待は大きい。彼女が場内に姿を現わしたときには確かに観衆の誰もが熱狂していた。彼女は例の準備運動をし、軽く一走りして落ち着いていた。「位置について」でスタンドはみな息をのむ、選手の鼓動が聞えるようなこの瞬間の心境はテレビの画面で感じることは困難であろう。ピストルの煙と同時に飛び出した一直線に並んだ「人間の壁」はゴールに向つて疾走する。前半先頭の依田、しかし力尽きたか五着でゴールへ突入した。首を垂れる彼女、潮のひくごとく静まるスタンド、依田は負けた。彼女の力走と結果から、本種目においての日本と世界のレベルの差の「大」を痛感した。

興奮と感動の中で何かを学び取らせたこの五時間余りは、東京五輪のよい思い出となつて末長く、心の片すみに存在しつづけるだろう。

一年とは三六五日？

中山 高春

この男、諸々の乾坤の神々より地上へ突きだされ、はや十七年を送る。なんとなしに

一般に自分に自信を持ってないと大変そんだ他人に頼りがちで、自分一人で決断できない自分一人では諸事を完全にできないと思う。そしてことさら自分が卑屈になる。他人を必要以上気にする。他人を気にするから行動にますます消極的になつてくる。それに對し、もし自分というものに確信する自信が持てればすばらしいことである。おのずと自からの能力と、限界を自分のわく内で知りうる。自己の確立である。それほどでなくても、自分の現状に即した自信がつけば、自分なりの行動ができるだろう。

それでこの頃はもつと自信をつけようと試みている。まずどんな事にも憶さないといい事。つまりある意味ではふてぶてしくなる事だ。自分にものごく自信を持つ、自分で自分にいい聞かせる。そして自分は相手に決して劣っていない、相手と対等なんだと心にきめてかかるのだ。そうすると他人のことはあまり気にならなくなってくる。しかし実行するのはたやすい事ではなく、あらかじめそう思つていても、相手と對しているうちに、相手がやたらすぐれているように思つてしまう。仲々至難な事だが、相手に決して自分より優っているのではない、と自負してかかるの

「二高生」という伝統（この内容わかつているのか？）に輝く高校に入り、一年を過ごす二年目の四月、「大学入試」という、人生の第一難関を突破するがごとく、一年時の怠慢をいまさらのように心にかみしめつつ、勉強に励むことを、志す……。

そして迎えた1966年、遠く異朝をとぶらふと、二大強国を中心に、各国新路線を打出し近く本朝をうかがふと、世はまさに不況ムードに包まれつつも、佐藤路線を打ち出しつつこの年昭和四十年の幕はきつておとされた。今年、四十年はこの男、いや全日本の高校二年生にとつて、「勝負の年」である。

思えば、四月の決意は目的なしの入学（といつてよいかもしれない）によるわだかまつた気持ちのために、折にふれて反省を繰り返しつつも、又も何の得る所もせず、二年を終わろうとしている。常に病氣と闘い、克服して勉強しようと努めたが、青春の若さに満ちた友を見るにつけ、悲しくさえた日々もあった。又そのために友や先生から誤解されるようなこともしばしばだった。スポーツに若さを発揮し、体力をつけようと何度思つたかもしれないなかった。

だが今は違う／　なんとなく古風じみた複

もおもしろい。

思い出の五輪見学

笠井 紀久夫

紺碧の空の下は、目のさめるような茶のトラックとじゅうたんのような黄緑色の芝生と七万に近い観衆だった。十月十九日の国立競技場がそれであつた。私達はバックスタンドの中央から入場したわけだが、その入った瞬間に私の網膜に写された風景は、今でも脳の奥深く鮮明な像として焼きついている。秋空に浮ぶ聖火を中央に、風になびく各国の旗に囲まれた建築物の、惜しみなく使用されたコンクリートの量感と茶と緑の広々とした空間その中に動く選手の原色のユニホームは一種の芸術品として私の心を遺憾なく魅了した。

オリンピックの花である陸上競技、この日フィールドでは女子円盤、トラックでは十種競技と日本陸上の救世主の一人である依田の出場する女子八〇ハードルの予選決勝があつた。この決勝のスタートは午後三時頃で、それより少し前に正面のロイアルボックスには両陛下のお姿も見えた。彼女にかかる日本人

雑な気押の上に、現代的感覚をもつて、大学入試をわりきつて考え、大飛躍を遂げんと、大鳥のごとくとはいわずとも、梨大学長の言葉のように青春の一日を大切に、今や偉大な目標に突進し始めたのである。

時あたかも、一月三日、冬の薄日がこの男の背を柔らかくつつんでいた。

穂坂 かつのり

何時のことか忘れてしまつたが、古い土堀の陽だまりで、一つの「生」を受けた蒔のとうが、あざやかに萌えて、そのかしらをもたげていた。暖かい陽、目にしむる芽の緑。うつらうつらしそうな時候であつただろう。いじ悪い厳冬に芽を出し、雪や霜にいじめられて尚育っていく。彼とボクとの形は違つても生きていかなばならないことに変わりはない広い大地のかたすみで、蒔のとうが芽ぶく如く、人間もそうである。天の恵みに時にほ喜び、時には嘆く、嘆かざるを得ない時には泣き狂う。しかるに人生の山道は己自身では決定できないのは当然であろう。その道が高くなるも低くなるも我々個々の「がまん」のほかはないはずである。そのがまんとはどう

いう仕事か。落のとうは知っているだろう。優しく教えてくれるだろう。良識ある人だけに……。晴れた日も、嵐のときもただ生きていく。厭ましいときも、痛いほどつらいときも、苦しいときも……。溢れるほどの生に対しての執着を持って立ち向う。落のとうだけでは足りないかも知れない。しかし、ボクにとつて落のとうのそういう力強さが欲しい。踏まれてもつぶれないだけのがまん強さが、たくましが欲しい。それは当然のことではあるが、観念的なことではない。落のとうに意地があるかないかは知るところではないが、ある意味については同じことが言えはしないだろうか。あの時は何気なく見つめていた落のとうに対して、今は新たな決意、信念を感じるようになってきた。いつまでもさわやかな緑の落を思い、大いなる恒心をもって己の峰を越して行こう。

当面の目的

岩田茂久

一高に入ってから、二年目がすでに過ぎようとしている。時日のたつのは実に早く、も

う十七になるうとしている。人生は思ったよりも短かそうだが、残りの年月を、一人間として満足のできるものになりたい。あと、どの位生きられるか？、といやそんなことはどうでもいい、明日といわず今日、何で死ぬかも分らない身の上だが将来に大きな希望をもてる若さがある。勉学に励む若者は特にそう言える。

誰もが、一日一日を惜しみ、または悔いながら、明日のあることを疑わずにフアイトを燃やして頑張る。少くとも僕はそう思う。

その勉強することの究極の目的は何だろうか、何の役に立つのか。ただ現在の僕は、目的を今から一年後において、矛盾してはいるが時に授業をおろそかにしがちであるということである。この勉強は、自分を社会の高い地位につかせ他から高く評価されて自分を満足させようとするための手段ではないか、興味もなく、覚えたくもないのに、一時的に頭の中へ詰めこむのもその為である。つまり良い点をとる為である。それには、努力を必要とする。努力を怠れば、自分は落伍者となる。そうなるのは悔しい、という考えから勉強をする。余りに現実的、小人的な考え方であらう。こうなると、僕が、テストで良い点を取

るために思う存分、努力しているように見えるが、それには実行力と性格的なものとの占める比重が大きく、人の、特に僕の考えは無常であることも考慮せられたい。

現在の点取り競争から解放あるいは、それが少しでもゆるめられる時がくれば、僕の現在の考えは変わるかもしれない。

いづれにせよ、当面の目的は分っているのだから、悩むこともあるまい。他のことにはわき目もふらず、一筋に突き進むのみである故に、この原稿を書いたのは、僕にとって余りに莫大な時間の浪費であった。

魔法の数字

藤島康由

我々の職業は学生だ。学生の仕事は勉強することだ。毎日毎日、学校でかなり勉強しているようにだけ考えてみるとたいしてしていない事になる。というのは、一年は三百六十五日ある。でも我々は一日に八時間は寝る。

そうすると一年の三分の一にあたる百二十日は寝ているわけだ。起きているのは一年に二百四十三日。食事したり、新聞を読んだ

り、トイレへ行ったり、なんとなくボンヤリしていたり、テレビをみたり、そんな時間が一日に六時間ある。だから一年にすれば九十一日それを引くと残るのは百五十二日しかない。一年には日曜が五十二回あるから百五十二日からそれを引くと百目しかない。

又土曜日は半休だからその分が年に二十六日、これを引くと残りはたったの七十四日しかない。まだまだある、我々は夏休み、冬休み、春休みというのがある。これが七十日あるのだが、補修だ何だで少くとも五日は学校へ行くだろうから結局六十五日ある事になる。この分を引くと残りは九日しかない。

それに成人の日、春分の日、天皇誕生日憲法記念日、こどもの日、秋分の日、文化の日、勤労感謝の日と、年に八日国民の祝日があるわけだ。これを引くと残るは一日。どんなにこせこせ勉強しても我々が本当に勉強しているのは一日だけなのだ。しかしものすごい重労働なのである。まず我々の心臓は十萬三千三百六十回脈打ち、血液はのべ一億六千八百マイルをつっぱしり、肺は二萬三千二百十二回呼吸して、四百三十五立方フィートの空気を吸収し三・二ポンドの食物と二・七ポンドの液体を摂取し、二四バイントの汗を

かき、華氏八五・四度の熱を放散しつづけ、さらに我々は少くとも二千語の言葉をしゃべり、七百五十の主要筋肉を運動させ、考えるたびに七百万個の脳細胞を動員している。まあ考えてみればよく生きていられるもんだと思う。このくらゐ数字をならべると、かなり数字に強いものでも頭にくるだろう。ワッハハハ……。言っておくけどここにのっている数字はデタラメじゃないですよ。ちゃんと資料は調べてあるのですから必要のとき参考にしてください（えらそうにね）。まあこれから我々も、試験の点、社会にでると金と数字に悩まされるわけだが、でつかい夢をもって、元気に進んで行きましょう。

志村健美

僕は家が学校から離れているため、毎日バスで通学している。そのためバスに乗るためには、通常七時頃起きなければならぬということは大きな負担である。特に冬の厳寒期には、目が覚めたとしてもなかなか床から離れているのがつらい。それでバスに乗れないということがしばしば起こる。その上、バスは汽車とは大変なちがいで、時刻というもの

をあまり重視していないという気がしてならない。自分はいつも時刻表を絶対的なものだと思っているのだが、バスは時には25分ぐらい遅れたと思うと、次の日は5分位早く行ってしまったということがある。そういうことが遅刻の原因になり得る。バスがそのような理由は多分交通の激しさのためだと思われる。バスに乗るようになってからつくづく感じたことは、確かに交通量が増大したにもかかわらず道路の拡張がなされていないということだ。これは全くの重大事だと痛感する。しかしバスの中では楽しいこともある。同僚達と多種多様な話をする。時にはバス会社の皮肉を言ってみたり、バスガールの悪口を言う。又一方あたかも自分の家のごとくにその中でぐっすり眠ってしまうこともある。こういうことは自転車や徒歩で通学する者よりもはるかに楽しいことである。けれどもバスともあと一年あまりでお別れということになってしまう。



自分について思う事

神宮寺 俊 夫

高校生活もはや二年を終ろうとしている時間的には、短いものようであったが、有益な要素の多い時期であった。その中で一番自分が考えた事は、人間というものの存在と自分の世の中に対する位置と、なすべき目的であった。その事はすべての人が考え続けてきた事であるかもしれない。私は、数人の人にその事に対しての考え方を尋ねた。しかし適格に自分の納得のいく答を出してくれた人はなかった。ある有名な人が「多数というもののはどしやくにさわるものはない。なぜなら多数を構成しているものは、少数の有力な先進者のほかに、大勢順応のならぬ者と、同化される弱者と、自分の欲するところさえ全然わからないでついて来る大衆とであるから」と言った。多勢の中に住んでいる自分は少くともそんな大衆の一人にはなりたくない。また、その人は「結局私達は目ざすべきか。世の中を知り、これを軽蔑しない事だ」。「人間を持つものの中で自分自身に基礎をおかぬ力

ほど不安定で、はかないものはない」とも言っていた。私はこの二年間に確かに自分の行為は、自分だけをたよりにしてなすべきであると感じた。私は常に前述の三つの事を考えて、自分で自分自身を納得のいく人間にしていきたい。

スポーツについて

小野 松治

色々な面においてスポーツは偉大であると思う。それは第18回東京オリンピックでも大いに証明された。このオリンピックが史上最大のオリンピックであり、世界の最高水準をいく科学のオリンピックであった事は確かです。外国の人々に戦後の日本の発展した様子国内の内面的なものをより深く知ってもらうこともできたと思います。しかしこのオリンピックがアジアで最初に開かれたオリンピックであり、全世界の国と国との友好や信頼、人々の友情を深め、ともすれば暗い不安な世界状況になりがちな今日の世界に明るい平和な一すじの光を投げかけたことも忘れてはならないことです。「人生でもっとも大切なこと

は成功ではなく、その人が努力したかどうかということだ」という言葉どうりオリンピック

でも陸に水に敢闘精神の花が咲いた。勝った選手にも負けた選手にも全力を尽した者だけがもつ崇高な美しさがあった。人間がもつギリギリの壁にいどむ老たち。これは我々を感動させた東京オリンピックの闘魂譜である又どの国の選手も国の大きい小さい、人種の相違にかかわらず正々堂々最後まで競技をやりぬいた。数々の美しいプレーも生まれました。私もテレビや実際この目で各競技をみて限りない感動をうけた。日本女子のバレーボールの試合をみて彼女たちの巧みなわざ、一本の糸でつながれたようなチームワークのよさに驚いた。最大の難関ソ連戦の時も持ちまえのわざ、チームワーク、根性を十二分に發揮して、これをストレートで破り金メダルの栄冠に輝いた。これというのも大松監督の下で私たちには想像もつかないようなきびしく激しい練習に各々の選手が耐えぬいたことによつて何事も負けない強い意志と根性、チームワークや完成された技術があったからだと思う。だからどの試合でもどんなピンチに陥ったときでも各人が信頼しあい自信をもってブ

ール部も新人戦で決勝まで進出したが、惜しくも敗れて優勝することができなかった。練習が十分でなかったことも、もちろんであるが、最後までやりぬくだけの強い意志と根性に欠けていたのだ。我々は勉強もあることから限られた時間の中でより効果的な練習をしチームワークや強い意志と根性とを築いていきたい。私はスポーツを通じ、又勉強との両立も考え、高校生活を有意義なものにしていきたい。

大好きな人

窪田 岩夫

この間、クラスの人に、女優の〇〇が好きだと言ったら、みんな笑って、からかった。しかし、好きなものは好きだからしかたない何て言われても平気だ。

東京に、ぼくのいとこで小学校四年の女の子がいる。ぼくはその子が好きだ。朗らかで、優しく、そして少しマセているが、とてもかわいい。彼女の弟はぼくのことを「ブドウのおにいちゃん。」 おかあさんのことを「セロリのおばちゃん」と呼んでいるが、彼

女も小さい時はそう呼んでいた。愛らしい目で見つめながら、そう呼んでくれると、大変うれしかった。今は、名前に「さん」をつけて優しく呼んでくれる。

彼女はチョコレートが大好きだ。いつも夕方には彼女と一緒に公園へ行く。そして、角のお店でチョコレートを買ってあげる。それを公園のベンチに腰かけて食べる。小さな、かわいい手で分けてくれるチョコレートは、とてもおいしい。

ぼくは、甲府へ帰る時にもチョコレートを買ってあげる。とてもよろこぶ。ぼくと同じほどチョコレートが好きらしい。もともと彼女のおとうさんがぼくにお小遣をくれるのでぼくはふところを心配しない。

ぼくは、夏休みにブドウを持って行ってあげるのが楽しみなのだが。今年に行けるかどうか。

無題

藤巻 良平

今、私の机の上に半ば換を被り、紙の変色した、小学校時代の三冊の文集が乗せてあり

ます。クラスの仲間みんなで原紙をおこし、刷り、一枚一枚刷って製本した文集は、幼稚で粗末ではあるが、私の心の中に強く印象づけられています。何も分からなくて困った事も、苦しかった事もありましたが、書く事が楽しくてたまらなかった時と、この文を書く事さえ苦痛に感じられる今と、苦しみ方の違いはあるけれども、出来上がって、手にし、読む時のうれしさに相違はありません。（しかし、少なくとも現代のような状態で喜ぶのであつてはならないと思います。）

『竹の子』ガリ版刷の、所々に誤字の見える文集が、年ごとにわずかではあるが、進歩の後がみられる物になっています。内容も作文、詩、俳句感想と載っていて、よせ書きなども見られる。作文を読みながら、親しかった友、隣り机の女の娘、あこがれをいだいた娘、鼻たらし小僧から急に大人びた子、中学卒業と同時に就職した友の顔が浮かんで来る三冊の文集に共通して言える事はみな、夢や希望に満ちて、小供なりの情熱に燃え、それが、私の思春期を形成していったように思えます。

たった五、六年ではあるが、過去をふりかえって見たとき、現在の私達に最も必要なの

は大きな夢を持ち、育てることだと痛感するのです。夢は一つ一つ離間にぶつかり消えていくでしょう。しかし最後まで自分の中に夢の残っている人は、ほんとうに幸せな生き方をした人だと思えます。

17 + 1 Ⅱ？

神津幸哉

月が真昼から天空でカッポレを踊り出し、足をふみはずして空からおっこちてきてぼくの目にとびこもうが、東西の首脳が五円のアメ玉をしやぶりながらにらめっこして幼稚園の先生におかれ両方が泣き出そうが、アフリカの土人が。パチンコを改良してノーベル娯樂賞をもらおうが、家庭の電球が発電所へ電氣を送り出し、電力会社が電氣料を払いにこようが、ペンギンが燕尾服をやめて、ジャンパーとジーンズスタイルで南洋の空を飛んで交通違反でつかまって南極の刑務所へ送られて凍死しようが、時間が止まをなりぼくがここでぼっくり病にでもかかって死なないかぎりぼくは今年十八才になる。

十七才と十八才。一年違うだけだが十八才

三度、四度そんなものをみているうちに僕の心はおちついた。そんなことも考えてみると不思議なことではなかった。あの人も僕と変わらない人間であった。

つれづれに

内藤敏夫

鉛筆を取り上げて、いざ書こうとしたが何も頭に浮かんでこない。精緻な思考力をそなえた人は別として、僕のような者が頭の中でひねくった文章は、真实性に欠けたつまらぬものになりやすい。一つ気軽な気持で書いてみようと思った。それで去年の文集を取り出して読んでみると、中学時代の知人が僕の事を痛烈に批判した文章が目についた。常日頃自分のつまらなさに腹立たしい気持を抱いていた僕だが、正面切って批判されるとかえって気持がすっきりする。夏の暑さにじりじりしている時、頭の上から水をブツかけられた様なすがすがしい気持ちになった。もつとも前半の僕を批判した文もだが、後半のもう一人の男を賞賛した文の中に、自分ない又ぜひとも必要と思われる語を発見したからだが、

になるといふとなんだか責任感みたいなものを感じる。単に成人映画をおおっぴらに見れるようになるといつて喜んでいいはいけない。(だれだ、ニヤニヤしているのは。)

このあいだ今年は十八才になる年だとふと思ったら簡単に説明のつけにくい複雑な気持がした。「すったもんだ言いながらぼくも今年で十八か、年をとったもんだ。」と年寄りじみたことを思ったりした。ぼくはなんとなく十七才に未練を感じ十八才に抵抗を感じる。最初ごたごたならべたのもそのためである。十七才から十八才へ；そのさかいになにかあるように感じる。それともぼくがただそんな感じがするだけだろうか。

淡きものなり

斉藤 斉

僕は休みにならなければ良いと思った。長い四十日の休みは僕にとつて苦痛であった。自分は勉強は好きではないが、休みになるのがいやであった。それはあの人にあえなくなるからであった。ああ少しでも近くにいたいためには学校が必要であった。

なぜ去年読まなかったのだろうと残念に思う程氣にいった文章だった。僕等は日々進歩し変化してゆくべき年令であると思う。校歌に「日に新たー」！とあるがごとくに。このへんでいつまでもくすぶっていないで、大いにハッスルしようと思う。(少し遅かったかな？)自分自身のためにも、又、あの文章を書いてくれた彼のためにも。文面より彼が善意をもって書いてくれたものとは思わないが、僕にあのすがすがしい気持を味わわせてくれた事と、ファイトへの導火線に火をつけてくれた事に対して、多に感謝しようと思う。

或る一日

鶴田千樫

今日もまたいつものように始まった。列車のデッキですきま風に震え、寒気の中を我が愛する一高へ向う。でも今日は新年早々つけざまにパンチをくらった。にくむべき物が返って来たのだ。

ああ、今度はだめだ／(助詞がちがうね)表面では平生を装い、心の中ではこんなはずじゃなかーつたと悲嘆の涙に泣いている。そし

草木が若芽をどんどん伸ばしてゆくのと比例して、その感情も成長していった。

冷たくすんだ眼、すんなりと少しもくせがなく伸びた髪。その眼には静かに燃える情熱がうかがえた。髪はそのけがれない心を示しているかのようであった。それらの賢い顔をみるたびに僕は満たされた気持になった。幾度出合ってもあきなかった。そして会わない日はなにか不安であった。それなのに、この非常な時間が四十日間も二人の間に鉄のカートンをおろしてしまふ。

長い休みの間、僕はあの人を写真を頭の中からひき出して、時々みつめた。が、そのうつりの悪い写真はすぐに、まるで暖所に降つた雪のように消えてしまった。ほんとうに僕は九月の来る日を一日千秋の思いでまつた。やがて九月になり、前と少しも変わらないあの人を見てよろこんだ。

時間の正確な歩みに感謝したいくらいであった。そのよろこびもつかの間であった。中頃になった時、あの人が他の男と話をしているのを見た。僕は驚いた。

数カ月にわたって作り上げたイメージが音と共にくずれ去った。深い深い谷底に。そして浮き上がってきたのは軽蔑の念であった。

いつものように我が脳髓をなぐさめるかま

点数なんか問題じゃないよ、若いんだ、

明日があるさ／

かくして午前の部も終り、飢えた狼のように食堂へ一目散。(生存競争が激しいからね)

うまく餌にありつけ、食堂からゆうゆうと出て来る時の何ともいえない気分。(もう試験のことなどどこ吹く風)

一高はいいなあ／

六校時が終ると足取りも軽く家路につく。

不滅の彼ら

望月和典

ぼくには彼らというすばらしい友達がある彼らには不滅ということばがびつたりであるおそらく人類が生存する限り彼らは存在するのである。ところでぼくが彼らに会ってからもう三年近くにもなる。その間彼らはいそがしい時には読書がわりを十分したし、そしてその他いろいろな役割を果たしてくれた。彼らと交際して人間的にプラスになったことは言うまでもない。夜自室でひとりして、其の気持ちになつて彼らに会う時本当に生きがい

感じる。彼らは多くの生活必需品となったのである。

彼らの中でもぼくは特に二つ好きなのがある。前者をB後者をDとする。Bは特にむずかしかったせいか、なかなか理解できなかった。が理解されるやいなやぼくの心をうごばった。そしていつも口笛の中に姿を現わした。

優秀作品とはこんなものだったのである。

かつてのドイツの名指揮者ハンス・フオン・ビューローは「これこそまさにB・Eの不滅の9つの作品に続くものである。」といった。

ぼくはようやくこの意味がわかってきた。Bに会う時彼は偉大な力をもってぼくを感動のうずみへ巻きこむ。そしてそれからぬけ出ることはむずかしい。そのたびにぼくは目に涙さえ浮かべて暗闇の中で真の芸術を知るのである。もう一つのDは大変有名で多くの人に知られている。それゆえ最初から好感が持てた彼は彼自身の持つ壮大さと情熱でぼくを魅了する。そしてぼくはその中にたいへん美しいものを思い出す。なんとも言えない気持ちである。

さて彼らの中にはこの二つよりもっともつとすばらしいものがあるかも知れない。それを知るのはぼくの望みでもある。

彼らはよくに青春の時だけ味わえる貴重なひと時を与えてくれる。ぼくは彼らともっと深く交際して二度とない青春を悔いなきものにしていきたい。

去年を振り返って

林 幹夫

過ぎ去った年、一九六四年を振り返って、今一番印象に残っているのは、個人的なものは除いて、強行遠足と修学旅行のことだ。去年強行遠足は高一の時、修学旅行は中学生の時とあわせてそれぞれ二度ずつ経験したことになる。この二つの行事は、二つとも学校内の諸行事の中で相当の比重を占めているのにもかかわらずその性格をまったく異にしているように思う。強行遠足は自分の体力の限界を知り、強堅な意志や根性をつちかうためのもので、いわば個人個人の行事である。それにくらべて修学旅行は実際に教室での学習をたしかめ、体でもって見聞を広めるということもあるのだろうが、その意義の多くは級友と寝食を共にし団体行動をしてその人の個性をのほし、人間性をたかめるところにある。

あと思う。

それでも強行遠足は無事に中まで行くことができ、修学旅行にも何かしら得たものがあつて、一九六四年も大過なく過ごせたようだ。

老人と青年

依田秀夫

十月の中頃だったか、ある村へ家の用で出かけた。台風のためかまだ青い稲穂がみな60度ぐらい傾いていた。そんなあぜ道を小走りに停留所へ急いでいくと、向うから手ぬぐいを首に巻き鎌の大きいようなものをしよつた老人がのろろと歩いて来た。私は立止って「すいませんバスは。」と聞くと「もう出てしまった。次まで40分もある。」とぶつきらぼうに教えてくれた。傍のきれいに澄んだ小川をビューンと飛びこえて、折れたり、かしがつてはいるがなんとか一メートルぐらいの影をのぼしているトウモロコシ畑の端に、どかつと腰をおろした。すると今まで走って来たせいかむしろ体が熱くなってきた。背の中までハンカチをつつ込んで汗をふきと

るとサートと風がはいって来てなんともいえない。

ない、良い気持ちになった。底まではつきり映した小川の流れがそれをいつそう増した。ふと見ると老人がいつの間にか隣りに来てすわっていた。「たいへんですね、台風でこんなに荒されて。」とこんな言葉が口から出た。それにこの夏休みに研究した農村の実態というのが手助けして次から次へと老人を喜ばせるような言葉が出た。「若いのに実に偉い、農業に関心をもって。」老人は満足した様子でいった。私は調子にのってベラベラとしゃべった。話がちょうど農村の若い人達のことに移った時、突然老人は「今での若いもんはなつておらん、なにかちゅうと東京へ出たがったり、会社へ勤めたがつたりして、ろくに仕事もできんくせに。あれほど盛んだった青年団もどつかへ消えちまったし、今じゃあ婦人会だけだ。」私もあいづちをうって、いわゆる青年達の悪口をいったが、自分もその若いもんの一入であることに気づいて、「しかしおとなにもある程度責任はあるんじゃないですか。」という。」「いや根性がない。今での若いもんには、軍隊にでも入れて筋の通った人間にしなきゃあだめだ。」「おじいさん

夢

S 1 1

増田直衛

んよ、たとえ改正したところで、徴兵制度を取入れることは今の日本の状態では不可能ですよ。」「そらみる、すぐそういうふうに理くつを付ける、それだから今での若いものはだめだというんだ。」そんな私に失望したように言った。その時ちようどバスの時間になつていたので老人にあいさつをして停留所へ急いだ。バスの中で思った。！そんなに今の青年はだめなのかなあ。そして一高生の顔が浮んだ。

字幕「ハンミョウは甲虫目・ハンミョウ科に属する体長二センチ程の昆虫である。」
字幕「体には、広い赤色の横帯と黄白色の小紋がある。あしは藍緑色で長い。」
字幕「道路上などでハエや小昆虫を待ち伏せて食べる。」
字幕「人が歩く前を飛ぶようにして、逃げるので、ミチオシエ、ミチシルベとも呼ぶ。」

ハンミョウの生態を示す数カッか。モノモ

ゾと動きまわり薄気味悪い。突然、飛ぶように逃げる。

S 1 2

闇の中、何かを追いかけている男が走ってくる。が、目的物がはつきりせず必死ではない(L・S)。男近づいてくる(カメラと男との距離は相当ある)。男腕時計を見る(L・Sよりズーム・アップ)。画面全体にゆがんだ針のない文字盤(ズーム・バックして男のB・S)。男は二本の長いロープをひきずっている(フット・ライト)。腐ったメロン、かけたコーヒーカーップ、あおむけになった人間二人、漫画本、参考書、こわれた自転車の上にやせこけた犬、がひきずられている。男はやがて暗闇に消える。

S 1 3

黒板、ノート、教師……数々のスチル。生徒あくび(スロー・モーション)。黒板、ノート、教師……数々のスチル。昼食風景(コマ落とし、瞬間的に脱のスチル一枚)。黒板、ノート、教師……数々のスチル(ダリの「睡気」のインサート)。黒板、ノート、教師……数々のスチル。下校(コマ落とし、B・E・V)。だれもいなくなった教室に一人後向きに立っている(以下ネガティブ、カメラ大きく左右

にゆれる)。こちらを向く。ノツペンした表情。血のまじった唾液が口から流れ、棒のように倒れる(画面真暗)。

S 1 4

(F・I、以下アニメーション) 一匹の奇虫が奇妙な形の階段をのぼっていく。相当登ったようだが、終点らしいものはない。立ち止まる。次の一歩足を踏みはずす。下に下にと落ちて行く。

字幕「V＝ $\frac{1}{2}v^2$ 」

さらに落ちて行く。登り始めた新たに衝突(画面暗転。)

字幕「E＝ $\frac{1}{2}mv^2$ 」

矢「LS＝ロングショット、BS＝バーストショット、

BEV＝ドアイヴィュー」

流れ

田中正文

駆ける駆ける。危いよ、そんなに急いで。蒼白い顔をして目だけ異様にギョロつかせ、生まれたままのようなそんな足で、そんなに駆けるなんて。

「だけどまわりを見て御覧よ、みんな駆けて

いるじゃあないか。」まあ、ちよつと止まつてよく見てごらん。そら、あそこを見てごらん。つまづいて倒れたままあの人は起き上がることできないじゃあないか。まわりの人は見向きもしないで行ってしまっただろ。苦しそうな顔をして。あの人達の心臓の激しいあおりの音が聞こえてくるだろう。いまにも張り裂けそうな音が……。

あつ、あそこで、そこでも倒れた。さっきまで、あなたはあの人達のように駆けていたんだよ。今にも倒れそうに、疲れ切った顔をして。苦しくなかったかい。

「苦しかったさ。だけど、駆けなけりや、みんなに追いつめられてしまふじゃないか。苦しくて駆けなけりやならないのさ。」そんなに駆けてあなた達は何処へ行こうというんだい。そんなに素晴らしい所があるのかい。「あるんだろ。みんな駆けているんだから。俺はそんなことは知らないさ。さっきも言ったようにみんなが駆けているから俺もそうし

ているまでさ。」それではあなたは、むやみに駆けているんだね。先ほど聞いた人も、あなたと同じことを言っていたよ。してみるとみんなわけも解らなくて駆けているんだね。

知識だろう。しかし彼は受験地獄にもまれた男だった。

彼は学校でつめようとすると知識は十分吸収した、彼は道徳教育を受ける時もつめこまれる準備をしていた。そして道徳を他の課目と同様に単なる知識として処理していた。道徳が他の課目を合わせたのと同じ比重であることが教えられなかった。道徳に関する知識がなさすぎた。事件を起した時「なに」が自分をそこそこまで導いたか、あるいは、事件の後に与えられる精神的負担やこれから彼が取るべき行動や社会に与える影響など多面的に考えた後のことであつたかを判断するのに必要な知識がなかった。

彼はより高く正確な幸福を追求することを必要としなかったばかりか、目標が正しいかどうか追求することさえ問題としないで、目標を達成することのみに意義を感じさせた学園に育ってしまった。彼は志望校達成のために奴隷と化し人間性を失つたまま実社会にはうり出された人々の哀れな代表者なのです。

を見つめながら。自然に逆らつてはいけないう。ゆっくり歩いて遠くまで行こうよ。あわてることはないさ。その一歩一歩において確実に生きることだと思ふな。その方がずっと遠くへいけるし、苦しくもないしな。歩こうよ……。

これからの教育

成瀬俊久

今日の日本は、教育について考え直さなければならぬと思う。

親たちの中には教育というものをまちがつて考えているものがある。

我が子がテストで良い点を取りさえすれば満足し、高校全入などということ呼び、我が子をより有名な校へ押し込もうとする。

一高でも一クラス五十五人、しかも一学年十二クラス。机の間をまっすぐ歩けないほど詰めこんである。

このような状態では、自分の目的をもち、しっかりと自己をもつて学ぶ者が少なくなる。そして一部の墜落した者のために全体がひきずられることがある。

蟻と蟻地獄

内田憲正

蟻はもがいても、もがいても蟻地獄からは抜け出ることが出来ないことを知っている。

しかし知つてはいても、やはり蟻はその底からはい出ようとする。力尽きるまでむなしい抵抗を続ける。それが自分の運命であるがごとくに……。

「母アさん。」

「父さん。」

彼は必死になつてそう叫んだ。しかしもはや遅かった。そのすがるような、絶叫に似た叫びは、底なしの沼に沈んでゆくがごとくに長く尾を引いて消えていった。ただ彼を芥子粒のように小さく包んだ乳白色の霧と、わずかにそのなごりをとどめているこげ茶色の大地とから、母と父の匂いがほのかに漂っているにすぎなかった。彼はその霧をつかもうとした。つかんで力いっぱい抱きしめようとした。しかしその無慈悲な無生物はスツと指の間を通り抜けていった。彼にはもはや、つかむ一本のワラさえもなかった。

このようにして教育された人が本当に日本の発展に役立つであろうか。

利己主義的な人間ができ上がり、自分の生活のために働き、全体のことはかえりみなくなるだろう。知恵だけはおそらくだが、自己と全体とを良く見詰め、批判して発展させて、現在の絶えず動揺している世界情勢の中における日本に必要なのは、単なる知識階級の量ではなく、強大かつ適格な批判力を持つ知識階級なのである。

教育がこの批判力を養えるような状態を保つよう考えなければならぬ。

欲求すべきもの

江間誠二

事件が起きた。放つて置けない重大事件だった。世論もさわいだ、しかし犯人は見つからなかった。

彼(犯人)はつぶやいた「時効を待つだけだ。」彼は事件について反省しなかった。反省に必要かくべからざるものが欠けていた。思考力かもしれない。いやそれを押し進める

彼は走った。走って、走って、走りぬいた。走ること、この真黒い炎をかき消そうとした。走れば激しく逆巻くこの濁流が清流に変わるだろうと、そう思った。

どのくらい走ったのだろう。あたりは依然として霧に包まれた混頓の世界であった。あるいは、彼は全然走っていないかったのかもしれない。ただ彼の追いつめられた心持だけがむなししい抵抗を続けていたのかもしれない。それ程に彼の肉体と精神とは、別の世界の二個の個体と化していたのだった。

彼はもうどうしようもなかった。其黒な炎が、流れ狂った濁流が、勝利の歌を歌うがごとくに彼の頭上を乱舞していた。彼の必死の死闘も皆、はかない抵抗に終ってしまった。彼の最後の抵抗であったのか、それとも最初の逃避であったのか、彼はついに我が身を汚臭のたちこめた泥沼に沈めた。ついに取り去ることの出来なかった、そのシミは、今、泥沼の中に溶け込んでその姿を隠した。泥にまみれたその顔は、そこに生への絶望と激しい憤りを映じて、すさまじい顔相を程していたが乱れた髪の毛は、つり上った目をおおい長く裂けた口からは灰色の血が吐き出していた

これが闘い終った人間の姿であろうか。敗者の姿であろうか。

彼はしゃにむに短剣を引き抜いた。今となつては、その不気味に光る短剣だけが、彼の友であり、味方であった。そして一振りそれを振った瞬間、彼は深い深い第三の世界へと吸い込まれていった。

「どうして、おれはこんなになつたんだ。」彼の最後の絶叫も、すぐに霧の中にかき消された。あとは、なにもなかったごとく、静寂のみが静かに影を落していた。

夢

橋本明夫

誰もが平等に持つ事ができるもの、それは夢。何の差別、束縛も入る余地の無い物、それも夢。貧乏人が大金持になり、空の上を飛び水の下を潜り、何百年何千年の昔や未来の世の中をも見ることができ、亡き父母や会いたい人にも会え、いたらない者が秀才にもなれる。それが夢。夢の世界はバラ色。夢の世界は人間の悩みを解決してくれる。そしてそれなりに自己満足させてくれる。夢は人間だ

けに与えられた特権だ。それは神様からの尊い贈物だ。夢を多いに活用し楽しい人生を送っていたきたいものだ。

前進する者

坂本・文彦

冬は寒い。しかしある日庭先に立つと冬とは思えない強い光がさしていた、そこには植木ばちが置かれ、小鳥はさえずっていた。その一方、へいの影になる池の中には夏は一番強く活動していた金魚は息一つしていないようにじっとしている。この現象は単なる下等な動物だけにおこるのではない。環境により人間は健康だけでなく精神までおかされ、ついには人間であるもつとも重要な行動、考えるということさえ忘れさせてしまうのである。これは人間生活が進歩すれば、するはどこのおそろしい現象はおこるのである。だから常に、人は満足してはいけけないのである。一步でも前進しようと思い、考え、悩めばよいのである。このようにして我々は環境に打ち勝ち前進し続けるのである。そこで自然は回転するが人間は前進するという意味が

わかるのである。

佐藤 富雄

死は、ある種の目覚めに似ている。そしてそれには目覚め特有の驚きが伴う。しかし、悲哀も、もちろん、歓喜などありはしない。その点、死はただ無味乾燥であると思える。私は、恐怖も、その他死に関するあらゆる感情は我々の妄想にすぎないと思う。だが事実流れ出る涙はほんものである。それがただの妄想にすぎないか。それは、感情というには甘すぎ、理性というには冷たすぎる、それ以外のもっと暖かく純粹でかつ複雑な何かである。それが何であるか、私はまだ知らない。義務を果たした時のあの感慨無量のそれか、又、終列車に乗り遅れた時の絶望感のそれか、これは推察である。

死につつある人をじっと見ていた私は、私の総ての感情を忘れてしまった。その間、私の目蓋は一瞬たりとも曇らなかつた。気がついた時には、すでに焼け野と化していた。草一本、花一輪咲かず、現在までのありとあらゆる、苦勞、怒り、悲しみ、哀れみ、楽しみ喜び、励み、望み、が一握の灰と化した。そ

こには、荒夢とした地表と、いくらかの岩漿の残骸がうかがわれた。この土から、又、何かが生まれ、育ち、いつの日にかあの夢が盛えることを願う。

人生は一回限りである。死も一回限りである。きのうも、きょうも、あすも、一回である。しかし夢は無限である。夢の中では、きのうも、きょうも、あすも、思いのままになる。私達は夢の中で、回想し、反省し、希望を持つ。きのうの思いを、きょうに考え、あすに生かそうではないか、そうすることが、人生を明るく、豊かにする所以となると思う有限より、無限を

一人の人間より、より多くの人々を愛せよ一つの人生より、より多くの人生を生きよ私は、多数の夢や、知識を一回の人生に託することこそ、最も充実した人生をおくる秘訣になると考える。これは仮説である。

石川 章

Lucky seventeen years old
この年、ドイツではホーフマンスタイルが日本では三島由紀夫が、まず最初になのりを

挙げた。古の唐代においては、杜子美が世に名声を得んと野望を企て、近代ヨーロッパにおいては、ナポレオンが黙々として策を練っていた。野心は單純率直であらねばならない。そこに莫大なエネルギーと純粋な鋭さ、それにいわゆるスピードを注ぎ込む。且つこれを成就せんとする燃える様な知識欲が必要である。そして、それら総てを兼ね備えたのがこの青年時代でありはしないか。

人によく我々に「絶望より飛躍せよ。」と言う。我々は、現在に至るまでにあらゆる悩みと戦い、そのたびに自信を失い、ある時は主観性を否定して客観性のみに頼り、人間としての総ての感情の妄却に疑問を持ち、理性の冷たさに我慢できずに己の立場に困惑した。又ある時は自分から自分が隔離していくのに気づき必死に追い求め、浮遊している自分から離れるほど、ますます自分となる。と言った。自分から離れるとは、自分をより客観的に、より理性的に見ようと言うことではないか。しかしモンテスキューは理性を否定した。彼は「人間はより情感的に取り扱うべきだ。」と言う。この種の思想には、必ず矛盾があり、我々を惑わせ、常にある種の弊害を伴わせるものである。

青年は、固まりつつある場合と、爆発しそうな場合の中間に存在する。どちらにしても一種の絶望を余儀無くされる。絶望して自己自身であろうと欲する場合、若者は野心を持つ。我々は、過去における総ての苦悩、孤独感、劣等感、優越感、つまらぬ虚栄心、それから脱却し、忘れ去るうではないか。総ての感情、思考は行為に基いたものであらねばならない。我々は、この機をスプリングボードとして一気に飛躍しようではないか。一人二人が善であれ、悪であれ、崇高にしろ、卑俗にしろ、それぞれ、がそれぞれの野望を達成しようと奮起しようではないか。そうすることがこの無気力な青年時代から衣頼心を取り除き、この絶望感から脱き出る唯一の方法ではないか。野心は一生一代の大博打である。当り外れを恐れていたら何もできない。それは達成以後の問題である。

青年はやはり若くあらねばならない。若さは力であり、スピードである。しかるに青春は短い。我々は急がねばならない。

自分はひとり夢の世界をさまよう。眼前は色も鮮やかな緑色の芝生でおおわれたひろい大地。突然その大地の中に泥沼が中からあわをふき出しているような場所が現われる。又自分は黒びかりした鉄道線路の上をまるで己が列車になったかのように走る。走る。……突然大地がきれ、絶壁が目にとびこむ。自分は思わず足に力がかかる。絶壁の奥底には何か黒いものがうずまいている空自がある。さきほどまでの広々とした風景とはうってかわって、黒々とした石炭の山があらわれる。そしてそれがだんだん大きく自分のしかかってくる。夢からさめた。……自分は現実の世界へもどったのだ。よかった。自分はひとり考える。いかに微力な生物であろうとも、自分はこの世に生をうけた以上、現実を見つめ、自分の力のかぎりをつくして進んでいこう。たとえゆくてに何がおころうとも……

微笑

時田和実

彼は好んで思索した。あらゆる時にあらゆる場所。彼は人類の流れが宇宙の支流であることを知った。人類は、その思想において偉大であり、宇宙は、その力において偉大だった。彼は、人類の行動と思想の歴史を学んだ。人類は、一つ時として完全なる統一をなして進歩しなかった。彼は、おかしかった。どうせ死ぬに決まっている人間が、どうせつぶれる地球の上で、愛し合ったり、にくみ合ったり、働いたり、悲しんだり、一刹那の快楽に喜んだり、どうせきわめつくせない宇宙の謎を解こうとしたり、戦争で殺しあったり、主義の違いからけんか腰になったりしているのがおかしかった。人が他日に会う約束をしているのがおかしかった。かくして、彼は人類の一微物たる誇りを失った。あらゆる事物が彼の思索と「偶然」の「一」ことをもって消え去った。そして、彼は大自然に目を向けた。無常なるものは、すみやかに回った。今や、彼が尊敬すべきものは何もなかった。今や、

自分と自然

阪本稔

自分はひとり青々と茂った草の野原に立っている。自分はただ自然のみを感じる。自分は夜の庭に立つて輝く星をながめる。だからも干渉されることもなく。そして自分は己が地球上の一つの小さな生物にすぎぬと感ずる。

思うこと

斉藤哲夫

いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、いやだ、
はやく、はやく、はやく、はやく、はやく、
うるさい、わかつてる、
よせ、よせ、よせ、よせ、よせ

でもすこしだけ、少しだけだよ

こまる、こまる、こまる、こまる、こまる、
はやく、はやく、はやく、はやく、はやく、

ああ、やつぱりそんな、

はやく、はやく、はやく、はやく、はやく、
おもしろくない、ええい、すてちめえ／＼
くやしい、くやしい、くやしい、くやしい
やるか、

やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、やれ、

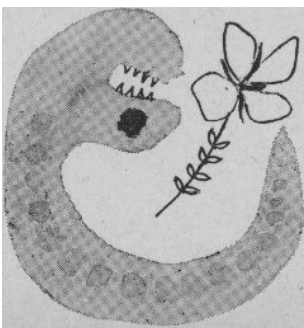
でもおおいぜ、少なすぎるなあ、

成せば成る、成せば成る、成せば成る、

ロマンチックだね。

お前は遅れてんだぞ。はやく、少しでも追いつくんだ。はやく、

うん、やるぞ、やるぞ、やるぞ、ウオー！



断 想

田 口 英 一

1
情ないではありませんか
列車から下りる人をまたず
乗りこもうとする人達を制止もできず
押されて
いっしょに中へはいってしまいました

2
足を上に向け
机の上に虫が死んでいる
それなのに今の私には
何の感情もおこらない
あなたのすばらしい横顔 微笑
永遠に 母のように しかし遠くに：
あなたは私を知っている 微笑は知らない

ああ ついに手にいれました
ほほ笑んでいるあなたを
永遠に 母のように 私にむかって：

私から離れずついてくるのがわかった

5
よわったなあ
入口に蜘蛛が巣をかけた
戸をあける時
こわしてしまいそうだ

6
季節はずれのタンポポが
殺風景な庭の一隅に咲いていた
小さな子供がとってしまった

7
蜘蛛の巣からはずしてやったあの蝶に
僕もなりたい

秋

矢 ヶ 崎 一 三

秋が来た。
枯葉は彼の技とお別れをした。
小さな流れが彼を待っていた
流れは少しつつ、大きく速くなってきた
ある時、流れは目もくらむような滝を
まっさかさまに落ちた。
枯葉は、おもいっきり岩にうちつけられ
息もつまる程苦しかった。

それは変わることのない微笑です
あなたはもう
私の前から微笑をかくすことをしませんが
私はあなたを 微笑を手にします
それではあなたはおとなしく
微笑のまま従います
私の手の中で

3
窓をあけた時 君ははいって来た
君と別れて 何時間たつだろう
今また君は 朝のすがすがしい気分と共に
床で寒さにふるえる私を訪れた
ああんて良い気分なんだろう
きょう一日の幸福を約束されたようだ
ありがとう 君のおかげだ
日の光よ

4
トンネルを通る時窓を見たら
むこうもこちらをみていた
その顔はあまり鮮明でなかった
何か言いたげだった
トンネルを出たとたん
黙って彼は消えてしまった
しかしその後トンネルを通るたびに

でも彼には

深く、ゆつくりとした流れが待っていた
彼はその流れに深々と腰をかけ
いたみをいやしていた。

と、突然

大きな丸太が現われた
彼もまた断崖から落されたのであった
二人はすぐ友だちになった
丸太はゆうゆうと流れていた
小さな彼なんかにはこだわらず
枯葉も、丸太のまねをした
だめだった、

彼の体が小さすぎたからだ
彼は決心した11

「よしっ、おれももっと大きくなろう。」
でも、枯葉がどうして大きくなれよう。
彼はそんなことにはとんちやくしなかった
いや考えつかなかったのだ。
愚かなやつだよ、実際、
幸いなことに、彼には丸太という思慮深い友がいた。

俳 句

竜 沢 時 人

春浅き庭にはひし梅の花
初滑り倒れるたびに進歩あり



回想

組主任 蘆原 幸

二年五組、この名のもつ響き、何時も誇りをもって呼んでいるこの名前。昨年四月、明るく充実した仲良い生活を約束して、自己を紹介しあったのは昨日のことのような気がする。それがもう一カ年たってしまったのだ。

四月当初、日もまだ浅い時、早々に盲腸炎にて入院（これが今後、親愛なる諸君達の模範？になろうとは）アフターケアと同時に改めて新学期がスタートした。一週二時間の世界史を通しての諸君達との結びつきは、なかなか顔と名前が一致せず困ったものだ。そうこうするうちに三年生の課外講座の開始。何やらかやらでホジと一息ついたら夏休み。明くれば第二学期、これからが大変だった。何しろ強行遠足、オリソンビック、修学旅行、この間へ級友諸君数名の相継ぐ盲腸炎での入院がほさまったのだ。皆に報告する度に、をるで自分がなにか悪いことでもしたみたいに気がひけて、切なかったこと。加えて年末には感冒の大流行、一時は教室も閑古鳥の鳴く淋しさ？ 回想は果しなく続く。

言えば諸君達の今日に至るまでの意欲的な楽しい学級建設への努力

は敬服に値する。第一が清潔な環境の維持、第二にクラスメートの大同団結、第三が当然のことながら熱心なる学習、等々何れにおいても欠くところはなかったと確信している。このことは誰より以上に諸君達自身が最も良く認識しておるところであろう。本当に楽しかった一カ年だった。別れに臨む諸君達の胸中を如何なるものが去来しておるだろう。お互に通い合うことの出来る嬉しい数々の話題をもちえたことに、今更ながら深い喜びを禁じえない。

さあ高校三年生もすぐそこだ。元氣を出して、大いに愉快に忘れえ

あしおと

あなたの歩む道 小沢俊夫

どうして蜜柑は知らぬまに蜜柑なのでしょう。

どうして蜜柑の実がひっそりとつましく、中にかはい部屋を揃

行動の足跡を残すことはできません。

私たちは人間の世界にもこれと似た現象をよくみうけます。個性をもち合わせない人たちはしばしば無視され、またその足跡が目立たないとしてその価値すら無視されてしまう場合が多い。

自然はもともと多層構造である。さきほどの素粒子のように、電氣をもつもの、もたないもの。そしてそれらの種類は何百種にも及ぶのですから、ますます複雑です。しかしそれほお互に無関係なものでなく密接なつながりがある。感覚的世界の古典物理学、超感覚的な現代物理学という表現があるが、人間の生活の世界はひっきりょう、感覚的なものからはのがれられません。超感覚的世界の探究は多分に気違ひじみている。そして工学者はそれを感覚的世界に引き戻している。

人間の肉眼でみることでできる素粒子、できない素粒子はそれ自身が超感覚的なもの、それをあえて感覚的な表現をしたのですから、一見して似ているようで実は似てはいない。

私たち人間の社会ではそのような超感覚的な考えでは到底過し得ない。そこに暖かみがあり、うるおいがあるというもの。みなさんがこの一年間に残した足跡がどんなものであろうと余り問題にしない。整然とした跡もあるうし、大層荒れた跡もあるだろう。あるいはまったく忍者の如く跡すら見当らない場合もあるう。しかし人間の足跡は物質のそして物体の残した跡のように早急な実証的結論は無用である。あくまで形而上学的な思惟の過程がどんなものであったかが問題であり、そしてそれが将来どのように成長するかが問題である。だれでもみな平等に、曇ったガラス窓はぬぐい去りたい。窓外の景色は如何と。そこに各人の道がある。教室の窓ガラスなり、唯一人がその労をとればすむ事だが、それは目的の対象が一つだから。しかしあなたの求めている道はそれではない。あなたの道はあなた個人のものです。私はその道をゆくあなたをじっと見守りたい。

(二一、一五)

へているのでしょうか。

どうして蜜柑は葡萄でなく

葡萄は蜜柑ではないでしょう。

世界は不思議に満ちた

精密機械の仕事場

あなたの足は未見の美を踏まずには歩けません。

何にも生きる意味はない時でさへ、この美はあなたを引きとめるでしょう。

たった一度何かを新しく見てください、あなたの眼は時間の裏空間の外を見ます。

どんなに切なく辛く悲しい日にも、この美はあなたの味方になります。

仮りの身が真実の身になります。チルチルはダイヤモンドを廻します。あなたの内部のボタンをちよつと押して。

もう一度その蜜柑をよく見て下さい。

11 高村光太郎

たしか、みなさんの現代国語の考査に出題された詩の一つでした。

私はこの詩が好きです。

自然は本来、その全貌を現わさないものです。一步一步と正確に踏みこんでいても、なお自然には勝てないものです。有名なニュートンでさえ、自然観に「井の中の蛙」的な面があったのですから。

人間は本来、未知なものに対して強い探究心がある。現代科学は吾々人間がもつ常識以上のもの、とうてい想像もつかない解決方法を与えてくれた。そこにある道は険しく、辛く、そして無限に続くであろう。第一步を踏みしめたみなさんははたしてどんな足跡を残したろうか。物理学ではあの極微の素粒子ですら、その行動の足跡を残し、それを吾々人間は肉眼でみとめる事ができるとしている。つまり素粒子それ自身がもつ電氣のお蔭です。逆に電氣をもたない素粒子は、その



強行遠足のこと

1 矢沢進一

迎えて二回目の強行遠足だった。出発前のあの何とも言い表わしようのないおちつかない気持、そして太鼓の音を聞きながら、自分のカードを早く渡してもらいたいと言ういらする気持。そうしたものは一回目の強行遠足の時と少しの違いもなかった様に覚えている。

二日目は計画的に歩いた。いや少なくとも最初の間はそのつもりであった。しかし出発してまもなく足は痛くなるし、腹の調子はおかしくなる、気持はいらいらしてくる（計画とはほど遠い歩き方になってしまったから）、あぐくのほては清里で医者にかかるなどさんざんであった。

一回目よりもずっと苦しい遠足だったが、その印象は一回目よりもずっと強く心に残っ

ている。

2 上田淑子

強行遠足はつらかった。砂煙をあげた何台ものトラックに、容赦なくほこりをふきつけられ、そのほこりに顔をしかめながらもただ精一杯に歩いた。ほこりだらけで足をひきずって歩いた。そして到着点についた。主役だった足も二、三日は痛んだ。でもそれ思い出だ。私の心にはそのつらさより物事を達成することの満足感が残った。棒の様な足をひきずり、ほこりにまみれて歩いたあの苦しみをのりこえて目的に到着する、尊さが私の心に残った。ころんでも、すべりおちても自分にある力を出しつくして努力した結果は必ず満足のものである。そしてその喜びをもとにして自分がほんのちよつとでも以前の自分より進歩したらそれでよいのだと思う。

3 田中明寛

強行遠足で何を待たか。
もちろんそれは人様々であろうが。
己を支配する意志を持った者が勝利者であるということ、を、体験を通して知った。そのような事はときどき耳にはするものの、あの

時まで抽象的で、次元の異なる世界けように思っていた。

強行遠足の苦しみ、それはここで取り上げるまでもないだろう。疲労、寒さ、眠けが一度に押し寄せて来る。僕はこの苦しみを自ら味わおうと一人で歩いた。友達と歩くと何分の一かに削減されると思ったからだ。

孤独の歩行は清里で終わり、清里からは三人で歩いた。二つの歩き方が比べてみて、いかに自分を制する力が必要であるかを初めて知った。まさにこの行事の教訓、意義はここにあると思った。

この力は、強くなったり、弱くなったりしながら今もなお燃え続けている。

修学旅行のこと

1 田中清隆

バスを降りて川に沿った道を上っていくと苔寺に着いた。門をくぐると、直すぐな道が前方にあり、両側には、もみじなどの紅葉がおおいかぶさり、とてもあでやかであった。それから少し行くと、右へ折れて中の方へ入っていった。とても混んでいたの、ぼくは最後から小河原君と一緒にゆくり歩いた。

ぼくは寺を好きではないが、山は好きであった。したがって苔寺の庭は山につづいていたのでとてもいい感じがした。しばらくいくとカタソ！カタソ！という音がした。いつてみるとそれは水が竹にたまっては流れでていく時に竹が石にあたる音であった。その昔が調子のいいリズムをとっているようだ。

2 三沢直美

二学年に於て最も思い出多き行事は修学旅行にある。

いにしえに栄えた日本の都を尋ね、その土地の真の姿にふれ昔をしのぶのが私の今までの夢であり希望であった。しかし、現実はそのほのかな思いを遠ざけてしまった。なぜなら、その対象はあまりに古く、尊く、高く私には近づきたい何物かを持っている様に思われたのです。しかし、何も胸を打たないというのではないのです。事実、広隆寺の弥勒菩薩の前では足を重くさせられ、薬師寺においては感嘆の息をもらせられたのですからやはり実物を肉眼で見る事の偉大さを考えさせられました。

又修学旅行の目的はこの他にも、クラスの親睦をはかったり、先生方と親しく話をした

りする事にあると思います。少なくとも私達のクラスではこの目的は果たせたのではないかと思います。最後に担任の滝原先生にはクラスの事を本当に良く面倒をみて下さり厚く感謝したいと思います。

3 大石俊治

ぼくの高校二年に於ける最大の思い出は、なんとといっても修学旅行のことです。見学した範囲は奈良、京都と少し少ないような気持もありますが一ヶ所を比較的長い時間かけて、見学するのも良い方法だと思いました。

ぼくが最も深い感銘を受けたのは、飛鳥時代の代表的な仏像である広隆寺の弥勒菩薩でした。この仏像は頭部に比較して身長が長くなりとしていて、なんとなく現代的な感じを受けました。この仏像を注視すると、かすかに、ほほえむように見える古式のくちびるはその簡素な姿をより美しく見せてくれる。ぼくにとつて、このほほえみは人生について暗示しているかのように思われる。「力強く生きよ。そして……。」この旅行の最大の収穫は、この機会にぼくの目を遠く古代にまでむけさせたことにあると思います。

4 斉藤俊樹

総門を入ると今までの騒音から解放された左右に高い垣根を望んで、じやり道を歩くと僕の心は銀閣へと移った。唐門に入り、銀沙灘・向月台、それに銀閣が目についた。銀沙灘・向月台は、中国の西湖、桜間にはなぞらえることは出来なかったが、その優雅な砂もんと、それと対称の「枯れた」苔の美しさは、そのむこうに横たわる銀閣を、よりいっそうひきたてていた。「銀閣」。それは小さい時写真を見て何かしら心を奪われ、一度行つてみたいと思った所だ。それが今、僕の目の前で、古淡な落着いた姿で静かに横たわっている。前には平面的に見たのを、今立体的にみていると、もう僕の心は感動の渦にまきこまれていた。池庭を歩く。昔、義政がここを歩いたのかと思うと、なんともいわれない、ふつと自分が義政となる、そんな快い気持となった。帰る時、もう一度銀閣を心ゆくまでながめた。今までのあわただしかった、又違ったがえした見学に比べて、ここでは自分の心の羽を思うぞんぶんひろげてくつろぎ、又楽しんだ。

エプロンの思い出

志村満喜子

このエプロン、昔、母さんが着てましたネ。
二つのポケットはいつも満員で、中には、
いろんなものが入ってましたネ。

洋服のボタンやホック、ヘヤーピンや輪ゴム。「名札がどつかにいつちやった。ダレか知らない。」「エプロンのポケットをみてごらん。」チャーンと入ってましたネ。エンドウの種も入っていたし、一円玉もありましたネ。時にはイネの落穂も仲間入りしてました。

母さんてケチンボだったのかな？
ウソ、チガウ。あのポケットはステキな
ママさんの象徴ナンダヨ。

このエプロン今は私の物になってしまいましたが。やつぱりポケットはふくらんでいます。私のポケットの中には新しい仲間がいるんです。チューインガムやキラメルがそれ。母さんは笑いませんネ。

色があせてしまったこのエプロン。でもポケットに両手をつっこむと、母さんと話ができるすてきなエプロンなんです。

想い（日記より）

武井秀雄

1
いつもどおりの飯を食べる暇があるかないかのあわただしい朝を迎え、怠惰なつまらない憩いで時間を追いつ、追われつして、いつもどおりのこたつにかじりつきつきの夜を迎えた。俺は、いつもビエロを装っているつもりで、いつのまにかビエロになってしまったらしい。11ああ全く何んて奴なんだ。11又いつものたあいな後悔。そんな事するなよ。自分が益々衰れになるだけだ……。涙が日記帳におちた。涙？ぶつぶつ俺が涙をながすなんて。いくじなしめ。弱い奴だ……。強くなるんだ。

2

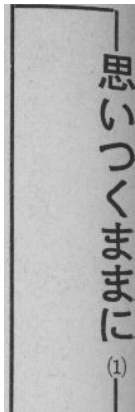
秋の日が西山に沈んで冬の月が上ってきた。その光に真黄ないちようの葉がくつきり浮び上がっている。それを冷たい北風野郎が吹き落した。「ああ……散ってしまう……いじわるな奴だ……」寂しさが俺の身体にあふれてきて、だれもいない暗い教室にこぼれ出した。一滴……二滴……そいつは、みるま

に広がって教室は寂しさで一杯。「ああ息がつまっちゃう。」窓を勢いよく開けた。ゆるくなった北風が教室をはいまわり、そいつを食べちまった……。

ふりかえってみて

中嶋久子

またたく間に、一年が過ぎてしまった。「光陰矢のごとし」とは言ったものだが、本当に月日のたつのは早いものだ。あれやこれやをしているうちに、時は容赦もなくすぎていってしまう。そして常に思うのが「後悔先に立たず」である。こうしてみると、一年、一日が、長く思われた幼い頃が懐しくなり、現在の自分の存在があわれに思われてしかたがない。毎日毎日あくせくと何を目標に過しているのかわからない自分に、時はとまつてはくれない。考えることさえさせない。もつと時に対して余裕のある生活がしてみたいものだ。それには、一日、一時を無駄にせず、時においまわされることのないように、大切に過して行くことだと、自分自身に言いかけ



うららかな土手

荒居正次

正月のうららかな日を浴びて僕は友とぶらぶら歩いていた。久しぶりに土手を歩く僕たちの心は踊っていた。どこへともなくただ二人は歩み続けた。向こうから大きな大人と小さな子供がそれぞれ大きなもりと大きなバケツを持って歩いてくる。僕たちは急いだ。111ちよつと見せて。……ワア取れたなあ。……11彼等は笑いながら通り過ぎて行った。彼等の長靴は冷たく光っていた。でも体ふりふり歩いて行く彼等をなつかしかった。

……土手も黒いはだを見せ、また草木も枯れ向こうには赤茶けた鉄骨が、それぞれ手を取り合ってどつしりと横たわっている。土手の向こうには田畑が続く、家々が散り、その向こうにはなだかなすそを引いて八ヶ岳がそびえている。……平和だなあ！……幸せだなあ！……友も叫んでいる。……俺は一つの

十七才のこの胸に

萩原憲明

十七歳も半ばを過ぎて、この頃ようやく自分というものがわかりかけてきた。大人に脱皮する時の、人が言う思春期かもしれないが何か自分の行動にも本来の性格としっくりするようになっていく。こうしてみると、様々な喜び悲しみをおりこめたあの修学旅行や試験、その他この年に経験した事のどの一つにも自分のまだ粗野な性格が現われていたように思える。だがこれはまた自己を客観的に見つめる目がでてきたのだろう。

……ただ反面、その日によって自分の欠点が発覚するのか、感傷的気分が台頭して僕を孤独と悲しみでとりまき、灰色の過去や高慢な非力人だといった自己嫌悪に陥る。一度陥ると、この自分を捨てて、新しい自己を探し出すのが難しくなる。溺れる老わらをもつかむ

の例のように、虚無的気分にもがき苦しむ。かえってそうすればするほど、自己をきびしくさせるのか、感傷的になっていく。

でも自己とのそうした戦いに、僕の発展を求めなければならない。近代文学の巨峰と言われる漱石の晩年になつての「則天去私」の諦念の気持ちにある自己観へ到達するのは、人生経験の表裏を見きわめる力の足りない僕にはなかなか容易なことではないが、自分を理解しようとする苦悶の票にも僕なりの修得があるだろう。

この苦悶に勝つ強さがほしい。強力。しかし、この底びえする北風の中に生命の萌え出する春の来るのを待ちながらも、僕はこう口ずさまずにはいられない。

何所行く夕日 一人旅

そつと呼ぼうか思い出を

十七才のこの胸に

しまつておいた思い出を

思 う こ と

小林康子

一年が過ぎた――。

その日一日をせいいつぱい生きたい、充実し

た日々を送りたい。そんな願いをこめて迎えた高校二年であった。でも、いつも何かいいしれぬ不安と孤独につきまとわれていた私、自分自身との戦いであったような日々：。自分がいやでいやでたまらない時がある、そんなとき

わけもなく涙が流れる

もう自分なんかどうなってもいいんだと思わずにはいられなかった日々。

やっぱり私は、生命が与えられ、生きる道が与えられた111人の人間。自分自身でこの与えられた道を歩まねばならない。悲しくても、苦しくても、あすに向って、遠い未来に向って生きなければならぬ。

そして今、再び戻ってはこない青春時代を一生涯で最も成長することの時代を過ごそうとしている。少しでも、不安や孤独を克服し「せいっぱいがんばった。」と、あとで思うことのできる日々を過ごしていきたい。そのために一日一日を大切に生きていきたいと思います。

微笑

内藤 浩

決してわかりません。ぼくが見ると、自分の回りにいる人がすべて幸福に見えます。家族はみな健康であるのに、物質的に満たされなからといって不平を言う者がいたら、それはぜいたくです。むしろ浅はかと言った方がよいかもしれません。目の前に幸福がありながらそれに気がつく事ができないのです。ただ金さえあれば幸福になれると思っているのです。しかし決してそうではありません。真の幸福とは、家族がみな健康で暖かい家庭である事です。兄弟親子仲よくする事です。そして日常茶飯事における平凡な事の中にあります。これ以上の幸福はありません。だから一生においていまがいちばん幸福なのです。現在を大切にしないでほしいません。ぼくには大きな喜びもあるのです。今までは無関心ではありましたが妹が成長して行くのを見たり、母に孝行する事です。妹の「兄ちゃん」という言葉や、母の「ありがとう。」という言葉を聞くたびに何か体にあついている感じが「ジーン」としみこむような幸福感にひたります。ぼくは幸せです。これからの長い人生の間で、まだまだ多くの困難にぶつかる事でしょう。けれどもぼくは力いっぱい生きていきます。

「忘却とは忘れさることなり：」

しかし、多くの思い出を刻んだこの一年を、だれが忘れさることができるよう。将来、多忙な生活を送ろうとも、決してこの暖みのあるクラスは記憶にのみがえるだろう。「盲腸」という言葉が思わぬ詳細な事までを思い出させ、思わず笑いが漏れ、多分、あの片角のぼる教室を懐しむことだろう。せめて、その時だけは粗忽な俗界を忘れさせることができよう。

恥じる先輩

向山 嘉代

私は一年のおわりに、ある部へ入りました。自分自身がすこしも上達しないうちに、新入生つまり後輩を迎えることになってしまいました。

中学校時代から部に関して、最もおそれていたことは、後輩にきらわれる先輩になることでした。

さて一年生が入ってくると、がぜん部屋はきれいになり、道具は整頓され、私達二年生は、赤面し、ただ感謝しているだけで手を出すこともできないありさまとなりました。(へ

友人とは

藤原 章彦

ふだん余り自分自身の生活を深く回顧したことがない僕にとつてこの機会はよいチャンスだったのでじっくり考えてみました。

多くの人間と接しながらも、常に自分にとって必要だという友人がいることは何んと心強いことかというのを痛感しました。僕にはそういう友人がいないのが残念です。何か互の間に障害物があり(二年生の場合意識的なものが多いように思われる)その人の真の心をとらえることができないのです。あえて言うならば「見かけだけの友人」とでも言えるでしょう。つまり、他の人から見ればさも互いがうちとけているように見えるのです。そんな友人だったならまっぴらだ。友人と言う価値のある友人を持ちたいものだ。

無題

前橋 藤也

けたたましい音……にくらしいと思うこと

心の年では、いつも悪いと思っていたんだけど、Aさん達ごめんなさいね。)

Aさん、私はあなたからそんなに礼儀正しい挨拶をされるような先輩ではありません。消極的というのか、気がきかないのか、自分から進んでいろいろすることができません。先輩と思わないで、用事をいっしょにさせて下さい。

中学校時代に思っていたことも、どこか頭のすみの方においやられました。

これからは、先輩、後輩ということに、こだわらず、高校時代の部活動を楽しんでいきたいと思います。Aさん達、よろしくね。

幸福

今 村 一也

早いものです。入学してから二年もの年月がすぎようとしています。いままで十七年間でこの二年の間ほど多くの事件に出会った事はありません。その中で最大の悲しみは姉の死です。二年たった今でも、深く心に刻みこまれています。そしてその悲しみがまだ生々しくのこっている内に今度の父の死を体験しました。経験のない人にはこのぼくの気持ほ

しよし、でも本当は感謝しなければいけないだろう。このめざましに、機械的になった毎日、家、停留所、バス、学校と変化なく、どの景色もまわりから分離して孤立している、たがい到一个づつが、意地を張り、誇っている、調和されず統一がなく……過ぎ去った遠い日々がなつかしい。寂しくも想える。今日も又一日が過ぎてゆく。

夜のひととき

内藤 純子

スー。あつ流れ星だ。頭上だけがいやに暗い空に黄金の糸がひかれた。その後は又一面に光るゴミが広がるだけ。私は星を見る時一番自然の神秘を感じ、幼ない日の想い出が頭をよぎる。地球が空間に浮き、数年前の光を見、巨大な銀河系の存在する等の事を、わずかな知識で一生懸命理解しようとした日、星への道が銀の並木道だった童話の世界からやつと一歩抜け出た当時ではしよせん無理だったことは、今でも微笑を誘う。だが現在神秘は科学に変わりつつある。そして科学の結果は又、新しい問題、夢を生む。星へのあこがれ、想像は限りがない。

ふと目を足下に落とすと、はっと現実が現われる。急に恥ずかしくなって赤くなる。空より黒い山が目の前を閉ざし、夜が迫ってくる。耳を澄ますと夜の音がする。それはあの星からのようであり、耳のすぐそばからのようでもある。体がすっかり冷えている。今日も一日が終わる。

スケート

石原源彦

初めて履くスケート靴。

滑ることのうれしさと尻をついての恥と氷の上で立てるかの不安で、心の中は、複雑であつた。

スケート靴をつけ、床の上に立った、安定がとれない、よちよちして、ひよこの遠足のように、ぼくたちは、スケートリンクに出た。

氷の上に、足を入れたとたん足は、がたつき、手は手すりからはなれない。ぼくは、自分に、ころぶのは恥ではないと言ったとたんすべり込みアウトであつた。こうなつては恥も外分もないものだと言ひ、いや歩き始めた。不安と恥は、解消され、やつとのことです、が滑るようになった。しかし、スケート靴を

内側に曲げ、どうも快適ではない、しまいに、足首が痛くて、すわんで滑りたいなあと思つて前を見ると、気持ちよさそうに滑つて行く人を見ると、スケートの快良さ、スピード感をぼくに与えてくれた。

最近思う事

小林美智子

ある目標に情熱を傾けながらも、人を素直にほめ、人のよさがわかる人。そして人を尊敬できる人。こういう人は、人からほめられ、人から尊敬される人間より、むしろ幸福ではないだろうか。多くの人は、あまりに後者を望みすぎ、前者を忘れていようような気がする。私自身も又、後者のような人に魅力を感じて、常に関心を向けていた。しかし最近、父と話をしているうちに、前者のような人、いいようのないすばらしさを感じ、そういう友を知った時、非常に美しく感じられたことを思い出した。私には努力しても、完全にそういう人間になりきれないかもしれない。でも、もしなれなくてもそれでいいと思つてゐる。ただ心の隅に少しでも忘れずに留めていれば……。そして、そういう人間の価値を

知つていれば……。

低俗な近頃の映画

菅野 悟

低俗とは「品質」の劣等をいうのだそう。最近の映画はまさにそれだ。昨年の邦画のベスト20に成人向きというものが7つもあつたのだからそれから外れた中で愚劣と思われる物は自然と想像がつこう。洋画に於いても、やれ何国では全国上映禁止、やれ数秒カットなどと誇らしげに広告に書き立てる。おまけにそんな映画の監督者には「巨匠」などつけられるのだ。

この様に愚劣な内容になるのは、映画界の斜陽にあるが、これではあまりにも観衆をなめたものであり、風俗を乱すことは必至である。「こんな物でも作ればお客は飛びつくだろう。」とする製作者の意図には、全く情ないものがある。芸術を表現なのだ、というに達しないが、そんな性的描写でも含めなければ、大人の世界を表現せぬものなのか。これからは気軽に、映画館の前を通れる様なものを作ってもらいたい。僕をやぶへびだなどといつてくれるな。



星に住む

萩原和美

深緑の松のその上の薄青い空

透明に輝く白き星

私は星に住む

(星の世界ってね、とても広いんだ。とてもなくね。道はまっすぐで、黄色に乾わいていて、やっぱ広いんだ。通つてただ歩くだけさ)

(星から見おろすとね、人間の世界って、ちっちゃくてとてもかわいいんだ。けど人間でね、いつもうろろしてるとよ)

荒涼とした冬の野に

冷たく輝く白き星

するどき光を私に投げ

私は素足で走ろう

銀にけぶる新雪の上を

小さなもの

井上喜由

小さな水たまり

秋の陽をうけて不思議な光の水たまり

大きいのはお前、僕は小さくていい

大きな深呼吸 大きなためいき

ごらん

お前にだって 僕にだって

たった一つの太陽がこつちを見てる

逃げようたつて 流れはしないよ

僕だって 逃げはしない

僕等の呼吸 それは泥の呼吸だ

僕等の深さ それは泥の深さだ

僕等の言葉 それは泥の言葉だ

泥は土に 土は大地に

泥のけんか 泥のやくそく

泥の涙 泥のうなづき

一本道で考えたこと

渡辺宏之

ずっと向うまで見たせる
田んぼにそつた道を
ぼくは自転車であつて行く
遠くで魔物の音、ゴーゴー、カンカン
気がつけばぼくの車輪は回っていない
ぼくは離陸する飛行機のように
だんだん空に上つて行く

よく見ると、帽子も服も体までもが
空の青さに染められていく
その色が空の色にぬりつぶされたとき
服も体も青色の透明になる
透けて見える心の中の小石が
音もたてずに落下して
地上の束縛から解放される
空気の上にひと休み、ぼくは自由だ／
気がつけばぼくはもとの自転車の上
遠くで魔物の音、ゴーゴー、カンカン

私は欲しい

吉川 敏子

あゝ、空よ 深く限らない青
この世のあらゆる怒りを すべて
その中に吸い取ってしまうように
ちっぽけなことに腹をたてていた
小さな私に
その豊かな笑顔でいっぱいに微笑み
そして 示してくれた
人間は、たやすく怒ってはいけないと……
そうだ これから怒りに負けそうな時は
あなたの広さと話しをしよう

あゝ、星よ冷たい静かな輝き
この世の絶えない悲しみを すべて
そのまたたきでこわしてしまいうように
ちっぽけなことに涙を流していた
泣き虫な私に

その素晴らしい理知の顔を輝かしてみせ、
そして 告げてくれた
人間が ほんとうに悲しむ時は他にあると
そうだ これから涙がこぼれそうな時は
あなたの冷静さを眺めよう
あゝ、風よ 走りぬけ吹き回る荒々しさ
この世の尽きない苦しみを すべて
その力で追ひ払ってしまいうように
ちっぽけなことに心を痛めていた

弱い私に
その厳しい怒顔で容赦なくぶつかり
そして 教えてくれた
人間の ほんとうの苦しみは
こんなものではないと……
そうだ これから苦しみに敗けそうな時は
あなたの力に向かって立とう
私は欲しい

弟と私

丸山 明美

よんでも撮って来ないちっちゃなちっちゃ
な私。
思わず自分の顔を覆う、さみしいさみしい
ひととき。
もつともつと楽しい時。
すばらしい、春をゆめみる時。
大好きな大好きな楨久君の、ちっちゃな小ち
やな手をとって。
青い野原をかけめぐるの、
さらさらさらさら聞えます
きれいなきれいな小川です。
「エビをとろうか。フナの方がいい？」
「どっちでもいいや。」
さつと冷めたい水の中に。
頭の方まで流れます。冷めたい冷めたい春
の水
思わず手をにぎりしめる……。
楽しい楽しい思いの時。

彼は中学二年生
おとなしくって まじめで
私とは正反対のようである
いつ頃だったかしら
二人でならんでみたら
彼の方が背が高かった
小学生の弟が
「おねえちゃん おにいちちゃんの方が
大きいよ。」といって笑いだした。
むりもない
彼は一年間に十三センチ
私は三センチしか伸びなかったのだから
知らない人がみれば
私の方が妹だと見えるらしい
私が入試に合格して
そのまま彼と制服の注文に行くと
「お兄さんの制服ですか。」と言われ
思わず顔を見合わせて

大きな心が、悲しみに負けない強さが
苦しみに堪えられる力が
そして

精一杯、生きぬく力が……

春

横内 照枝

春がすぐそこまで来ています。
暖かい暖かい冬の日の、楽しい楽しい思い
の時、
頭の中で回ります。ぐるぐる／＼回ります
誰も誰も知らない。私のためのメリーゴー
ランド。
そこにひよつこと現われるの。
ちやな小ちやな私の顔、今にも消えそうな
小ちやな顔。
まわりは一面花畑。レンゲも菜の花も咲い
てます。
ひらひらひらひらちようのよう。
びよんびよんびよんびよん小犬のように。
だんだんだんだん速くなって……
遠くに遠くに行ってしまうの……

古き都に

小河原 正夫

初めて会ったあなた
「きょうと」と言う名のあなた
あなたの体臭は余りにも重く
清らかに漂よい
私の胸にしみこむ
そして
忘れられぬ流れをつくる
あなたのリズムは
静かに静かに私を誘う
それは けっして
断続音ではなく



虐めらかな流動の余韻なのだ
余韻 11

夜の巷に甘く流れる口笛のように
私の心をせつなくさせる

ああ その吸引力
あなたは母のまなこ

乳飲み子の私は
宵闇せまる中で

懸命にあなたの乳首を求めるのだが
感ずるは微かな流動の余韻のみ

ああ

あなたは威厳ある母であつた

私はあなたの体臭を求めて

夜の巷をさまよう

私の目は鋭く、臭覚を帯びて……

しかし

私は断続音に包まれた

ギターが流行を奏で

男も女も享楽に酔い

断続のリズムに浮かれる

寂しい人生があつた

私は虚しく

とぼとぼと歩く

口笛を吹きながら

そんな力ない私の吐息に

化繊のベールが微かに揺れた

ああ 私を待っているのは

夜汽車の汽笛11

ただひとすじの

枯木のいななき

ここにも余韻はあつた

やがて私は眠りに入る

極めて自然に……

断続音の蒲団に包まれ

暗黒の車窓には

享楽の灯

ピンク、けれどわびしく

この私を見送る

あなたとの

再会を約して私は帰る

お か あ さ ん

私は大きくなろう

いつか

あなたと対等になつて

あなたの体臭に触れよう

山と空

橋田 ゆかり

そこに山があつた。

緑にうずもれた山と、若葉がいつぱいの山と

その下に若さがあつた。

希望に満ちた顔と、フアイト満々の顔が。

そこに空があつた。

雲ひとつない秋れ晴の空と、雨にぬれた六月

の空が

その下に声高らかに笑う顔と

涙にむせぶ顔があつた

みんな みんな 呼びかける。

山に向かつて空に向かつて、

この道はどこまでつづくの

山も空も何もいわずに

私達の顔を映してくれる。

そして希望と夢を運んできてくれる



人につくすこと

丸茂 皓 生

私たちは少しは人につくし、また人からつくしてもらっている。しかし、純粹な気持で人につくしている人は少ない。そこで人につくすとはどういうことか。それを少し探ってみたい。

街頭には、やれ赤い羽根募金、やれ救世軍未開地での医療活動などといういの救済事業が展開されている。

ところで、たとえば赤い羽根募金などの場合、私たちはどんな気持ちで募金に応じているのだろうか。大部分の人は無感覚に感じていると思う。そして、自分の出したお金が少しでも困っている人に役立つのだ、などいう意識を持ちあわせている人は少ないと思う。しかし、もしそのような意識なしに人につくすのなら、それはその募金の価値11貧

困な人を経済的に助け、二人立ちできる勇気を与える11が半減している。無感覚な私達の行動に、どれほどの意味があるのか。私達に必要なのは、その行動とともに意識ではな

かるのか。純粹に人につくしたいという気持は人につくす行為と共に大切なのである。純粹に人につくすという気持が、より多くの人に出てくれれば、それだけ社会の醜いできごとを少なくすることができると思う。たとえば、普通だったら悪いことをするような人でも、良心が残っていれば、人に心からつくしてもらった時、良心の働きが活激になつて

善い人になり易いであろう。また、悪いことを誘発する原因を解決できることもあろう。そして、この気持は、社会全体の幸福にも継

がるものなのではなからうか。

生きる

内藤 治 生

我々が直面している現実はいまにも苦難に満ちている。

たとえば、大学入試などの社会制度、また人間関係など、それらは非常に複雑、怪気にわれわれの前にはだかつていない。したがって

我々是我々の未来にあまり希望をもてず、絶望を感じざるを得ない。我々は目先の事、すなわち、すぐに我々の苦難をすくってくれ

うなものへあこがれをもち、性急な解決を望む。青春時代は、たしかにせつちちなのだ。その解決方法は、「高校時代は暗黒だ」

とか「試験地獄だ」とかいいう口実を作り、そして現実から逃避することである。

逃避してどこへ行くのか。現実を否定してどこへ行くのか。これこそ性急な解決をのぞんでも、のぞみえられないものなのだ。その結果絶望の状態になることは明白である。

そこで我々はいま一度現実にかえつて、この現実に向かうことが必要である。現実と立ち向うことこそ我々に必要な「若さ」なのだ。ゲーテはいった、「人間は努力する間は迷うものなのだ。」と。確かに我々は努力しなければならぬ。そしてその努力こそ「若さ」である。ベートーヴェンの「悩みをつらぬいて歓喜に至れ」ということこそ、これから我々が進んで行かねばならない道なのだ。

我々はこのような力強い、たくましい青年として生きなければならない。「生きる」11 現実にしつかり足をふんばって立ち、そしてたくましく生きることこそが大切なのだ。

交響曲

保坂哲也

美しく清き自然の声。先日のコンサートでははじめて交響曲をそう感じた。

ヴァイオリンは清らかな小川の流れ、チェロはうずまく急流のうなり。その二つは交互に流れて大きなオーケストラの大海へ流れこんだ。その中をピコロの調べが私の思いを自然の国へ流れ寄せた。

ここからこの偉大な音楽家はその自然と戯れ、戦いそして傷つく、高らかにトランペットは鳴り狂い、激しくシンバル、ティンパニーが吹き荒れる。その最後にさびしくフルートが響く。しかし自然の神である指揮者は、ヴァイオリンのやさしい調べをその天才に与える。彼はその自然の声を愛し、素朴で神秘的な自然の謎を追求する。オーケストラの響きは次第に高まり、ついに彼は自分もその偉大な自然の一つであることに気がつく。そこであらゆる自然の音が希望に変わり、ほがらかにホルンが響きわたり、神の大きな抱擁で交響曲は終る。ここでその芸術家は完全に自然に帰ったのである。 11 以上僕のロマンンティ

ツクな主観です。

たわごと

赤岡 猛

大宰治が、多くの彼の解説者が指揮する様に、人生における自己否定を真に「道化」と思い込んでいたならば、私は彼の人生観を認め難い。自己否定による「己れ」の否定と、「道化」による「己れ」の否定とは、一に同じものであつてはならない。

人生の終極の目的は自我の確立にあり、私達が、自己主張の、他と対立した生活に於て初めて自我を確立し得るといふのは凡常な真理であろう。しかし、他から奪うことにより自ら肥り、他の肥ることにより自らの瘦せるを知る、即ち自他共に「己れ」のみに生きて行く方法を、孤立したエゴイズムとして認めるを得ない今日、自我の確立された人間的な生活を求めることは至難の業に思える。ここに私は自我の本質を知るべき必要性を感じる。自我の本質とは所謂「己れ」のみであるうか。一体、自他共に所有する捨象的な共通感覚は自我の本質とはいえないのだろうか。自我を確立するための手段であるべき機械

バスの中で

天野正仁

帰りのバスの中だった。車内はそれほど混んでなく、二、三人立っている程度であった。バスが「松竹前」に止った時、数人の客と共に、一人の田舎くさい老婆が乗り込んできた。乗り込んできたというより、飛びこんできたという感じだった。そしてすばやくあたりをきよるきよる見回し、空いている席がないとわかると、がっかりした表情をみせ、今度は「私はお婆さんだから誰かが席を譲るのが当然だ」と云わんばかりの様子を示した。その厚かましげの態度に思わず反発して僕は立ちかけていた腰を降ろしてしまった。すると横に座っていた小学校一年生くらいの女の子が「お婆さんどうぞ」といいながらつと立ち上がった。車内の目は一斉に感心した様に、その少女に注がれた。一瞬僕はそれに驚いたが、すぐ自分の取った態度が悲しく恥かしく思われ、乗客がまるで僕を軽蔑し、責めている様に感じられて、その場にいたまれなくなつた。あの老婆がいかなる態度を示そうと、老婆であることには変わりなく、その

文明が、目的を失い、人間疎外を引き起こしている現実には、私達があいかわらずの媚態的自己主張を続けて行くことが、絶望的な未来に通ずることを自明にしている。未来に希望を託す私達は、現実をしつかり見つめ、もはや「己れ」を主張すると同様に「己れ」を否定することが、自我の本質に近づくものであることを認めるべきである。

自己否定は、あくまで自己否定であつて、「道化」ではない。実生活の、特に対人関係において、自己否定と「己れ」とを置き換えることが可能ならば、私達は「己れ」を超越した生活が、人間の本質―自我に基づいた、余裕のある爽やかなものであることを知るであらう。

心の内にあったもの

吉田成美

私には、愛情がない。ゆえに思いやりもなく、友情もなく、同情もない。

今までの私を振り返つて見て、思いやりの気持がまったくなかったと言えよう。すべてのことが（意識しなくても）自分自身の為であり、あるいは、道徳的考えからであり、他人は

他人、自分は自分で生きてゆくのだ。人の世話などすることはないものだと思われた。「世界において徳そのものを除き友情にまさるものなし」とか、アリストテレスは、

「親しき人々なくしては、他のあらゆる善きものを有しても人は生きることを選ばぬかも知れぬ」と相互愛の重要性を説いている。

愛にも種々あり、文化的価値へ向う愛、いわゆる遠いものへの愛があると言えよう。が、この十数年間を、愛なくして、なんと無意に過ごして来たことだろう。しかし、私は、長い間この問題について考え、悩んで来た。そして、その結果として、今の私以外の何者にも成らぬことを知って、落着いた気持ちだ。でもこのまま自分というものが形成されてしまうのだと思うと悲しい。いかなる努力によつても、先天的性格は変え得ないと思う。私は、将来の職業に社会福祉の仕事望んでいるが、それは決して愛情から来るものではない。それは、一種の自己満足であるかも知れない。あるいは、目に見えない悪魔に導かれるのかも知れない。

目ざめ

鎌田隆雄

授業中のことではあったが自分はぼんやり教室の外を見ていた。青く澄んだ空、青い山脈、その両者にはぶい冬の日を受け、静かに寂しく光る白色の雪によつて分けられており、それは実に平和な姿を描き出している。自分はその中に魂をうばわれ、教室ではからの自分が授業していた。考えるという事をめつたにしながら自分だが、何かが頭の中に飛び込んで来た。簡単に言うとうと、ある意味では平和に見える現代に満足し進歩することを怠り、地上に残された物は今の美しさがな

くなると同時に全滅し、逆にそれを見抜き地上の美になごりはあるが、地球を去り宇宙に飛び出した物が生きのびる。これは実に幼稚な考えではあるが、規模を縮めると我々の事の様でもある。言いかえると大学に入った人が出世する。これは今の社会を批判したとして仕方がない。個人が努力するより対策はないのだ。又高校時代の出来事は長い人生において過去の事であり、昔の夢でなければならぬのかもしれない。自分も考える事を覚えたとの機会に今後態度を改め、もつとまじめになるべきだと感じかけた時、終りのチャイムが鳴った。すべては昼飯後に考えることにしよう……。

悩みと迷いの向こう

長田 亘

人には生きようとする以上何んらかの未来があるに違いない。もちろん私にもあるんだろ。しかし、今の私には高校生活最後の一年という広い海峡を前にして、その向こうに広がる未来と言う大地の何んであるかを想像することさえむずかしい。しかも沖合いはるか見える暗雲の告げる空模様は、暴風雨にな

っても夕立では済むまい。嵐を避けて迂回すれば、日数や燃料も余計かかるに違いないし船長は腕と勇氣に不信の目を向けられるかもしれない。それでも大波をかぶって難破するよりもましだろう。天気予報とても最後まであてにすることは考えものだ。この船にいても安心して身を任せられる状態にあるはずがない。しかし細かい事に気を使つてどうしたらよいか迷つていられる時間さえなくなつてきている。危険を犯してもし沈没でもしたら、大きなカメラにでもなつて氣長に泳ぎ渡ることにしてしよう。いつかはこんな事に悩んだ私を思い出して、笑いをもらす時があるかもしれない。それが未来の一部にあることを願つて、海図に上陸地点を捜して進路を書き込む事にしよう。だがどこに。

意志の力

多田 和夫

ある事を実行しようとする場合に、そこにその人の意志の力が強固であるか否かが問題となるであろう。そしてそこに必ず何らかの抵抗があり、それは人の意志の力の強弱により非常に力の強いものであり、又非常にひ弱

な小さなものでもある。校長先生が始業式に言われた「厳寒に入り、寒いと思うのはみんながそうであり、その寒さを克服して蒲団をけつて起きるところに喜びと感慨が生まれると……」この言葉にはみな共鳴するであろうし僕も自分なりにそれを理解し得る。そして又この言葉は今の僕等の心に必ず止めておかねばならないように思える。何の抵抗もなくス1と毎日を過ごすよりも、抵抗を克服しつつそこに喜びを感じながら「日々は新」の気持ちで事に当たるようにしよう……。

日本語の現状

数野 詞治

われわれの日本語が凄惨な目にあつてゐる。日本製の鉛筆、電気器具には、必ずアルファベット26文字が記せられ、評論家は憑かれたように横文字を用いる。テレビ、ラジオのスピーカーからは、耽奇的なわれわれの心につけてこんで色も香もないバター臭い宣伝文句を並べ立てる。小智小才の猿男は友との会話に必ず英語をしゃべり、我こそは万物の靈長であるといわんばかりに自己耽溺にひたたりながら日々を送っている。もちろん無国境言語

も必要であることは、何人であろうとも否定出来ぬ事実であるが、われらの祖先と一体となつて現代にまで進んできた千古不動の巨巖の永遠に失われることのない絶対価値を保有している日本語を、いたずらに放逐してしまうことは大きな断罪である。われわれが鋭角な視線で日本語を見つめ、かつこれを愛する時こそ、弱点は止揚され、真の青い鳥を逡巡することなく、かごとにおさめることが出来るのである。

平等という言葉

千葉 洋子

「人間は生まれながらにして平等でなければならぬ。」この言葉は、昔から多くの偉人により、唱えられてきた。私には最近まで資本主義社会においては、この言葉が実現されていとは思われなかった。

しかし思えば、なまじ、わずかばかりの資産があるばかりに、大きな、クッションのよい回転椅子に、ふかぶかと身を沈めてしまつていような人達は、自分の書斎に、多種多様なりっぱな本を並べておきこそすれ、それらはただ装飾品の役目を果しているだけで

あろう。また一方、たとえ一塊の道路工夫であらうとも、詩情を育むことはできる。

たしかに物質的、地位的には生れながらにして上下の差がある。しかしそれだけがすべてではない。精神的な豊かさも考慮に入れたとき、私達はもはや、生まれながらにして平等である。ただ平等でなくするのは、各人のその後の考え方ひとつだ。

空想への逃避

遠藤 和男

私はよく空想に耽ることがある。床の中でまた教室で、試験中にさえ頭に浮ぶ事がある。内容は大部分とりとめのないことではあるが、空想は欲求不満から自己を防御する反応だそう。私は自分に對した社会に對して多くの不満を持つてゐる。では私はそれを回避しようとかだらない空想にふけるのであろうか。空想は楽しい。

しかしそれが現実からの逃避としたら何と情ない事であらう。なぞもつと積極的な合理的な解決法を見出そうと努力しないのか。

自己の欠陥を実際にただし、自分の不満を解消しようとしなないのか。総てを無氣力に受

け入れその抵抗を無氣力に避ける自分。自分はいつたいこれでよいのか。

知恵

大野 奈保子

老子の言葉に「智慧出有二大偽。」というのがある。意味については私なりに解釈して理解できるのであるが、智慧とは何かと考えるとわからなくなつてくる。辞典には、「知恵とは物事を上手に処理する能力である」と説明されている。しかし、この説明の知恵は一般的に正しいかもしれないが、兼好や老子のいう知恵という言葉を充分に満足させるものではないと私は思う。徒然草で兼好法師が、「本當に知者であり善者である人は、知恵もなく徳もなく功もなく有名でもない」とのべていることは彼の頭の中に、老子の「知恵出でて大偽有り」という考えを認めるものがあったからだと思う。また彼は、「伝えて聞き学びて知るは、誠の智にあらず。」とのべている。このことは辞典の説明を一面で否辞しており、兼好法師のいう知恵が老子のそれと一致することを示すものである。彼らは、知恵をどのように理解していたのであろうか。老子のいう知恵が私の頭につめこまれていようような気がするのだが……。

Puzzles
JOHN DRINKWATER

Two days ago the wild-rose buds
Were very tight and small:
The roses yesterday were wide,
And now today they fall.
And yet I see
That other buds are on the tree.

The mud walls of the thrushes' nest
Were wet a month ago,
Five speckled eggs were laid,
and now
I watch the feathers grow
On five new thrushes, while a new
Nest has other eggs of blue.

The river water flowing by
Come back again no more,
And yet the flowing waters fill
The river as before,

For they are meant
In spending never to be spent.

It all seems very strange to me,
Perhaps it does to you,
All things, it seems, must go, and
yet
All things are always new,
Which somehow seems to show
that there
Is some one who is taking care,

6



一年生の時は、クラスも学年全体も、ひとかたまりになつて、非常なまとまりをみせる。しかゝ二年生はちがう。全く個性的になつて五十五人の色がよく感じられる。第二学年という時期は、いわば、過去と将来とを分ける分岐点にあるといえよう、それだけに、迷い、悩み、

進学への努力という大きい流れの中で、著しい成長をとげ、自分の前にある種々の問題を白から考え、身体に直接感じてその決断をつけようとする段階にまで至つたことは、何より喜ぶべきことである。受験勉強に対する悩みはつきない。入試の是非に對し意見は別れている。朝日新聞に最近掲載された高校生のなまの意見には次の如きも

のがある。

「僕は受験勉強は自分に勝たねば出きないものだと思う。多くの者は自分に負けて安易な道に逃げこんでしまう。しかしある者はやりとげる。この苦しい勉強をやり遂げる者を社会が求めるのは当然である。」

「ふたたび戻つて来ない高校時代に、力の限りをつくして、勉強する姿が最も美しい。」

「一生に一度ぐらいは、死ぬほど苦しい目にあつてもいい。そこから強い精神力が生れる。」

「高校生活のすべての価値基準は、ペーパーテストの点数で定められる。そして良い大学に入ることが、人生の目的を得る必要で十分な条件のように見えてくる。矛盾だらけだ。僕等の選ぶ道は、この現実を直視して良い点と悪い点を見きわめることだ。」

「現代は個人尊重の時代であるが、現在の教育は、類型的な人間をつくり、個性が育成されない。」

現実に対する首足の意見と批判的な意見である。このように、是非の間を行きつもとどりつて、解決を求めているのが現実といえるだろう。この様な傾向は、我が国においては必ずしも新しいものではない。只、毎年その度合が深まり、今日においてその極に達した観を呈していると言つていいだろう。戦後二十年を経てようやく教育問題について改革のきざしがみえて来たようである。入試制度について特にそうである。しかし、在学生の諸君については、依然として現状を維持していかねばならない状態である。

二年生の諸君に希望することは、飽くまで勉強を重ねて、将来へ飛躍する土台をきづいてもらいたいことである。現実の苦しみに勇敢に

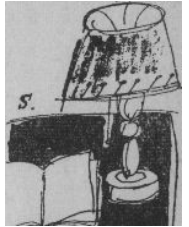
立ち向つてもらいたい。諸君は将来へ向つて第一歩をふみはじめたばかりである。大きい夢を抱いて進んでもらいたい。大理想の実現には、現実の小さい理想の実現がつみかさねられなければならない。教科書を読み、辞書をひくことからはじめなさい。謙虚な態度をもつて事にあたるよう望んでやまない。施設の子が東大へ見事に合格した例や、オリンピックのマラソンのアベベ選手の勝利等を見るにつけ、そこにある不屈の精神力を見落してはならない。

第二学年という時期はこの現実に対する反応を特につよく示す時である。この反応如何によつて今後に大きい影響を及ぼすべき重要な時である。

二年先諸君に望むことは多々ある。それは、「自覚」という二言によつて充分表現できる。大理想の達成を目標とすることは、勿論のぞましいが、大に至る前提として、現実の幾多の小的達成がある。昨年のオリンピックで特に印象的だつたマラソンの勝利者アベベの努力・又施設の子として逆境に育ち見事東大に進学した門君の不屈の意志等すばらしい手本といえるだろう。現在やるべきことを確実に果たす実行力こそそのぞましいのである。けんきよな態度で学習にとりこんでほしい。

本年度はオリンピックという国際的行事があり、学年としても、修学旅行、富士スバルラインへの遠足、強歩大会、文化祭等、例年になく盛況山な行事があり、極めて印象的な一年となつた。早くも終りに近い。最終学年を充分成果あるものにすべく益々努力していただきたい。はじめに掲げた英詩は、教科書から選んだものである。

受験に追われて落ちついて読むことが出きないことが残念である。十年後、二十年後の思い出のよすがとしたい。



Idealization

星野幸郎

それは若く
野情豊かな女神なり
空飛ぶ清楚な子鳥
淡く輝く光、
かくあるときそれは美しき。
それは大なる
微笑みかほる故郷なり
断崖の高貴な扉
かくあるときそれは幸ひなり。
それはかくあるもの
現実ならざるもの
かくありて生くるものなり。

それは虚しく
悩める錯乱
激しく苦しき吐気
見つからざる骨なり
かくあるときそれは哀れなり。
それは
寂しく離れたる心
静かなる力
かくありて穏やかならん

田中孝道

壊旧の渦に曇る飛鳥路の
堂の裏なる凍てし水鏡は
阿修羅が心を映し
あわれ
踏み来し径に沿い並ぶ
戒壇羽松の緑……
汝は去りし想いの造化なりしか
薄あいの御室にさしこむ燭光一条

閑居古仏の面を曇らし
君が泣きは
出でし路なき杜に吸われむ。

たわごと

伊藤正文

かなしみの中に
ぼくは生まれた
赤いもんきひの様な顔をして
此の
かなしみの中に生まれてきた
そして
其処にあるのは
二片のたくあんと
泪の茶漬だけだ (楽天の歌)
自分程楽天的な人間はない、と思ってい
る。かなしみの中に生まれて来たなどとは
考えた事もない。只スベースをかせぐ為に
詩の様な形をした嘘と云えば次のはもっと
夫が甚だしい。
吾 たはむれば

君 うすき笑みうかべん

あほれ (ひとに)

佐藤春夫の真似をしようとして、真似に
もならなかったものである。考えてみたら
佐藤の心情と自分の心持とは凡そ異って
いた

自分でも充分につまらぬと思うものを、
しかも二つも人前に曝したとは、人間十七
になっても少しも賢明にはならぬが、年を
重ねるに従って破廉恥になる、という事な
のだろうか。

(1965. 1. 23)

放課後の教室

広瀬憲幸

みんなが帰った放課後の教室、
つらく悲しい僕だけがいる。
一人ここにすわっていると、
なやみが二倍にふえたような気がする。
なやみ／
なぜ僕にはこんなものがあるのか。

何かをこわしたくなるような、
誰かを殴りたくなるような、
破壊主義者にかり立てるような……
分らない／

なやみにひっぱられて行くようになって、
なやみが生活のダニのようになって、
一日一日 をすごしている。

苦闘の生活／
大げさかも知れない、
しかし僕の精神は、
ダニにかきまわされた感じた。

しかし／
克服しなければならない、
絶対に／
負けてはならないんだ／

みんな帰った放課後の教室、
つらく悲しい僕だけがいる。

いつも休まずに

塩谷政之

「コレカラ」のために
いつまでも休まずに
歩き続けよう
オマエの
力と
夢で。

讃 春

金丸吉宗

わが苦悶の歳月は流れぬ
かくしてわが青春の礎は日をみたり
噫！

天地万霊この春をたたえよ
しかれどもわが彷徨はやむをしらず
漂泊のみあるべし
人なるゆえに……

この青春

新津

勉

君よ！

お前は悲しくはないのかい。
サンドイッチマンが街を歩き、
ソファにふんぞりかえって葉巻をふかす
姿を。

君よ！

お前は考えた事がないのかい。

授 業

田淵保雄

……
あいつは
参考書ととりくんでいる。

あれ／

あいつも一生懸命
考えているぞ。

ノートを取る奴

先生をじつと見つめている奴。
頭をかかえこむ奴。

みんな真剣だ。
先生も真剣だ、

チョークを持った手を
ブルブルゆすり、
大きなゼスチアで、

説明する、
質問する、

答える、

ああ／
授業なんだ。

冬の日

岡部修造

グレンデをすべる
何の障害物もなく
自由にすべる
雪面を踊る
何ものにもとめられず
かるやかに踊る
左に白く輝く北アルプス
遠くに
遠くに
ちよつぱりブルーの姿をのぞかせた冬富士
静かに静かにこちらを見てる
グレンデをすべる
楽しく楽しくグレンデをすべる
冬のある日のことである。

空の海

今井一生

ただ黙って空を見る
何もかものみ込んでしまふような……
ただ黙って空を見る
私も昇天しているような……
人間の 孤独の時間
ただ黙って空を見る
それは深い海の色
ただ黙って空を見る





若尾 和光

「おぼしき事言はぬは、腹ふくるる
わざなり」。

停留所にひたはしる。人塊がみえた。真中に入って、朝のお祈りをした。きょうは絶対に止ってくれよオ。バスの中で、なんとかがらさがつていた。隣のおっさん、何んだって人のオーパー、取ることはないだろう。間違えるなよ。これがオッサンのだよ。皆さん、あまり動かずに、シャツがよじれちゃったじやないかよ。車掌も車掌で、何をしてるんだ。ドアは、がま口じやないんだ。あけてばかりいなくていいんだよ。どんどん通過するんだ。まったく、ハス会社では何を教えこんでいるんだらうね。また国鉄は、人口問題を取

・色だった。そしてそれから、ざっと十年間、学校へ入り、僕の音楽的知識も年と共に、増した。しかし、なぜ、こんなに、音楽が好きになったのか、と問われても、明確な答は出せない。でも、人は誰でも美を求め、夢をみるだろう。音楽には、音楽美と云う美の中に夢が直結して、ひそんでいた。

音楽の与えてくれる夢、これは、より空想的に、他人に気がねなく描き、そして、生活意識から解き放たれて、あるがままの自我にかえる事ができる。音楽を聴く時は、自我の感情以外に何も頼るものは、ないのである。だから、個人の情緒的内容により、感じてつくりあげる夢は、他人から、何ら束縛されたい装飾のほどこしてない感情の造形である。これは、音楽の形式にも影響する大きな意義であると思う。僕は、これからも、僕の音楽を楽しみとして、好きになるだろう。

無 題

功 刀 芳 郎

私が思うに、現代人としてわれわれ特に男はもっと家庭電化製品についてもっと知るべきだと思う。女は一般に機械に弱いらしい。

り連えでもしたのか、暇さえあれば事故を起

こして、コロコロとお客を殺す。全く、ふまれて、けられて、その上をローラーにかけられた思いだ。それに最近の国内事情よくないね。サトウはアマイから考えものだね。始めは佐トウへ、サトウへとウサ気もなびいていたけれども、調子でないじやないか。たのむよ。帰宅したが、机に向ったところで、出来っこないから、こたつでテレビなんぞみていると、「あなたお酒飲んでる、タバコ飲んでいる。だったらこれ飲んで」ときた。何を言ってるんだ玉川、まわりは子供ばかりじやないか。風邪気味で菓を飲むと、これが良くきいた。どんな菓だろうと見ると、腹痛にヨクナオール。近所のあの家の車は、何のうらみでエンジンをふかすんだい。あつためなくちや走らないようなのを、無理して買うことないんだ。音を出しても、殺しさえしなけりや、近所迷惑じやないというもんじやない。インスタントガレージを立てたようだが、なにせ狭いんで、寒い中を、家族総出で、バックオーライを小一時間も叫んでいる。たまつたもんぢやない。まるで、こじきが、馬をもらつたさわざようだ。夜もふけてくると、ロクなことはない。こんな英単語がのつてい

とかく電気というと、しびれるといつてこわがるが、少しの扱い方と原理さえしつていれば、簡単になおせるものである。特に現在の製品はがんにように出来ているから内部の細かい所はめつたに破壊しない。かえってスイッチの接触不足とか、コンセントがいかれているかといったようなだれでもなおせるものばかりである。家族のために修理してやつてこずかいが入ることもある。何も電気屋に高い金を出して修理してもらう必要はない。われわれは学生なんだから実用的な電気技術を知ろうじやないか。そして現代機械文明の人間疎外の中でわれわれ学生は人間性回復のために、まずその中にとびこんでそれを知る必要がある。バイタリテイの中にとびこんで知つてこそ、その回復の道も開けよう。

スポーツの意義

中 村 悦 二

私はスポーツをやっている者の一人として、スポーツの意義をどう解釈してそれをやっているかを述べて見たいと思います。まずどうしてスポーツをやっているかという、私は好きでそれをやっております。ク

いはずはないのだがと、おもわず机をたたいたら、とたんに表紙が出て和英と書いてあつたりした。気分転換などと、シャレこんで、ラジオのスイッチをひねつた。メロディが流れているなと思うと、CMが入つて喫茶店や食いのばり。どうして山梨放送は、こう喫茶店のスポンサーが多いんだらうね。そのくせ、青少年を守る運動などとログセのように言っている。スリラー小説を出して読んでいると、首筋が冷たく感じた。フト後を見ると父がニツと笑つて立っていた。これがホントのショート・ミステリー。全く四人じやあるまいし、そう監視されたくないよ。時計を見ると、動いていない。時間がわからないから、寝る事にした。眠りかけたが、近所のドラネコめギャーギャーないて眠れやしない。飼い主は、エサをやらなきやダメじやないか。バカ猫をこらしめようと思つて、闇を進むと、カバンにつまづいた。

僕 の 音楽

鈴 木 義 広

・僕が音楽に興味を覚えたのは、幼稚園の帰りに寄つた友達の家で聴いたヴィオリンの音

ラブのため、学校の名誉の為でやりているとは思つていません。そのようなことは自然にそうなのであつて、始めから目的とすることは誤りであると思います。

次に練習がつらいとか、練習のため勉強が出来なくなつたからとかいう理由で退部する者が非常に多いことです。スランプに陥つた時など特に練習がつらく、またいやになることもありますが、それを切り抜けてこそ始めて上達するのです。そこでくじけてはならないと思います。練習の苦しさや、勉強時の睡魔に打ち勝つところにこそ、スポーツをやる其の意義があるのではないのでしょうか。

また机にばかりかじりついていて、身体の鍛練を怠たことは将来に大きなマイナスになると思います。過度の運動をして身体をこわすのもいけません。ある程度の運動はやらないと体力がつきません。またとかく、一高生は利己的になりがちだといわれますが、スポーツをすることによって協調性を養うことも、今の私達には必要な事だと思つて

す。
以上の事からして、私達は大いに勉強し、大いに運動し、自己の限界を知り、それを押し広めていかなければならないと思います。

思うこと

酒井 二四雄

われわれは円の面積は πr^2 とか、円の周囲

は $2\pi r$ とか球の体積は $\frac{4}{3}\pi r^3$ をなどと使う『 π 』をなんとなく「3.14」としているが、

僕が小さいころ昔の数学者には円周率を求めるのに一生を費したというのを聞いたことがあったが、この間ある雑誌にこんなことが書いてあった。

「ピーターという数学者は円に内接外接する正三十九万三千二百十六辺形の周を計算して、 π の値3.1418926535と、3.1418926537と

の間にある事をつきとめた。又、ドイツのルドルスはその全生涯を円周率の計算に傾け遂に小数点以下三十四位まで求めた。又……。」今日の人なら一つの問題に全生涯の全精力を費すなど馬鹿げたことだ。今では電子計算機を使えば幾桁でも求められるではないかという人があるが、真理の探究にこのように熱心な態度をとる学者があったからこそ、文化の華はますます開けることを忘れてはならない。

人間何事においても、一つの事を与えられ

いはずである。

それから「偽善」と「倦怠」の存在を知った。特に偽善が何であるかを知ってからは人生観が大きく変わって来た。あらゆる事が偽善に見える。自分のしていることさえも。この偽善は考えて見るべきである。もつとも知らなければ平和安泰であるが、必ず自分に大きな嫌悪を感じるはずである、もし何とも思わなければよほどの鈍感か自惚れ屋であろう。

とにかく五分前に感じた事と今考えていることとの間に矛盾を感じるが、いつもかあらぬ比重でんと自分の目の前にすわっているのは、入試である。現実強いとつくづく思う。そんな自分にも嫌悪を感じる近ごろである。

思うこと

風間省一

昔から、私達より先に人生をあゆんだ人のいわゆる「格言」といったものがどのくらい作られたであろうか。自分の人生をふりかえり強く心に浮かんでくることを述べ、自分の失敗したことを子孫にくりかえさせまいと考

たらどんなことをしても、やりとげることが大事ではないのか？

POPS に思う

加藤 秀雄

今日ラジオ・テレビでポピュラーミュージックをやっていないときはない、歌謡曲からリパブル・サウンドまでひっきりなしである。しかし世のオヤジたちはどうも氣に入らないらしい。「あんなのはさわがしいばかりでいいとこがない。」というのが彼等の言ぐさである。これは日本ばかりでない。アメリカ「ビートルズ論争」も同様である。しかし我々としては大迷惑である。たださわいである訳ではない。我々の溢れる若さの発散の手段、悲しみを紛わし、喜びを表現するものとしてそれを歌い、聞くのである。（我々はそうあるべきである。）それだからオヤジ諸君も我々をもつと理解してほしいものである。彼等が酒で憂さを晴らす替りに音楽で紛わすのである。

また我々としても彼等の立場を考え、音楽を前に述べたように上手に利用すべきだと思ふ。ただわあわあさわぐ事に楽しみを感じて

えては短かく言葉につづった。そんなものが「格言」となって私達の前にこのようにたくさん残っている。人としてはみずからの喜びを他人にも与え、みずからの苦しみ、苦勞を後の人には与えたくないと欲する気持はよく理解できる。だから「格言」のどれをとつても真違っているものはない。しかし私にはそれらを正しいとは言えない。なぜならそれを用いる人が正しいと決定できるからである。善の決定は自分自身がするんだ。たとえ他人がそれを悪と考えようと自分が善と信ずるなら善として良いと思う。それによって自分が行動できるのだから……。

田舎の友

田中 静男

この頂、責任を他に押しつけ、自分が卑劣だと思ふことが多くなった。物事に妄想的になつて本当に悲しいのにどうして涙が出ないのかわからない。「僕は君の乳くさいところが好きだった、君は忘れてはならない大切な暖くつつんでくれる楽しい意識をどこかに忘れてしまつて……あの頂は愉快だった。春夏……裏山の僕ら岩場・土手の上の六のみ

いる人は、この際考えを改めることを願つてやまない。

無題

今 泉 茂

夏休みからずっと今まで、多量の本を授業時間までもさいてとにかく読みに読んで来た。その結果直接得たものといつたらほとんどなかったかも知れない。だが感動はした。しかし概して感動というものは時間の経過に比例して減少するものである。本から目をはなして誰かと話しをするまで、それで終りである。どんなに高尚な気分に浸つていても、たちまち現実にひきもどされてしまう。われながらなさけないと思うこともしばしばである。

直接得たものは何もなかったが、批判力が少しはできたと思う。今まで読んで来た、あるいは今読んでいる小説にしろ他のものにして、それが完全だと思つてただ盲従的に読むことはしなくなった。

自分に出来ないことを色めがねをとつた批判的な立場から見るというと生意氣のように聞こえるだろうが、これは決して不遜では方

つ、毎日疲れもせず駆けまわつたなあ」ノスタルジア……あの頃毎日俺は君の大家さんから笛吹の桑実（カミズ）の道を目をつむるようにして役場の玄関の電柱に向つて下つたことを覚えてゐるよ。

「君は自分は卑劣だと言つたね……」

自業自得の理を誤魔化さないで自分自身の中に勇氣を持つて不幸の原因を尋ねることが必要ではないのか。」

危機

望月 義時

俺は無感覚という主人に鞭打たれて来た奴隷だった。俺は機械文明に無感覚だった。不思議に時間にさえ抵抗は感じなかった。だが俺は目覚めた。今はその束縛を感じ得てしまった。束縛の輪は徐々に小さくなった。だが俺の理性はあやうく崩壊をまぬがれた。そして俺は精神文明の立ち後れを痛切に感じた。

現代社会は理性よりも衝動の比重が増しつゝあるのだ。その例として、週刊誌が氾濫しているが、理性的なものは数少くてそれにもまして、映画の「どぎつさ」、その模倣者と犯罪の続出だ。未開地の原住民の中では、こ

のような事はないそうだ。やはり精神文明と機械文明とのアンバランスから生じたのだ。そして、資本主義のため競争という輪が一つ加わって、触媒となり衝動の勢力を強めるのだ。

そして、この衝動も理性に打ち勝つ時、完全に衝動に生きる人間となる時、彼はもはや人間ではなく、狂ったライオンだ。彼は王者だ。しかも狂った。片手に機械文明の利器をもち、あらゆる物を破壊しつつ、片手には排他性と嫉妬をもって、退歩的均一化を図るのだ。つまり人間の衰退の一形態を示すのみなのだ。しかるに、現代社会は乳母車の中に、一人おき捨てられた赤子だ。いつ波にさらわれるかもしれない、唯一人助けに来てくれないのだ。彼は一人で砂浜を這わなければならぬのだ。

我々はこの危機をのりこえるのだ。

過去・現代・未来

浅川 春夫

ある日僕は、ぼんやりとはるか遠くの山をながめていた。過去のいろいろな思い出を想起し、試験がなかったらなあと考えながら。

野をもつ八ツの雄姿がその赤茶けた岩肌とともに印象的に見えた。西方には鳳凰、白根の三山それに甲斐駒の南ア連山がその私峰を競うがごとくしているのがすぐそこに見えた。もし雲に浮かぶ小舟があったら、たやすくその対岸にたどり着けそうに見えた。

この素晴らしい眺望はいつまでも強く私の心に残ることであろう。まさに「秩父の雄」の名に値する雄大な眺望であった。

富士山

・藤原 二三男

雑草を踏んで丘の南端に出た。快い日陰をつくっている雑木林はそこで終わりになって急に視界が広がった。

かなり登ってきたので汗ばんでいた。気持ち良く南風が顔をなでる。

正面に富士が見える。良く晴れた青空に突き出ている。ふりかえるとさつき出発してきた部落の全景が見える。三十戸ぐらいである。わらぶきの屋根が多い。ところどころでこいのぼりがのびのびとおよいでいる。親戚の家は部落の入口の大きな松の右上にみえる。お婆さんらしい人が洗濯物をほししてい

ここでも現実と過去が交錯している。この日は確か試験の前の日だと思う。また誰でも、小さかった頃を、折にふれて思いだすだろう。ある時は、現在まで歩んできた道をふりかえり、あの時はあーすべきだった。こうすべきだったと悔い反省する。しかし、過去にあまりとらわれてはならない。何となれば現在は刻々と変化し過去との距離を広げつつある。しかるに過去に生きることとは、無意味である。また現実を忘れてあまりにも高い理想を掲げていてもだめである。未来は、いつか通りかかるだろう地点である。現在をより良く生きることが未来に通ずるのである。要するに、過去の経験を生かし、現在をよりよく生きることが大切ではなからうか。

金峰山

深沢 幸雄

金峰山の頂上小屋に着いたのは午後五時頃であった。（この小屋は山頂より少し下った山の端附近の岩陰にあり、山小屋としては新しい方であった。）一休みした後、私は親切な小屋の番人に炊事の仕度を任せて外に出た。

又、前方を見下すと、桑畑の間の道をパスが登ってくる。もう十一時である。雑草の上に横たわって、五年の暖かい太陽の下でうとうととした。

下から登ってくる足音に目が覚めた。部落の者でないとひとめでわかる。都会風の女生だった。思わずどちらからともなく頭を下げた。胸をみると二年生だった。前に立ったまま、富士を見つめている。瞳は黒く大きくかがやいていた。急いで登ってきたのか、ほほは赤く上気していた。

「富士山はいつみてもいいですね。」と急にふりむいた。目が笑っていた。黙ったまま軽くなづき、目を富士にむけた。いつもより近くみえた。富士山はいい。好きだ。いろいろな山、峠、等からもみたが、やっぱりここでみるのが一番いい。この地にいた時はこちらん、ここを離れてからも親戚にくる度毎にここには来る。雨の日、風の日、雪の日、霧にかすんだ日、日の出の時。見えなかった時もある。

そして青空にこいのぼりがおよぐ今も、じいっと富士を見つめている。さきの女学生が目の前からいなくなつたのにも気づかずに。ふと、みおろすと、彼女は桑畑の間を歩き

外に出ると、秩父の主峰金峰の頂が眼前に大きく映った。金峰は他の山と違って山頂附近まで、這松や苔桃などの小さな高山植物が生茂っている。しかし急傾斜な岩壁を持つ点では他の山と同じことである。日中、海面のように見えた裏白な雲の広がりも、夕暮とともに暗い陰を帯び、まるで前人未踏の砂漠のように見えた、やがて日が沈みその神秘的な大平原も静かに眠った。

翌朝、私はまだ暗いうちに起床した。そして山の朝を自覚するとともに胸に登頂への期待がわいて来たのを感じた。あわただしく身仕度をして山頂に向かった。途中這松が足に掛かるのを注意しながら、しばらくの間登り続け、とうとう山頂にやって来た。その時太陽はまだその全姿を表わしては居らず、ただ雲海の東端が赤く焦がれているのみだった。

周囲には山々の姿が薄くかすかに見ることが出来た。やがて白い太陽が全姿を表わし、暗闇が去り、急に私の前に明るくありありとした光景が表われた時、思わず私は感嘆してしまった。正面にあの崇高優美な富士が大海に浮かぶ小さな孤島のように雲上に、小さく頭を突き出していた。振り返ると、広大な裾

ながらふりむき、手をふるのが見えた。その時になって「富士山はいつみてもいいですね。」といった。細い高い声を出した。

富士登山

今沢 政秀

七月二十九日突然友人から富士登山の話を出されてびっくりしたが、別にする事もないので参加することにした。メンバーは同級生の四人である。しかし登山の準備を始めたがなにしろ海拔四百メートルぐらいの山しか登ったことしかないで困ったが、富士山に登ったことのある兄に聞きやつと準備し翌日の三十日午後五時半のバスで甲府を立ち、8時ごろ河口湖についた。それから登山バスに乗りこみ、スバルラインを五合目を目ざして約一時間半の道のりである。車窓から見えるものは黒い松の姿と、時々鳴る雷の光だけである。バスの中には冬の姿をした人々が小さな電球の光の中でこれからの登山のために少しでも余力を蓄へようと静かに眠っている…。

しばらくすると水銀灯の冷たい光が見えた。もうすぐ五合目である。バスを降りると、まわりの暗い静けさとは別に休憩所の黄

色い光の下でこれから登山する人々がせわしく動いていた。午後十時五合目を出発し頂上に向かう。これから夜中の行脚である。さいわいさきほどの雷は遠のいて月が出てきた。六合目あたりで一高の先輩に会ったが、大学入試に備えて精神統一とのことであった。そこへいくと我々は気楽なものである。しばらく登って行くうちにいままで見えていた木立がなくなっていた。友達に聞くとこのあたりが木の生息の限界だそうである。七合目を過ぎるころ頂上附近に月の光を鈍く反射している青白い雪が見えた。この雪は溶けることを知らない万年雪だろうか、なんとなく霊山「富士」にふさわしい神々しい光景である。

火山岩の道はさらに急になってとても歩きにくくなり、いつ果てるともなく上に続いている。そろそろ風も激しくなり寒さがいよいよよきびしくなってきた。時計を見ると午前二時である。いままで下界の暑さに馴れていた我々にとって非常に寒く感じた。八合目の休憩所でセーターのうえにジャンパーを着、手袋をして防寒体制を整えてから一気に登ってしまおうと出発したが、十五分ほど登ると足が言うことをきかなくなってしまう、しばらく休むことにした。もうこの辺まで登ると富

士吉田市などは深い井戸の底のようで、河口湖や山中湖は一粒の露のようである。休憩の後、また登り始めたが、またすぐ休んでしまふ、こんなことをくり返しているうちに、前方に小さな鳥居が見えた。その瞬間これが兄の言った頂上の鳥居だと思った、もう我々は無我夢中である。四人とも先を争った。

「ああー」ついに五合目口から五時間半の苦闘の後にはやっと頂上についた。もう休憩所には登ってきた人々を迎えるかのように火、はちに赤々と炭が燃えていた。我々は疲れをいやすために横になった、と同時に一種の勝利感安心感がこみあげてきた。困りの人々の顔にも喜びがあふれている。

東の空が白みはじめるころ表に出た。濃紺の空がしだいに透き通っていく、とみんなの顔に赤い光がさした。御来光である雲海の中から巨大な太陽が我々の苦勞を忘れさせるように昇ってきた。それに向かって手を合わせ人、カメラのシャッターを切る人、じっと見つめる人、それは輝やかしい、静かな一瞬であった。



黙ってられない

笠井 貴久男

第十一回青年の主張全国大会を聞いて、私は、自分の心の弱さ、意志の弱さを、つくづくと感じ、同年輩の働きながら、勉強をしている人々や、不幸にして、両親を失なわれた人々等に、深く深く、頭の下がる思いがしました。彼等は、強固な意志と、忍耐力と、大きな希望の有機的に結合した。どんな逆境にもまけない、精神的な、純粋な、何かを、もっている。それは、私の様な者には、つまり親のすねに、かじりついている者には、とても、持つことができないものです。

現在の矛盾した、狂った社会、二、三例をあげて見ると、青少年の犯罪、人間が規格化製品化されつつある社会、そして、夢と希望に満ちている私達も、大学に進学し、大部分一平凡な、サラリーマンとならざるを得ない様な社会に、そんな社会に、私は、大きな反発を感じるのです。しかし、この現状に背を向けることは、できないのです。と言って私達若者が、このまま、今の状態で進むことができるでしょうか。

考えれば、わかることです。できないのです。否、してはならないのです。解決する方法は、一つあるのみです。それは、私達も、彼等の様に、自ら苦しい試験にたえ、その貴重な経験から、彼等に、勝るとも、おとらぬ様な「強固な、意志と信念を、築きあげ、それに向かつて、前進することです。ともすれば、勉強のみに、追われている一高の諸君、たまには、こんな事を考えて、みるのも、よいことではないだろうか。

舞踏会を読んで

柳沢昭憲

この作者（芥川竜之助）は巨大なる、すぐれた繊細な神経によって、傍観的、消極的世界にひたつて、独得の世界を形造っているようだ。さて本文のあらすじは、鹿鳴館でのある舞踏会に明子という令嬢が、不安感をいだきつつ、出かけるのである。到着して、理的、美的な自己を見い出すのである。やがて美男子の海軍将校と顔を合せ、踊るのであるが、ここでも将校の行動、態度により、自分が満足感を得る。そして、休息して食事を共にしている。その席で、何かのきっかけで、

五重塔

塚谷次雄

西芳寺、石山寺、銀閣寺とどの寺についてもああ寺らしいな、と感じただけで、竜安寺にいたってはただ一回りしただけである。どこに行っても観光客がウジャヘといる。

二日目の夜興福寺の五重の塔を下から見た時、どこにも良い所はあるものだと思つた。法隆寺にしても薬師寺にしても、相異はあろうが五重の塔は美しく人の目をひく目鼻の様なものである。しかし人気がない、まっ暗な中に立っているそれは美しくはなく恐ろしく目をひかず圧倒する。目鼻などというなまやさしいものではない、巨大な仁王像である。それはまるで寺全体を守っている様にそびえ立ちがんとして動かなかつた。翌朝見たそれはもう恐ろしくほなく、目をひいた。夜だからと言ってしまえばそれで、なにも言えないがなにか生き物の様に、大きく高く重く立っていた。

この海軍将校が考えこんでいたが、やがて、「私は花火のことを考えていたのです。我々のヴィ（生）のような花火のことを……。」といったと書いて一区切りになっています。

そして次の段の所では老夫人の明子が、汽車中で、一青年と前段の事で口論し、明子が相手の将校はジュリアン・ヴィオという人だったといい、青年はピエール・ロチだといひ問答している場面で終っている。

私はこの小説をよみ、人間の、はかなさ、もろさというものを、痛切に感じた。そしてあの将校の「私は花火のことを考えていたのです。我々のヴィ（生）のような花火のことを……。」という言葉に、この作者の言いたいことを、発見することが出来たことはいふに、と共今新たに、恐怖感という様なものを感じしめられている。又、作者が第二段の所で、積極的に、人間の生命の短かさと、それに対する、月日の立つ早さとを対比させている点は、前文を、盛り上げるのに、大きく役立つように思える。そして我々は、この短い生涯を、悔いすることのない様、「日走れ好日」となる様、生きなければならな

考える事

内藤 茂好

青少年の非行が、大きな社会問題としてとり上げられている。そしてさまざまな対策がなされているが、なおも絶えない。先日東京で少年の通り魔がつかまり、正月には、少年と少女が墜落死した事件の起った事は、承知の通りです。我々はこれら青少年を、自分とは縁の遠い者として片づけがちである。しかし、そう考える事自体、非常に危険である。僕は思う。非行の問題について考えて見る必要があったと思うのだが、先日の総会ではついにとり上げられなかった。我々は小さな失敗を反省してみたい。たとえ、それがどんなに間違っただけでも事の小さながゆえ、目をしてしまふのである。たとえば、総会の場自体がそうである。先日は、審議事項の大半をのこして流会となった。議題を審議するか否は、成程、大した事ではない。しかし、そこに見た協調性の欠如……すなわち、自己本位的な考え方には一考を要する。孤独の生活にはあせりが出、無計画になりやすい。こんな時、何かの刺激で発作的に大事件を起こすの

なると思う。自分ももともとがんばりたいと思う。もし苦しさを卑劣なものと感じこれに負けそうになった時にはあの夜のあのシーンを思い浮べて。

この一年間の図

書部と僕

石川 利彦

新入生歓迎会…小松農園の猿のおりとにらめっこ。どっちが猿だっけ？
部だより発行…全員そろって初めての仕事。
出来はともかく楽しかったべ
夏期製本講習…誰だ／本を開かなくしたのは暑さにもめげず皆よくやった
本栖キャンプ…ボート、トランプ、ツイストがうまくなったっけ。
図書部長就任…世の中には物好きな人がいるものだ。
球技大会…二年の女子大いにハッスル。
二、三年の男子顔負け。
文 化 祭…よい勉強になり初めてとして
は思った以上に良く出来た。
図書館だより…目下編集集中。いつ仕上がるのやら？

ではなからうか。とにかく、自己を把握し、考えて行動すれば、それが自分を守る最善の方法であり、さらに前進を促進させるものであると信ずる。今の社会は、一部の常識を忘れた行動が目につき、一名「狂った社会」などと言われている。しかし、やがて来る我々の時代には、もっと健全な、すばらしい社会をつくらうではないか。…あと一年余りとなつた学校生活であるが、まずは、今までよりさらに良い生活を送り将来のために頑張ろう。最後に、棚に上げておいた自分を引きずり降ろし、皆さんの嘲笑をいただきたい。

あのシーン

土 屋 一 三

東京オリンピック第十四日目女子バレーボール日本対ソ連の試合をテレビで見た。一セット二セットと日本が危げない差でセットを取りはしたものの第三セット後半これでもかこれでもかと追いつけてくるソ連の反撃はものすごかった。息づまる接戦、手にあせをにざる熱戦、しかし、これも長くは続かなかつた。とうとう日本の勝利が天からストンと落ちてきた。この瞬間、この一瞬の場面、それ

ある一つのクラブに入ってクラブ活動することは、親友をつくり、授業以外の勉強も出来、また高校時代のよき思い出として一生涯忘れることはできないであろう。

世界平和への道

志村 郁造

平和の象徴である東京オリンピックは成功した。昔とは違い今や世界のオリンピックとなった。白、黒、黄、色あざやかであった。英雄が出た。アベベ、シヨランダー、とくに米国で問題の黒人が、ヘイズがすばらしかった。しかし、問題はあった。インドネシア、北朝鮮また六億の民を有する中共の不参加は私たち青年にとって大きな失望だった。しかし、その最中、世界は大きく揺れ動いた。その中で中共の核実験はその唯一の洗礼国として私たちに大きな驚異を与えた。

昨年私がヨーロッパに行った時（仮説）、そこにあつたカーテンは世にも恐るべき鉄のカーテンであり、ベルリンの壁は氷よりも冷く不気味だった。戦後二十年、世界は一つの大きな冷蔵庫の中にはいつてしまった。ぼう大な若いエネルギーはことごとくその熱を奪

を私は忘れることができない。

長い間激しい訓練を耐え抜いてきた彼女らが、苦しさを常に共にしてきた仲間達が互に抱き合つて泣いた。そしてこの偉業を成し遂げた大松監督はベンチで一人静かにうつむいていた。実は私はテレビを見る前からこの場面は想像していたし、同時に期待もしていたんだつた。ところが実際の感じは想像とははるかに違つていたのだ。元来感激したり興奮したりしやすい私だがジーンと目頭が熱くなつてきて本当にどうしようもなかつたのだ。

それにしても、苦難、緊張、疲れ、こういったものから一瞬にして解放された時の彼女らの心情は私などには計り知れないものがあるにちがいないけれども苦しきあとの非常なる喜び、苦しさを自らの限界を越えるような努力で乗り切つたときの喜び、私はここに人生の本質的な美しさがあるような気がしてならなかつた。

ところが自分はどうだ。この人達と自分を比べてみたときに自分の努力の足りなさ、自分の考えの小ささを思い猛省を促されるのである。人間てものではでき得る限りの努力をしている時が一番幸福だと思つてまたそうすることがそれ以上の幸福を生み出すことにも

われてしまった。
東京オリンピックの聖火が沖繩に上陸した時、日の丸を振りながら祖国の火を見つめたその老人の目に光つた涙を私たちはどうしたらよいだろうか。

戦争を知らない私たちではあるが、私たちの生まれる少し前を思い出してみよう。その時代に尊い青年期を過した人々はペンを銃にかえ、戦い、死んだ人が数多くあつた。今の私たちにとっては現在幸福すぎるくらいだ。しかし、ただ目先のちよつとした幸福やはない快樂にのみかまけ、教育の本来の目的の一つである「人権平和のために尽くす。」を忘れてはいないだろうか。諸君、目を大きく開こうではないか。広い宇宙から地球をながめようではないか。十七才のこの胸に勇氣を持ち、大志を抱いて勇往邁進しようではないか。

日本の進むべき道

斉藤 雪男

一月四日ごろの夕刊（読売新聞だと思つたが）ある大学の教授が、「今年二九六五年」は、日本はある転期に立たねばならない。」

と新聞で言っていた。たしかに去年の中共の核実験によつて、核の恐怖からのがれることが（今までもそうだが）、でなくなつたこと。それから、このままゆけば、インド、イスラエル、エジプトで核実験をおこなうという。怖しい「核分散」が起こる。これを防せようと、アメリカでは太平洋、東南アジア、極東をアメリカの大きな「核のカサ」の中にくみいれようとしている、（つまり新安保条約）。こんな流動する国際情勢の中で、日本はいかに進むべきか？ フランスの軍事評論家ガロワは日本の将来進むべき道について四つの道を予言している。（いままでも予言はいろいろあつていた。」と書いてある。）

まず第一としてアメリカの防衛構想の一環に日本をおく。第二としてアメリカに対するフランス、ソ連に対する中共のように、日本も核武装することによつて、国際的な主体性を確保する。第三として非核武装中立にふみきる。第四として自衛隊に依存してアメリカ防衛構想の一環として主体性を充実し平和建設に貢献する。以上の四つだが、国は①では主体性は失なわれる（独立性も）。大国として進むべき道は②だろう。しかし憲法が障害となるばかりでなく、世界で唯一の核被害国と

しての国民の支持も必要である。これは現在の日本では無理だろう。③も国際的な常識に反するので、不測の事態はまぬがれない。第四これが現在の日本の理想だろう。しかし理想と現実とは、くいちがうもの。なんとかして若い僕達が、新しい日本を建設して、世界平和に貢献すべきである。

春という季節

名取一好

僕は春という季節がひじょうに好きだ。山の緑は萌え、野の草花は、いろとりどりに咲き乱れ、春の精なる蝶は飛びかよう。しかしこれだけではない。これは単に春の表側だけであり、その裏側には、生命の維持という並み並みならぬ労苦があるのだ。あのきびしい冬の寒さに耐え、あの風雪に耐えぬいた生命の喜びを春は、僕に感じさせてくれるのだ。仲間の中で死んでいったものや、枯れてしまったものもあるであろう。しかし、そこに生き残った生命は、次の生命を創造するよう又努力するのである。そしてその中のあるものは又死んでいってしまうのだろう。生物界において、こんなことが何百年、何千年と続い

て来たのである。

『心の糧』―『友』

中 沢 保

いよいよ三年となり、一年後には入試と言う難関が迫っている今、勉学に一生懸命励んでいく上において、又それと同時に、立派な人間に成長していく為にも、一番必要かつ重要なものは「心の糧」となるものではないだろうか。しかし、「心の糧」となるものと言いたいのは親友をつくらうと言う事である。保健の教科書にもでていた事だが、今の僕らの年代の人達にとつて「友と語り合う」と言う事が、何よりもまさつて楽しくかつ大きな慰め心の発達と変わるであろうと思う。この高校時代に、是非互いに理解しあえる良き友達をつくらうではないか。そうすればその友情は、将来の自分にとつて最大の心の糧となるのではないだろうか。

復活の日

平野和春

冬になると、ぼくは、自然の偉力を、いつ

より強く感じます。

冷房完備の教室のぼくらクラスメイトは寒さと戦つて、勉強に励んでいるので当然ですが、暖房のきいた職員室で暖かいめをみている人たちも、周囲からジリジリと圧迫してくる冬そのものの圧力を感じないではいられないはずだ。

そんな時、ぼくは、自然に対する人間のかわさを―あるいは、人間に対する自然の強大さを、あらためて感ずるのです。

もちろん。人間は、積極的に自然にいどみ人間にとつて住みやすい環境にかえつつあります。

地球上の暑さ寒さはもちろんのこと、大規模の地球開発もすすむでしょう。そしてそれは、宇宙の方面へも、おしすすめられるでしょう。人間の住める環境は、ぐんぐん広がつていくでしょう。それが、未来の宇宙開発の規模であるべきだからです。

にもかかわらず、人間の努力は、大自然のほんの一隅に、ひつかき傷をあたえる程度のちいさいものにすぎないでしょう。

人類が、これからどのくらいの年代を生き続けていくか、それはわかりませんが、それが一千万年、一億年であつても、大自然の無

限の時とくられば、ごく僅かなものにすぎないでしょう。人類は結局、自然のなかに包まれ、自然の力の域外へは一步も出られないままに、いつの日か消滅していくのです。

ある日あるとき

石原与志夫

よく晴れた日の夕方、地熱の全く感じられない死を想像させるほどに冷たい大地に立った。星がすこしずつ輝き出して来た。東方の南アルプスは薄暗くそまつている。その赤みが消えようとするあたりにやや自ばい水色がかった帯が流れている。それより天頂になると紺の中に美しい銀白色の光をはなつ星が夢物語に酔わせるかのようにまぶしい程の清純を永遠にうたい続けている。いにしへの思い出をあれやこれや考えているうちに、あつというまに星は黒いピロードの上にダイヤモンドを降らせたように輝やいていた。

冬の夜汽車の中、窓はくもっている時々しずくがガラスの一番下まで達する。そこにはみかんが窓の端から端まですきまなく並べてある。週刊雑誌は投げ捨てられ、みんな話に

夢中である。頭のはぼせていかにも若々しい。みかんは甲府につくまで全部食べてしまった。

波

中込久則

長い海岸。そこには絶えず波がある。ある時は強く、またある時は弱く打ち寄せる。波は果てることがない。また一瞬の間も止まることはない。同じことの繰返しのように見えるが、けつして単なる反復ではない。常にゆっくりではあるが変化しているのだ。

また時によつては高波や津波も起る。長い海岸線は、あるところでは削られ、またあるところではその形を一変してしまふ。そしてまた穏やかな、静か龍海から新しい海岸線に向つて、波が打ち寄せる。波はいかなる時も休むことを許されない。晝夜その仕事を続ける。今も波は水平線の彼方より、岸に向つて単々として進んで来る。



フアイト

川口純一

我々にフアイトがなければ何にもできない。フアイトは自信と信念より生まれ、これらは自分が一生かける意義のある目的より生ずる。ただ将来が約束されているからといって、出世への最短コースだからといって大学を選んではいけないと思う。

このハン雑で欠陥の多い又ぶっそうな現代社会において我々への人々の期待は大きい。

現代社会の困難な問題に背を向け自己主義にならず、これらに積極的にぶつつからねばならない。」その面で我々はただ就職条件で学校をきめるべきでない。

ある大きな目的のため高校時代だけでなく一生努力すべきだと思う。

たわごと

飯室哲也

ヒュー。ヒュー。冷たい風の吐息。ミシ。

ミシ。枯葉の踏まれる声。本当に独りきりになった。望どおりになった。だれも私の心にな

雑感

岡本明

師走のある日。空の白く、どんよりと曇りの日。地面のしめって足にもひたひたと感じて歩いていった。しばらくして、遠くの電線にたくさん的小鳥が上下二列をなして止まっていた。小さく黒い点に見える。その集まりはみごとであった。あたりには雀が飛び急ぎ、声が聞える。小鳥はしばらくの間、電線の上で休んでいたのか。すこしたって、何かがあった、何であるかよくわからぬが、バシツというような音があったような気もする。それを感じた。その瞬間に小鳥たちはいつせいに一羽のこらず飛び立った。飛び立つと同時にみごとな編隊を組んで、その動く点の集まりは大きくなったり、小さくなったり、濃くなったり、薄くなったりしながら大空を飛び続け、次第に速さかり、最後には雪の片のようになって白い東の空に消えていった。この間数秒にも思えたが、あるいはもっと長い時間であったかも知れない。それにしても、かれらはどこまで飛び続けるのであろうが、おそらく、ずつとずつと遠く離れた地方へ、長い

入る事は出来ないんだ。干涉出来ないんだ。ああ、何と素ばらしいだろう。私は永遠に独りなんだ。木々よ、雑木よ、枯草よ、喜びの盃を、合唱してくれ。ああ、我友自然よ。

さみしすぎる。さみしすぎる。自然よ、お前は自分よりも一歩も出ない。私の入る一分のすき間も与えてくれない。なぜだ。私はあんなに寛大だったではないか。人が悲しい。人が。私は余りにさみしすぎる。

ワツハツハツハ。お前もやはり人間だったのさ。彫刻じゃなかったのさ。血の通う、肉の有る人間なのさ。ワツハツハツハ。さあ、愉快にやろうじゃないか。ワツハツハツハ。一ああ、うるさすぎる。騒がしすぎる。こんなじゃないんだ。こんなじゃないんだ。私は独りになりたいああ、独りになりたい。脱落者。ワツハツハツハ。

闇の中の灯

日野原正樹

身を切る様な北の風が、乾ききった校庭の砂を人気のなくなった校舎にたたきつけていた。忘れものを取りに戻ったボクは、風からにげる様に、すでに薄暗くなった教室にとび

長い旅を続けるにちがいない。山を越え、川を渡り、平野をゆく。きょうもあしたも。

初心

奥山克

高校へ入学して早くも二年たった。いろいろな残した事が多く後悔するばかりだ。運動にせよ、勉強にせよ自分が最初にしようと思うことを、ためらうことなくやりとげる意志の力の必要を痛切に感じている。人があんな事をするから自分もやってみたいと思う事はたくさんあるが、これを一つ一つやっていては自分の初心を貫けないばかりか大きな後悔が残る。いくら他の事に手を出さなくとも自分のしていることに疑問を持つものだがこれはその時その時の自分のしている事に対して全力を向けて努力すれば解決できるケと思う。私は自分の初心を通してその時その時に全力をつくすという信念をもって来る三年に対処したい。

夢

深沢正彦

こんだ。そしてそこで見たものは、ついさっきまでのあの騒がしく、活気あるそれではなかった。陰気な白壁、雑然と並べられていくつたくそんな机、すき間から吹き込む風に何の抵抗もなくあやつられていく。色あせたカーテン、すべて昼間の教室とは似ても似つかないがめだつた。あまりの不気味さにそこにいたたまれなくなったボクは、忘れものを手にすると黒い教室を背に、転がる様にほこりの荒れ狂う中にとび出した。この時から放課後の教室に、はげしい嫌悪をいだくようになった。しかし、それから数日後、やはり激しく風の吹く夜、私用で学校の門の前を通りかかると、校舎は青黒い夜空に、たち向かうようにして立っていた。それは明るく昼間以上に大きかった。窓のいくつかには、電灯の光があふれていた。そう、そこには夜の高校生の学習の場でもあったのだ。夜の教室は、昼間と同じ、いやそれ以上に新鮮で活発な生活が満ちているに相違なかった。学校は夜もなお生きている。

あの風の吹く夜、何かに感動したボクは、確かに重大な多事を学んだはずである。黒く明るい、大きな建物から。そして、もちろん我が教室は、いつもすばらしい。

僕は、こんな夢を見てしまった。それはついこの間だ。それは、大学をかなり受けてみたが、その全部が受からなかったというのである。その時、つまり夢の中で、僕は、とてもがっかりしてしまった。そして、死にたいような気持ちだった。そして、その不合格というのも数学でいうと、十(プラス)と(マイナス)あるいは計算の違いといったものですべての大学が不合格になったというのである。だから直さがっかりしてしまった。友達らはみんな希望している一流校に入れたのであるから、ますますがっかりしたり頭にきたりした。そして、自殺をしようと決心して、それに取次ろうとする所で、やつと目がさめた。この時は、安心した気持ちと、これからの不安とで、折り重なった、複雑な気持で、一杯だった。こまでだと、よくある話であるが、よく考えて見ると、このような凡ミスは、この間のテストの時にあったのである。このまちがいが、夢の中では、大事な大学入試の時に表われたのである。この間のテストが終わった時は、このような凡ミスは、それほど、重要視しなかったが、ここで改めて考えさせられた。これからは、このよい教訓を生かして、もつともつと注意深くしかも、しつ

かりとテストを受けるつもりだ。

一月一日

伊藤利治

はや一九六四年も終わり、新年を迎えた。毎年このことではあるが、今年こそは、今年こそはと計画は立てる。しかし実行がともなわない。だからといって、計画を立てないわけにはいかないだろう。やはり一応は立てる。しかしいつまで続くかは保証できない。

僕にとって、正月も師走も、別になんら変わりはなく、単なる風習的行為にすぎない。なぜならば、一応機械的に計画は立てるが、また機械的に忘れるからである。まさに三日坊主である。

しかし、やはり新年にあたり、たとえすぐ忘れはしても、新しく計画を立て、希望を持つこと自体は事実であり、正月ならではである。

だから今年も例年の如くにし、また今年こそは例年の如くにならないように努力するつもりである。

列車の中で

道村富美男

早朝、あわてて飛び込んだ車内、そこには暖かい空気がある。天井の電灯が窓からもれる、薄黄色の日光にかすんでいる。わずかに五人の人しか見えない座席、ほっと一息ついて窓をながめると、水滴で曇ったガラスにブラットホームが映る。しばらくするとホームは消えた。水滴をぬぐって外を見た。外は冷たいだろう、家もどう細も、川の水も、皆白みがかって見える。霜の一粒一粒が朝日に輝いているようだ。たまにもやが、かかった日には水蒸気が踊りながら窓ガラスをなでていく。外はまるで別世界のようである。ふと顔むきを車内に移すと、座っている人が再び見えた。うつとりと外をながめている中年の会社員、眠っている若い人、時々かん高い声を発するおばさん達、みんな何も考えないでのもんぴりと座っている。自分はこんな静かな暖いふんい気に誘われて楽しい夢想に取りつく。まわりの物は消えて不思議な場面があらわれる。透き通らない空間で別かれて自分の自分達と他の世界、そこでは時間が逆だつ

豆 単

新津章二

去年の秋、友達がやっているというので豆単を買った。もともと豆単には賛成できなかったが、「単語は入試英語の『可否を決定するカギ』である。」などというはしがきを読んで、「よし、いつちようハッスルするか。単語の一万くらいいいしたことはない。」まったく覚えぬ先から大船にでも乗ったつもりでいい気なものであった。軽くなめてかかったのが大失敗。何日たってもさっぱり覚えられないどころか、既習の単語までも忘れていくような傾向である。少なからず自分の頭の悪さに失望せざるをえない。チクシヨウ、たったこれっぽっちの本がこうも自分を悩ますものかと、かみつきたくなる。事実、覚えてはそれを食べるやぎのようなやつもいるとか（？）のことを聞くがまさかやぎになるわけにもいくまい。うっかりかんしやくをおこしてたべて盲腸にでもなったら大変だ。まあ頭の悪いのはうまれつき／もう一度「傾向と対策」をたてなおして末長く冷静にやりなოსとしようかの

たなんてふふん。もしかして自分と同じ全く同じ人間がいるかもしれない。

管弦楽の響きが胸をはいた。と、そこは十八世紀頃のヨーロッパ。彼は髪をふり乱し首の引つ込んだ石のような体を激しくゆすっていた。そんな体から、ただ美しい純粋な音だけがつき出ていた。素晴らしい、人の音楽だった。

暗いやみばかりの夜、松はたまに自分の方を刺した。そこから空を舞い屋根をよじ登って目さす部屋へたどりついた。戸に油を流し毛皮の帯をさつと敷くと、自分の足は一歩一歩目的に、しかし下人がさげんだ「出あえ」下の方からとどろくような足音が、私の手から十方手り剣を飛び立たせた。

自分は三十キロ付近をひた走りだった。アベベはすぐ先の方に少し疲れながらも長い足を動かしていた。オリンピック実況中継の車が自分の足のすぐ後にくっついていてた。私は急にスピードを増した。横にアベベの黒い顔が並び後の方へずれていった。

目に見なれた家の屋根屋根が向きをかえながら明るく建っていた。今まで思った事を考えて見ると自分の余りにも空想的だった事がおかしいくらいである。しかしまるで目の色

この方向

小沢一隆

昔から月ほど、歌に詩に吟ぜられたものも多くはない。今夜もその半円いっばいに光をはなち、薄くすみきった光を地上に、そして僕になげかけてくる。一昨日雪が降ったのであるから少し観賞の時期違いではある。

家の中から運んだ暖かい陽気な空気と交換して、一面の冷たい空気が僕の身体にしみこんできた。もう近辺のあかりは消えさり、わずかに街頭が小さな、そして忘れさられたものの様に点在している。四方の山々のふもとにはかなりあかりが残っていて、全体が相映じあつて目の前に浮かんでくる。

この厳しい寒さの中で、両手を上げて深呼吸し、大きく背のびをしたら、姿勢を正して一つの方向を力のかぎりながめて見る。

僕の進む方向だ。決めたんだ。思いきり走ってやるぞ。



が薄緑色に輝く少女達にも似たこんな自分には非常に満足している。まだもとの自分のままだ。一番忘れがちな自然の自分はまだいると、汽車は私の自己満足を乗せて走り去って行く。駅から出た自分には現実がああ絶えられないきゆう屈な風がほのぼのした、朝日のぬくみを流して、頭といわず呼吸も奥深い心臓までゆううつにする。そんな時私は、「飛ばされたいだろうな」そんなはつきりしない不安めいたものが、心の底でささやくのを聞くのである。

後悔

大森浄二

ある朝私はある寂しさにおそわれた。それは、いまの味気ない生活によるものである。

味気ない生活とは、勉強、そして勉強にあげられる生活である。

しかし、勉強を忘れて思いきり遊ぶ事は必要な事である。それによって、味気ない生活に少しは楽しさが出てくる。

しかし私にはそれが出来ない、それは今の私の学業成就に対する不安からである。

もつとよい成績になれば生活に余裕や張りも出てくるだろう。なぜなら今の勉強第一の生活において、成績の上下はどうしても考えねばならない事だからである。成績において上位に位置するという重要な事を得たという自信に裏づけされて生活に余裕や張りが出てくる。

私は今になってようやく、今の生活において勉強し、よい成績を得るという事が、単に大学に入るただけに必要なばかりでなく、また、高校生活を楽しく過ごすためにも必要な事である。という事が分った。

その前夜

飯沼 明

べ切りまであと半日しかない。「いくら考えても良い文がうかばない……なんて思っていたら文ができた。これを提出しよう。」なんてのが一年の学年誌にあったが、私もこれと同じことを書きたい。しかし盗作になる。ごたごたはおこしたくないと思った。何んかないかなと思っても、何にもうかばない。残り時間は少ない。アセルナ、アセルナ、植木君でも頼めば何んとかしてくれるだろうが、

これからでは遅すぎる。

ふとそのとき、私は国語笑字典の一節を思い出した。この本はたいへんおもしろい。勉強して疲れたあとなんか読むと気分転換になつていい、ぜひ読みたまえ。（こう熱心に買え買えというからといって、あいつ出版社からいくらかりベートをとっているんじゃないかと思う人がいるだろう。パレタカと答えたいがそうじゃない、かといって本屋の息子でもない。残念でした。）盗作のすすめのところに、言語生活は盗用盗作の連続である。」と述べてあった。これは私にとって救いの神であった。

かの有名な島崎藤村だって盗作をした。これを読んだときもうしめたものだと思った。島崎藤村でさえしているのだから私がしてもかまわないだろう。そういう心がけがいけないと注意する人もいるだろう。頼む、みのがしてくれ、あとでたんまりと……へへへへ、わかつてるねえ。そこで、一大傑作を作る、いや盗作することにした。

吾輩は猫である

吾輩は猫である……ページ数の関係で略す………南阿弥陀仏々々々、難有い々々」どうだすばらしいだろう。これで今日の芥川

しまったからだ。

ケネデイとの会見

三井文彦

俺がケネディ大統領と会ったのは一九六三年の八月、ワシントンとしては暑い目だった。ホワイトハウスはその名の通り、にぶい白色に輝いていた。その大きな鉄門の前にした時、俺は日に焼けて真っ黒になったこの顔が熱くなったのを覚えていた。

思えば長い旅であった。昨年の七月に横浜港を出帆した。その時俺は日用雑貨、下着などの入った大きなリュックをかつぎ、ふところには十万円ちよつとあった。大勢の人が見送りに来てくれた。俺は感激で本当に涙が流れた。

それからの旅は涙あり、笑いありで、今考えると実に楽しい思い出。まずフランスに上陸し、パリに向った。テクテク歩くみちのりのなかで見た事は、すべて日新しい事だった。

パリでは様々の体験をした。パリの女性は美しいと実感をもって感じたのもこの頃だ。パリですですに有金全部はたいしてしまった。そ

賞は俺のものだ。どうせやるなら大きいことをやらなくちゃ。これで三年（もし進級したらの話しか）、の学生誌のことももう安心である。

子供の夏

中林源吾

太陽のさんと照りつける中に、男の子が昼寝もしないで、もろこしの木でかこまれた細道を歩いている。子供は妻やら帽子をかぶり白いあみを持ち虫かごを持って、中にはミヤン、ミヤンとニイニイが鳴いている。その子の父はある建築会社の技師で母は彼が生まれて三年目に帰らぬ人となつてしまった。今の母は継母である。子供の好きな夏になると、彼の家の近くのお寺の杉の大樹にセミをとりに行くのである。子供はつかれると大樹の木かげによりそつておかあさんのお乳をついきのうまで吸っていたようなかわいらしい無邪気な顔をして眠っている。

子供の足に一匹のアリがのしていく。子供は今何の夢をみているだろう。きつと幼いころおとうさんと、おかあさんに手をひかれて動物園のおサル電車に乗ったり、おかあさん

にだかれて象さんにユサをやっている夢をみているだろう。今日も又男の子は妻やら帽子をかぶり白いあみを持って通る。

題のない話

深沢正樹

学年誌の原稿を書けと言われたが何を書いていいのかわからない。一応、記録に残るの・であるから、そうくだらない物も書けない」といってやたらに形式ばつたものでも面白くない。詩など作るのは、わりと手頃だが、作詩などする柄でもないし、ありきたりでつまらない。「去年の反省」などというのもありかしいけれど、こんなものを書きはじめたら原稿用紙の三枚の中とうい押しこめられるものではない。（反省することがあまりにも膨大すぎて）それでは「今年の抱負」などというのはどうだろう。大風呂敷を広げ過ぎて恥をかくのは目にみえている。

一体何を書いたらいいのだ。

小学校の頃「作文は心の中で思った事をそのまま書きなさい。」と先生にいわれた。まったくその通りである。なぜなら思ったことを羅列しているうちに右のような文になつて

おもしろかった

山田七利

男子クラスにはいつてよかったと思う。一年の時男の最後だったから大きい体をいつも小さくしていたが、頭上には頭上がある1後には後がいた。授業中静かにしたためしなし。これはたのしかった。そして民主主義のぬけた自由主義これもまたたのしかった。自分はいつも開手、受身が専門であったが、二高が女だけの学校であるように一高もまた男だけの学校がいいかもしれない。

今

秋山義人

この青春期、過去は短かく、未来は長く感ずる。この中で毎日毎日がたちまちのうちに過ぎ去って+まう。このたちまちに過ぎ去ってしまう青春期に、僕はは何を考へ感じ取りいかに過ごしていったらよいだろうか。

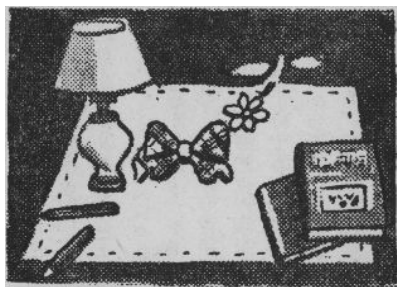
この時期は、『第二の誕生』と云われる。この『第二の誕生』が、これから先の僕達がいかにして生きて行くかを、どのような人間

として成長していくかを、方向づけ決めていくのである。今までの考えから新しい感情・欲望が生まれてくるこの時期において、毎日毎日が僕達を刻々と新しく生まれ変えつつある。それは決して一日で変化するものではない。この時期の毎日の生活の中から少しうっ少しづつ変化して行くのだ。

今まで歩んで来た僕達の後の道は、まわりの人に手を取ってもらい歩んで来たのである。これからは違う。自分で方向づけ進むのだ。その道は、長く険しい道である。苦しい時もあるだろう。が、途中で同じ道を歩む者と行き合い、彼と友となり助け合い進む事もある。だが、その人はいつ自分と異なった道を進み出すかもしれない。あくまでも自分は自分自身なのだ。

青春期はただの新しい誕生と云うだけではない。それは、この時期の間に、自分の方向、考へが一挙に逆転しつづきを変え得る時期である。ここで変化した物は後々の人生に長く尾を引くにちがいない。

『青春は友情の季節である』と何処かで耳にした事がある。友情がない青春ほどつまらないものはない。そしてどのような友を持つか、その友からどのような影響を受けるか、



により後の自分の人生の方向に、それが強く響くのである。だから僕は皆、多ににすばらしい友情を持つべきである。一人きりなでまったくツマラナイ事である。
今、青春期は人間変革の時なのだ。

茶色の顔

組主任 八田政季

私の長女はいま一二歳である。まい日まい日反古紙にわけのわからない絵をかきまくっている。正月の「かきぞめ」の絵を居間にはっておいたところ、先日、本校の卒業生でお茶の水大学の教育学部にいるIさんが遊びにきたときそれを見て、にやにやしながら私と妻とに「A子ちゃん」は『欲求不満』じゃないんですか」という。彼女の話によれば、子供が茶色をつかうのはその証拠といえるのだそうである。みるとたしかに「ヘリコプター」と「おとうさんの顔」と「金魚さん」だという三枚の絵は茶色でこたごたとぬりたくられている。「いつもは寝かせてやっているのに、暮れのうち何やかやと男の付き合いだなどといってほったらかしておいたから、あなたの顔が茶色になったのだ」と妻はしたり顔でいう。そういえば南アルプスでの遭難さわぎで、家の裏の総合グラウンドには、新聞社のヘリコプターが離着陸をくりかえしていた。長女もそれをうるさいと感じていたのだらうか。子どもってやつも案外「うるさい」ものだ。

きのうまた茶色の顔を二つかいた。「A子ちゃんそれもおとうさんなの」ときくと彼女は答えた。「ちがうの。これは県病院の先生なの。こつちは先生なの。」私はあきれてしまった。両方ともかかりつけのお医者さんである。子供の病気に悩まされる私たちは、できるだけ医者きらいにならないように、ときには私が白衣をきこんで遊んでやりまですた。「効果はてきめん、予防注射だとさえないえばどんな注射も泣かないようになったのだから」とうぬぼれていたのに。

実はIさんにいわれたとき、私ほうなづきながらも「偶然茶色のクレオンに手がいっただけの話である」とたかをくくっていた。今でもそういう考へが全くないわけではない。人の心の動きなんてものを科学的にとらえるなどということは、とうていできるものではないと思うからである。しかし、どうも私はまちがっているらしい。そうだとしたら、科学の進歩は驚くべきものであるといえるし、考へようによっては「人」も、自然の法則に従う不愛想な「物質的存在」にすぎないといえそうである。

北巨摩の分校の中学から入学してきたIさんが、高校、大学へと進むなかで、香り高い知性をみがいでいく姿をみながら、やはり世界の未来は若い人々になわれているとの感を抱かされた今年の正月のある「エピソード」である。

7

「クラスのこと」

わがクラス

武井 勉

四月以後毎日のように合わしている顔。

ピカソの絵にくらべればずっとハンサムなものばかりだ。だから一年間もあきないでいるんだろう。チュエリッブのように鼻の下のロングな者、薄暗くなるまで将棋をする者、朝始業の前に弁当を食べる者、インディアンすらも驚きそうな奇声を出す者。

こういう我々を受けもつ先生「自称××一家の親分？」も大変なことだろう。

この先生には良い所が数多くある。たとえば生徒といっしょにソフトボールをした時に生徒の打ったボールが来てもムリにトンネルをしたりバッターボックスに入れば力いっぱい打ったふりをして内野ゴロ。そのかわり夏服の名札をつけて来ない者には出席簿でずっとなでる。まだまだたくさんある。だからといって良いことばかりではない。

れを知らずに、バ声を発する奴がいた。教師曰く、「今騒いだの、前に出る。」きびしい目つき。語調。某生徒がししぶ前に出る。教師続けて怒鳴る。「もう一度言ってみろ／＼」頭をかいて困惑した様子、それを見かねて

「もういい。席に戻れ／。大勢の前ではできないことをもうするな。原則として騒がない。文句ある？。ないね。大方の御賛同を待ちました。」ここで一同爆笑。こんな調子で、ある時は怒り、またある時は笑いをまいてクラスの中の人気と信頼をパツチリ握っていると言った感じだ。＃彼は大物＃これは小生の感想。

午後また大騒ぎ。満腹、満足至極といった調子で授業を済まして、足早に教室を出る。帰りは早いが朝は遅い。ナンタルチア、ナンタルアルチアーツ。なんだいや？甲一ナンバーワンのうるさい（？）クラス。成績もまたハイクラス。成績は悪く、騒がしいクラスとしての一員を為す者として、絶対に忘れてはならない（？）人物がいる。私だけが知っている。それは私です。1お粗末¹

授業中さわがしいと命があぶないし、HRの時なんかは先生の意見に対して文句の一つすらもいえないでオオカタはゴサンドウしなければならぬ。これがハッタイズムというものののだろうか。

何題、どんな問題

小沢 譲

「カーン」「カーン」チャイムが鳴る。「ドタドタドタ」「ガガアーツ」「ギーツ」半分はずれたような入口の戸が荒々しく開かれた閉められる。

帽子もかぶらず、カバンのようなちがうような変てこな袋を小脇にかかえて息を切らせて入って来る。次は後の戸。前の戸に比べて少々調子は良い。「ガララーツ。」「ビシアリ。」先生の到来。出欠席をとり始める。「誰だ／。その空いている席は誰だ。」「H君です。」「そこは？」と又聞く。「G君です。」「タケシです。」「式です。」「末ださしつか来て居ないが、授業を始める。先生が黒板に向かう、チョークを持つ。すると戸が開く。一人現われ、続いて遅刻の常適の登

愛すべき八田先生

深沢 敬英

御待ちかねの、我々の『E』を紹介いたそう。その人は天下に知れたる『八田』先生である。

まずその容姿からお話ししよう。皆様の想像の便を計るために、一年間に及ぶ主観的観察結果を述べさせていただと、『ギョロカツバ』である。

それはあの大きな目つくり玉にある。ギョロリ、ジロリとあたりを見回すのである。そして余り黒くもないバサバサ髪を前額にたれ、とがった口、あの目、いかがです。ズバリでしょう。

次に先生のお話しを拝聴いたそう。テストも終ったある土曜日

「きようはみんなでソフトでもするじゃないけ。」又ある日は先生、生徒に用事を頼んで、目く「今度だけやってくりよう、いいじゃないか。今度の成績は「2」にしてやるじゃない。」

場。「ガラガラ。」「カツカツカツ。」「ビシヤツ。」誠に騒がしい。無理に足音を立てて歩く俗に言う＃悪い奴＃スーツと入って来てコソコソと席に着く奴。色々ある。が、自分の席に他の人がすわっていることもある。そんな時は、どこか空いている席を捜して、着席せざるを得ない。そんな訳で、頭にまともに入らないまま授業は終わる。朝のうちはダメ。

三、四校時はポチポチ空腹を覚え、なかには休み時間中に弁当箱をきれいさっぱりとしてしまうのも居る。そのくせ昼休みは日新ホールへ目を血走らせてすつ飛んで行く。教室に残っている者は大騒ぎ。毎日毎日話のタネは尽きない。ニヤニヤしながら本を読んでいる奴。多勢集まって大声で話をしている連中。考え込んで外をジーツと見ている者もいれば、又、参考書を開いて真剣に取り組んでいる勉強熱心な生徒（こんな人にだけ生徒と名づける。）こんなクラスでよく勉強ができるなあと思うこともある。SHRのチャイムが鳴ってしばらくたたないと皆は教室に集まらない。

威風堂々と歩いて来るのは我らがホープH教師。後の入口からスーツと入って来る。そ

と、まあこうゆうしだいであるから、クラスが一高きつての評判クラス（？）であるということもご理解できたであろう。

最後に性格やら、行動やらを教え歌で、紹介しよう。

一つとせ、人に知れたるその名前
三つとせ、見れば見るほどいい男（？）
六つとせ、むりを聞かせるその意気地
八つとせ、やんちゃを愛する八田先生
（ここから係り結びの法則（？）が成立したのである）

十とせ、とても酒好き、タバコも好き（コマーシャルと間違えないようにに）
終りとせ、尾張名古屋は城で持つ、二年七組彼でもつ、

こうゆうしだいで、現在では八田先生あつての二年七組というわけなんです。

修学旅行

古 都

深沢隆之

奈良は静かな町である。田舎の、山間のそれとは又ちよつと趣が違ふ。落着きがある。どこを歩いていても香の漂よってくるようないかにも古都にふさわしい感じのする、そんな町である。旅行中はそんな事は思つてもたいなかったのだが、少し日がたつてみると、何となく思ひ出されてくるのだ。寺社を一つ一つ見ていた時は、こんな寺のどこが良いのかこんな仏のどこが良いのかと、不思議に思つていたのだが、やはり千二百数十年の歴史を経たこれらの建物は今になって、僕に迫ってくるのだ。はっきりしたものは分らないのだが、ただ、夕方のあたりの山々の、かすんで薄紫色に見える時、あの奈良の良さをつくづく感じるのだ。

歴史家でなくとも、一度奈良を見た者は、もう一度行つてみたい氣になるだろう。

聖徳太子の夢、飛鳥文化、……を見、知る為に行くのもよいだろうが、ただ「何となく行つてみたい。」それでも良いではないか。奈良はそんな町だ。

細川義雄

とつても拍車加わってくる。が、何もかも忘れさしてくれたものがあつた。京都御所だ。その▼一帯だけの上空が青々と澄んでいたかの様だ。足音だけが周期的に大脳を襲う。今でも「静寂」にひたりたい感じさえ起こさせている。

私は友と散歩に出たが、近代文明に毒されている感じの京都を見てなにか反発的にもやもやしたものを感じた。11近代文明を否定しているのではない。なにかが心の中でくすぶっているのだ。雲の様に分かる事は分かるが、つかみ所のないように。

なるべく大通りを避けて、小路を歩いた。はたして、そこにはあつた。まるでお山の大将のようにどつしりと腰をすえている昔の京都が。京都ならでの情緒を腹いっぱい味わつた。おかげでもやもやの氣押も入る余地がなくなつたとみえて、散歩から旅館についたときは、もう跡形もなく消えていた。

やはり、私なりの京都のほうがよかつた。そして今ではあえてそれを忘れようとしているが、たとえ忘れたとしても、シユガーコートの甘さだけだろう。真に学び得たものは、

京都駅に着いたのは午後六時すぎであつた。ネオンサインの明かりが輝いていた。最近着工された駅前のタワーも夜空に浮き出していた。このタワーについては、新聞等でかんに非難されていた。古都にはふつりあいだと言ふのである。しかしほくはそうは思わなかつた。いくら古都だと言つてもしよせん時代の流れには勝てないと思ふ。高層建築ができ、タワーが出たとしても不思議はないと思ふ。

それよりもつとにつり合ひなことがある。名所旧跡をまわつて見ると、どこへ行つてもかならず見学金をとられるし、また仏像がショーウィンドーに安置してあつたり、建築物自体がコンクリート造りになっている物さえある。この方がつと名所旧跡の名をけがすつり合ひきわまる物だと思ふ。このように名所旧跡の場所さえもこんなである、駅前にタワーが造られようと非難するのは見当ちがひだと思ふ。それよりもショーウィンドーの仏像を他の方法で安置し、仏像を仏像らしく見せ、また建物自体にもつと工夫をこらしてはどうだろうか。見学するのに少なからずお金がかかるし、見学が禁止されている物が案外多いが、これらの物をもつと自由に、

苦く深く心に焼ついてしまふだろう。たとえ止りを知らない流水のようにすばやく見学したとしても。

感想

米山孝之

修学旅行で感じたことを一言で言えば「建物の偉大さと当時の仏教への絶大なる支持への驚き」だつた。

法隆寺を始めとして東大寺、平等院、京都御所、二条城に至るまですべて規模といい様式といい素晴らしいものばかり。本当に当時の文化水準の高さを示している。しかし、それらは全部当時の支配者の勢力を示すものであり、影での民衆の苦しみを忘れることができる。絶対的な階級の差別が有り、支配者に生きていくのに必要な生産物以上の剰余生産物を搾取され、当時の文化はその上に実つたものである。奴隷である民衆は一大工事をするのになおいつその苦しみを背負い宗教に助けられるどころではなかつた。(一)所せん宗教とは観念論的なものであり、政治にうまく利用され、真の生活を助けるもので

だれにでも見学できるようにしてもらいたいものだ。すぐ目に入る大きなものばかりに注意をよせるよりも、ささいなことにもつと多くの注意をはらってもらいたい。

京都で

内藤素久

「日本人の心のふるさとであり、国際文化都市として世界にその名を知られている京都は。……」リズムカルな口調でアナウンスするバスガイドの声が内耳を通り大脳に達した時、はじめて、京都に來た。という実感がわいて來た。そして私なりの京都も出来上がった。

旧跡は概して地理的にはまとまっているが都市的には集まっていない。が、京都は比較的集中している。旧跡のために発展した都市か、都市のための旧跡か。はつきりしないほどだ。大して両方とも差はないが、この語であえて自問したのも、平安神官の濃厚な塗りを見て以來である。見学科をとる。夜は夜で観光の街は学生服で満ちている。どれを

はないのだから。(一)

昔は支配、被支配の階級の違ひが大きかつた。被支配者は支配者に対して絶対服従であつた。支配者の都合の悪いことは言うこともなすことも、教えることもむずかしかつた。なんと不平等な社会だつたんだろう。

現代においても案外同じようなことがあるのではないだろうか。いつかは其の平等の社会がおとずれるであろう。京大教授井上清が岩波新書「日本の歴史」で言っているように「資本主義の時代も、過去のすべての社会構成体と同じように、いつかは終るであろう。」

修学旅行

近藤信雄

三日目の午前中に京都御所に着いた。白壁と古めかしいかわら屋根とがよく似あつて、さらに周りの松の木もよく調和していてすごくせいせいとした気分であつた。さうつとんだらかな曲線を描いた黒くくすんだ屋根が周りの緑から青い空にいくつか立っていた。案内人と生徒の話し声の他に何も聞こえないほ

ど静かであった。二千年ほど昔からあったのだらうか小石の敷きつめた所を音をたてて歩くのもよい気分であった。

龍安寺の石庭

長田好文

修学旅行第三日目、いよいよ待望の龍安寺見学だ。こずえに残る柿の実が寂しく我々を向かえる。「禪の真髓」「芸術の極致」あらゆる称賛の言葉を浴びた龍安寺の石庭。我々は今その龍安寺を目ざしてつま先あがりの山道を登って行く。急ぐ心を懸命に押さえて順番を待つ。案内人の説明もうわの空。過去の記憶をひっくり返してできる限りの想像力を働かせて理想の石庭を作りあげる。やつと順番が回ってくる。クツをぬいで一瞬目をつむる。まぶたの裏の石庭を期待しながら、恐る恐る目をあたけ。見物人がたくさんいてよく見えない。しかしどうも想像とは違うようだ。第一正面の壁がおかしい。たいへん苦心して作ったものらしいが、数百年の風雨にたえず、色はくすんでしまっている。もともとそのつもりで作ったのかもしれないが、白砂の

明かるい色とは調和しないような気がする。それに庭も思ったより小さい。視界がせまいせいかとてもせま苦しく見える。それでもと思つて人をかき分けて最前列に座りこむ。じつと見つめても何もうかんてこない。トラの親子も見えないし海とも見えない。これではどう見ても大石の羅列としか見えない。来る時とは反対にがっかりして池の回りを下って行く。すると田舎から出てきたらしい男の人が三人一生懸命に石庭の批判をしている。「あれが芸術かネー。」「一カ所からでは石が全部見えないというのはおかしいね。」「あれはきつと商売のひけつを暗示しているんだよ。よく見ればもうけがころがつているってねハハハハ。」僕は急に愉快になった。「そうだ、自分の見方が悪かったのだ。あまりにも先入観にとらわれすぎたのだ。今日はまだめだったが今度来るときにはきつとその真髄がつかみとれるような人間にならう。」「自分に言い聞かせてバスに帰る。空はあくまでも青い。秋は静かだ。

私たちの考えること

町名改正に思う

矢崎和博

我々が住んでいる甲府市は近代的に成長した町でもあるが歴史的な町で、そこには古くから市民の間で親しまれてきた町があり、又そこに住んでいる人々と深く結びついている町もある。

ところが、これらの町名、特に市の中心部は軒なみに住居表示明示のために新町名と入れ換わった。すっぱりと改正に踏みきったのはよかったが都合の悪い事が改正直後すでもちあがつていた。テレビ広告、新聞広告がそれである。私達は衣食のために買物の必要がある。そのための予備知識としての広告は商店側の意図を購買者に知らせる手段として、いまや欠くことのできないものである。

ところが、買う人の立場では自分の欲しい品物を広告で見かけても場所が分からなければ

ば足を棒にふるだけであり結局は、有名店、デパート等に集中してしまう。

町名改正の意義は住居表示を明示するためつまり合理的・機能的にすることにあると思われるが、かえって市民の生活に混乱を巻き起こしているに過ぎないではないか。

売る人の立場から考えて見よう。有名商店・デパートなどは町名が換わるうとそこにいけば必ずそびえている。ところが一般商店はどうだと言えどこれは大いに迷惑な話に違いない。旧町名の際の広告ならばどこかに町名を示めせば事足りたことだろうが改正後たとえ新町名を明示しても同じ町の人ならともかく、なじみのうすい客が来てくれるわけがない。

あくまで市民の実施が混乱と損害とを招き、又この動揺した社会で、11小さな社会においてもそうであるが新しい町名がはたしてどれだけ市民の間に浸透するかという事を考えると、この改正はどうであつたらうかと思われるのである。この事を一断面から見て判断する事に無理はあるかもしれない。

しかし現実には市民にとって大きなマイナスが生じているという事実は、いかにこの改正

が空虚なものであつたかということを実に物語つてはいないか／私達は自分の住んでいる甲府市のことに無関心であつてはならない。

今後こういう問題が起こらないためにも、自分のからにとじこまらないで、もっと大きな目を見開き、甲府のことに関心をもってもらいたい。

考えること

井上正博

「考える暇がない」というより、今の私達は考えようとしなのではないだろうか。心にかたすみには入試のこと、また一方に逃避しようとする気持ち、そして何となく随性的に日を暮らしているのではないだろうか。現代の人はあまりにも妥協的で深く思考することがない。「生活が安定して、人と争わず法にふれず、一日一日楽に暮らせれば……」それで幸福だという人があまりにも多いのではないか。目的のない生活、まさに進歩の限界であろう。とかく現代の生活は煩雑だ。人は進歩のため、能率のため、合理的であるた

めに機械を作った。それはそれでよいのだが、その機械に歩調を合わせた人間はその機械になりつつある11考える輩がかれつつある。私は原始の世界に（人は退行だと言うだろうが、）人間の故郷に、心のふるさとに帰りたい。しかし私はあわれにもその故郷に通づる道をしらない。帰るすべを知らないのだ。今の私に何ができるのだ。

若者、ぼくら

福田秀夫

ある日曜日、おじと僕はこたつで新聞の記事を話題にしていた。その時僕が資本主義をちよつぱりひにくつたら彼はむきになつてソ連や共産主義を猛烈にけなし始めた。その内容は次の通りである。

「ソ連は貧富の差がないとおまはん思っているかもしれないが、差がないのは貧乏人同志だけで政治的指導者との差は日本以上についてる。フルシチョフが失脚したがすぐに前のように殺されてしまうぞ。だいたい赤なんてものは……。そこへいくとアメリカは……。一まるで全部知り尽くしているようだ。これを

聞いた時、おじもインテリぶって自分では立派なことをいつてるつもりだろうがたいしたことではないと感じたのである。無理もない。僕の友達の一人もこの間社会主義を良いと思うのは貧乏人だけだというようなことを言ったのである。

別に僕はここで社会主義を売り込もうとするのではない。僕自身まだはつきりとは世の中の思想を理解しているのではない。従って社会主義者でもない。

ただ僕たち若者は常に現実批判的でこれは良い悪いと決めてかかってはならないと思うのである。資本主義、社会主義を例にとつたがこういうことばかりではない。日常茶飯事いたるところに保守、革新はある。僕のようにな年寄りと生活しているとなおさらであるが、批判的態度はいつまでも持続したいと思つてゐる。

使用禁止

平井洋一

「世の中に出来ない相談と云う事がある。到底如何にもすることが出来ぬと頭では承知

し乍ら情に於いて之を思い切るに忍びぬ未練がある場合に、人は自分の前に突立つ冷かな鉄の壁に向つて出来ない相談を持掛け勝ちなものである。出来ない相談を持掛ける心持は（痴）の一字で尺されている程果敢ないものに違ひない。」

（三太郎の日記）

「力を尽くして狭き門より入れ」なんてのがある。別に受験には関係ない文句らしいけど、何かピタリとくる感じ。狭い門に入ろうと無理して、勉強する。ガリ勉すると体がやせてくる。やせて細くなれば狭い門でも通ることが出来る。

もう一つ入る方法がある。門の方をヤスリでけずつたり、おもいきつて爆弾をしかけてバラバラに破壊すること。だけど、どうやら母屋は門がこわれるといつしよにつぶれてしまふように出来てゐるらしい。

荒木 力

我々の授業態度に「若さ」というものが感じられたら私は喜びたい。何故なら「若さ」というものは無限の可能性を有していると考えからである。吾々はほとんど総ての事柄

倫理社会について

鶴田明雄

二年生になつて私は初めて倫理社会を学んだ。もつとも今年初めて実施されることになつたのだが。倫理社会の青い教科書の前がきには倫理社会を学習する課題や実際にはどのようなにして学習したらよいか等がしるされていた。それが私達にのべていることは、倫理社会を学ぶことによつてだれもが心にいだいてゐる理想や目的を実現するためのよりよい方法・手段を学びとり、そしてつづばな人間になれということである。のべていることはたしかによいことである。しかしその前がきをよんでから一年近くたつてゐるのに一向にそれらしい具体的な方法・手段をみつけれない。私だけがぼんやりしてゐたのだろうか。そうかもしれない。けれどだれでもみなそうではないのだろうか。考えてみると一週間に二時間の授業の時もわけのわからないぼんやりしたことをただノートに写すだけでおわつてしまふ。これでは真の目的がわかるはずがない。今勉強している西洋の思想にして

に可能性を持つてゐるといつても過言ではない。それは神が我々にだけより多くの可能性を与えられたからでも、努力して我々が掴んだからでもなく、ただ若い故にである。若い故にあらゆるものに興味を示しあらゆるものに可能性があると考へて満足する、満足しないまでも不快ではない。しかし現実には何も実現しえない。それは個々の実現への確率が零に極く近いこと示すのではないだろうか。しかし絶対に零ではない。そこに可能という言葉が生まれる。しかしこの可能性をすべて実現することは不可能であり神もそれに努力しない私達を許されるであらう。そこに選択の必要が生ずる。」「世のもので最も公平に配分されているのは良識である」という言葉は我々を励ましてくれる。一その理性がより多いとかより少いかいいうことは偶有性のものであつて―同じデカルトの言葉であるが偉人といわれる人々の理性が偶有性のものであれば私は大いに悲しみたい。

「デカルトだかだれだか知らんけど、こりゃあなんだ、だいたい論旨がはつきりしておらん。」

「そんなことおらあ知らんよ、解答を忘れた。」 「何だ。その態度は。前に出てもう一

度いう。これからもこういう筋道の通らん文を書くようじゃあ原則として倫社は―だ。」 「先生、それは立場の相違です。何とか単位を下さい。」

「まあ僕が二高にいたころは、みんなこの程度で単位やつたけど、だいたいお前は、態度も悪いし情操教育がなつておらん。趣味は。」 「読書です」 「ほう、何を読むのかね。」

「週刊誌とスポーツ新聞です」 「やあー、まいったまいった。」 「他には」 「マーじゃん」 「どうりで目が血走つておる」「それから……………」

「うるさい／僕達の若い頃は……………」 「そんだけんどね、今は月給が少ななくて、「こんなところでぐちをこぼすじゃあねえや。」 「まじめにやれ／」 「そういうこと。」

「ねえ、先生、助けてエー」ところが或る日突然に先生は私を一層軽蔑して単位を下さなかつた。わかりました。人間の可能性なんて論ずるに足らないことが。

時

「時は金なり。」 「光陰矢の如し。」等、時に関する格言は多い。「時」ほ、貴重なものの一つだからである。

これには時刻を意味するものがある。現代人は、「時」を如何なる概念として把てゐるだろうか。現在社会機構においては、時間的観念を持たざるを得ない。しかしなおかつこの「時」は守られてゐない。個々人におい

では、なおさらそうではないだろうか。我々は、お互いに時刻を守りたいものである。自分自身大いに反省しなくてはならない。

もう一つに、時間的隔たりをもった「時」がある。この「時」は、多くのものの手段となる性格をもつ。つまり、精神的動揺・悲劇・負担を鎮め、慰さめ、あるいは軽減する。

「神は時に、惨めな人間を慰さめるよう命令した。しかし時は人間を救うであろうか。時によって慰さめられることは、人間のはかなさ一般に属している。時とは消滅性である。」と、ある哲学者はいった。

「時」はまさに金である。いやそれ以上に高価なものであると思う。また視覚にとらえ難いため、軽視されているのだ。「時」は得がたく失いやすいものである。「時」というものを再認識し余生を過ごそうではないか

人と行動について

中村 正人

行動と一口にいってもいろいろある。一意志によるもの、本能的なもの、生理的なものなど。ここではもちろん意志によるものを

取り上げる。では意志とは何であろうか。それは選択し決行する心の働きであると思う。何を選択するか。それらは自分のおかれた時所において、その人の人生の目的にあうもの、彼が正しいと考えるものであろう。人生の目的とは幸福になることであらう。正しいものは道徳的・法律的にそれにあうものであろう。

前者は個人的主観的であるように思われる。しかし個人だけの幸福などというものがはたしてありえようか。うたがわれる。もちろん後者は道徳も法律も歴史的過程をへて人によって組み立てられたものである以上集団、に通じる集団的客観的である。実際の所は人間はそんな行為をするだろうか。結果は自分の利益になり外見上体裁のよいものを選び、自分のまわりの人々に引き込まれる（いわゆる群集心理）とかなんのきなしになれてしまつて自然に行っている行動が大部分であらう。だから人間の成長過程において環境というものは大切である。その環境は人の作り上げたもの、また作っていくものである。環境は時とともに変化していく。時は現象世界を変えるばかりでなく人間の心の中まで変えてしまうおそろしいものだ。ここでまとめると人間には意志による真の行為などというものはないの

だろう、ああもう三年になるのかと思うほどである。今また、この一年をふりかえつてみて反省することは、遊んでいるのでもなく、勉強しているのでもない。だらしない生活をしたということである。そして、このようなことがおこつたのは、何事にも計画性がなかったためだと、今また深く反省して、これからががっちりした計画を作つて悔いのない高校生活を送りたいと思つてゐる。

SFについて

谷 戸 文 広

SFとは空想科学小説のことである。しかしひと口にSFといっても、その中には、多くの題材が含まれている。文明批判、人類の進化、宇宙への発展、未知の世界等々である。

SFは空想科学小説だからといって、科学的であるばかりでなく、未知の世界の美などを叙情的に描いた作品もあれば、人間の心など非合理的、抽象的なものを描いた作品もあることはあるのだ。

しかし、SFの主体はなんといっても、機械文明、物質文明、核戦争などを描く面にあ

ではなからうかということである。このように人間を悲観的に見るのも年令というものであろうか。

「このころ思うこと」

深 沢 克

現在高校二年生である私達にとって最も大事なことは大学にはいることなのだろうか。

私達ここで改めて大学に進学する目的を認識しなければならないだろう。大学は何のためにゆくのであらうか。今はど大学にゆくことの目的が誤解されていることはないと思

う。そのことはただはいりえさすればよいという考え方にも如実にあらわれてくる。大学はただパスポートのためにのみゆくのであらうか。たんにパスポートのためにのみゆくのならばそんな人はただちに進学することをやめた方が利口ではないだろうか。（もちろん私自身そうならぬ様努力しているつもりである。）高校を卒業して職業についての方が社会にとつても有益であらうと思う。

それならば「大学において学ぶこと」の目的は何であらうか。それはまた「高校におい

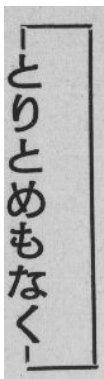
るのだ。これらのSFによつて科学かきらいな人も、機械や科学のすばらしさを知ることができであらう。しかし、一般にSFでは、物質文明の高度化による、人類の破壊がよく描かれる。だが、これは人類の向う方向を、誤まらないよう龍との、警告であつて、宗教的な末世思想の影響ではない。

墮 落

ジミー・ケンジー

ある晩秋。野分のすさまじい朝。カーンカーン遅刻者がために鐘は鳴る、小生教室に入り見回すと、スミの方で一点を凝視し何か考えている奴がいる（エラソウニ）、人生の懷疑が現代の矛盾、きつとそんなたぐいだらう。その横の者は顔が辞書に見えた（アレ）彼らは迷惑そうな目つきで窓側にめくばせた。そこで賢いそうでない獣達が雑談？している。小生も仲間に入った。こんな会話が始まった。

「寒いなあ／＼」 「この髪形イカスカ？」 「おいおい。あいつが通るぞ見ろ見ろ」 「なに？」 「キャー・キャッポー」 「ステキー



一年間の反省

橋 爪 元 司

月日がたつのは早いものである。小学校のころは正月、運動会、遠足などの待ちどうしい楽しい事がたくさんあって、そのことは遅く感じられたものだった。それに対してこの一年間は教科書の初めのほうはいつやったの

「「ワー」 「おお。トンデトンだ」 「見えたぞう「低い声」」 (掛詞)「爆笑」」今言った者は前に出る、もう一度言う「頭をかきながら一人立つ。これがある青春の断片であり昨日〇し今日悩み明日死す(ニヤリ)。はない命と知った目に勉強ができて大学にはいる(ウソツケ)。人間達は墮落している。してあなたは只一人にて生まれ、死ぬも只一人。汝は死なねばならない。生きつつ生きぬ者が調子をあわせてホイホイ、ガンバル。恐ろしく衰れるもの、浅間しく弱きもの、汝の名は人類。猿の親類よ／ あーあ、すべては滅びゆく、すべては死で終わる。」

「ある経験」

宮崎 康

たしか冬休みも終わろうとする正月五日ごろだったと思う。僕は帰郷中の兄と共に、疲れた頭をいやすべく散歩に出た。夕暮れも近くいかにも冬らしい底冷えのする日だった。家をこして来て三カ月程たった僕は、何か違った環境に対する好奇心をもっていた。事実前のところは散歩するにも出来ない、ひどい

く、頭はくり色の毛で短くかつてあり、黒ぶちの眼鏡をかけている外人がいた。背を丸めて何んだか窮屈そうにこたつにあたっていたので少し可哀そうになった、が、かなり流暢な言葉使いで話していた。

外へ出てから二分位、ガラス戸のカーテンごしに居間の様子を見ていた。さすがの好奇心も八つおろしに負け、自室にひきあげようとして階段の直前まできた時、父の呼び声があった。(アア、ついにつかまった)しばらくとまどっていたが何事も経験だと思い、思い切って居間に入り挨拶した。その時は上がってしまつて外人の顔を見るところではなかった。僕は丁度外人と相対する位置に座った。

しばらくして余裕ができたらしく、やつと外人をまともにみる事ができた。外人の年を想像してみたがまるつきりはずれていた。というのは、彼は今から帰米し大学にいくと話してくれたからだ。しかし年のわりにふけてみえた。

外人らが帰つたのは九時半頃だった。話をしている間、小学生の妹は外人の顔をみるたびに下を向いて笑っていたのが妙に気にかかったので、そのわけを問うたところ、「だつて、顔が赤く鼻がうんと高くて、目とまみえ

場末であつた。身をよせあいながら、落葉がサラサラとはう凍った小道を二人であるいて行つた。田舎道を二十分程歩く。わずかに跡づけられた石段があつた。「この向うは何か」、という好奇心を持って上りきると、視界が開けた。貯水池である。周りは高く堤によつて囲まれ、外界とは全く遮断されている。堤には、ゆるやかにスロープにかけられた水草が夕風にそよいでいる。みまわすところ一面その堤である。おりしも日がとっぷり暮れ、水面が闇の中に深く感ぜられた。風がふくごとに、サラサラと音をたてる。無気味な感じである。僕は思い切つてそのスロープを降りてみた。水面は：僕はそこに一艘の舟を浮かべてみたい衝動にかられた。あたりは全く静まりかえり、今までの煩わしい世間は、微塵も感ぜられなかった。そこにはただ暗闇とその中に横たう神秘的な水枯草があつた。この煩雑な世の中にこんなにも孤高な、心を透明にするような所があつたのかと思われた。何げない気持ちで、家を出た僕は、この全く思いがけない経験に面くらつた。

帰り、再びそのたそがれの道を歩く時に、たつた今遭遇した情景が夢の如く感ぜられ、こうこつとした感じでしたそれあれ。っは、冬休

がくつつきそうで目がひつこんでいるんだもの。」

冬の夜

早川弘之

冬の夜はとても寒い。体の奥底までつきさすように寒い。北風が吹いている時などはとてもではないが長くは外にいられない。たとえ風がなくてもあたりはすっかり冷えきっている。

冬の夜はとても静かだ。シンとしていて気味が悪いほどだ。物音一つ聞こえないといったような感じで、ただ遠くに犬の遠吠えや車の音などがかすかに聞こえるだけだ。

冬の夜の星はとてもきれいだ。澄んでいて冷い光をはなち、こちらをにらんでいる。人間に何かを教えているかのようだ。北極星・北斗七星・オリオン座・カシオペア座などのはつきり見える。とても美しい。そういう星に行つて見たい。そういう星から地球を見たらきつとすばらしいだろうっ

冬の夜はとてもきれいだ。特に雪が降った時などは、あたり一面が由一色で塗りつぶさ

みの問のくすんだ、なまくらな、かわいた心へのちよつとした小事件でもあつた。

外人

杉原清則

「コンパンワ」、夜の八時頃だった。流暢な日本語の挨拶だった。一人の外人と日本人が我が家を訪れた。そういうえばつい二、三日前、弟が教会の關係で今夜外人がくるような事を言っていたのを思い出した。

この時僕はこたつにいたが、いざ外人が自分と目と鼻の先程に近い所に現われるとなると恥しいような窮屈のような変な気持になるだろうと思つたのでさつさと二階の自室に、ひきあげ、本を読んでいた。

しばらくして、下で笑い声が始めた。とても楽しそうだった。あまりに楽しそうな笑い声に、さつきから溜り始めていた好奇心が一度に溢れ出した。階段をそお一つと降りて外に出るふりをして居間をのぞいてみた。その一瞬、僕の視線は余儀なしに一所へ集中せざるを得なかつた。そこには、色が白く(白いというよりも桃色がかつていたが)鼻が高

れ、何ともいえない感じがする。また霧の夜などは、いうまでもない。一寸先も見えないほどの濃い霧の夜などはなおさらだ。

冬の夜は寒い。冬の夜は静かだ。冬の夜の星はきれいだ。冬の夜はとてもきれいだ。冬の夜はとても長い。しかし、冬の夜は大好きだ／

夜空

山本武彦

九月、空のすみきつた夜に外に出て、空を見る。望遠鏡を空にむけて、あちこち、動かしていると、星団の薄明かりが目にはいつてきた。門灯で、見にくかったが、その光をさえぎったときに、目の前にパツと、あらわれたのだ。それは、まっ黒い壁に、たくさん穴があいていて、その壁をとうして、こちらに進んでくるようだ。それはだまつて、しずかに、つめたく光っていた。この様子はなんともしいようなない美しさを持っていた。このときのことを、今になつても忘れられようか。

月をみると、まるで丸い粘土にB玉をぶつ

つけてへこましたような穴が、無数にあいているのがわかる。みか月のときに見ると、とくによくそれがわかる。よくもまあ、あんなに穴をあけたものだと思心するくらいである。低倍率で「月」全体をみると、昔から「月は美しい文性のようだ。」と、よくいわれることに納得がいくであろう。

ある男の人生

千 野 一 男

これは名も知れぬ土地に生まれ、いつ生まれたかも知らないが、その土地に育った僕のアイドルの人生なのである。彼の家庭は両親と二人の妹から成る円満な五人家族である。

さて、彼の幼い頃はいたづら好きで、時には一日のうちに母親の三面鏡をめちやくちやにこわし、放火の気があったのか知れないが家に火をつけたりしたが幸い早期発見によって大事に致らずに過んだほどでした。そんな彼もいよいよ小学一年生です。さっそうと入学式に臨む彼は、まじめそのものです。はや三年が過ぎていよいよ上級生です。ある晴れた夏の日、彼が友達と運動場で遊んでいると

突然彼の陸にちらつと水星のごとく輝いたのが某小学校美人N.O.W.ンの美しくまた愛らしく輝やく瞳でしたしつまり皆さんと同様に彼も初恋をしたのです。その時の彼の心情は永遠に忘れられないものだと言っています。後のことは皆様の経験から判断して下さい。こうして楽しい小学校時代を終えて中学へ入学です。勉強も難しくなったが、彼は僕と違って優秀であつたからさほど気にしなく気楽であつただろう。また彼は一段と色気が付き顔にはニギビが点々と出始めた頃で人一倍内気な彼は、女の子とろくに口もきけなかつた。そんなある日彼に学校でも評判の高い一女生徒から手紙が舞い込んで来た。つまりそれは愛の言葉でいっぱいなラブレターでした。

その話を聞いた僕は少ししやくりだつたが「うまいことやれよ。」と励ました。その後は？と君達は知れたがるがそれを言う必要もないし書くこうにも書けないのです。なぜなら僕も知らないから。だがその後の彼は前よりも一層勉強し、時には大いにハッスルして羽根をのばしたものだつた。こんなハンサムな彼も僕同様に高校時代に突入し、人一倍内気だが付き合ひの良い彼は、高校に入つても

交際範囲がやたらに広く、これを読む半分の皆様もいつか、ふとしたチャンスに彼と知り合ひ幸福をつかむかも知れないだろう。しかし彼はまじめで、しかも勉強好きな几張面な性格で僕の尊敬する人物です。

合 宿

岩間英仁

「起床」という声で目がさめる。時計をみると、六時半だ。すぐしたくをして、外へ飛び出す。けさは雪が降っている。さむくてふるえがとまらない。先輩の号令で体操が始まる。体があたたまるところ体操が終わらずぐ朝食だ。食事だ。食事の時は、先輩のごほんをもつたりなやらで一年の部員はいそがしい。八時半から練習が始まるが現役は八時までに外へ出てコースをふみ確めて練習の準備をする。八時半先輩が出てきていよいよ練習が始まる。きょうは回転だ。先輩がボールをカットしていく。部員は下から登って行くあいだにボールを見ながら自分の通るコースをきめていくのだ。また、登りかたがのろいと先輩から「のろいぞ」と声がかかる。まず先

くりできる時間だ。九時に床につくと一日のつかれがどつとでて皆すぐねてしまふ。

ぼくらの詩

黄昏の天使

内藤全之輔

夕闇せまるこの浜にかすかに浮ぶ白衣裳風に流れる黒髪に小鳥と語れるその姿舟に寄り添う姿こそたつた一人の僕の友そつと振り向くその顔に花の唇ほほえめりそれに答えるこの僕に綻びつぽむつぽみからたつた一事「さよなら。」と無常な声が聞えけり

翻らせて見せた背が花の眉 黒髪が小鳥のさえずり 小舟までつとそこから消え去れり飛ぶようにして行つたのに砂の上には跡もなくそこには湖水の香のみ黄昏の浜に漂えり急に砂辺は暗闇よ

逃れられない死の世界の暗闇にただ一人一人僕だけ残されり遠くにかすむ一つ星その星からか今一度「寂しき人よ 余りにも救われぬ人 永遠に。」それだけ言うとその星もこの世界から去るためか長い尾を引き消え去れり僕一人のみ置いたまま

夜

宮坂 紳一郎

夜は泣いていた。
がらんどうの暗い空の下、
夜は泣いていた。
バイク、エンジンのかげび、
黄色と黒をスニーカーは吐き出した。
うすつべらの赤い青いネオン、
それら。そして空気は汚れていた。
ほこりだらけの柳の木の露
その露さえのアイシヤドウ。
電灯の下には蛾が群がっていた。
車のきしみ、ブレーキ、
人、犬の遠吠え、
仕方なくそれらを胸に抱えて、
夜は泣いていた。
空に、
黒装束のその空に、
星を一つ、一つ投げ上げながら
夜は泣いていた。
夜と云えば十二時。
ズンと積んだ夜行便のトラックが、

コンクリートの道路を踏みつける。
風、柳の露がそれ造った。
それはまた、
道路をいつそう黒く染めた。
その露に、
その露の冷たさに……。
夜はまた泣き出した。

小鳥

石原和広

ピュピュピュピ
暖かい軒下に
一羽の小鳥がさえずっている。
小さなかごに入れられ、
まるで友を求めているかのように。
ピーピーピー
薄暗い軒下に
二羽の小鳥がさえずっている。
小さなかごに入れられ
まるで暖い春の日求めているかのように。
ピュピュピュピー

無題

飯室和男

ぼくは見た。
朝早く起きた。
小高い丘の上に登る。
東を向く、
高さ三十度あたり。
空は赤く
ぬられる。
燃えてきた。
銀色に、
いや金色にだ。
まるで金のやりが、
自分を突き刺す。
すこし苦しかった。
目を閉じた。
しばらく……。

がすぐ楽になった
目を開いた。

そこにはまんまるい

黄金の玉。

実にすばらしい。

目を閉じた……。

スズメの音が、

天井が、

まわりは明るい。

夢だ。

我がふるさと

市川 訓弘

我がふるさとの空は青い
我がふるさとの山はみどり
我が家は昔と変らじ
ふるさととは変らじ
幼きころの思い
我が胸にあふれる
楽しくすごした幼き日
あの丘 あの森 水車小屋

人生

石田 克彦

故がふるさとは故がいこい
我がふるさとは我が勇氣

人生は個々の生涯……

人生は喜怒哀楽の生涯……

この頃人生を考えるようになった

頭から離れなく

ずつしりとおそいかかる

そのたびにゆううつに又陰気になる

人生は運命……

ますますゆううつになる

それがこうじて自殺するものもある

それを超越し生きているものもある

人生は希望……

これが僕たちに課せられた命題であり

使命であり

肝要である

人生は希望である……

人生は希望である……

純粋で美しい希望である……

あいつ

渡辺 正彦

クシャクシャで短かな黒ズボン
小さくパチきれそうな学生服
素足にうすつべらなゲタ
クリクリ坊主に貫禄十分な学帽
ちつともシャレックが無いあいつ
無口で女の子に恐怖症なあいつ
ボーカフェイスで
いつもオレを煙に巻くあいつ
でもどこか一本筋が通ったあいつ
でもどこかたよりになるあいつ

高く青く澄んだ空

鈴木 保彦

悠々と深く広い空
はげしく雨をたたきつける空
オレはこの空に妙に
抵抗を感じる此頃だ
幼ない頃オレは原色の青で紙が厚くなるほど塗りたくって表現したものだ白い部分をボ

ツカリあけて。パンのような雲を描いた時もある

球をふっとばしてホームラン王の夢をみた
こともある空、親しみそして空気のようにな
近に感じていた空、この空に希望を語ること
も深く呼吸をすることもオレはいやになつた
あの富士もバックに青い空がなかったら
世界に誇ることはできないだろう。自然の物
体を百%うき立たせることのできる空、この
空のこの力強さをいつ、どうして勝ちとるこ
とができるのだろうか底知れない力と広さ
この一部でもオレのものにできたら この空
から一握りの何かをつかみとることができ
たら 人生の今むかえている高三という大き
なフシのエネルギ―にしたい 空のヤツは今日
もオレの頭の上で 深く、高く広がっている
「オレはきつと貴様の中からなにかをつかみ
とってやるぞ／＼とばかりしく力むのである

憩の一時

丹 沢・道 彦

杉林の中を歩いて
楽しかった幼年時代を思い出した。

十七才のこの胸に深く残った
恋のささやき

この町を出て行こう
知らない町へ行ってみたい
知らない町を歩いてみたい
そしてその町でアイドルをさがそう
ウナセラディ 一高ああーっ。
恋をするなら サ―フィン踊って
太陽の彼方に行っちまおう
ゼッケンZOOM でスタートだ
幸せなら手をたたこう
悲しい時にはチエツチエツチエツ。
羽田発七時五十分で
アバヨ サヨナラ東京
東京の灯よいつまでも
君恋し 大阪暮らし
泣いたって泣いたって
あーあスッカタなかんべや

遠く市街を離れた所で

だれも訪づれてくる者はいない。

その静な林間で、

私の追憶は頭をかけめぐる……………

しかし、このような楽しい時間は、

いつまでもつづくものではない

また、そうぞうしく

無情の世界に

帰らなければならないのだ

あーあ……………

無題

雨宮敏仁

深い霧

濃い霧

冷たい霧

いくら書いてもきりがない

その霧の中の

あの橋のたもとで静かにたたずむ

霧の中の少女

君達がいて僕がいた

君の名は……チコちゃん

君はかわいい女学生

モスクワの夜はふけて

ワシントン広場の夜もふけて

ロシアより愛をこめてやって来た

どこかで船の笹焼が聞こえる頃

チャペルに続く白い道を

君と肩くみうでをくみ

君と歌ったアベマリ

僕はお金がおちていないか

下を向いて歩き

君は上を向いて歩こう

お化粧がくずれない様に

たまにはけんかもあったけど

和解港に行く

すぐに仲が直っちゃう

二人は若いやつなのだ

しかしいつまでも続く仲ではない

修学旅行での約束は

高校三年生の三学期に破られた

愛と詩をみつめながら

あのこは詩人になっちゃった

僕は泣けたこらえきれずに泣けたつけ

あのこと僕の約束も

夢みる思いも破られた



前島良男

今年も感銘した事が数多くあった。校風にも幾分慣れたせいもある。それでも学年当初は一年当初と同じように何んというか、勉強一本というマンネリ化した生活を送るのかと思うと憂うつな感もした。そのうち月日が経つに従って、我がクラスは案外とノおつとりしている外面にかかわらず、内にはハッスルした闘魂をもっている者が、三々五々集っている事がわかった。それが運動面にも、学習面にも好結果として現われていたように思う。ところで修学旅行では、旅館での思い出京都の夜景景でのそれが心に残っており、又強行遠足では、一晩中歩き続けた事、朝方から昼間へかけて歩いた松原湖付近での心の戦いなどが悩裏に残っているが、そのような苦楽の思い出にもかかわらず、友情という面が更に心に購っていた。特にクラブ活動で、合宿の時、試合の時

の苦しさも、一口ではいえない友情で帳消しにされていた。一高生は利己主義者、勉強一本槍の人も多いが、人間として立派な人も一層多いという面に触れた一年だった。このような中で、迎える三年に備えて、僕も人間的に成長したように思う。

わがクラスについて

長田寿孝

四月、やつとぼくの心にも春が来た。「一年の時男子クラスなので」いつぱんに目の前がバラ園と化してしまった。おまけによそのどのクラスより女子の数が多し。パンザイヤー 言つて見たいような気もする久々のおどろき。なんとわがクラスには秀才が多いことか「自己評価は禁もつ」？よつて先生はいつもニッコリニッコリ笑い続ける。そしてわがク

ラスの女子の良さ、いつも昼食の時間にはおかあさんの言つて通りに不規則的に手を洗うに行く心がけ、男子諸君まねするべきである。ぼくも明日からそうしよう。又いつもきれいな花を花瓶にさしてくれるこの時の女子の美しさ、あー美しい。

これは男女クラスの得なこと。

この辺で女子をほめるのはやめて男子についてわがクラス男子は色男、頭は良く、おまけに女子諸君には親切のこの三拍子そろつた、わがクラスの男子、中には例外もないことはないが、だれどぼくの言う事を信用した方が待ではないだらうか。女子諸君、ゆえにわがクラスの女子は毎日学校に来るのが楽しそうだ。これらはぼくの当てにならない想像力よりわいた事がら。

教室のきれいなことカガミみたい。

修学旅行でよりいっその友情を高めたと思う。球技などでのクラスの団結の強さ、みんな楽しく勉強でき生徒の間、先生と生徒の間で親密に話しができる、こんなクラスに早くなつてほしい。ぼくも一歩一歩進歩して行く。

短歌十首

組主任 舟山正泰



本を繰る手の冷え冷えと図書室の日ざしはすでに移りてあたり

かのあたりキスゲ群落の咲きしところいま雪原のはるか続けり

狭き庭梨りんごの色づきて匂ふ草なかにあまた落ちたり

ブラジルに行きたる君は米五粒便りにはさみ送り来たり

葡萄かつら紅染めて夕暮るる通勤電車に今日も揺れあて

ぬばたまを見せむ約をば果さずて黒き実こぼれすがれ倒れぬ

富士五合目にて

枝たわむさうしかんばの切れしとき頂開けりわが眼交に

この年の芽立ち遅れし百日紅日当たるところ淡き花着く

緑葉の中に色づく桃の実を見より心開けきにけり

修学旅行にて

石庭に続ける庭のびろろど苔洩る日もなくて碧く静もる

麦の生命力

佐野健三

一月八日雪、この頃雪を見るのもめずらしいことであるがらんと静まりかえった中に空から雪がおちて来て地上のあらゆるものを包んでしまうという景色を見るのなかなかよいものだと思った。

私は秋まきの麦は雪とかあるいは冷い冬の気候とかそういった状態を通りすぎてこなければ立派に一人前として穂を出さないということを生物で勉強したが、麦にしてみても冷い気候というものは身にこたえることだろうと思う。又雑草にしても人間やその他の動物などに踏みつけられることによつてより一るの繁茂が期待出来るのである。こういった植物はまだまだほかにもたくさんあると思うがこれらにとつたつてそういう状態はけつしてはたで見える様ななまやさしいものではないと思う。しかしそういう状態を通りすぎてこそ初めて来春へのすばらしい活動力が養われるのであつて、その苦しみに耐えられないものはやはり減びて行くより仕方がないと思う。

春の麦に対して画家はその日をさすような麦の青さに対して筆をとり、詩人はその麦の人間の心をもゆさぶるような生命力のすばらしさに筆をとる。つまりこの兩人が筆を取つたということはそこには筆をとるだけの価値があつたからである。あるいは麦が彼らをして筆をとらしめた。つまり筆を取らずにはいられなかつたと言えるかもしれない。このように麦をもてはやされ未来に対して希望が持てるということは冷たい冬をすごして来たという努力があつてから

つては、痛い言葉である。

更におもしろいことに、人間は、他人を納得させるよりも、自分を承知させる理屈をつけるのに、より巧みだそうであるが、考えてみると、この冬休みも、何やかやと理由をつけて、のんびりすごしてしまつたし、映画を見るにも、「気分の変換」、にしよう。こんなことでは、これから一番大事な時期へ、入つて行くこうとしてゐるのに、先が思いやられるひとつ今年からは、自分にきびしくしよう。

この一年

武藤行子

とにかくこの一年はあわただしく過ごしてしまいました。特に二学期には強歩遠足・文化祭、修学旅行につけ加え、オリンピックという国際的な行事もあり、わたしにとっては「勉学の秋」などという言葉には、ほど遠いものでした。三学期になると、三年生の苦しんでいる状態をみせつけられ、来年を思うと頭の痛くなる感じがす。

こうして一年をふり返えてみると、やはり頭に残っているのは修学旅行ということになりました。夜遅くまで騒ぎ、旅館の人から苦情をちやうだいたしたこともありました。また皆の現在の生活に対する考えや、ホームルームに対する意見などを知り、たいへん参考になりました。人は話しあつてはじめて理解できるものだとつくづく感じました。

あと一年、悔いることのない毎日を送りたいと思っています。

こそだと思う。私はこれが人間の場合にもあてはまると思う。努力は苦しい。しかしその苦しみの後にこそ世の人々か、らとおとばれ尊敬される人間が出来るのだと思う。苦しみの中にこそ真の人生があり、楽しみがあり、希望があり、真理があると思う。

このごろ

秋山敏徳

早いもので、生まれてきてから十七年、合格者の中に自分の名前を見い出して、決意を、新たにしてから、もう二年もたつてしまつた。陶淵明ではないが、全く「歳月人を待たず」、である。この二年間に、自分では、いくらかでも、物事の判断がつくようになった、と思つていたが、弟に言わせると、まだまだ近くの河原を遊びまわつた頃と、少しも変わらないそうである。

三年後には、いよいよ成人式だし、身長伸びもそろそろ止まつてきたので、この辺で、精神年令も、追いついてもらいたいものだ。それはともかく、

この間、自分の生まれた目について、はたして有名人はいるかどうか、調べてみたところ、イギリスの劇作家バーナード・ショー、という人がいた。一八五六年七月二十六日に生まれたそうである。名前については、「どこかで聞いたことがある」という位にしか知らなかつたが、この人の言つた言葉が、目に止つた。「人間が虎を殺すときには、スポーツとよび、虎が人間を殺すときには、凶悪無類とよぶ」。全く、何事につけても、口実ばかりつけたがる僕達にと

田中正二郎

高校へ入学してはやくも二年。自分の二年間を振り返つてみてこれといったものがない。ただふわりふわりと過ごしてきてしまつた。何にかするにも受験という言葉がおおい。思うようにいかず中途はんば。社会を批判してみても、やっぱり自分が弱いのだ。どんどんやつていくのがいるじゃあないか。何んとかしくちやあ。

大人は若者には無限のエネルギーが存在するといふけれども、自分はどうだろう。ピンボケな心で、筋金不安定でただふわりふわり。

しかし、このまま惰性で高校生活の最後の一年を終つてしまふのは残念だ。自分の前には美白な空間があつて、そこ色彩あだやかなはつきりした色をもつて、真つすぐに着色していきたい。あとで悔のないように。

松井忠

「灰色の高校生活」。この頃よくこんな言葉を耳にする。確かに現在の我々の生活はそうかもしれない。毎日のでき事がすべて受験という大前提を常に意識させる。しかしそうはいつてみても僕の意識の中には大学に入るまでのことしかないようだ。「とにかく大学へ入ればいい。後はどうにかなるだろう」といったような具合である。こんな調子だと肘鉄でもくらつて見事に振られそうである。僕のみではない。そんな人も又多いのではないだろうか。それではこのような受験に迫り回される高校生活はいつたいこれから先どの位続くのであろうか。このような状態を打破することは不可能なこと

あろうか。何らかの解決策があつてよいはずであるこれの一番の障害は現在の一一般の人々のなになんでも「大学優先」という考え方であると思う。もつともこれは我々自身の中にもあるようだ。これをうちやぶるには、何回となく叫ばれている大学の在り方についての根本的な検討が必要だと思ふ。これがなされない限り現在の状態は続くことだろう。しかしぐちばかりいつてもいられない。我々には現在与えられた重大な使命がある。「人の一生は重荷を背負つて道を行くが如し」、と誰かの言葉にある。今までに重荷を背負ってきたのではなく重荷となつて背負われてきた。背負つてゆくのはこれからである。山あり谷ありでたいへんな道程に違ひない。我々はほんの坂の登り初めにすぎない。まだまだ先は長い。「男ならやつてみな」、である。いや男性に限つたことではない。女性でも大いにやつてかまわないのである。我々を遠い山の向うでこまねいてゐる。未来のささやかな幸福の為に！。

佐藤 恵美

一年なんて長いようで短かいなあ：毎年三学期になると思う。あれをすれば良かった。これもしたかつた：毎年同じ事を考える。そして、来年こそはと思う。しかし実行したという覚えはない。毎年同じ事のくりかえしである。今年も例によつて例のごとくで、今考えてみても今年一年いつたい何をしたんだろうと思ふ。勉強にしても、その他の事にしてもみな中途半ばで、自分が満足するところまでいかなかった。というよりは、満足するところまでいくように努力しなかつたというほうが正しいかもしれない。いつもこの次にすれば良いなどと考えて途中でやめてしまつた。だが、いよいよ二年

も終わり、もうすぐ三年生、この次になどといつてはいられなくなつた。来年こそは本当にがんばろう。一年ぐらい例年の年があつても良いと思ふから……。

秋山 孝男

「書け」といわれてこれほど困ることはない。何について書いていいのかさっぱりわからない。これを書こうと思えば違ふ事が頭に浮かんでくる。ただ一つはつきりしていることはこの小さな頭の中にいつでも、不安があるということだ。もちろん大学受験のことであることは、いうまでもない。勉強、勉強と大いにりきむのであるがさっぱり。

だいたいおれは勉強なんかするより冗談でもいつて騒いでいる方がむいてゐるんだと、自分で自分を慰めるのであるが、環境が環境である。「二年の終りまでにこれだけは終つていなくてはだめだ」と。まったく骨の折れることである。「だめならだめでいいじゃんか」と、やつぱちになる。たしかに勉強をしなければだめだ。おれだつて人並みに大学へ行きたい。だいたい大学へ行きたいなんて言うやつが多すぎる。だからその席がおれまでまわつてこない。まったくめいわくなことこの上なしである。その席を獲得するのに大いに苦労しなければならぬ。まったくやつかないことである。それともいつそやめてしまお手か。それではわが青春はだいなしになるのではないかな？なせばなる、なさねばならぬ何事も、ナセルはアラブの11。冗談をいつてゐる場合ではない自からかえり見えてなおくんば千万人ともわれ行かん。まさにこの意気である。

萩原 克彦

大学入試まであと一年。また何と時間のたつのが早いんだろう。ことしこそはもうこれで二回いや中学三年の正月を数えると三回いつたことになる。でも今年はどうしてもやらなければならぬ。

勉強しながら考える。「人間は若い時ものすごく一生懸命に勉強しなければならぬんだ。若い時しか十分勉強できないんだ」と。でも年とつてからだつて勉強を忘れる気はない。福沢諭吉のことはいつ思いだしても感心する。彼ほど勉強した人はおそらくあるまい。勉強のやり方が僕のと根本的に違つてゐる。この間新聞に「あなたはどこに住みたいか」という調査がのつてゐた。みると外国にすみたいという人が31%もあった。しかも高学年になるほどヨーロッパに住みたいという。それほど日本にはみれんがないうか。実をいうと僕も日本には全然魅力がない。それとも日本の本当の良さがまだわかつてゐないかも知れない。日本は島国だ、しかも小さい。でも工業は発達しているしロケットもとばすし生活水準も高くなりつつあるし教育制度もりつぱなのが整つてゐるし最近はおリンピックもやつた。それにもかかわらず31%も外国へ住みたいというのはどういうことだろう。僕が日本に魅力を感じないのは日本が僕に魅力をかんじさせないからである。今の高校生活の中では日本の経済の驚異的な伸びや科学技術の発達やその他の発達にピンとかんじがない。すべてを無関心にさせてゐる。これも原因ではないだろうか。

高校生活を二年送つた中で僕が一ばんはつきりかんじつたのはあまりにも世間への無関心化と気持ちの狭いということです。自分自身についてはなおさらよくわかります。自分では広い大きな気持を持

つてゐるつもりですがやはり狭いようです。いまからもつと広く大きく気持を持つようにすべきだと思います。又自分がいかに努力をしてゐないかもほつきりわかりました。残り少ない生活をぜつたいがんばつてやろうと思ひます。

車中の友

功刀 仁美

それは修学旅行の汽車の中だつた。どこからどこまでだったか忘れてしまつたが、名古屋から京都に向う途中であつた。友達三人で腰かけてゐると数人の女学生が乗り込んできた。一人だけあいてゐる席にすわつた。私達は同じ女学生だという気軽さからすぐおしゃべりが初まつた。かたぐるしいところは少しもなく、京都に近いせいか、言葉は、実に感じがよかつた。修学旅行の事、又学校生活の事など、別れる時はなんとなく心残りのした車中の友であつた。ちよつとした言葉の交換が、旅行がすんだ今でも心に残つてゐる。車中の旅で疲れてゐる私達に、楽しさおもしろさを与える。ちよつとした心がけが、どんなにありがたいか、又どんなに楽しいか。これほど痛切に感じたことはなかつた。私も汽車で通学している一人として、常にこのような心がけをもって、その旅をより以上に楽しい思い出となれるよう、努力しようと思ふ。



思 っ 事

小林 正 英

「人間はある輝かしい結果に到達するためには長い苦闘の時間を持たねばならない」。いつか現代国語の教科書でこんな言葉を習った。また校長先生も「人間はある抵抗を通してはじめてりつばな強い人間となることができる。」とおっしゃられた。

苦闘とは何か？抵抗とは何か？なんの目的も持たず、わけもわからずただ苦しむような単なる文字通りの苦痛とは受け取りたくない。また自分の希望、目的とは別に通り抜けねばならないことなども苦闘とは思いたくない。僕ははっきりした目的に向って邁進する過程においてする真の努力や苦勞のみの文句で言っている苦闘であると考えたい。ほんとうに自分の身になり輝かしい結果となつて現われるための苦痛とはそういうものであると思う。

このようなことから今までの自分を振り返ってみるといかに弱い意志を持ち合わせていたかということがしみじみと感じられ、またなさけなくなる。ちよつと苦しいこと。気が向かないことに出合うとすぐいたずらに反抗したり逃げたりしたものだった。しかしこれではだめだ。理屈や言いのがれは後回しにして、まずは目的に向かつて進むための困難ならば、すなおに妥協し成し遂げることが一番たいせつだと思ふ。努力しよう。我慢しよう。たとえ十年でも二十年でも、せめて自分の望みに到達するまでは、悔いのない毎日を送るために。

升 田 暢 夫

青い空。それは雲：なく果てしなく広い。それを見つめていると、不思議と気持ちが大きくなる。どうしてだろう。しかし、それは真の自分の姿ではない。確かにもう一人の、そして現在の自分よりはるかに人間的にも完成されたものに違いない。彼はいつも僕に呼びかける。「でつかく生きる」と。あまりに漠然としていて理解に苦しむところである。しかし、考えてみるに、小異にこだわりの、刑部の変化に驚嘆している現在の自分を嘲笑しているのかも知れない。同時に、自分を慰めるためかも知れないが、または、夏に精進させる為かも知れないが「あした」という言葉が頭にこびりついて離れない。これは、過去のすべてを殺し、でつかく生きる希望と夢を与えてくれるだろう。「あした」何と素晴らしい言葉だろう。もう一人の自分はすでに未来に生きているのだろうか。そして一分一秒でも早く僕を彼の境地に到達させたいのだろうか。その結果は時が解明してくれるだろう。この彼の象徴とも言うべき青空を仰ぎ見ると、無限の未来が広がって、彼の道程が、展開しているが如く思われる。これを見ていると、どんな事でもいい、何でもいい、とにかく少しでも未来を経験してみたい。一歩でも彼に接近したい。

新たな未来に邁進する僕を激励するかのよう、この不思議な青空が、ほほえみかける。

変 な 話

武 田 光 仁

今僕たちは三年に進学するために毎日一生けん命勉強している。

それはまたある目標を達成するためでもある。その目標とは一年後に大学に進学できるように。それも一流の大学に入るためだろうと思う。又僕たちが今一生けん命勉強し、苦勞して大学へ行こうとしているのは、自分の教養をたかめるためという人もいるだろう。しかし、ほとんどの人が現在、一般世間の人が上級学校をでないければみとめてくれないからだと考えているのではないか？又ぼく自身そう思っている。しかしこういう社会に生きている一人として上級学校をでているからといってその人間を評価してしまうのは、大きな誤りがあるのではないかと思う。能力があっても家庭が貧しくどうすることもできない人でも上の学校に進んでいる人より以上にあらゆる点ですぐれている人がたくさんいるからだ。しかし現代社会というものはこういう人たちにあまくはないのだ。たとえ就職することひとつにしても、たった一枚の紙つべらでその人の人間的価値、人間性というものを評価してしまい、そして結局は能力はあっても上へ進めなかった人というのは無視されてしまうのがほとんどだ。表面的価値だけがめて、みとめ、真の価値というものをみつけることを忘れ、無視している世の中、アーやんなっちゃった！。

現 代 人

遠 藤 憲 三

最近の統計で昭和15年の壮丁と同39年の青年層に同じ質問をし(1)先ず自分のこと余裕があれば他人のことを考える。55% (2)自分のことだけを考えず社会につくす。38% (3)と示されていた。¹⁰二十数年間に戦前と戦後の青年の考えがこんなに変わってきたのに驚いた。しかし事実であり自分も戦後の仲間の一人である。封建時代の人々が自由の権利獲得のために多くの命を捨てて戦った。これは自由の尊さを証明した。自由の価値ははかり知れないものである。しかし現代に生れた私たちは自由の尊さを忘れがちでしばしば濫用する。したがって自分本位な考えになつてきているだろう。だが協同生活を営んでいくためには自分の自由を主張する一方他人の存在や自由をも認め人間には多くの短所もあるが長所を見い出しお互に尊敬し合つていくべきだと思ふ。

若 芽

高 野 あ つ 子

毎日、何の気なしに見過ごしてきた。窓辺の植木パチ。ふと目を見るとその中には、冬の問も青々としている小さな若葉があつた。こんなちつぽけな世界の中で、やがて花咲く日を夢見て、必死に守

り続ける小さな命が。いろいろな足跡をたどって、とにかくここまで成長してきた私たち。私たちもやがて成人して、世の中に花を咲かせていくのだ。無心に遊んでいる小さい子どもたち。その笑顔を見て、私にもあんな時代があったんだなと思い、知らず知らずのうちに顔がほころんでくる。それにしても今の私は、くだらないことに必要以上に気を使ったり、意地を張ってみたいらしい。自分では必要以上かと思う。そして、無邪気な子どもたちが、うらやましくもなる。また、現在の心境を考えてみると、自分でも解らないことだらけだ。一方では、早くおとなになりたいと背伸びをし、他方では、責任が重なることへ不安を抱いてみたり、おとなっぽい洋服を着てみたい一方、こどもっぽいものを持ちたがったり……。そして、今だに帰り道友だちと、おみやげのたきっこをしている自分が、おもしろくもなってくる。11ちよつと頼りないけれど、私も十七才の高校二年生なのだ！

名前も知らない、存在さえも忘れていた、植木バチの中の若芽。ガラス越しに冬に日しを浴びて、けなげにつぼみをつけているこの若い芽。私もこの花に負けないように、すこしでも立派な花を咲かせよう。

わが青春に悔いなし

今村 務

これは青春期の時間の尊さを表現した言葉でこれは二度とない、あらゆる可能性を持った人生のある時期である。これを自覚し行動

当で、失敗して目的地まで歩むことができなかったのも、今年こそはと、経験を生かして、スタートしたのだが、最初勢いよく走りだした為か、半分も行かないうちに、疲れが出て、足が重くなって右につまづいたり、立ち止まったりするようにさえた。最初のうちは、越されると、追い抜くという意欲もあったのだが、一人、二人、三人と越されていくうちに、「こんな事で、意地をはって、体でもこわしたらばかしい」という惰性的な気持になってきた。特に苦しかったのは、清里の検閲所が近づいた手前の舗装道路のあたりだった。もうここまで来ると、私の足も機械的になってきて、野辺山迄行こうなどという気持は頭の一部分さえも占めていないように思ったが、いざ清里に着いてみると、心の奥底から行こうというフアイトがむらむらと湧き出て、足はひとりでに動き出し、あたりの景色さえ美しく感じるようになった。が、しばらく行くと再び疲れが出てあごを出した人形が機械的にあやつられているかのようになってしまう。しかし友達に励ましや、次に浮かんできた私の気力とで、遂に目的地、野辺山に着いた。この時ほど嬉しかった事はない。伸び切った足をさすったり、ばつぱつとする顔をなでて、座りこんだ時には、だらしなくやめかけた時のことなど全部忘れて、いいような満足感で一杯だった。人生は登山なりと、バスカルがいったように、私達の人生も、一つの目的地に向かって一歩一歩自分達の手で建設していくもので、現在私達の目の前にある大きな目的地は、大学である。私達はその苦しみのうち勝てるだけの勇氣と、意欲とを持って一歩一歩、歩んでいくべきだと思う。

するのは難しい。しかしこの尊い時期は二度と来ない。これに気がつかない人は、自分の可能性を失いつつあり、後に悔いを残す事になると思う。だから我々はこの時間を有効に使うべきである。有効だと思ふ事、やらねばならぬ事を精一杯やる事である。その結果より、その過程に意味がある。即ち何でもやってみる事である。やってみなければわからない。出来ないからやらない。それは自分の可能性を知る事が出来ず、悔いを残す事にはかならない。僕はある人が多数の人に、「これを覚えて来い！、やって来ない者は殺す！」と言ったとする。そして、その翌日に実行しない一人の者を本当に殺してしまつたならば、残りの者は次の問題が無理なものでも、必ず覚えてくると信ずる。このように、人間はどんな場合にも自分をその環境に従わせることが出来る。それを自分で自主的に行うことが出来ればいいのであるが、難しい。しかしそれが出来る程度出来るのが、この時期、即ち青春の時期であると思う。それでも出来なかった人、又反対にうまく出来た人、この二つはその過程を考える場合によって決して敗北ではないと思う。全力をつくしてこそ「わが青春に悔いなし。」だ！胸を張って前進しよう。輝ける青春ではないか

強歩遠足を顧みて

山下 和美

一年生の時は、「目くら蛇ものにおじず」で、時間の割り当てが不適

現実

宮沢 雄二

人間、特に高校生活をおくっている我々には沢山の悩みがある。現在持っている最大の悩みというところ、やはり大学受験のことだろう。「もつと充実した生活」と思いながらも考えどおりにはいかない絶望感。こんな我々の生活は決して楽しく幸福なものではない。

しかしそうは言っても、高校生活がまったく世間から特にかけるなれて不幸だというわけではない。当の本人（私も含めて）が自分にふりかかった不幸を最大の不幸と思っているのに過ぎない。どんな人間でもその人間が特に不幸だとは言えない。又どんなに希望に満ち満ちた生活をしていても、幸福であるとは言えない。こんな不幸の生活にも一条の太陽光線がさし込むと、じめじめした泥沼からも美しい幸福な花が咲くのだ。

我々が不幸だと思うのは、生活の一面をみて、絶望し、友人の心の中に凶暴な猛獣が巣くっているのを発見し、驚きかつ失望し去っていく時であろう。自分の一面に、又相手の一面に失望し、人から愛されたいと思ひながら、孤独に親しみを感ずるようになり、さらに自分を愛してくれるはずの人間さえも嫌う。しかし他の一面は希望に満ち満ちたものであり、自分の励みとなる物かもしれないのにその一面には見向きもせず、悲しみ多い薄暗い世界の中にとじ込めてしまふ。

しかし我々もやはり人間である以上、親切とか愛情にあこがれ、

詩や音楽を楽しみ、友情になぐさみを見出だす。そんな風であつて良いのに、現にそうなのに、このわずかな時間の、短かいがしかし力強いこの幸福感も過ぎ去った後には、我々にむなしさと不安感しか残さない。今の私には迷いと不安しかないのである。しかしこの不幸を捨てるのは幸福を捨てて事よりもつらい。だからこの避け難い外的運命を甘受して、良い事も悪い事も充分味わいつくして、本来の運命を見つけ出し獲得したいものだ。

十七才

天野朝馨

僕も十七才、いよいよ大学入試も一年後に控えて、第一の人生の岐路に立つことになるのである。この頃はテレビなどを見たり、家族と食事後話にはずんで過ごしている時など、入試のことを思い出すと少しゆううつになってくる。小学校の時、ただ先生から与えられた宿題だけをそくさと済ませて、後はただなんにも考えずに遊びに興じていた頃がなつかしく思われる。しかし教科書にも書いてあったように人はある輝かしい時期のために長い苦闘の時間を持たなければならぬのかもしれない。今の時期には苦闘し、精いっぱい努力した後は、立派な社会人としての時代が来るのである。苦あれば楽ありである。この一生の内のわずか一年か二年の短い時期ではあるが、しかし比重の大きな、将来を左右するかもしれないこの重要な時期に、十分に考えて、苦悩し、若い柔らかな芽を、弾力性のある、踏まれても踏まれても枯れない強い芽に育てたい。こ

の岐路に立つて、輝やかしい将来に通じる道を勝ち得て、胸をはって歩いていけるよう、がんばろう。

雑感

武田有司

三十八年の春、苦勞を重ねたかいがあつてやつとこの高校へ入れてもらいました。手はなしで喜んでいるうちにもう二年の終りになつてしまいました。大学入試はあと一年ほどに迫りました。三学期のはじめ校長先生がおっしゃいました。「二年のうちに基礎的なことは終つてしまふように」。現在のところそれを目標にして勉強しようと思つています。(今までなまけていたのでほとんど不可能に近いけれども。)それからまあ自分の頭のなりゆきにまかせて遊んでいけばいいだろうと思つています。つらつら思うに、いい大学へ入るには知能も関係すると思うけど、ある程度一生懸命勉強しなくてはだめらしいようなので、努力はしてみようと思います。

また入試のために目の色を変えて勉強しなければならぬ、と思うとまったく情なくなりません。でもまあ、一歩道を踏み出した今となつてはそんなことも言つていられません。

いい大学へ入ると、遊べないからつまらないけれども、大学卒業のことを考えると仕方がないからやつぱりそれを狙おうと思ひます。

大学へは一体何のために行くのでしょうか。それは大いに学問を身につけて社会のために働くためと考えます。では自分より有能な人

にその席をゆずつてもよい。しかし自分は人間です。負けたくはない。この見えない相手と破るにより、社会のため、自分のための道を開きたいのです。

高校生活と若さについて思うこと

清水保富

私たちの年頃は人生のうちでもっとも大事な年頃であると言われる。この大事な時に、私たちは一体何を考え、何をすべきでしようか。

この若いという時点にたつて、第一に考えられることは、学問によつて自分を磨き、より鍛えるということです。しかしそのほかに何かしなければならぬ大切なことを、私たちは忘れてはいないでしょうか。

たとえば、この時期を過ぎてから、したいと思つてもできないこと、あるいは私たちの若さのみが吸収できる自然からの感動など、そういうものを私たちはもつとより真剣に考えるべきです。それはあくまでも前者の学問を中心に考えるべきではあるけれども、その学問も単なる功利主義的にのみ可能とせられたら、あまり意味のあることではないと私は思います。

高校時代の私たちは、お互いに喜び合い、悲しみ合うものだと思ひますが、現在の私たちは、自分が他人より優位に立つために、隠し事までせねばならないようになってきているのです。そして私たち高

す。なぜならば私たちの生涯は、ただ一つの功利的目的のためにただ一つの手段のみが、その若さを支配することを許され、他のなすべき重要なことはすべて除去されています。

このような現象を私たちは現代の社会が悪いと言つて、そのせいにしがちです。たしかに現代のゆがんだ社会は、頭でかちの人間や、若さはきちがえた青少年を生んでいるかもしれない。しかしここで問題になっている当人はあくまでも私たちであり、社会ではないのです。

私たちはこのような社会の中に生きながらも、常にはちぎれる若さを持つてより人間らしく高校生活を送りたいものです。

楽しかった修学旅行

佐野路子

この一年を振り返つてみて、一番印象に残っているのは、何といつても修学旅行だ。京都や奈良は、やはり甲府とはちがつて、歴史物匂いがする。京都の繁華街はもう大部都会化され、昔の面影はないが、ちよつと中心街からそれると、古びた素朴な美しさが、すみずみまで満ちている。旅行の三日目、友達のアさんと、京の町を物をして歩いたが、ある扇店の主人夫婦のやさしい言葉使いや、物腰から、京都大の落ちつき、穏やかさというようなものを感じた。

また、私達が関西を訪れた時が、もみじの紅葉もあり、季節的に一番よい時であつたのかも知れないが、見学場所どこを見ても、庭やまわりの風景が、調和的な美しさを持つていた。私に特に印象に

残っている庭は苔寺だ。一般に「苔」と聞くと、何か陰気な感じがするが、この苔は、あたかも緑のじゅうたんが、敷きつめられているようだった。その苔と、木々の緑、もみじの紅、木の幹の茶、池の水の青とが、とてもよく調和している。心が静まるような感じだった。また青竹にいつぱいになった水がこぼれて元にもどるとき下の石に当たって出す「コッソ」という音が、澄みわたった空気の中にしみこまれていくようで、さわやかな快い感じを受けた。ただ、もう少し静かに、ゆっくり見学したいと思った。一

とにかく、五日間があつたという間に過ぎてしまい、私達はそれぞれ、楽しい思い出を胸に秘め、元気に甲府に帰ってきた。

修学旅行と我がクラス

小林 峻一

僕が高校に入った最大の目的は勉強よりも修学旅行であつた故に高校時代に於いても一回ぐらいの修学旅行はあつたつて良いものだと思つているが、修学旅行反対論まででているのだから所詮無理な願いだろう。しかし修学旅行は楽しかった。僕が一番楽しかったのはいろいろな物を見物するよりも旅館内であつた。事実を言えば見学なんかしないで一日中旅館に居ればよいと思つた。そうもしてられないから先生の後を、ただただくっついて行つた離れないようにあたかも舟山のオツチャンは女王バチのようだった。それにしても日数が少なかった。したがって寝る時間もおのずと少なかった。目をこすりこすり見る仏像は全部が全部睡魔に見えた。そんな

ことだから見学したものはすこしもどこをどんな風に見て来たのか憶えていない。家に帰ってから自分が寺院といつしよに写っている写真を見て始めて行つてきたな、ということが分かった。だからもし僕の唯一の頼みの『修学旅行をもう一度』が実現したら今度は睡眠薬をポケット一杯持つていくつもりだ。しかし修学旅行はこの受験地獄の中のもっとも深い想い出となつた。我がクラスが男女クラスであつたのも深い想い出の一つでもあつた。考えてみるとついにこの一年間男女友好協定は成立しなかつたけれども、修学旅行という奴が調印させるところまでこぎつけてくれたが、両者にはその意志がなかつたのか、今ではまた冷たい風が吹き抜けている。それに北風が加わつてなおいっそう冷たくなりつつある。早く夏が来ればよい。

意志

小林 賢二

「意志があれば道がある」これは自分が強い意志を持っていればかならず、その人の道は、きつと、開かれるであろう。ということではないだろうか。しかし意志は、その人の努力がなくては、意志を押し通すことは出来ないだろう。だから僕は、各々の意志を押し通し、最大の目的を達しようではないか。

一年を顧りみて

中村 幸男

何と言つても修学旅行のことが今一番思い出に残っている。秋も終ろうとしている十一月中旬に、級友との楽しい旅は一生心の片隅にやどつてゐるに違いない。日本古代の建築や壁画、彫刻等の芸術品をまのあたりに見学できたことは、非常に光栄であると思つてゐる。法隆寺、京都御所、平安神宮、平等院、二条城等の数多くのものを見て回つたが、三十分位の見学時間を惜しんだ。とりわけ、法隆寺の夢殿は官製はがきに、宇治平等院の鳳凰堂は十円銅貨に出ているが、これがそうかと関心も一段と深まつた。

このように昼間はあちこち歩き回つて疲れたにも拘わらず、夜になつても勢い盛んだ。夕食前に部屋の中で相撲をとり、唐紙を破つて旅館の従業員にどなられたこともあつた。

又、消燈の時間になると、電気だけは消えるがくらやみの中で枕の集中攻撃をうけ、とつくみ合いが始まつて体の小さい者はさんざんな目にあう。朝起きて見ると、ふとんはよじれ、掛けぶとんは敷きぶとんになり、敷きぶとんは掛けぶとんになっているというありさまだ。とにかくにも、こんなに騒いだにしてもけが一つなく帰れたことは、本当によかつた。こんなわけで、五日間もちよつとの間に過ぎてしまつたが、今こうして除夜の鐘を聞きながらその時の写真や絵はがきを見ていると、あの日のことがまざまざと脳裏に浮かび上つてくるのである。

短歌五首

清水 陽子

明けそめし新春の道かるやかに
神にもうでし心すがしく

初雪に庭のなんてん頭さげ

青垣はゆる新年の朝

初雪に冷たく光るガラス窓

あたたかくみゆシクラメンの色

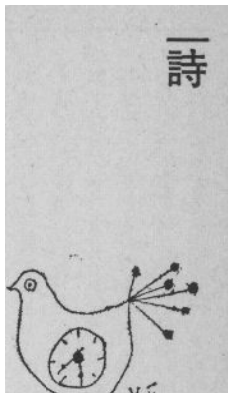
寒風にいてつく空の月青く

残れる初雪ふみならし行く

ききなれし古き町名は消えゆきて

心にひびかぬ新しき名





少女とモミの木

戸栗礼子

線色の世界

ミルク色のもやに包まれていた
大きなモミの木があった
涙でぬれた様なしおらしい葉
一枚一枚がまるで形がちがう様な
上にいくほど青くさわやかだった
小さな風がくすぐって通る
モミの木は大げさに身を揺って笑う
「ゴウゴウ」「ザワザワ」
「つかまえて食べてしまうぞ」
弱虫で泣き虫な少女
恐ろしさに石につまづきながら走った
雨の綾の日の光は七色

ぼくと太陽と

広瀬和江

あの丸い不思議な球が
ぼくをぐいぐいと引きつける
めらめらと、焼きつくすような炎
一瞬も同じ形をしていないくせに
何十億年もの長い間
一つ所について退屈しないんだ
そうさ、太陽はいつでもあったんだ
うれしい時も、悲しい時も
太陽はぼくの心に生きていた
闇の中のぼくは光を求めた
目の前がぱっと開けた時
太陽がそこにあったんだ
太陽はぼくを導いた。
もつと情熱を持てと
自分自身で光れと

こずえの間からキラリとこぼれる
それは青く輝く宝石
少女だけが知っている
帽子につけて『青い鳥』の様にまわそう
一ばん先にどこに行こうか

『七人の小人』のお家がいい
しかし木は高く葉は痛かった
少女は思ったー大きくなったら行こうと
幼い日の夢……
モミの木にかかる夕雲の色にも似ていた
空は曇っていた
長い間少女が忘れていた好きな場所だった
大きなモミの木はなかった
青い宝石と『七人の小人』の夢も又
色あせた枯葉の線と少女の心の宝石……
少女はみつけたちっぽけなやつ
大きなモミの木の子供
折れそうな枝 精一杯のぼして
重そうな空がのしかかっていた。
大地に死物狂いではがみついていた
少女の目にわけのわからない涙がにじんだ
そこには又緑色の美しい世界があった
ミルク色のもやに包まれていた――

太陽……………
おまえは何ていいやつなんだ
遠く離れているくせに
かあさんのそばにいるみたいに暖かい
ぼくにとつてかけがえのないもの
それは若さと太陽なんだ

楽天的な人

平井和行

私は色々な人を知っている。
のんきな人
腹黒い人
誠実な人
責任感のある人
なにもいわない人
……………
中でも楽天的な人が好きだ
楽天的な人はどこにでもある
あんたの友だち
あんたの先生
いやあんた自身――。

若いんだ

小林章一

女の人が
大きく口をあけて
腹の底から笑ったその顔
目は細く
歯並びのよい白い歯が印象的だ
男の人が
雪深い南アルプスを
一人で登る
山は孤独にさせてくれる
自分の力を試す所だ
若者
――星よ聞け――
その光で若者に
希望を与えよ
――水よ聞け――
その青さで
若者の心を
清らかに育てよ
――大地よ聞け――

楽天的な人は無理をしない。
けん実な人とちがいますよ
いつも自分をふりかえる。
楽天的な人は定義されない
どんな人にもなりうる人。
ただ、我慢――

楽天的な人は勉強がきらいだ。
授業はまっぴらでねむ気がさす。
物理化学は気にしていない。
楽天的な人は大男。
豊山ぐらいあっただろうか。
大きいくせに小さい目をして
ニギビの上に愛きようがあつて。

楽天的な人

その人はいつもわらっている人。

朝

井村直仁

白く、深く、
霜はしら。

サク…、サク…。

霜柱は、
消えて
了った。

仲間

窪 田

学校って所はいいところだなあ
うちにいる時もいけれど
学校にいる時はもつといい。

どうしてかな
凝して勉強は好きでないのに。

先生が好きだからかな
それとも

愉快的仲間がいるからかな
うん、きっとそうだ
それに相違なし！

しかし仲間ってものはいいいものだなあ
これからも大切にしよう。

こんな言葉

小屋 理恵

友達。自分の気持——悲しいにつけ、また嬉しいにつけ——をそのまま話すことができる。彼女はそんな友達です。だからこの友情をあたたく長く続けたいと思う。そして、成長したい。友情ということを考える時、こんな言葉がすぐ思い出されるのです。

ライム、ライトの中の

テリイ「世の中のことが何もかも無駄のように思われてきたの。花を見ても、音楽をきいても、そんな何の目的もない。無意味なように思われたの」

カルヴェロ 「意味を求めたってはいまらないよ。人生は欲望だ、意味などどうでもいい。すべての生き物の目的は欲望なのだ。それぞれ欲望があるから、バラはバラらしく花を咲かせたがるし、岩はいつまでも岩らしくありたいと思つて頑張っているんだ。

……そうだ人生はすはらしい。恐れ的气持さえもたなければだ——何よりも大切なのは勇氣だ。想像力だ。」

反則

金 丸・義 敬

彼はゆっくり泳ぎながら考えた。『今のフライングはどうも俺

らしい。だがそのことについてはっきりした意識がないとすると、
案外純粹なものだったんだな。』

彼は水から上がると手早く体をふいて、イスに座った。目はスタート台とプールの向こう側を往復している。

再び笛が鳴る。スタート台に立った彼は、今度はだいぶ落ちついていて。さっき自分の犯したフライングのことを考えながら慎重に構える。一瞬体の動きが停止したように感じた。全てが彼の意識から遠ざかったと同時にピストルの音がする。「チェツ、油断したな。」だが彼はうまく飛びこんだ。

水の中に入るともうあのためらいは感ぜられなかった。すでに競泳が始まっているという緊張が、彼を夢中にさせたのだ。彼は水が非常に冷たいのに満足した。水の新鮮さと緊張によって、彼の心には新たな闘志がわきおこった。

しかしターンを終る頃から、彼の心の中に何かが生じてきた。そしてそれは、体の疲れと比例してしだいにはっきりした意識となつて広がった。それは逃避感であり、またずるさでもあった。そしてそれは彼をますます疲れさせた。もはや彼には苦しさへの嫌悪と快感への憧れしかなかった。苦しさは現実であり、快感は未来であった。彼は現実を忘れるために未来を思つてみた。が、思つてみるだけ苦しさが強くなるにすぎなかった。彼はあえいだ。そしてそれはまさに「浮いた」ということだった。

彼には、もうどうすることもできなかった。彼はあきらめた。
『やっぱり純粹じゃなかったんだ。』



自由記 より

古明地勝美

×月×日（木曜日）曇のち雨

最近思う事は、精一杯生きるという事だ。自分に与えられた生活の中で、ほんの一部しか行動しなくて、やって行くなんて、本当に小さいと思う。隅から隅まで活用しなけりやもつたいたい。この短かい人生に、おいては、その事は自分の個性を大いに延ばす事にもなる。真面目に清く正しく美しくなんて、いたいけな少女趣味だ。

×月×日（月曜日）晴れ

新年会のフォークダンスで香代子さんに会った。彼女変っていて中学の時よりずっと大人っぽくなっていた。

「変ったね」「あなたも」、それっきり何も話さず次のパートナ―に手を取られていった。淡い寂しさと共に懐しさが、こみ上げて来た。いつか夏の日に夕方まで白い球を追ったデニスコートがまぶしかった。

×月×日（火曜日）雨のち曇

青空だ！青空が見える。さつきまで、どんより曇っていた空に確かに青い空が見える。かすかな夕やけがほのぼのと、うす赤い。杉の木立が静かに並んでいる。

ポブラのホーキも寒そう。

×月×日（土曜日）晴れ

う。親や年寄りは、自分たちがもう人生の旅の終りに近づいていることを知り驚きあわて、そうして自分に残された日、一日たりともおろそかにすまいと思う。

ところが、数日たってもその生活の中へもどると、人は細かくきざまれた時間のために、利己的になって人のことなどかまわなくなる。反省することもなく時間においまわされ、自分の事にふりまわされあくせくしながら、苦しい苦しいといって動きまわる。子供は親を冷たい目でみ、親も子供のことなどあまりかまわなくなる。そうして、なにもかもがばらばらになって、人は孤独になる。いよいよまづくなると親はすてばちになる。なにもかもが中途半端に終る。どうしよう。どうしようとあせるだけで、ずるずる時間におされ生活におされ、そのまま終ってしまうのかもしれない、とするとなんだかむだな気がする。どこかが変だ。どこかが狂っている。

奉仕

相沢 佐代子

私はあるクラブに所属していた。そのクラブはキリスト教関係でたまたま育精学園という精神薄弱の子供たちのための学園に、奉仕に行くことになった。そこで私たちは絵本とか、古新聞紙をもって出かけた。わずかな贈物であったが喜んでくれ、裏庭の草を抜いてくださいと、頼まれた。九月の始めごろで、裏庭には乾いた地面の上に、雑草がいつぱい生い茂っていた。少し草刈りを始めたら、日ざしが儲かったので、水を飲みたくなって、友達数人と水を頼ん

毎日さんだ心の生活の中で、きょうほ、うれしい事があった。K先生といろいろ話し合って先生は最後に「困った時は、いつでも相談に来い」と、いつてくれた。

うれしかった。涙が出るほどうれしかった。

×月×日（水曜日）曇り

燃えるような満足感！

「A、F、S」きつと落ちるだろう、でもやってみよう。

そういう事を考えるだけでも楽しい。

今度行けなかったら大学を出て行ってやるから、どっちみち結構だ。小さい事を考えていたのが、ばからしくてしょうがない。

ちよつと考えた

上笹 秀男

いなかの冬の夜は、じつにいい、山と山の間にすこしばかりのぞいている空に、星がいっぱいだ。そのすみきった光をみていて、ふと考えたことがある。

どうして人はいなかにくると、心から人に親しもうと思うのだろうか。心が穏やかになって、何でも温かい目でみるようになる。きのうまで自分のいうことに耳もかさなかつた子供が、なんでもよくいうことをきくようになって、親は、なんてよい子供なんだろうと思う。いなかの人は素朴でいい、彼らは人間らしい温かさでまわりの人をつつもうとする。そうされると、私たちはとてもうれしく思

だ。すると、学園の先生が、やかに水を入れ、コップを二・三もってきてくれた。学園の子供たちは、あまり訪問者が来ないのか、不意にやってきた人を囲んだ。ちよつと問の抜けた、視線が外れている子供たちである。その子供たちが先にコップで水を飲んだ。私は何かそのコップがきたらしいように思えて、水が飲めなくなつてしまった。私はずつと、人は平等であり、差別をしてほしくない。だれにでも同じような気持ちで接しなければいけない、と思つてきた。しかし、それはただ頭の中で正しいと信じていただけのものであった。実際の私の行動や気持ちは、そんな私が考えていたものより低俗であった。そして理想のようにしようとするが、気持ちが悪いつという方がまさつて、子供たちと溶けあうことができなかった。自分自身がなさけなくて、いらだちを感じた、私は頭の中で正しいと思つていことができなかった。ある程度、勇気も必要だったが、本当の原因は自分の心の根本からだめだったのだ。実践をしている人々は、人類愛にもえて、別に偏見を感じないのだろうか。広い心をもちたい。

バスの中の彼女

岡 真理子

年の暮れのある日教科書を買に行った帰りに偶然あるバスに乗りました。そのバスは案外すいていて、あいた座席もかなりありました。私は前の方の乗車口に一番近い座席にすわりました。そして自分のそばに立っていた車掌さんの足もとを、うつむいて何の気な

く見つめていました。何の予めにそうしたのかわからないがその後私はその足もとから順に目を運んでついに視点が顔に達しました。顔を静かにはこぼした彼女は私の方を見ていました。彼女は私のことにすでに気づいていて私が気づくのをまっていたようでした。私はハッとしました。バスを乗りまちがえたか、それともバス料金をまちがえた時のようにとまどい落ち着かなくて座席から腰をあげたりすえたりしました。私は彼女が私の小中学校の同級生であることを忘れていたのです。彼女は〇〇交通の車掌さんで前にも時々バスの中で会いました。彼女であることに気付いた私は、やっと安心して彼女と話を始めました。彼女の仕事上もあって私達の長話はゆるされませんでした。客の応対に忙しそう彼女を見ると、とても満足で社会において何かの仕事をしていく厳しさの自覚がよみかえりました。彼女の客に対する態度は常に落ち着き、私に話しかけてくる時の声には、中学校時代の独特の高い声は少しも聞かれなかった。ただ停留所を客に告げる時の声に、かすかに彼女らしさが、ただよっていた。

大きく波打った黒い髪の毛と自えりの紺の制服で清潔に飾られた彼女に何となく、学校時代とは異なる現在の彼女を発見しました。バスから降りてその位置にしばらく立っていると、最後の客をおろしたバスは、彼女の底に満たされている気迫のような勢いで走り去った。後に青い煙と私がのこりました。二つともしばらく立たずんではいましたが、煙は、落ち着くところへと散り、私は家に帰りまし

ある夕立ちの日に悟る

長田 義人

夕立ちというものは何か心の中に巣食ったムンムンしたものを解きほぐしてくれるように感ぜられる。確か夏休みも後一週間ほどで終わろうとしているある日の午後であったと記憶している。真向いの山をぼんやりながめながら「死」ということについて一人思っていた。苦しい問題であった。自分はいつ死ぬのであろうか。

死ぬ瞬間どういふことを考えるであらうか。あるいは意識がはっきりしないのでなにも考えることができないのであろうか……。でも意識は明瞭でありたい。そして果して生まれてきて幸福であつたかどうか。一人ほほえみたくなるような自分の姿があつたかどうか。死ぬほどの苦勞をしたかどうかということを天上を見て考えた。

などと思っていると、向かいの山の上に高くあつた雲が急に広がって、あたりがちよつと薄暗くなった。来るかな？ と思うと同時に向かいの山の少し左の方の空から降ってきた。遠くの竹やぶの竹が頭を殴られたように大きく揺れている。そこらの屋根の瓦に当たってビシ、ビシと音をたててる。しばらくはその夕立ちの勢いに今までの事を忘れてしまっていた。しばらくして突然、記憶がもどってきた。しかしその時前とは違った考えができていた。

「死」というものは簡単に口に出すべきものではない。またいくら考えてもわからうはずがないものである。しかし思うにこれは

少年の話

早川 昭仁

決してあきらめではない。なんとすれば自分は今生きているからである。生命あるものは「死」よりもまず「生」を考えるべきだからである。

そう悟ったのを知ってかどうか夕立ちはカーテンを引くように去っていった。

突然雅夫は、耳が聞こえなくなっていました。それ以来彼は暗い沈んだ少年になったのです。

ところがある時。彼の耳に、風のそよぐような、かすかな声が聞えてきたのです。それは、日増しに、はっきりと聞こえてきたのです。それは、木や川や空や大地などの自然の声だったのです。そして、こんな話をしていたのです。コノ家ノ雅夫ト、イウ少年。耳ガ聞こエナイカラトイッテ。アンナニ沈ソデル事ナイノニ。ソウダネ。人間テ、ナゼコセコセ生キテイルノカナ、自然ヤ宇宙ニクラベルト、短イ生命ナノに。自分ノ目先ノ事シカ考エナイモノガ多イネ。ソレニ、同ジ人間ドウシデ争ツタリシテイル。モット素直ニ生キラレナイモノカネ。シカシ、考工方ニヨッテハ。オタガイ、競争スル事ガ、人間ヲ、ココマデ進歩サシタノデハナイカネ。ソレハソウカモシレナイ。ケレドモ、人類進歩ノ為ニ、私達自然ヲ、破壊シテイクト、モウソレキリ。私達ハ、帰ッテコレナクナルノニ……。人間ガ、モット、自然ヤ宇宙ノ上ニタツテ、物事ヲ考エタラ、キ

寝坊な私

・ 深沢 みつ子

「みつ子、七時三〇分よ。母の第一声。」……「みつ子！十五分前よ。」ウーソソ「みつ子八時ですよ」わかった……「みつ子！いい加減にしないさい。遅れますよ。」ハハハ「毎朝の母と私の台本である。毎朝」もうおことわりよ「と言われるけれど、それでも次の朝もやつと起こされてなんとか授業に間に合う。中学生になった時からもう五年、そしてもう一年。この母のこの助けがあればこそ、どうにか学校に通える私である。

父の死、

上杉 恵子

夏休みに入つてすぐ、私は非常に恐ろしい経験をした。それは父の死である。いままで父は入院していたが、土曜の午後急に死んだ。その日、私は学校で課外を受けていた。そこへ父が死んだという知らせがあつた。その時びっくりし過ぎてそれが信じられなかつた。

た。夢中で病院へ駆けつけたが、足がガクガクして倒れそうになった。父の顔には、すでに白布がおおわれていて、父のベッドに取りすがり泣いている母や立っている兄の姿、そして立ち尽くしている看護婦さん、同室の人たちの異様な感じで瞬間父の死を知ったが、その悲しみは実感として湧いて来なかった。暫らくして泣き続けている母に、私は「この世の中には、お父さんのいない人が多勢いるんだもの。」と言った時、思わず涙があふれた。以前から父の闘病生活の苦しみを見るにつけ、医者になって少しでも早く父を救おうと思っていたが、父はそんなことも知らず死んでいった。母はその間、私たち四人の兄弟の面倒をみながら、絶えず看病に精魂を尽くした。雨の日も風の日も、ある時は暑い日も寒い日もあの山道を六年間通い続けて、ひたすら父の回復を願っていたのに、その甲斐もなく、父の死に会った。あらゆる苦勞をした母の姿が今ここに走馬灯のように浮かんできて、母の一念が、どうして神に通じなかったのだろうと思ひ、これから先、母の余生を楽しみ思ひ出と凍るように、兄弟皆で努力し、母へ孝養し、父の死に報おうと思った。また父の死によって命のはかなさを痛切に感じたので、将来、自分の人生を大切に、私の全身の中に、父の魂が生きていて、いつも私を見守ってくださることを信じて、ひたすら自分の目的に向って前進して行く覚悟でいる。



趣味について思うこと

吉村真佐子

私の弟は、将棋が好きで、休日などは朝から晩までそれに関係あるものに夢中になっている。例えば、将棋講座のようなものをテレビで見たり、将棋の本を読んだり、新聞のその欄を見て研究したりあるいは誰かを相手にさしたりなど。まったく私は閉口してしまふ。よくまあ一日黙って同じことを考えていられるものだなあと。しかしそれも好きだからこそ出来るのだろう。そして好きになるのは、時には勝つからだろう。

私のあきないで出来る趣味をしいいうなら読書である。最近、一人つきりであるのが嫌いになったので、長い間続けて本を読んだりしたことは無いが、なんといつてもこれは楽しい。私の場合たいそうで泣いたりするののも後で思ひ出すといふものだ。小さい頃ジャンヌダークの話の本をずいぶん何回も読んだ記憶もある。これもみんな本の魅力に引かれるためだろう。

私はもったった手紙を読むことにも非常に興味を持っている。書くことは面倒だけれども遠くにいる友から返事をもらいたいから、時々書いたりする。友の気軽なユーモアのある文をそつと読んでおもしろく笑ったこともあった。ふつう学校のことなど、生活についてがおもしろい、中には励ましや慰めの言葉もある。また、美しいと感じた平凡な出来事や風景について細かく書いてあったり、詩など

だ。私は思ひ出のために生きる。それは決して進歩のないものではないと思う。

若いのち

堀口守雄

若いのちほ生長し、展開し、運動する。

生命力はいよいよ強くなり、より深い意味を持つようになる。そして、次第にどこかで何かと一緒になろう。同化しようとしてくるのである。そこに見られるものが、善なるものか、悪なるものかは判定しにくいのだが、そういうものが人の感情を支配し、いろいろな物事に独占欲を増長させていくのである。

ある程度まで、「発展」、「進歩」をした若いのちはまた、時に、激烈な幸福の苦情をおぼえることがある。成長過程にあつて、幼年時代を抜け出る時、無限の生活の莊嚴の前にひざまづく時である。自分の持つてうまれた能力、現在の漠然とした日々のくりかえし、将来の可能性の微々たることを痛感するのである。

そんな期間に現れてくる激しい欲望は、エゴイズムになつて、人間を形成する一つの要素となつてくる。しかし、それについては日常一般の解釈が悪意になされてくる難もあるが、実はそれ以上、はるかに自然なものである。初めには一部の人間の心を独占しようとし、さらに進むと、もつと高尚だと考えられている。精神的領域、思想なり、芸術なり、事業なりで、自分を一層意味あらしめていくのである。

思ひ出

樋口和子

もうかなり前のこと、幸田文の本を読んだら、こんな文がでていた

「よい思ひ出はその人に与えられた天からのほうびで、いやな思ひ出は、それを忘れない間は罰である。」

私は非常に感銘して、この文を日記に書き出して置いた。そのころ私の考えていたことをすばらしくまとめた文章で、その的確さにも私は一種の尊敬のような感じを持った。

そして日記にこんなことを書いていた。

「近頃私はまったくくだらない生活をしている。何年後、私がこの時を思ひ出してこんなにつまらないことばかりだったら、私はさびしくなるだろう。又自分に悲しくなるだろう。思ひ出はほんとうに尊い。大切なもの。人生その時その時に最高の思ひ出ばかりを持てたら、それは私の最高の喜びであり、幸いである。」

この文章は私を大いに激し、夢を与えてくれた。時々自身に何かさし迫った時、この文章が頭に浮かんでくる。そして私には天から罰ではなくほう美を受けなければいけないと自然に不思議な力が出てくる。それは思ひ出の一過程である。しかし未来に通じたもの

つまり、ぼくたちの一般に苦しむことは、より成長した印である。現実からの逃避をなそうとすることもあるかもしれない。幸福な毎日、将来に価値をもつ現在、乗り越え難いある制度に拘束されている。その制限を発見することは多少のさびしさを与える。そして、ぼくたちの中にもそのさびしさを絶望的なもののように感じている人があると思う。実は彼は彼なのである。それを知ることが、制限の中に親しみを与えるのである。

転 勤

芳 賀 美 佐 子

おまんじゅうの形をした、すべすべした、黒い小さな石。私がまんじゅう石と名付けたこの石は、大島の元町で船に乗る直前泣きながら拾ったのだそうです。父の勤める測候所が元町から奥へ入った所にあり、同じ年頃の仲良しの友達もなかった私に、三重県の尾鷲へ行くといつても悲しい理由はなかったのに、別れというふんいきが私を泣かせたのでしよう。小学校へ入学する春のことでした。

尾鷲市の小さなブラットホームに入りきれなかったクラスの友達と先生は踏切りの所で手を振って見送ってくれました。岐阜県の御嵩町へ行く時でした。私を教会へ連れて行ってくれた近所のお姉さん「陸ちゃん」から小さな小さなお人形と小さな小さな貝殻と箱に並べた貝殻を、私が毎週ポケットに10円入れて通った日曜学校の先生からは小さな新約聖書を、真由ちゃんと一代ちゃんからはお人形をいただきました。これらを見るたびに尾鷲のことを思い出します

す。四年生になる春でした。

仲よしの籠橋さんが小さな御嵩駅で見送ってくれました。ある朝私は何て言おうかと考えながら学校へ行きました。門の所で籠橋さんに会いました。「今度、山梨県の甲府へ転勤。」「甲府！ そんな遠くへ？」彼女は驚いてくれました。その頃の私には別れる悲しさより皆が驚いてくれるのを見る楽しさの方が大きかったのです。未知の町への関心と中学生になるうれしさでいっぱい春でした。

今度の父の転勤は、まだ、はつきりしたものではありません。しかしその話を聞かされた時、一番最初に頭に浮んだのは学校のこと編入試験に受からなければならぬから成績が悪くなった今年でなく去年だったらまだよかったのということです。今まではただ悲しいと思っただけで、今では慣れてしまいいつに任んでも同じだと思ひ、他の事を心配するようになりました。

こ れ か ら

大 久 保 礼 子

また一つ新しい年が加えられて幼児らにとっては年々と可愛いさが増すことがたのしみとなり、ある者にとってはまた一つ年寄りになったといつてはうれしい思いになる。ところで私たちにとつてはどういう考えをもつようになるだろうかここにいざ抱負でも書こうとすると、やはりこの年を迎えて忘れられずに頭に浮かぶことは競争に勝ち目的を達しようとする気持ちばかりが先走る。しかし現在これはごくこの年代の著にとつてはあたり前のことであるかの

ように思いこまれている。そして何もかもがその焦点を旨ざし力が注がれて、毎日がその連続であるのだ。そんな中で私は悲観的に考えこんでしまつて、こんなに苦しんで将来どんなになるんだろうかと、これから先の自分に課せられた未知の人生というものを、放棄したくなつてつらい気持ちになることがある。しかし、その反面心に強くならなくては、強く進まなければと、はげます矛盾する自分の気持ちに驚くのだ。そして誰も答えることのできないこの質問を、自分自身でかみしめた。ところが到達するところは、やはりいつも自分が強くなるといふことのみである。また幾度かこんな考えをもつたが結果は同じだった。そして苦痛に敗けずに頑張る若者を見るたびにほんとうに自分の気持の弱さが恥かしく、こんな気持ちをもつた自分が残念に思われるようになり、これから先を強く勇気をもつて進めたらと思うのだ。

車 中 に て

小 笠 原 芳 美

父の死後七日目、一月四日だというのに、ものうさと空虚さがつきまとい離れない。母と兄と私は父の生前の勤務先1大昭和製紙吉永工場1の宿舎に父の身の回り品の整理にいくことになった。実

際私は父の会社も宿舎もまだ見たことがなかったので見ておきたい気持ちもあったが、父の生活していた所や使っていた品物などを見るとまた泣いてしまふようなのでいきなくなつた。その日、朝早く空のスクケースを希つて身延線のホームに立つた時ひとしお寒さ

が身にこたえた。朝日新聞を一部求めて乗りこんだ。右側の席の方が景色がよかつたのを私は思いだした。母と兄もそれに応じた。準

急で富士駅までの二時間、母は車窓の景色をぼんやりと追つていた。この時はじめて私は母のやつれた顔に気づいて心が痛かつた。

兄は新聞を読んでいた。私は何をするともなく時々車窓に目をやつたりこれから行く父の宿舎を心に描いていた。きれいずきで凡帳面な父の部屋は、きつと塵一つもなく何もかもきつんと整頓されているにちがひなかつた。隣に子供が二人、少しもじつとしていないで腕白ぶりを発揮していた。車窓から見える下部や身延の山々は草枯れていかにも寒々しかつた。その内、目の前がパツと明るくなつたかと思うと車内の人の感嘆の声、青く澄んだ空に雄大な富士がくつきりと現われたのだ。積木の様な家々を前にして半分ほど雪をいただいた富士が長い裾を引いてその美しい姿を右の車窓一杯におしげもなく見せてくれた。母も私も窓ガラスに顔をよせて、しばらくは夢見る様な心持ちでこの富士の姿に魅せられていた。私の家から見える富士とほスケールも趣も全然異なつていた。こんなに私の心に富士の姿が印象的に写つたことはなかつた。畑にはキャベツが転がりお茶の花が咲いて、所々大きなミカンが黄色く浮きたつて見えた。まもなく、富士駅到着のアナウンスが入つた。

古 人

清 水 永 子

人とは不思議なものである。死して後にも後世の人々に教え学

ばせる。現在の人はまたそれを次の世代に送る。それは永久にかわらない。

古人は唯一の師である。問題をなげかけては相談する。きつとそこには求める答がある。いや答ではなくわれわれを導き理を教えてくれるのだ。時には冷く、時には暖かく。そのうえ古人はまたとなひ友人である。流れる時に友は替り心も変わる。しかし古人は一定不變、われわれから離れることはない。安心して其の心を打ちあけ、反発し学び合う。私達はそうすることによって共に興じ、共に悲しむ。われわれはそこに光を見つめる。見つめるまで進む。暗黒の泥沼の中を、どうかするとそれやすく、こみいり連鎖している。しかも障害物はある。しかし昔人は導く。一步一步輝く太陽のもとへ正しい方向へと。

われわれは強く昔人の尊厳さ、偉大さを知らされる。ただ客観的に文章の上で接するのみでも、私達はその表現に古人を知り、道を知る。死人と生きている人との暖かい血のかようなのが感じられる。こんなにも素晴らしいものを大切に尊んでゆきたい。

歩 き な が ら

山 本 睦 子

「お前は歩くのが遅いね。」

「あら！それはお母さんと、こうして話しながら歩いているせいよ。学校から一人で帰る時なんて、さっさと歩くわよ」

「わき目もふらずにね」

運 命 に つ い て

大 沢 良 一

運命とは人間の行動を支配する大きな力だ。

私は、過去十七年間の見聞より次の事を考える。不十分な装備や悪天候を通して、山に登り遭難した人々を、新聞、テレビなどの、マスコミを通して知り、そのたびに私は思う、死ぬと生きるとは紙一重であるが、その境に大きな力が作用していて、それによって山からの帰りが、電車が柵かに別れて、それぞれの中で揺られてもどる。次の事については、経験もなく詳しくは知らない。戦場に同じ状態で同じように百人の兵隊がおり、みな坑の中から半分鉄かぶとに隠れた顔を出す。たまたま前方約百米の地点において、敵が発砲した時、弾丸は誰に当たるか、確率は一パーセントであるが、そこには、弾丸の行手を左右する大きな力、運命があり、それにより一パーセントが百パーセントになったものが運が悪い奴といわれるかも知れない。以上より私は、人間の運命は、私たちが「おぎあ」と産声を発した時から、すでに定まったものであり、人の力ではどうにもならないものであると考えた。本人としては運命に従順に生活していいつもりでも、その人が一杯の茶をごく普通に飲む時、散歩する道順でさえも束縛を受けている。しかし、それでは人生は宿命的で、闇となる。私たちが行なっている一挙一動がはかなくわびしいものとなり、すべてに虚無を感じざるを得ない。この時私は次の言葉を思い出した。「我々が、我々の運、不運をつくる。そし

「そうよ、それに、この間お姉さんと、顔を見合わせたわ。だってお母さんたら、セカセカ忙しそうに、どんどん歩いて行くんだもの。『お母さんも年取ったんだナア。』ってね」

「それで、気がせくのかも知れないよ、先が短かいんだから。」
せまい道の両側に、小さな工場がある。右手の製糸工場の、あの何とも言えない、イヤな臭いが鼻をつく。その通りを抜け出して、四・五分、目ざすショッピングセンターが目の前にせまる。
めずらしく母がこんなことを言う。

「帰りに、屋上で、遊んでこようか。」

「そうね。あそこには、まだ一度も行ったことないものね。」

左手の工事現場の広く深くはりおこした地面の底に、小さな人間が働いている。

冬の午後の日ざしは意外と強い。手をグツと上に伸ばして、思いきり胸を広げた。

「ああ、明日から又寒い教室か、いやだなあ、私の所は仲々日が当たらないし……。でも、いいわ、寒い寒いなんて、言っているうちに冬なんて、すぐ過ぎちゃうものね。」

「お前、あと半月もたつてごらん。余程寒くなるから。」

そうに違いない。オーバーや首すじに射し込む暖かい日射しと、この頃では珍しい、弱い風が、私にそれを感じさせる。



て我々はこの運命と呼んでいる。「これならば、人生に明りも差します。努力も実ります。だが次によく用いられるので「運命を変える。」があります。この場合悪いを良いにしたと考えるのが当然変える以前は不運であり、変えた後に、ずっと良いを保ちえたかどうか？ 私は、この事は強く運命づけられていたのだと思う。運命を開拓すると、それに従うとは、全く対立するにちがいない。しかし、私達には、私達自身の運命がわからない。(時として、その一端をつかみ得る人がないではない。)「わからない故に、私達は、少なくとも現在に最善をつくさなければならぬと思う。一方最善をつくし、努力しているその事自体が運命づけられていると言えないでもない。私達には、無限の可能性を持つ明日があり、若さがある。その若さで呪われた運命？を力一杯打破して、明るく住みよい社会を築こうではないか。

僕 の 毎 朝

佐 野 寿 仁

三学期の始業式に校長先生がおっしゃったが、たしかに冬の朝起きる事はつらい。そこを無理して朝飯もそこそこにして、我が愛車に乗る。時計をにらんで、ボタンを掛けながら街道すじに出る。長年シグナルの多い所を通っているのでシグナルとのかけひきがうまくて、普通はあまりそこで止まらされていることはない。さつと通り抜けて、冬の一時を楽しむ。まわりを見まわすと。毎朝会う人はいたいい同じだ。毎日つづけて会々と、＼おはよう＼なんて声をか

けたいような気がする時もある。

相生町から平和通りへ出て、銀行前の十字路へ来ると、かの有名なおじいさんが黄色い旗をふりまわしメガホンを持って面倒みているので、スピードでおし切るといことができないのでよくストツプする。しかし失った加速度を取りもどすために、止められた連中はシグナルが青になるのを待ちかまえていて、必死になってスタートする。

それからこの旅路の最大の難所である横沢の坂へ出る。ここをスピードとフォームとを考えて乗り切るのだから、容易な事ではない。その上バスかなにかと追いかけ合いを演じなければならぬはめに随った時なんかは冗談ではない。しかしこれも年期をかけた関係からか、テクニクはうまくなったつもりだ。

ようやく学校の前に出る。＃今朝はまにあうかな＃などと思いつながら、けさも懐しの校門に入った。

部 室

清水俊夫

柔道場、それは我々柔道部員のいこいの場であり、また修練の場である。あるは友と語りまたある時はわざを競い合う。

脱衣所へは常人には入れない。なぜならそこにはひどい悪臭が漂っている汗と油がそのかべにほしみこんでいるのだ。しかしそれに我々には感じない。むしろ、その臭いがかがらないと変な感じさえする。

毎日の練習は苦しいけれど、終ったあとのあの快よさ。一日のうさが吹きとんでしまうような心地がする。この気持ちは運動をしている者以外にはわからないだろう。我々が「柔道をやっていてよかつた」と思うのもこの時である。

なきたい時もあつた。しかし我々はつづけた。そして「黒帯」。まちにまつた黒帯である。その黒帯がいまこの部室にかかつている。これを見るたびに闘志がわく。「勇猛精進」と三船先生がいつた。我々はきょうもこの柔道場で練習にはげむ。何事にも負けぬために。



9



春日雑感
組主任 橘田

ボカボカと暖い日の光にさそわれて庭に出て見る。つい先日まで厚い氷におおわれていた池の面もいつの間にかとけて、底の泥の中にじっと動かずにいた金魚達が水面近くをユラユラ泳ぎ廻っている。秋頃から手入れもせずに放つておいた落葉を掃きのけて見て驚いた。去年の秋に地中に埋めて置いた水仙の芽が三センチ程可愛い姿を見せて居る。手入れもしたわけではなく、植えて置いた者達も忘れてしまった球根が、厳しい冬の寒さに耐えて、土中に根を延ばし、若々しい生命のいぶきを見せて、せい一パイに背延びしているで

はないか。薄緑色のほかまを小さいながらもキチンとつけて。

自然の歩みは緩慢だ。一日一目を比べて見ても昨日と今日と何の変化もないように見られる。けれどもこうして人の気のつかない地中で、営々と生の営みが行われ、時の至るのを待っている。緩慢なだけにそれだけ確実な歩み。その確実さを今さらのように感じてしばらく水仙の芽に見入った。

新年に思うこと

山本登志子

歴史の歯車が急回転するでもあるまいに、大みそかから一夜明けて元旦ともなれば、気分が一新するから妙である。天にも地にも、新らしい年の落ちついた匂いが充滿してい

る。ななめにさす陽光をまともに受けて、至極のどかである。

初夢はごくつまらないものであつた。しかし、夢というものは、ずいぶん価値のあるものではないだろうか。というのは、人間は自由を欲するが、其の自由は、夢の世界においてのみ得られるからである。現世では実現不可能なことができるのであるから、夢は神様から人間への、有難い贈物であると思う。

日本人気質について

大西透

先日、下校の途中、ある交差点でこういう事があつた。小さな子供を三、四人連れて歩

いていた母親が、横断歩道を渡ろうと道の中程まで至った時信号が赤に変わった。すると信号の変わるのを今かと待っていた車は、青に変わるや否や走り出そうとした。その婦人は子供の手を握ったままうろうろしたあげく、

結局元のところへ戻されてしまった。あと少しの時間でも運転手に待ってやる気があれば良いのだが、どうも気の短かい、相手に譲ろうとしない運転手が多いらしい。ある国では法律で歩行者優先を決めると、どの車も人が歩いている間は待っているという。それはその国の人々には、他人を愛するという気持が強く、譲り合いの精神に基づいて生活しているからである。それに比べて日本人（全部ではないが）は、明治維新後、他国に遅れまいとする風潮が起り、それが日本人同志にまで及んで、相手を退けてまでも自分を良くしようとするようになった。それは、ある一面では積極的で当然の事かも知れない。だが現代の世で、他人との協調なしでは生活出来ない。どうしても相互理解が必要である。しかし、今日の日本人は他人より伸びよう伸びようと思ひ、利己主義とまでは行かなくとも、譲るといふ精神に欠けているのである。聖書に「汝、己れを愛するように、隣人を愛せ

よ。」と言うのがあるが、日本人も他人を愛してこそ、工業の発展だけでなく、精神的にも真の先進国となれるのではないだろうか。

歲月人を待たず

小野 正巳

「歲月人を待たず」このことばを今始めて身にしみて考える。ついこの間一年の学年誌の原稿を書いたばかりなのにもう二年の学年誌の原稿を書かなければならないのだ。「高校二年生」、何と早く過ぎ去るのだろう。日々の柔道の練習、その日その日の予習復習におわれ、秋にはいろいろな行事に浮わっていて自分を振り返ってみる余裕もなく、惰性的にここまで来てしまった感じがする。もうそこまで高校三年という試練の年がやって来ている。この学校で高校入試を受けたばかりと思っていたのがもう来年は又どこかで大学入試を受けねばならないのだ。「二年より二年、三年より三年、三年より浪人の年が短かく感じる。」と先輩は言った。なるほど程度差こそあれだれでもそうだろう。あせりというものが、これを感じさせる最大の原因である

う。浪人したならば今年こそはと考えるだけにより強く感じることだろう。このあせりをなくするには必勝の信念、勝負強い根性を持ち毎日の学習を計画的に着実に実行していき自信をつけることが必要であろう。あと一年間の高校生活の一日一日を有意義に過ごし、高校三年生を収穫多い一年だったとゆつくり振り返って見れるだけの余裕は持ちたいものだ

自分だけの世界

渡辺 稔

現代の人間社会は大変せこましい。人間の一生の時間で何の目的もなくボーッとしている時間つまり自分一人の世界に入っている時間が以外に多いと思う。この時間の適当でない人が疲労で倒れ、早死、自殺をするのである。余裕なしに何事も成功しない。

散歩など完全に自分の世界である。体に良いだけでなく、その間に何か頭の中でボーッと考えていると思うがこれが何においても何らか役にたっていると思う。

もう一つ自分だけの世界に興味があげられる。趣味は自分が好きな事であるから疲労を感じない。だから機械的な生活を乱して楽し

くさせる。

もしこれらがなかったら人間は機械的社会に殺されたまた味気ない人生になってしまう。

自分だけの世界は度が過ると陰気な人間をつくるが、適当であれば大変重要ではないかと思う。私たちはまだ若くて、また病気がかかってもない。これからの人生、これからを大いに有効に楽しく過そうではないか。

根性について

長田 謹造

オリンピックにおいて、日本は十六箇の金メダルをとった。日本としてはこれは十分すぎたことだったのではないか。米英等欧米諸国の諸新聞に、日本は予定十五箇の金メダル獲得は不可能で、よくても十どまりだろうと述べられていた。しかし、日本選手は奮戦して、十六箇の金メダルをとり、世界3位のスポーツ王国になったのだ。これで十分ではないのだろうか。

日本中の全新聞に日本選手の根性は最低だと書かれていた。私は全くけしからんことだと思う。たしかにオリンピックの前において記点上はまずまずの好記点を出した選手が本

番の大会において失敗した、破れさった。しかし、失敗したというのは新聞社のヘボライターの弁だと私は断定する。

日本選手に根性がないとよくいえたものだと思う。なぜならば、自分がスポーツマンになって優勝する事ができるだろうか、きつとこの大会に出場することさえできぬだろう。

だから、自分がスポーツマンになればよいのだ。そうすれば、競技の敗北が根性の敗北に連結されているものでないことも気がつくだろう。たしかに、根性が大きな比重をもつということは私も知っている。しかし、オリンピックに出場可能な人は、偉大なる魂をもった巨人であると断言できると思う。

もしかすると、いや、きつとライターが反駁をするだろう、これに対して。「俺はこの道で一旗あげている。成功したものだ」というかもしれない。では、彼は世界一のライターと自己を自信をもって断言できるだろうか。できるはずもない。それでは、選手を酷評することを避けるべきだと思う。オリンピックでのアイドルはチャンピオンだけなのだ、王者だけが美評されるのだ。だから、これに基づいて考えると「根性なし」論は退かすべきことが分かると思う。

日本で生れ、メキシコの柔道選手として采目した某さんはこういつていた。「アメリカ人や本当のブラジル人は、日本人と違い、スポーツのメッカたるオリンピックにたのしみをもっているが、日本人は苦しみの圧迫のみをもってくる」と

日本人は背が低く、体も細い。だからスポーツに苦をおいて、トレーニングをしてオリンピックにやってくる。練習量は他国の選手の倍やってもおいつかぬ、ことさえあるのだ。

それでも日本選手は十六箇の金メダルを取ったのだ。それが、賛辞よりも「根性なし」の方が多いとは、どういうことなのだろう。だから私はここで、根性なしというのは、末葉の考えとしておき、その前にもつとかがえべきことが多くあるとおもう。選手自身の身にもなって考えるべきだとおもう。

西部劇から

小林 憲次郎

僕は西部劇が好きだ。雄大な大草原、西部男のスマートな容姿はもろんのこと。しかし僕の心を一番つかんではなさないのであ

悪を倒すガンの力である。そのガンさばきを得意とする西部男の、何に向かつても恐れることのない安心感をうらやまずにはいられない。西部男のガンに匹敵するもの、それが現代はあつたら果して何だろう。1僕自身この複雑な世の中を渡り切れるかどうか心配だからである1。それは人を殺す拳銃でない事は言わずと知れている。世の中をうまく渡る技術、それが必要かもしれない。しかし僕は故ケネディのもつていた正しい判断力勇氣、誠実、献心をあてはめたい。これらをもつ老こそ西部男のような強さ、魅力をもつ男だと思う。彼ケネディはそれを何によつて得たか、それは真理の探求によつて得たのだと聞く。真理の探求。それこそ人間だけにしか出来ない尊い使命だ。国語も化学も数学も真理の探求に他ならない。とすればそういうものを学ぶことこそ正しい判断力、勇氣、ひいては誠実、献身などが身について来るというわけだ、もちろん例外もあるが……。おれはまだ若い。学生は先ず学問に精出さねばならぬ。そこでこんな言葉を思い出す。

青年老いやすく学成り難し。一寸の光陰かろんすべからず。

夜明け前

依田 政幸

今この文章を書いているときは静かである。もうすぐ家々の台所から騒しくなるであろう。だが今は、目覚し時計の時を刻む音と螢光灯スタンドのうなりがきこえるだけだ。この静寂はすぐ破られんとしている。今まで繰り返してきたように人間の活動の聲がもうすぐ爆発する。今はそれがおさえつけられている。むしろ自分たちでおさええているのだ。

私たちにおいてもこの人間の短い一生に、少なくとも一つは心からしたいことがあるだろう。それを遂行するにも、行きあたりばつたり主義で必ず成功するだろうか。その前に何か必要となつてくる。それはこの夜明け前の静けさのようなものだろうと思う。今までの経験からしても、一つの事をするのに計画を立て実行方法を練るために大部分の時間を費し、神経を碎いてそれでもなお結果にはひびきみ現われてきた。これからの私たちは今まで以上の重い目的を成就するために苦勞することは確かである。それをするためにも私

努力の中に

数野 利夫

人生の目的は何か。人生の喜びとは何か。これに答えることはむずかしい。しかし、次のように言えると思う。人生の喜びは、ひとつの偉大な目的に自らを結びつけ、全心全霊をそれに傾注することである。小さな欲望もつまらない不平も、無益な泣きごとを忘れ、自分の定めた目的を実現するために、あらゆる困難に耐えて、努力することである。努力の中に喜びは生まれる。これはネールが言つたことばである。われわれも目的をしつかりもつて努力しようではないか。

たそがれ

斉藤 正敏

ゴーンと鳴つた遠くの寺の鐘が、その余韻を静かな空氣にいつまでも残しているようなそんな雲が次第に暗くハゝその色を変えながら西山の端からちぎれていくのである。そして山ざわをほのかに赤く染める夕焼けの名残りは、歓喜の後の快い筋肉の疲れであろうか。

私たちはもつと長く苦しい夜明け前を耐えなければならぬだろう。私たちは精神も肉体もそれに耐え得る立派な心身を育てようではないか。

白い空

清水 啓子

塔屋の壁によりかかつて見上げると、どこまでも続く空がある。目が痛くなるまで、その空の向こうの向こうを眺めてみると……そう、どこまでいつても、ただ白い空。

冬の夕暮れ近く、一人、屋上にたつている。雪の山々を走りおりてきた風が裏のお寺の柳の枝をしなわせる。櫛形山が青く、遠く山の端近くに夕日がぼつかりとうかんで1白い光の中に灰色の家々が人なつかしげに見える。北の空には、きょうも又、鳩の群れが飛んでいる。日の光に鋭く、白く光つたかと思うと、褐色の山の中にふつと隠れ、そして、又、心の影からふいに現われる。

胸の中に灰色の霧がたちこめている時、私は決まってここに来る。山も、空も1太陽も、何にも語りはしない。ただ、冬の風が、蟬の聲が、心の底まで突きぬける。からっぽ

今、世界はすべて一つのねぐらへ帰るべく静かに足のみいそがせる。すでに葉を落して久しい桃の木も、年中色を変えようとしなない竹藪も、山も、林も、自然との対立者であるはずの事の騒音でさえも、ここにおいて、彼と夕闇とが混然として一体であることをだれが否定できよう。すでに私自身も、その大いなる同化の働きのもとにある自分に気付いたのである。思うにたそがれの魅力は、この偉大な同化の力にあるのではないだろうか。すべてが、調和しようとし、一つになろうとする。そして私は、その動きに例外でない自分を見出した時、楽しい夕餉のその時にも似た心臓の動悸を感じ、また一方、小さいころの自分を思い出すような、感傷的な気分にもなるのである。我々が本当に自然を味わうことができるのは、自然のふところへとびこんだ時であろう。山のふもとや青い小さな灯は、チカチカと夕辺の物語を始めた。山はなお暗くなり、すでに多くのものは判然としない。強かつた八ツおろしも息をのんだように静かに足もとの白く枯れた草のみがカサカサと鳴る明るさを増し、濡れたように光る一番星は、子供達の親しき道案内であろうか。

の心だ。そして、不思議に光みちている。すべての可能性は、「無」から出発する。：人生や社会や、その他様々の物に対する疑い、信仰、皆、かぎりなく広がる同心円状の空の中に溶けこんで、からっぽの心には白い空の明るさがしみとおる。何も求めない。何も捨てない。ただ、あるがまま。：

へ私は絵をかくのが好きだ。こどかい所にすわつて、遠く川の流れや緑の木々を眺め、何も無い紙の上に、新しい世界をつくるのが。でも、紙の上に移されたものは、山も、空も、田畑も、皆氷りついてしまう。あふれる光の波は少しも表われない。枯れ枝に輝く白い日の光も、紙の上では、厚ぼつたい白色だ。曇り日でも、雨の日でも、空は明るい色をしているのに、紙の上の空は死んで暗い。：

魔法使いがほうきにつけて飛びまわっている夜、寢床の中でほおづえをついていた。暗い電灯に、家具の影が壁を斜めにはつていった。十二時を打った。時が白く過ぎていった。

我が家の珍風景

望月由美子

我が家には珍妙な風景がよく見られます。まず誰かさんのベッドを見ると分かります。ミーコ（猫）が枕をしてまん中にでんと眠っており、人間さまが端で小さくなつて眠っているのです。私が先日かぜをひいたのは、どうもこのためらしいのです。猫なんか、ほっぽり出せばよいとお思いでしょうが、そうはいかないのです。なぜなら我々子供は皆ミーコにまいつているからなんです。

「ハッピー（犬）／＼お入り。」 「ねえ。ハッピー。」 「お願いだからハッピー入つてよ。」 さんのハッピーは知らん顔。最後の手段、頭をなげたりさすったり。甘やかされて育った箱入りの娘ハッピーはすぐこれにひっかかり、抱かれて犬小屋に入れられます。なぜこんな事をするのかとお思いでしょう。それはうっかりすると遠くまで付いて来て、まい子になるからです。まい子になられると、こつちがやせてしまうので。

のです。彼と僕が親しくなったのは、もちろん一高に来てから、それも、確か一年の時、文化祭の時だと思ひます。同じクラスであつたのにあまり話さへしなかつた僕らは、そのとき、僕が彼の自転車を借りたことで親しくなりました。その上彼が僕と同じクラブへ入つたことでさらに深まることができました。ところが、僕は、強情で我儘なので、どうも、彼とのつきあひも同等の位置でというわけにはいかないのです。その上僕がクラブの部長だつたことが災ひしました。僕も小さい時はいつもいじめつこにいじめられていたの他人に圧力を加えられることには、普通以上に嫌悪感を持つていました。ですから、いつも彼に対してすまないとと思つてゐるのです。彼もそのことは知つていました。彼は僕に「自分でそうしようと思つてゐるのだからいいんだ。」と彼がいつも僕に服従的であることを彼自身すこしもきらつてゐないのだと言つてくれました。僕はこの言葉だけでずいぶん気がやすまる思ひでした。彼に友人ができたとき、その人は、彼に最もふさわしい友人でした。僕は彼に迷惑ばかりかけてゐる自分はもう彼と別れようと思へました。もちろん好き好んでというわけではありません

山のこゝろ

川崎光洋

山は私の友である。盆地では色づいた紅葉を、木枯らしが一葉二葉散らしていくころ、山々には初霜がおとずれる。冬の澄んだ青空に白根を盟主とする南アルプスの山々が厳かにすわつてゐる。そんな時山々が最も美しく見える時である。それは美しいパイオリンの音色であり、崇高な詩である。単純なあまりに現実的な生活にあきた私の心の限りない郷愁を誘つてくれる。遠い雪の山々は私にとつてあこがれであり、夢であり、理想である。山よ！私が悲しい時、君のその氣高い愛でなぐさめてくれ、ともすればくじけそうになる私の希望を、山よ！君の不動の魂で奮い立たせてくれ。

右から甲斐駒、鳳凰、白根壮嚴な山なみは日本の骨である。私は富士山を眺めることができる生活が送れることを幸福に思う。

朝の南アが清潔でひきしまつた若々しさであるとしたなら夕暮の南アは落ちついた静けさである。夕日が山の端に淡い光を落とす山々はその黒々とした姿を横たえる。それは何

もかも調和してしまうおおかさを持つてゐる。奈良の大仏の顔にもにたおおかさがある。私はそんな時いいしれぬ心のやすらぎを感じる。私の心をすつぽり包んでしまうような山の心を感じる。

朝昼夜、山は一瞬一瞬変つてゐる。それだいてなお永遠に変わらず高く静かにそびえてゐる。人間の愛やにくしみ、悲しみや喜び、うそや誠をだまつて見つづけてゐる。永い永い渇きにも、嵐にも、千年の水雪にも山はじつと堪えてきた。山は孤独の勇者である。

山は私の友であると同時にこの世界で最も尊敬する師である。私は山を愛する。愛さずにはゐられない。そして山の心をつかまえようと必死にもがく。しかし私は山を知りつくすことは決してできないだろう。だが私は私の心が「山のこゝろ」ならむことを願う。

親友

佐藤吉元

今僕には一人の親友がいます。が、彼はおよそ親友らしくない親友です。こんな風に言うときも悪友の様に聞こえますが、決してそうではなく、むしろ良友すぎるくらい良友な

ん。そのことを彼に告げましたが夕方家へや

つて来た彼は、親友とはそんなものではない事を教えてくれました。何かの本に「親友とは互に、心の内を包みかくさず話し合える友であり、互に相手を尊敬し合ひ、互にGive Take と関係になれば親友とはいへないし、そう思つていてもすぐ壊れてしまうものだ。」とありました。ところが僕は彼を尊敬してゐるわけではないし、僕は彼に尊敬される何物をも持つてゐない。その上僕は彼からTakeばかり、彼は僕にGiveばかり。この点からいへば、最初に言つた様に、僕らはおよそ親友らしくない親友になるわけです。けれども、僕は、彼と僕の関係だけは例外的な親友関係だろうと虫のいい事ばかり考へてゐるのです。

少年時代について

村松康彦

もう、畑の中を飛び回り麦の穂を背中へ入れてがまんできなくシャツ一枚で遊んでゐる子供を散歩にでかけて見なくなつた。今での幼年（小学校五、六／＼中学二年生）ぐらいの子供にはまるでへびのような、なにかと

めのない子が多い。といつてぼくはまだ若い

が？ 私は今こうして筆をとつて少年時代のことを考えると、どんな頭の中にその実景がうかんでくるほどです。日曜日といへばかならず遠くはない山へ行き、野うめを取りバラ線にひつつかいたことも幾回もあつたし、春には小さいながらも（少年時代から背は大きかつた）高校生の仲間に入り畑のすみれ草花の上で遊び、ずぼんのものゝ辺はやぶり、畑床にはほいり、まつ黒になつたことをおぼへてゐる。そうした思ひ出というものは今からはもうできないだろう。幼い時には幼い時ながらの感覚、感情があり、その感情が子供らしくてよいのだ、それなのに、今での幼年者はどうだろう。まだ小学校二年生ぐらいで「恋のバカンス」だの「高校三年生」なんかの歌を口ずさんでゐる。私は実にいやになつた。なぜもつと少年時代らしい感情で力いっぱい、はしやぎまわらないんだ。何も私は遊んでけがをしろとはいわない。しかしけがをしても涙はないくらい男児の方がいいと思う、朝から晩までテレビの前にいる「ばあさん」のまねなんかしないで。広場なんかで運動していつた方がよいと思う。

思うこと

舟久保良子

青春は人生にたったいちどしかこない。私達はこのような言葉を幾度となく聞いている。ほんとにはずかしいことに私はこの言葉を近頃まで間違った会釈をしていた。私のこの言葉に対する概念というのは、とかく表面的な行動のみに思っていた。しかし違う。この言葉の真意はもつと内面的な深い意味を含んでいるように思う。そう考えると、あの輝かしいオリンピックに偉業を成し遂げた日本女子バレーボールチームは、決して青春を犠牲にしているのではないと思う。また私達高校生は受験という大問題を目前にびかえながらもなお表面的な青春を求め楽しみたいと思っている。しかしそれは現実には許されない。そこに矛盾を生じ、不満を抱いていたのだ。でも今は思う。オリンピックの彼女らがひとつのものに、一心に打ちこんだその若さこそ青春は人生にたったいちどしかないという言葉の真の行者であるように思う。

憂い

吉岡 一

高校二年、年齢十七才、自分はあと五、六年後には社会人として第二の人生をスタートしていくかもしれない。その時の自分はどんな状態であるか、はたして自分の希望の方向に進めるだろうか。こんなことを考える僕の頭に自然と浮んでくるのはいままで自分が持ち続けてきた数多くの未来像である。

すべての人が幼年時代から少年時代にかけて未来の自分の姿をより空想的により自己本意に考えるように僕もいろんな伝記や小説体験記などから未来の自分を空想し、そしてそれに酔ってきた。その酔いはまことに心地よいものであった。それは過去の淡い思い出として今も僕の心の中にある。

時がたつにつれ、わた雲のようなものも徐々に縮小され、またあるものは消え去り、夢もより現実的なものにはなってきた。しかし最も大切なこと、すなわち夢を現実にする行為は僕にはなかった。身からでた事として多くの夢ははかなくも一つ一つはつきりとくずれ去っていき、高校も二年ともなるとそれは

激しくかつ決定的なものとなった。むしろ

に寂しかった。そして自分の怠慢と行動力の不足をなげき、はじた。でも早くこんな絶望的、虚無的な自分を再び未来に向かい、よりたくましく前進する若人の姿にしなければならぬ。僕はつとめてこう自分に言い聞かせている、そしてより行動的になれと。それはもちろん外面的なことばかりでなく内面的にもだ。そしてカンフル剤になるものを求めている。ろんな本や雑誌などからいろんな体験談を読みまた聞いた。大松博文の「なせばなる」も僕に希望とフアイトを与えてくれたものの一つだ。

しかし、なかなか思い通りにはいかない。が過去の失敗を悔いている時間はない。第二の人生への一つの関門は一年後に迫っている。過去の失敗は取り返しがつかないかもしれない。でもやっついていかなければならない。それがただ一つの道だ。その道がどこに通じているのかはわからないが。

星の王子さま

雨宮 由貴子

星の王子さまは、お花が大好き、バラの花

が自分ひとりのものだと思っていたのに、この地球上にはたくさんのバラの花のあること

を知って悲しくなった。でもその時、キツネは言った、＼そこらに咲いている花はただ咲いているだけだ。しかしあんたが残してきた花は風にあたらないう様に……してやったからあんたにとってはこの世にひとつしかないものだ。つまり心で見なければ、物事はよくみえない。かんじんなことは、目にみえないんだよりって。この物語には、人間生活の一番美しい世界、静かな世界がにじみでています。

私たちにとっては、ずい分そのことをわすれている様です。童話のもつゆめの世界を、その世界には悪も善もあり、種々様々です。しかし、それらはみな純粋だ。だから美しい。だから楽しい。

人魚のお姫さまの涙は真珠となる……こんなことは本当はないのにー。小さかったころ私はそれを信じた。童話の世界も、現実の世界もみな同じだったからー。「大きくなら、お城に住むんだ」っていったも遠いあの日、今になっては、何もかも知ることができるようになった私。それだけに、夢をもたなくなつた。童話の世界の人々とも話をしなくな

った。

しかしこのごろ思う。毎日毎日を無意味にすごす私にとって、時々は昔のことを思い出したり、ふとゆめの世界に入ったりするのは楽しいひと時だろう。それが自己逃避でない限り……私は、その時を大切にする。毎日毎日を始めじめとした気持で生活をしているよりも現実の世界をちよつとはなれてみるっていいことだ。北風が吹き抜ける街を私は、「王女さま」になったり又、「マツチ売りの少女」になったりして家路へ急ぐ。

思うこと

岡光 臣

1

修学旅行・強行遠足などほこの一年間で最も記憶されています。京都・奈良の町の外観や実物の仏像の姿、又夜道を歩いた事や時間一はいまで海の口まで行つた事など。僕は一年間の記憶が二つであることを不安に思っています。充実してはいなかったのか、又感動を受け得なかったのか、と、

一番身近に影響するものは何だろうか。僕達にとって大切なのは勉強です。勉強の上で

大切なことは、「記憶」です。成績がよくない時、よく努力が足りないとか、努力しなさいと言われる。が、何を努力するのか。それは「記憶」を明確に多量にする行動をさしている。

2

人間の記憶ほど精巧なものはないと思う。

これを器械にたとえると、十八ミリカメラ・テープレコーダー・タイムマシンを組み合わせたものと言えるはずですが、けれども「記憶」には忘れやすい、フィルム・テープを紛失しやすい、人間の不完全さがありません。

中には、感動を強く受けた場合などは、はつきりと「記憶」されることがあります。これでも特に強い部分だけが記憶されるものです。

小説「知と愛」を読

んで

小野 信子

ある修道院の騎士風の非の打ち所のない華措をし静かなしみとおるような思索家の眼差しと美しくきりつとした細い口唇を持った賢く美しい、「知」に生きる少年助教師ナルチ

スとその生徒で「愛」に生きるゴルトムントとの友情がこの小説の主題である。高貴さ故に孤立していたナルチスはその鋭い洞察眼によりゴルトムントが彼と全く性質を異にしていることを見ぬき、ゴルトムントに芸術に奉仕すべき運命であることを教える。ゴルトムントは放浪の末、木彫家となる。長い年月の後彼は全く疲れきった。しかし邪心のない満足した様子で修道院長となったナルチスと再会する。ゴルトムントの死の直前にナルチスは「愛は君にとって珍しくはない。しかし私は人を愛したことがついでない。」という。

「ナルチス、私は母を持っているので死ぬる。君は母を持たないとしたら、一体どうして死ぬつもりなのだろう？母がなくては愛することはできない。母がなくては死ぬことはできない。」という言葉を残しゴルトムントは息をひきとった。そしてこの言葉はナルチスの胸の中で火のように燃えた。

以上があらすじだが最後の言葉に全てが言い尽されている感じだ。私達の生活に愛がなければ一日たりとも生きていられないだろう。愛とは崇高な精神的なものだと私は思う。その点でゴルトムントの愛に生きると同じ

赤んぼの声を聞いた時、私はオロオロしてしまいました。「大変だ。大変だ。」と言って家の中へかけこみ、さっそく皆に報告して、赤んぼの鳴き声までまねしてあげました。新しい生命、何とすばらしいのでしょうか。だがこの事実、よくよく考えてみると私は失恋したようです。彼女は、チャッカリ彼氏を見つけていたのですから。それというのもしょせん、彼女は犬で私が人間だからでしょうが……。

二枚の枯葉から

芦田川 きよみ

席替えをして一番南の一番前に来た。そして気がついた。

窓のすぐ向うに、枯れた葉を二枚つけた細い木がある。今にも落ちてしまいそうなのに枝に必死にしがみついている葉。風や雨にさらされ、でもがんばり通して生きている。人間だってこんなものではないかしら。

はかない、本当にはかないと言って良い程の小さい命をもち、生活に夢中でしがみついている。愛をささえにする者。仕事をささえ

時に欲情のあまりに行動する様には抵抗を感じずにはいられなかった。思うあまり行動しなければ優れた芸術は生まれないのだろうか？心から満足して死ぬことはできないのだろうか？豊かな愛と同時に欲情を抑える理性も必要なのではないだろうか。ナルチスが人を愛することを知っていたらもっと幸福であつたろう。なぜ二人は強い友情で結ばれていながら互に相手にないものを与えあうことができなかったのだろう。友情とは互いに与えあい共に成長しようというものではないのだろうか。そんな友情を望むこと、知と愛を兼ねそなえた人間になりたいと望むのは無理なことなのだろうか。人間の生き方を考えさせられた小説だった。

私の恋人

近藤久子

「私の恋人」これは家族の公認しているアイツの事です。アイツは色が白くて、体は小柄、お目々のパツチリした赤いスカートの似あうかわいこちゃん。それでもててもてて困るんです。ひいき目でしょうか。アイツと私はよく散歩に行きます。春、タンポポの咲いて

にする者。そして、ただ自分のみをささえにして生きる者。——でも皆同じ。たった一つの命を生きている。

風が吹くと——それが本当にかすかであっても——ブルブルと震える二枚の葉。一体、何を夢見てあんな枯れた体を頼りない一本の枝にたくしているんだろう……。

寂しげに孤独をかみしめる人間。年若い、何の望みもなく、又それがあっても思いをよげる事の出来ない人間。枯葉はそんな人間の姿に似ている。

何もかも必死で生きている。
戦いながら1日分の心と。自分の体と、そして世の中と。

あの葉いつまでしがみついているだろう。
あの葉いつまでしがみついているだろう。
あの枯葉、私の心に散りそうか気がする。
そして一生私の心にあの老いた体を横たえるような気がする。

「どんなすばらしい青春だって、いつかは枯れてしまうんだよ。人間は誰だって年とる

いる小道、夏の日暮れのあの夕焼け、秋は落葉を踏んで、冬、冬はクッキリと富士と八ツが見える。だけど風が強いし、寒いので、私はあまり行きたくありません。それでチョクチョクサボタージュ。しかしアイツとの散歩のとき私は気を使います。どこかの道に出会うとき私は気を使います。どこかの道に出会うときその奥の方を恐る恐るのぞいて見ます。アッ／＼犬がいた。それも大きな黒いヤツ。それで私はアイツを抱いて一目散に逃げます。それでもそばまで犬が来たとき、私は謝ります。「ゴメンネ、もう来ないから。アンタお家へ帰ってちょうだい。ゴメンネ」考えて見れば馬鹿らしい。チビの女の子がチビの白い、雑種だか、スピッツだかわからない犬を抱いて、言葉がわかるのかわからないのか知らないけれど他の犬に謝まっているなんて……。

そうなんです。私の恋人はメスのワンコなんです。とつてもいたずらっ子で、おやつの時間になると戸をガリガリやつて催促します。それで私のおやつの一皿は彼女行き。彼女はお餅が大好きです。初めてやった時は、のどへつかえさせて、目を白黒してしまっただけ。その彼女が赤んぼを産んだのです。その

んだから。私は今つくづく思うんだ。若い頃もっと自分を大切にすれば良かった、と。

もっと一日を大切にすごすべきだった、と」

ダイアローグ

高屋れい

わたしは自己を否定する。広い世界をつき破るために。社会の中・人間の中にいる時の自分は、社会の、そして他人のわたしでなければならぬ。苦しみ。悲しみ・寂しさを恐れてはいられない。自分一人の泡の様な幸福

・喜びを求めることは、今のわたしには、無意味な愚か以外の何ものでもない。
自己否定

そこには、空虚な感じだけが残る。しかしこれを克服することは簡単だ。一人、自然の中をさまよう。そして夢を見る。偉大な自然の中を、清い美しい心が踊りまくる。消えることのない、幸せに満ちた、真実のわたしの姿を、わたしだけが知り、楽しむ。



光る星

安藤 一宏

「青白く光る星なあに」

「あれはオリオンの星雲さ」

「北極星はどこに」

「ほら、北斗の上に見えるだろ」

夜の空は美しい

おおらかな眺め

ダイヤのパノラマ

美しい天然の

遠々のためいき

アンドロメダの星屑に乗り

にぶく白い夜空を散歩したら

星のレンズで覗いてみよう

青く淡い生き物

とてつもなく大きく

ちよつぱり寂しい彼ら

しかし、皆若者さ

深く暗いもやの中

僕はもがいていた

（地上の仮物でもあるはずの僕が）
母のまなざしに似て清らかに

かぎりない平和の泉

そう、そこでのやすらぎを求め

星が影を引く時

ふと、大空のかなたに

僕はしずんだ

美しい天然の

深いやすらかなためいきにより

俺の望み

丹沢 良二

一生の中に

一つの仕事を成し遂げたい

それを成し遂げるとは何たる幸福／

おお、どうぞ疲れぬやうに／

そうだ、それは空しい夢ではない・

いまはこの樹の根にすぎない

（やがて幹もできよう）（実をも結ぼう）

最後に俺は笑いたい

清水

小林 美和子

山に行くと、きつと小さな流れにいくつも
あひます。

小さな川の流れは、

いつも変わらぬ速さで

いつも変わらぬやさしい音をたてて
流れています。

でも、時には、思いがけず

大きな黒い岩にぶつかります。

しぶきをあげて、はね返されます。

相手にもされません。けれど

川はたゆまぬ流れをもつてついには、

トンネルをつくります。

このトンネルは、

川が長い年月、うまずたゆまずその岩に

ぶつかってはりだしたものです。

泉からあふれてばかりの水は

まっ白い小石の間をゆつくり流れていたの
に

ここでは、たゆむことのない力で
かたい岩にぶつかり

ついには、流れの道を聞いたのです。

地の深い所から湧きて

今、かたい岩にぶつかってしぶきをあげて

いますが、その水は、

今もお、

湧きでたままの清水です。

遠い流れ

堀内 豊明

人は、どこかにある淋しさを持つ。

何かを待ち、そして、何処へか去る。

人は、そのことを知らない。

いや、もう気がついていられるかもしれない。

ひとつ、静かに輝き星の清らかさに、

その人は、何を語りかけるだろう。

独り、自己の惨めさに打ち沈みて

その人は、何に慰めを得るだろう。

人は、気がつかない時に、

知らない所で、知らないものに、

はぐくまれ、あるものを奏でる。

真実の悲しい響きに魅せられて

人は、その美しさゆえに悩み、

その高貴なるがゆえに苦しむ。

そして、人知れず花が咲く。

子供

中沢 倫子

何の苦しみも悩みもない無邪気な子供

男の子、女の子

みんななかよく遊んでいる。

でも

あんなにちいさなかわいらしいお手が、

何でもできる大きな手にかわる。

あんなに細いかわいらしい足が

しっかりと、大地に足をつけるようになる

そして、

次第に無邪気な気持ちをわすれ

仕事に命をかけるだろう。

また、もつともらしい顔をして

「人生とは」なんて言いだすだろう。

その間に人を

愛すること、憎むこと、尊敬することを

秋の苔寺

角田 啓子

長い歳月の門に

すっかり白壁の落ちつくした黄茶けた土塀

もみじの葉が

都会の塵埃のみじんもなくはき清められた
参道に、

苔のむす飛石に
黒いしつとりした土に
わずかに緑の新鮮さを欠いた苔の上に
むぞうさにかさなり積っている。
ひっそりした土べいの中の
心の文字を形どった池に
青い空と

のしかかるようにかぶさっている古木が映り
もみじの葉がいく枚か浮いている
日の光のほとんどあたらない土を
ベルベットのような苔がおおっている。
夢窓国師の造ったというこの庭の
あちこちにある東屋で
遠い遠い昔の軍人たちが庭を楽しんだのだ
ろうか。
古き良き時代の歌人たちの歌会が開かれた
のであろうか。
昔の面影をそのまま秘めている庭に、
もぐらおどしの乾いた木音だけが
カーンカーンと響いていた。

熱風

橋田尚之

ウルトラマリリン
悲哀の淵の花咲く乙女
湖水より湧いて騒がす求道者の声
漂泊は掟か

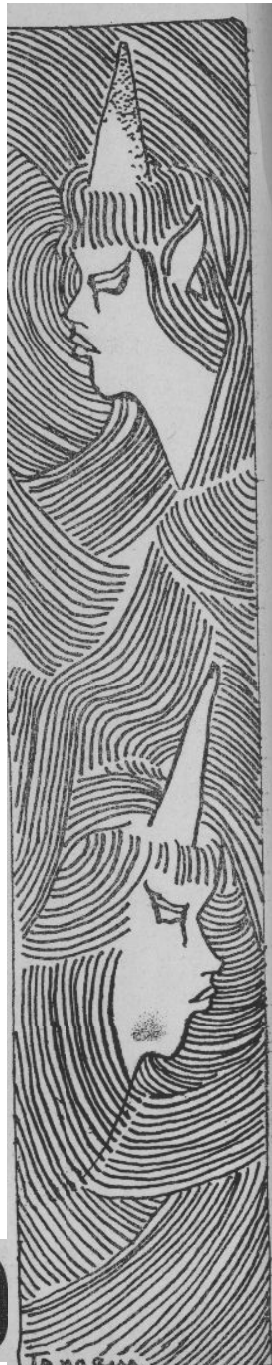
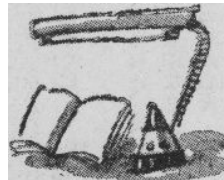
シルヴァーフオワイト
ペンテイングナイフでモデルの心を塗りつ
ける

のぞかれたはだほ虚悦の泉
この淋しさの因は
サソ・ミツシエルの石畳

ビーチ・ブラック
クロブニヨンの旧から
真卒ならざる者の安息所
その悦びほ
支配される民衆のため英雄の心

オーレオリン
JOY OF LIFE
聖なる狂る 狂るの筆触に

目をおおうはアフロディティ
噫！
熱砂に座し
狂るう嵐に面を洗う求道者よ
最早、恋は破れ惑いは去りぬ
道は唯一つ
バルテノンの丘に向う



私の希望

組主任 矢崎 豊

転任して一年、二十数年前を思いだしなが
ら、後輩の諸君に、少しでも手助けできるこ
とを念願してきましたが、時勢の赴むところ
ろ、昔のノンビリした生活は影を潜め入試を
唯一の目標とした、切羽詰った雰囲気には、
中学卒業の資格をクラブ活動で獲得したよう
な私には、いささか戸惑いの連続でありまし
た。私が化学畑に入ったのは適性を考慮した
わけではなく、クラブの顧問教師が化学の先
生であり、放課後は、部室兼用の化学準備室

で、ゴロゴロして、ろくに勉強もせぬのに、
なんとなく卒業させてくれた先生への恩返し
の意味がありました。それだけに、今もって
苦勞が絶えぬ次第ですが、この年令になっ
てみると、不適性の方面に進んだことへの後悔
や、それにとまなう苦勞も、人生の貴重な経
験として、諸君に語れると思います。勉強と
は、何も英数国……等、学校でやっておる教
科の面のみではないと理解しながらも、現実
にはその勉強のみに、追われているのを、ど
うしたらよいか。難しい問題だが、その解
決の一つとなるかもしれないと思う事柄は、自
己の能力で、トツプになれるような方面へ進む
ことではないでしょうか。鶏頭となれ、午後

となるな、との格言があるが、常に人の後を
追うのみでは、追いつくためにのみ努力せね
ばならぬが、先頭に立てば、先方の広々とし
た世界を見、考え理解することが可能であろ
う。学歴がなくても、学校の成績が悪くても
人生では成功した人が多いが、かような人々
こそ、このような道を歩んだ人ではないだろ
うか。学問とは、苦しい経験により得る事柄
を、割に楽に理解し実行するためのものでは
あろう。しかし、その範囲は、やはり極限され
ている。それを、学校を卒業した事で、すで
に経験したり、獲得したりしておるように錯
覚しておるところに学校卒業者の弱点があ
る。勿論実社会にいれば、大部分の人は、こ

10

の誤りに気付くが、なかには、理解できぬ人、或は、迦解しようとせぬ人もいる。年若い諸君のうちから、大いに心して巾広い勉強には、げんでいただきたい。

山道の散歩

山内秀文

ある冬の暖かい朝、灰色に曇った気持ちこそうとして、すがすがしい朝日を浴びながら一歩一歩を踏みしめた。すこし登った所に、松林があるのですが、先年の七号台風の時にほとんどの松が倒れてしまっていて、無残に大木が朽ちてしまっていて、倒れた松の折れた所が、のこぎりで切ったように平でなく、それがなお一層の激しさを感じさせた。この場所には、幼少のころ遊んだ塚（古墳ではあるけれど小さいものです）があり、その場に立つと小さい時の思い出が浮かび、すらりとした松のその幹に泡をふいている松やに、仲良しのとなりの子……と幻燈のように頭の中を回った。

——あの頃を思い浮かべて立ちて見れば
裂け倒れたる 松も緑に——

そこより少し歩いて行くと、神社が下に見

えてくる。そういえば、この今進んでいる急な山道も、あの神社のみこしが登ったつげと思い出し、やはり今はねり歩かないあの勇壮なみこしの、大勢が引つぱり上げて山へ登って行く姿が目の前を進んで行くような錯かくなうけながら、今年も聞こえてくるだろうあのおはやしを聞くようなかつこうをして、しばし立たずむ私だった。久しく、心の明るくなるのをほくそえみながら、今までの自分を反省し、一時ではあるけれど童心に帰ったのを契機に、新たな気持で今日からの毎日を過ごそうと決意を新たにし、収穫の多かったこの朝のそぞろ歩きに終止符をうった。

——この決意、貫ぬき通すと 心しめ——

オリンピックに思う

岡 敏彦

僕らの心にバツと咲いた「世界の花」の祭典のオリンピックは終わった。青い空にその花をもたげ、緑の芝生にその根を張り、僕らの心に「美」を与え、「力」を与え、「感動」を与えて去っていった。肉体の限界を克服し精神力とに闘いながらきそったその技、それは僕達の心をひきつけ離さなかった。

僕も終始テレビで観戦したが、十四日目（開会式の前日）好運にも学校の抽選で当たったので国立競技場にサッカーの決勝戦を見にいった。この国立競技場の設備の豪華さ、会場の美しさには目を見張った。競技場のまわりの体育館、屋内プール、高速道路……etc）どれも近代建築の粋を集めたもので、うわさにたがわず素晴らしいかったけれど、それにもましてよかったのは競技だった。緑の芝生の上に転がるボールをその巧みな足技で得点するその躍動力だった。また再び日本でやることは近いうちにはないだろう。そういう意味でこのオリンピックの競技を観戦したことは有意義だった。

ところでオリンピックのモットーは「勝つ

い、負けるのはいやだなんて考えている人も

いるのではないか？もつとフランクに考え、積極的に競技をやり競技を楽しむという考えをもつべきであろう。設備の不足も原因の一つだが。

又この大会はスポーツを通して国家間の相互理解を深め、その民族を再認識させる役目もあるのではないか、そして世界の青年が手と手を取り明日の世界を背おって立つという、心意気を示めす絶好の場所であり、又そうしなければならぬと思う。今のこのいつ爆発するかもしれない嫌悪な世界を明い平和な世界にする為の一種の手段というか方法であるオリンピックに又それから発展して平和のシンボルであるオリンピックに発達していくことを願う。

思 い 出

宮崎 進

もう二年も残りわずかになってしまった。いつも思うことだけれどまた月日のはやさを感じさせられる。四月に、どんな人といっしょにさせられるのかと心配したけれどいざ別れるとなると少しはさびしい。五月には遠足

読 書

深沢 一洋

静かに開く二ページ
とたんに話し動き出す人々
彼らは名演技者だ
話し合い熱演する
そのすばらしい一コマに
私は喜びに胸をわくつかせ
また、悲しみのどん底に追いやられる
彼らの会話や演技は
私を魅了せずにはおかない
そして私は
喜びに満ちた目で
彼らの演技を追い
また、悲しみに震える手で
ページを綴る
そしていつの日か
彼らとの再会に
この感激はさらに高まろう



今

雨宮としお

「今」という一瞬に立ち、「現実」に生きる。

空

今までの歩みが、「過去」として永遠に消えることなく残り、また「今」という一瞬も、「過去」になろうとする、未知の「未来」もまた……。

「今がどんなにいやでも、「今」がどんなに苦しくとも、それは「過去」として残ろうとしている。

現実

社会生活を営んでいるという「現実」。

僕は今の社会に生きている。しかし、今の社会にそまりたくはない。

X君、君は社会に妥協しなければ生きてゆけないといったね。たしかに現実には僕がいくら逆らおうとしても逆らいきれるほどあくまない。しかし、僕は学生なんだ。僕はいやだ。学生の時から、いやだ、あまりに現実と云うものは偽善的すぎると僕は思う。マスコミが善人なる人々の表彰を告げている。しか

うたかたの思想

石原秀昭

この思想とて、いつ又変わるかわからぬ。森鴎外の小説の一節にこんなことが書かれてある。「およそ日本人は、小学校の門を潜つてからというものは一生懸命に此の学校時代を駆けぬけようとする。その先には生活があると思うのである。その学校というものを離れて職業にありつくと、その職業を成しとげてしまおうとする。その先に生活があると思うのである。そしてその先に生活はないのである。現在は過去と未来との間に画した一線である。此の線の上に生活がなくては生活はどこにもないのである。そこで己は何をしている。……」もう一度読んで楽しく味わってほしい。たえず現在の巨大な機械化の流れに押し流され、心の底まで洗われ、個性まで失いがちな私達は大きな夢ももたず、たえず漠然と未来に生活を求めて、毎日毎日进行しようけんめい駆けぬようとしているように思える。そんな毎日でよいだろうか。よく考えて見よう。この一刻、一瞬が生活なのだ。短い人生の一部なのだ。決して時間をむだにし

し、その人々がはたして善人であろうか。

その時の善行が、ほんとうにその人の心の底から出たものであろうか。X君、君はその善行が心の底からのものでなくとも結果的には良い事だから……。というだろう。たしかに結果的には良い事だ。しかし、僕はそれが心の底からのものでないかぎり、その人に心からの尊敬のまなざしを向けることが出来ない。

「現実」はきびしい。

「純粹には生きられない」とX君、君はいつた。もちろん現実の中にあつて、完全に純粹になることは絶対に出来ないだろう。また純粹に生きようとするむずかしさも少しは知っているつもりだ。それでも僕は僕の心をもつと純粹になることをねがう。君は、「理想論にすぎない」、「不可能だ」、と云うだろう、しかし今の僕より一年前の僕、一年前の僕より五年前の僕の方が今の僕より、多少なりとも純粹であつたと僕は思う。單純だったのかも知れない。でも、今の僕には、「現実の社会」に生きる大人より、昔の僕の方が清く見える。ばかな考えと笑う人もあろう。しかし、僕は僕なりに現在より少しでも純粹な心を求めて進んで行きたい。

てはならぬ。毎日毎日を有意義に過ごすべきだ。

ますます非人間的になろうとする社会に対し、あくまでも自己を失つてはならぬ。

高遠な理想を描きそれに向つて、日々努力すべきである。

——毎日が生活であることを忘れずに——

正月雑記

田 辺 宏

今日は、正月恒例の関東大学駅伝の実況放送をきいた。その実況の中で芦の湖畔の松についての説明があつた。この松は、樹令が約三百年というから、千六百年代に植えられたことになる。——千六百年・関ヶ原の戦い。

千六百年・江戸幕府成立……このあと年表をみると、島原の乱↓鎖年令↓種々の改革↓ペリー来航↓明治政府の成立↓世界大戦と歴史は続いている。——人間が三百年生きるのには不可能なことだ。なのに、この松はこのような世の中の変化に屈することなく、今日に至るまで常に変あらぬ風体を保ってきた。更に、我々の世代が変わつても、なお同じ状態を保つことであらう。それらの松を、頭の内

思 い

佐 藤 基

あたり一面焼けた砂ばかりだ
上からは巨大な太陽がギラギラと輝く
私と仲間はその中を歩いている
いったい何のために？
私にはわからない

私はただ皆の後について来ただけだし
しかしこの中に目的を持っている者が何人いるのだろうか

それはたぶんわずかなものだろう
暑い

▼

水がほしい
だがほかの者はあてにできない
己の力しか頼れないのだ
そろそろ脱落者がでてきた
大勢ばたばた倒れてゆく
しかし誰もかまわない
自分が生きるのが精一杯なのだ
ああ！気が遠くなりそうだ
少し休もう
いや 休んではいけない
それは自分の最後の時なのだ
歩くのだ 歩くのだ
いつ果てるとも知れぬ砂漠を

に思い浮かべてみると、まるで歴史を一人じめしているかのように思われてくる。——駅伝の実況から、こんなとりとめもない自然の悠久さ、底知れぬ威力について考えてみた。

回想

松 村 健 一 郎

濡れた瞳に
快くしみる夜の大気

何を求めてか
深い心の谷間を
ひとすじの流れが音もなくよぎる

指先にこぼれる 星の雫
そのひとつづつに

きらりと光る 過ぎし日の甘美な想い出
そして

夜よりも碧い ピロオドの冷たい光沢
永遠のアンドロメダ
その 幻影の大星雲をめぐる
サファイア色のトーン

流れるはMidnightBlues
想うは誰が事か……

バスの中で

斉藤 正夫

先日、帰りのバスの中のこと……超満員のバスの中に子供連れのおばあさんが乗った。二人は窓際に押されていた。僕の背骨がどうかかなりそうだった。まして年寄り子供にとつてはさぞかし苦痛であつたらう。すると立っていた他校の女生徒がおばあさんの荷物を棚へのせてやった。残念なことに、おばあさんの真正面に一高の帽子をかぶった生徒が本を読んでいた。彼はチラッと上を向いてまた視線を戻した。すぐその後、隣りの若い男の人が席を譲つてやった。僕はこのような光景によくぶつかります。世間の人はバスの中でも勉強して一高生はりつぱだと言う。しかしバスの中で勉強してどれだけ効果があるだろうか。たかがバスの行くところだから、いくら遠くでも一時間なんて乗らないだろう。かえつて乱視になるくらいのことだ。だいたいにおいて一高は利己主義者の集団だ。頭デッカチの集団である。皆んな同じように登校して勉強して、帰って行く。見わたして見るにほとんど奇形児がない。ほと

感であつた。

つまらない小説や映画を見るよりも、よっぽどよい勉強になった。来年もまた見る事ができる様願いたい。

冬休みの生活

松 木 毅

休みに入る前に、一応自分なりに予定を立てておいたのだが、例にもれず、ほとんど実行されずに終わってしまった。だいたいこの休み中、午前中に起きた事が、めつたになかったのだから、おしてしるべしである。自分の抵抗に対する弱さをつくづく感じ、反省するところである。一方、この休み中初めてアルバイトをやつてみた。その仕事というのは、

(笑うなかれ)デパートの清掃である。自分の部屋のそうじもろくできないのに、そんな事ができつこない。と思われそうだが、時間が夜の三時間ほどだったので、続けることができた。掃除といっても、地下から七階までを二十人位するのだから、そう楽な仕事とは言えない。特に、大晦日の目なんかひどいもので、よごれた作業服を着て床を掃きながら、年を越してしまつた。もちろん、こ

んどモノサシで計つたようにそろつている。

一生のうち一番大切な時期に将来役に立ちそうもないことをしているようでもつたない気がする。きつと我々は自由な時間を欲しいのだ。青年には青年の時に読まなければ価値のない本があるという。だがその本すら十分に読めない。しかし現実にはきびしい。現在の僕らの力ではこの流れを一時にも止めることは不可能だ。僕もこの大きな流れに従がわざるをえない。

彼らの考え

井 口 潔

今年もまたチャンネルをNHKにまわした。年に一度しかないこの番組をもう四回みる。この番組は僕に新しい考えをふきこんでくれる。番組は「青年の主張」である。同輩の人達のしつかりした意見、信念に僕はすつかり敬服してしまつた。今年も又高校生(女学生)であつたが、五人ぐらい居たと思つた。定時制に通っている人もいた。

中でもこの春卒業する北海道と四国代表の女子学生は「私は辺地教育に一生をささげた。」「ときつぱり言い切つた。彼女らは現在

のアルバイトをして得た金なんか、ごく僅かなものだが、人のあまり好まない仕事をしたのは、よい経験となつた。それにこのアルバイトが、冬休みのだらしない生活の唯一の抜け道でもある。

猫

柳沢 英久

これは一月一日のことであつた。祝賀式に出席するために自転車で家を出た。外の空気は冷ややかで新鮮な感じがした。電車の出発まで十分に時間があるのでゆつくりとペダルを踏んだ。それは元日の印象を強く心に刻み

たかつたからであつた。道路には自動車も人影もなく西側の家々には正月の飾りがしてあつた。街全体に正月の雰囲気而立込めていて実に神聖な感じがした。途中で中学時代の友達に二人会つた。ゆつくりと雰囲気をかみしめるようにして街を通り過ぎ富士橋へ向かつた。目の前には白く輝いた鉄橋とその後に大木の山があつた。太陽が水々しい光をぼくのメガネにあてた。富士川がきらきらと光っていた。橋をわたりかけてすぐに右の欄干の基に猫の死骸を見つけた。目はそれに集中さ

た教育のあり方についても関係当局に強く訴えていた。「辺地差をなくして、設備その他の諸条件を改良してほしい。」と、彼女らが一人や二人で叫んだところで今すぐ実現されるものではないけれどもすばらしい意見だと感じた。父母無くして兄弟三人をかかえた北海道代表の林さん(だつたと思う)の自分は大学を卒業するまでは辺地の教諭助手として就職して通信教育によって大学卒業資格をとり正教諭として一生をその道にささげたいという意見――は入賞はしなかつたがまつた感動した。

また沖縄代表の先生は沖縄の現状をのべ、「だんだん忘れられてしまひそうな沖縄を暖かい目でみてやつてほしい。片言でもよいから社会科の教科書に沖縄の事を載せてほしい。」と訴えていた。「歴代の首相が沖縄をまだ一度も訪問しないのは残念なことである。」「と、のべたのに対して来賓の文相が首相に「是非、そのことを総理に進言したい。」「といったが口実でおわらせたくないと思つた。僕も沖縄が一日も早く米国の統治下からでて本国に復帰されんことを願う。それにしても訪米中での共同声明が沖縄やアジア地域の事柄に関して進展しないのは、はなはだ遺

れた。三毛で大きかつた。その時は別にかわいそうとも思わなかつた。だからそれを見ながら通り過ぎた。つぎにブレーキをキユツとかけた。風に吹きさらされるのを想像して始めてかわいそうだと思つた。それをどこかに移そうと思つた。しかしうじがわいていてさわると皮がむけるのを想像したら触れる気になれなかつた。猫は背をこちらに向けていた。後からはだれも来なかつた。そこにはぼくと猫だけしかいなかった。結局何もしくてまたペダルを踏んだ。自分に対してひどく絶望した。ゆつくりと進みながらも拾ひ上げたならどうしただろうかと考えて見た。

「橋の上から落とす以外にはないではないか。ぼくにはそんな残酷なことではない、そうだがやはり拾わなくてよかつたのだ。そう考えてすこし安心した。橋を渡りきるころ左に竹藪を発見した。あの竹藪の中に埋めてやることができるではないかと思つたが引き返す気にはなれなかつた。帰りに再びここを通つた時には猫のことはすつかり忘れてしまつていた。

生活

大竹賢一

我々の生活をちよつとでいいからかえりみてみよう。何と無駄が多い事ではないか。寒い冬などはなかなか床を離れずいつまでもぐずぐずしている人は非常に多い。この時間に単語一つ、年代一つ記憶したとしたら高校三年間には相当数の単語を覚えることになるであろう。右は我々の生活のほんの一部ではあるが深く考えねばならないことである。よりよい生活を送りたいならまず生活に無駄をなくしたいものだと思ふ。

心の落ち着き

長谷部 貞 夫

現代のような煩いの多い時代になると、人間生活に於て、心を落ち着ける時間が少なくなり、それとともに大変必要なものとなつてきたと思われます。特に僕達のような受験をひかえた者にとっては、心を落ち着けて物事に打ち込むことは是非とも必要な事といえると思います。こうして書いている僕などい

つも心が落ち着いているのではなく、どちらかというと落ち着いている時の方が少ないようであります。だから、いつも落ち着いて

を見るとき、うらやましいとともに、どうゆう事を考えているのかなどと考えることがあります。僕は心を落ちつけて書物を読むような時間を今までほとんどとつてきませんでした。やつと最近、寺田寅彦の随筆集をじっくり読むような時間をもつようになったのです。僕の心が落ち着く時は大体どんな時だろうと考へてみるに、夜の勉強の前、寒々とした外気の中で、晴れわたった空に輝くたくさんの星をながめ、バットの素振りなどをする時とか、好きなリンデンバウムの歌、その他落ちついた歌を聞いたり、心の中で歌ったりする時などであります。また、寢床へ入つてすぐはどうかと考へて見るに、落ち着いているようでもあり、そうでもないようでもあります。時にはあれやこれやといろいろな事が浮かんできたり、時には心が静まつて、たて続けに二、三題数学の問題でさつきまでわからなかつた解法が浮かんでくる時があるからです。とりとめもなく書き続けてきました

宇宙

向山 一 男

星・星、星
宇宙は広い
広大か宇宙は
この一個の物体を
吸い込む
地球から
宇宙へ
そこにはある
何の束縛もない
自由が
広大な宇宙よ
この一個の物体を
吸い込んでくれ

音楽における

耳の発達

斉 藤 茂

ソクラテスの書いたものの中に、虹の色は三色だというのがあるそうだ。現在、我々の内で虹の色が三色だと言う人はあるまい。我々には七色に見える。つまりここに視覚の発達があつたというのである。ほんとにそんなことがあるのか、思いながら聴覚の発達と音楽のことを考へてみた。

七世紀始めのグレゴリオ聖歌と現代音楽の間にはたいへんな差がある。グレゴリオ聖歌は一声部を歌うものである。つまり七世紀には和声の感覚はなかつたのである。和声音楽が現われたのは十六世紀のパレストリーナやラッソのころからで、やがてそれはバッハ、ハイドンと時代が進み多くの楽器が改良、發明されてくると次第に声部を増しベートヴェンに至るとあの巨大なシンフォニーの出現となる。そしてロマン派後期、ドビュッシーは彼の非常なる聴覚によつて、それまでの音楽では現せない倍音による音楽を作つた。彼はまさに新しい音の発見者である。学者の車に

は音楽史を形式の変化であつて進歩ではないと言う人もいる。しかし、ここでは音楽はドビュッシーによつて新しい音の世界に進歩したので考へることができると思ふ。そして今、我々はそのドビュッシーを開ける耳を持つてゐる。ベートゲエソの第三交響曲が発表された時、当時の批評家の中にこれを狂人の音楽だと評した人も居たことを考へると我々の耳がいかに進歩して来たかがわかるのである。

そうしてみると、古代ギリシアの人達が虹を三色と見たというのも確かなことかもしれない。

オリンピックの感激

内 藤 健 司

世界中三十億人の人々の注目のうちに開かれた東京オリンピック。

黄色い肌、白い肌、黒い肌に差別なく参加した世界中の人々。お国色豊かに、体に反物をまきつけたような服装、ブレザーコート姿また数百人の参加国、あるいは数人の参加国など、いろいろな特徴をもつた開会式は一生自分の心に残るだろう。この内で最つとも強

大切であります。ですから、心を晴らす時は大いに晴らし、後には落ちついて物事ができるように努力してゆきたいと思ひます。

く感激したのは、西ドイツと東ドイツが統一ドイツとして参加したことだ。ただ残念なことは開会式事前にインドネシアと中共が帰国し不参加になつたことだ。政治、宗教の境を越えて九十四ヶ国のスポーツマンがひごろの腕を競ひ合つた十五日間ほまことに美しいものであつた。

自分もテレビだけの観戦でなくサッカーの決勝戦を国立競技場へ見に行つたが会場のすばらしさ、緑の芝生、赤い土が目にしみるほどであつた。又はるばるオリンピックからはこぼれた聖火が赤々と燃えつづけ雨の日ではあつたが、すばらしい感激であつた。

この十五日間のオリンピックも成功のうちに無事終了したが、大会運営の陰の力になつた人々の、苦勞も尊いものである。又同時に各競技場で使用された器具のすばらしさ、一等国日本として世界中に文化の高さを示したことだろう。

無 題

小 尾 正 彦

友達と楽しい話をしているとき、自分が考へていることと、友達が考へていることが

致するとうれしくなります。私達は自分の経験を通して得たものを多かれ少なかれ持っています。そして、もう一つの大きな、大学に入るための試験に今年はぶつかろうとしています。その試験から何かを得て、友達と楽しく思い出を語り合う日のために、自分のベストをつくそう。

攻めと受け

鎌 田 豊

勝負の世界、それはスポーツいや人生に代表されると言った方が良いかも知れぬ、激しく又、無情な世界である。そこでは「負けるが勝ち」といった世渡り上手は存在を許されないであろう。去年はオリンピックもあつたりして、勝負という事には特に強い関心を抱いたのであるが、自分なりに勝負の世界を分析してみ、そこに従来の勝負観と全く逆のそれを見出したのであつた。

我々によく「攻撃は最大の防御」という言葉を使つたり聞いたりする。しかしそうとばかりは言い切れなくて、むしろ「防御は最大の攻撃」という鉄則が勝負の世界を支配しているのだと思う。日紡貝塚が、攻撃力におい

出した。が、かまわずに出発した。始めのうちは雨のため前方が見えずに困つたが、ここで若さでスピードアップ。勝沼で少休止、笹子トンネルを出た。下り坂を中古車級の三台の事は加速度をどんどん増して一騎に百二十百とまではいかなかったらしいが、そうしているうちにも一路山中湖へと飛ばし、大月、都留を通り富士吉田に入った。道はよし天気は悪し、三台の中古車は快調そのものだった（がいつ故障しないとも限らなかった）スピードを増々増していた。その最高調に達した時に姿は見えねどサイレンの音は聞こえてくる。私達の車は無意識のうちに速度が落ちた。しかしながら目的は別の方だった。それは少し離れたところで交通事故があつたらしかった。我々はこの一瞬の緊張も忘れて再びスピードを上げた。一直線に舗装されたドライブウェイをいっぱいにアクセルを握つた。気分は爽快、スピードは出ない（原因はパンクだったらしい）あたりの景色は申し分がなかった。さていよいよ山中湖に到着だ。風は激しく湖面は波立っていた。おまけに雨も降り出した。寒かった。ひとまず家に入って暖をとつた。雨雲が激しく移動して変りやすい天気であつた。しばらくして雨がやんだ出発しよう

て優っているソ連チームを見事ストレートで破り金メダルを獲得したのは「守備は最良の攻撃」との考えのもとにあの名高い回転レシーブをあみだしたからである。往年の名横綱双葉山、彼は平幕時代は、うっちゃりで勝つ事が多かったが体重の増加に比例して攻めの相撲に変わった。つまり「受け」の完成に「攻め」が加わったからこそ、あれだけの不滅の大記録を生み出せたのだ。現在において大鵬と柏戸の強さの相違が相撲内容の相違——大鵬の守り、柏戸の攻め——にある事を考えてみれば「受け」の重要性がわかるではないか。スポーツの世界だけではなく碁将棋の世界においても又然り。「しのぎの坂田」と言われる本因坊栄寿名人がそうであり、徹底的な攻めの将棋で序盤における構想では他の追随を許さない升田九段に素質的にはるかに劣ると言われながらも大山名人が名人位はじめ各種タイトルをほとんど独占しているのはその徹底的な受けの将棋にあると思われる。さてここで勝負の世界における「受け」の重要性はわかつたとして、それを人生に求めたらどういふことになるのだろうか。「盗まれてもほへんでいる人はかえつて泥棒から盗み返している人だ。」（シェイクスピア）つ

とすると愛する中古車がパンクしていたそこでひきかえしたりなおしたので一時間ばかりいったり来たりしていた。それから昼食を食べ強風についてホテルマウント富士に登つた。そこからの富士山のながめはすはらしく世界の平和と人類の幸福を反映しているのかのようにその雄姿を横たえていた。

覚 悟

上 田 満

Time is moneyの言葉通り時は大切であるこんな事を言っている間にも時は過ぎ去って行く。もうすぐ僕達も三年である。一分一秒でもむだにしないで残りの高校時代を悔いのないように過していきたい。

しあわせって

白 倉 和 子

しあわせってなあに
ダイヤのようなもの？
ううん、シロツメグサのようなもの

まり、我々の生活に伴なう困難・不運・失敗を受けとめ包含し、それらを笑いとばすことのできる客観的な態度に帰着することは自明である。我々はともすると主観に閉じこもりエゴイズムに陥りやすいが常に冷静に客観的に自分をみつめる事が出来なければならぬ。「幸福な人とは客観的に生きる人である。」ラッセル。

思 い

野 沢 正 史

偉人の達した高峯は、一躍地上から達したのではなく、同伴者が夜眠れる間も刻苦して一歩一歩よじ登つたのである。

若さでとばそう

南 郷 四 郎

文章を書くのは始めてで困つた。そこで山中湖へ行つた途中のできごとを回想して書くことにする。私達は毎日毎日の何の変化もない学校生活にあきて遠足に行くことになつたまず、私達は八時頃平和通りの交差点に集まつた。その日は薄曇りで膚寒く時折雨もふり

しあわせって どこに

澄んだ青空のかなたにあるの？

いいえ ほら あなたの振袖の

たもとの中に

しあわせを つかむって

簡単なのかしら？

ええ そうよ

そこらの野草をつむようなもののなの

と あの人は教えてくれたっけ

ウン ウン ウソよ

しあわせなんてどこにもいなかった

私のみつけ得たのは

ほほをつたう 冷いしずく

そう

涙だけだったんだわ



無念無想

秋山賢三

現在われわれの生きている世界には、驚き慣れ、疑い、惑い、というようなものが、漂い流れている。これは何事に対しても大手を広げ行く手をふさぎ、邪念を引き出し、その結果われわれは心に曇りを生じ心の病にかか。これは、どんな偉人でも、その場、その状態において生ずる。そして、これは凡人には平素の心掛けや修養がたりないためにより多くの時間を使い、初めてそれは自分自身が作るものであり、しかもそれは医者でも友達でも治すことができないことにきずく。

世の中に対してわれわれは相手をしり、我を見、勝をあせり、生にてつする、これは無念無想の境地ではない。こうしたことがかえって相手の心の動きを見失い、自分の心がみだれ決して勝利はうまれない。「打とうとも我は思わず打たじとも我は思わぬ神妙の剣」これがいわゆる無念無想の境地である。すなわちこの古歌が表わすものが人のもつ平常の姿であるように思われる、われわれはともすると世のうずまきにまきこまれて無念無想の

境地をわすれがちである。これをわすれることは人間本来の姿をわすれることである。

強行遠足

保坂美智子

ヒタヒタという足音が背後に迫って来る。私はいくぶん足を早めた。呼吸が乱れ、足が重くなってくる。足音は私と並び、ついに追越して行く。あせりがちな私に叫ぶ。「マイ・ペース／マイ・ペース！」

忘れもしないあの二度目の強行遠足である。あの日の感慨は、今もなお私の胸に生々として残っている。それは、私にとっておそらく一番充実した一日ではなかっただろうか。

くじけそうになる私の心に力強く響く「マイ・ペース」そして、着実に一步一步前進していったのだ。だが、それでも清里を目の前にした時、意志がくじけそうになった。気ばかりあせって足取りは重く、頭がクラクラしてきた。「しかたがない。自分の歩ける速さでどうしても清里まではたどりつかねは……」私の目標は野辺山までであった。「これまでやつてきて、清里止まりでは何をしてもし口惜しい。」そう思いながら、やつと清里に着い

にして重要な事である。

山

堀口和美

甲府を離れて東京などに住むようになった人は、よく「山が懐しい」といいます。私たちのように毎日山を眺めて生活している人間は、うかつにみることの多い山ですが、それだけに又山と深い心のつながりを持っているのではないでしょうか。山の色に注意してみることがあります。夜明け前の紫紺から西アルプスの頂きが紅に染り、それがすそにと伸びて行く朝の色、その日の気象条件で毎日変る昼の色、金色に輝く夕方、深々と眠る夜と山の色彩は見事です。季節によっても装いが変わります。幼なさを感じさせる芽ぶきの春、すがすがしい若葉のころ、緑が一段と深みを増す夏、晴れた秋空に深い青磁のひだをたたむ秋、どれをみてもすてがたい味があります。その中で私が好きなのは、愁いを秘めた

ような秋の色と、早春のしかも暁の山です。寒風に洗われ、藍とはこんな色かと思わせるような空に、黒かと見間違わんばかりの紺に浮き出したカラタチの垣根越しに立つ真白な

た。そして私は思わず喜んだ。前進停止時間五分前というのである。それまでずつと我慢してきたお茶をグツと飲んだ時、うれしさに胸が震える思いだった。そこから野辺山までは快調であった。周囲の景色を見ながら、終点の地を踏んだのであった。

あの時のすがすがしい気持。意志を貫徹いたのだという大きな喜び。何ともいえない感慨に包まれた。あの時食べたりんごのおいしかったことといたら、この世で一番おいしいものではないかと思われたほどだった。

私はこの日の収穫が、あまりにも重要かつ大なるに満足せずにはいられなかった。そして、この気持をいつまでも忘れないでいようと固く心に誓ったのである。

青年

堀内成子

このごろになると決って三面記事にぎわすものがある。「遭難、そうなん、ソウナン」各新聞社は、これを大々的に取り上げ、報道する。そしてきまつて、こんな批判の声があがる。「甘味な冬山登山、夏の装備で、冬山登山とは、生命軽視にも程がある」等

アルプス、何もない荒涼とした一見冷たく冷えきつた世界です。しかし枯木のような木々は厚いがくで芽をはぐくみ、雪の大地の下では、小さいかすかな生命が台頭の日を待っているのです。よる術もないほど厳しくみえる風景だけに、静かなけれど激しい生きる力のたくましさに、神秘ささえ覚えます。日々の生活に疲れた私たちをある時は遊ばせ、ある時はものの哀れを教え、時には失意の人を慰め新しい活力を与える。私たちは知らず知らずのうちに情緒や勇気を、厳しさを、どれほど分たれたことでしょうか。へつらいも容赦もなく与えるものは惜しみなく与える。こんな豊かなものを身近にもつ私たちは幸せです。悲しくても苦しくても苦しくてもつらくてもまっすぐにこの山を眺めることのできる日、それはきつと人の道をはずれない生活をした日です。そしてそういう人だけに、山はその深いふところを開いてくれるのでほないでしょうか。

古都を尋ねて

加藤マサ子

昨日まで甲府にいた私が今修学旅行先の一

々、多様な発言がなされる。しかし先日荒川岳での遭難は、今までにみられるような、生やさしいものではなかった。にもかかわらず、ペテランでさえ、ままならぬ「山」というあこがれの地に、どうして人間は挑戦するのだろうか。まかり間違えば、「死」という恐ろしさが、ただよっているその山へ、なぜ登らなければならないのか。ある人は、こんな事を言った。「若者が危険をおかしてまでも、あえて山に登るのは、そこに危険があるからである。」と。なる程、若者は危険が好きだ。高速道路を時速何百キロで走るのも、広い広い海を渡り他国へ行くのも、これ皆、危険があればこそその事と思う。もしそれらに危険が伴わなないとしたら……。だが山へ登っても、どんな装備でも「絶対、危険なし」とわかっていたなら、そこは、若物の「あこがれの場」とはならない。しかし私は生命軽視の現代の若者に完全に共鳴しているのではない。私は、ただ危険をおかしてまでも「山」という難関を突破しようとする、最後まで完全にやりぬこうとする、その若くたくましい闘志に魅力を感じるのだ。浅はかな現実であつてはならない。何事も窮極まで深く考える、行動する事、「画竜点睛」の、それは青年

後に残るものを何か得たい。荒い人生の中において、いわば温室ともいふべき防波堤の中にある学校生活をすっかり過ごしたい。むだをなくし、自分を流れの中で見つめればできるだろうか。自分の行為に責任を持ち、進んで行けばできるだろうか。

思い出と夢の混乱

乙 黒 こずえ

『楽しい思い出っていえばやっぱり高校の時でしょうね。そうそう、私は入学当時からクラブ活動みたいなものに入っていましたよ。少しながらバイオリンがひけましたからね。何かやつたらしいんですよ。二年の時の演奏会に「未完成」をやつてね、何が何だかわからなくて弾いたものですよ。合宿なんかもしてね。修学旅行へも行きましたよ。何かつまらないと思いますねえ……大勢で行くんですからね、一人で行く所ですよ。覚えてる事では薬師寺の人が何とか……このくらいのもんですよ。私は遊んだ事しか話しませんがね……何せこんな時代になつてはね、勉強なんかどつちでもよかつたんですよ、全く

今はあの当時想像もつかない事ばかりですね。昔の真理はみんなくつがえされてしまつてね、そしたらすぐに、もう他の星にも自由に行かれるようになって、しまつて……何か数学に根本的なまちがいがあつたそうですね。

私もこの地球が住みにくくなつたらもつときれいな星へピアノとバイオリンを持って行くかと思つていますよ……』。

ふつと気が付いたらぼんやり数学の本を前に空をゆく雲をながめていた。

もうすぐ三年、大いに遊び楽しんだ二年とも縁を切つて一年間張り切つてやろう。

この辺で一つ大活躍をしてもいい時だが……。

S

F

津久井 高寮

ガラスの間の液体を
空間と液体と鉛硝子で

みつめる

反射・屈折・拡大そして虚像
像が網膜に映じる

見えない……

微動ネジはミミズのごとく

手には汗が冷たい

何かが動いている

何か何か分らない

止つた

彼と目があつた

それは遠い世界との交渉

彼はまた動く

そこは液体に包まれている世界、ある社会
そこでの彼らは大海原の小舟

だけれどもこれはフイクシヨンにすぎない

核の回りを

電子が回転

太陽の回りを地球が

太陽系はある点を

銀河系は宇宙を

宇宙は何かを何かを……。

つづき

無用の用

坂 本 まさみ

とにかく今の世の中は忙しすぎる。せつちだ。一時もぼんやりとしてることができない。社会の要求する優等生とは、道草をしないであつてすぐ目的地にたどりつく人という、その手段がいかなる物でも。つまりその優等生は単なるぬり絵をぬりつぶすのに、毎日きりもみしている。自分で何度も書いては消し消して形を措くことはしない。紙が毛ばだつまで、自分の手でデッサンしようとはしない。いかにして与えられた平面を早くぬりつぶすか、その要領を考えるのみである。だがそれが仕上がつた時、彼にはいったい何が残るのであるか。残るのはぬりつぶす要領だけだ。それに比べ、自ら形を措く者は、仕上がりは確かにこそい。出来あがつた絵は、美しさという点で劣るかもしれない。それにもかかわらず彼に残る物は大である。ここでいうあえて苦労して形を措くという事は、今の世では無用として通つてゐる。時間の損失にすぎない。しかし、私はその無用が用なる事を決して疑わない。無用なくして其の用は

存在しないと考える。自己内に無用の貯蓄のないものは、自分の吐息にもふらふらするであろう。浅いことだ。無用は用である。無用を用とする事こそその人間の真価だ。

村 松 万佐子

高校に入学して二年。「学年誌の原稿を出して下さい。」なんて言う季節になつたかと思ふとビックリしてしまふ。＂光陰矢の如し＂どころか＂光陰ミサイルの如し＂と言つた方がピッタリくる感じた。今、この一年を振り返つて、学年誌に書くような事は何もなかつたようだけれど、どうにか頭を絞つて少しポイントが狂つた修学旅行の思い出を書く事にした。

十一月十六日（火）晴れ

一日中見学で疲れてしまつたけれど、夜の自由時間は楽しかった。Yさん、Hさん、Mさんと私の四人で、スカートでは動けないとばかり、体操ズボンとジャツシーに制服の上着だけというイデタチで奈良の街に飛び出した。常日頃のおしとやかさを捨てて、四大でスクラムを組み、ハミングをしながら走り

心の鬼

堀内 英子

歩いた。あてもなく気の向くままに進むことにチョット不安もあつたけれど、知らない街を意味もなく歩くことへの好奇心の方が強かつた。池に石を投げて月の動きに古人の境地に便り、重心に返つて遊び、静まりかえつた奈良公園をマラソンし……。今考えれば無軌道と言われそうな行動だつたけれど、知らない土地で思う存分歩いた事は収穫だつた。心の底から何のこだわりもなく友達と話したなんて、普段の生活では考えられなかつた事だから……。この旅行は、こんな面でもとてもよい思い出になつた。

人間の心の奥底には全くえたいのしれぬ鬼が住んでいるようである。そしてこの鬼が活躍して、人間を苦しめるようだ。もう鬼なんかは、おとぎ話の世界にしか住んでいない、と現代人は信じこんでいるので、鬼はいつそいういい気になつてあばれる。ではどんなかっこうをしているかという困る。これの正体をつかんでみせるわけにはいかない。ただ赤い色をしていたり、青い色をしているだけは

たしかである。昔から赤鬼・青鬼というのはこのことかもしれない。

赤鬼は人間が恵まれた境界にいるとき、よく活躍する。人の心の奥底で赤鬼が手をふり、しこをふんで「もつと／もつと」とかけごえをかけると、その人の目は下をみることを忘れ、鼻は天の方に向かってぐんぐんのびる。そうすると、次第に同情心はなくなり、ごうまんな気押が高まり、欲は限りなく深くなるが、感謝する心はかけらもなくなってしまう。また青鬼は人間がみじめな境界にいるときほしいまにふるう。そのために人の顔まで青くなり、青筋があらこちに走る。むやみに他のひとをねたみ、うらみ、何をみても腹立たしく思い、つねに不平不満がたえない。

赤鬼、青鬼の二匹の鬼がいるのではなく、実は正体のつかぬ鬼が、たくみに赤になったりして、自由自在に人間を苦しめる。人間の世界はこれのために、いつもかきみだされているのであるが、人間は大い気がつかない。満員電車が駅にとまった。人は我先きにと争い乗る。こんなちよつとした人間生活の一こまにも、鬼が赤、青たくみに色をかえて人を悩ませ、平和をかきみだしている。

人間というものは複雑奇妙なもので、理くつで割りきれたり、科学の力だけで解決できるものではない。しかし、いつの時代に於てもたえない人間独特の苦しみや悩みはおそろくそこから出ているのではないだろうか。

狂乱

大平裕子

「やるか！」

「こい！」

毎日、我が家の男性二人が顔を会わずと、必ずこうして、狂乱が始まる。

この二人、実は、小学校五年の弟と、当年〇〇才の父である。だが、精神年令はわかつたものではない。

最近では、こたつの困りで二人が取組み合いのけんかさながらの狂乱振りを見せるのが二人の日課のようになってい

●二人に言はせると、これは一種のスポーツだそうだが、必ず最後には眼鏡や時計をはずしてしまつて、かく、ひっかく、つねるの大騒ぎである。時にはテーブルなどの角にぶつけて、大きなお山をおでこにつくり、美男子の要素が欠けたのではないかと心配すること

もある。

どう見ても「小犬のじゃれ合い」にしか見えない。

我ら女性族は、いつも非難の声、

「もういい加減にしてよ！」

「もつと人間らしくしなさい！」

「わからんじん／＼」等々：

だが、はたから見ると実に楽しそうな親子だ。それこそ「親バカ、子バカ」だ。

こんな二人の心は、童心そのものである。毎日こんな調子で暮せるものなら、さぞ、楽しいことだろう。

「お父ちゃん、さあやろう。」

ガタン、ドタン、ガラガラ……：

「アハハ……。」

「マイツタ、マイツタ」……：

こうして二人は相変らず、今日も例の狂乱振りを發揮している。

夏の日の回想

市川ひろみ

高い杉や檜の老木の間からさし込んだ太陽の光が、ほどよくしめつた山肌の草木の葉に届いて、白く光っている。私は、緑のじゆう

だ。そして自分一人、この美しく歓喜に満ちた大きすぎるような自然を相手にして、とけ込みそうだ。思わず感動がこみ上げてくる。こんな静かな空気はいやに感情的にさせるのだ。夏の山は全く生命だ。私はもつと奥の方へ行ってみることにした。

トランジスターを

聞きながら

許山菓子

「：アジアハイウエールトA……」海外

取材記者がしきりにしゃべっている。西アジアの金褐色に輝く砂漠、インドの草原地帯、ペトウイン。脳裏にそういう光景がチラッチラツとひしめく。つい数年前までは、回教圏に対して何の関心も持っていなかったが、映画をみてから何か強くひかれた。最初それは、広大な砂漠という日本とは全く異質なものの対するあこがれだった。が、西アジアにはそれ以外のものといろいろな問題がある。

昔は、サラセン帝国のような強大な国を持つたのに現在では西欧先進国に全く無力なこと。ひとにぎりのナツメと皮袋の固形乳だけ

で長距離を旅するペトウイン、また、メッカメジナ、ダマスクス、モハンアッド、イブンサウドなど、イスラム世界に対する興味はつきない。日本にイスラム教がはいってこないのほほんとうに残念なことだと思ふ。

「ラッパイカ、アッラーホンマ・ラッパイカ……」

歳月

浅川博子

どうして待っていてくれないの

私くたびれちゃった

どうしてそんなに走って行くの

私もう走れないわ

どうしてそんなに急ぐの

あそこで少し休んでいきましょ

ホラあんなにステキな家が

あんなにきれいな花が

あんなにかわいらしい小鳥が

どうして行ってしまうの

どうして待っていてくれないの

どうして走って行くの

私もうついていけないわ

ことだろう。そうだここは人間の世界でないことではないか、全く自然だ。自然そのもの

無題

田村好子

友人について、たとえば年が同じで話をすれば互いに「理解できるだろうなあ」と考えやすいが、これほど求めているとやすく得られるものはないし、何の判断をもつて作るのかわからない。このごろ、今までは何の意識もなしに冗談に話をしたりしていた。友を、一人の人間として感じるようになった。それは話をしている相手の考えの深いのを感じ、ハットし、自分が何も考えていない、考えようとしていない自分を発見して驚き、相手の存在をはっきり知るからだろうか――

きのう数名の友達と貧しい人達に何をしてやったら、よいだろうかという問題について放課後、暗くなつて相手の顔がわからなくなるまで話した。お金をやるのが一番いいだろう。その人達は、すぐに必要なものをかい、ある方面だけでも充分な満足した気持ちをもつだろう。与える者にとつて受けとられる者の喜ばれる表情をみたいものだ。彼らはきっと求めている者にそういう感情を表わすだろうという人あり、又誰かの作品に金銭の快樂は

一時的なものであり、なくなった気持は、たちまちくずれてはかない、お金でしか喜びを感じられない貧しい人となるだろうといっている。やはり精神的な、なぐさめ、奉仕は永久的でいつまでも絶えることはない。人間の心の暖かい交わりこそ尊いと主張する人もいた。又ある友は、そんなことをいつては、世間についてはいけない。お金さえあれば、何でもできる。欲しいものは、すぐに、すべてのものを手に入れることができる。魂もお金さえ失わないのなら安泰とした気分で持ち続けられるであろうとお金の絶対性に賛成する人ありで、考えはいろいろだ。私は皆の断固とした態度で主張する意見を聞いていて、そこに今まで感じられなかった一人一人に親しみを感じたほどだった。人間として考え悩んでいる一人の青年の姿はなんと美しいだろうかといった人の言葉をもつて友達を見ていた。同時に第三者的に黙つて聞いている傍観者の自分にたまらない切ない気持をだきながら聞いていた。



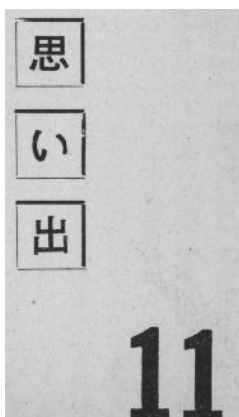
大鹿を生捕つた話

組主任 根岸 昭



先日甲府市内で鹿を生捕つたと言う新聞記事を見て昔の事を思い出したので今まであまり話した事もないが書くことにする。勿論た

めになる話ではないのでそのつもりで読んでもらいたい。僕が中学三年の一月下旬、学校が休みだったのか、学校から帰つてからだったかはつきり覚えていない。午後二時頃、家の炬燵に入っていると、隣部落の同級生が走つて来て『大きい鹿がこっちに來たそうだから追ひ掛けて來たので一諸にゆかないか』と言つた。この辺では西山（甘利山）や茅ヶ岳には鹿がいると言ふことは聞いていた、が、村中に鹿が來たと言ふことも、野生の鹿を見たという人も聞いたことがなかった。一寸信じられなかった。しかし真面目な友人の言うことではあるし、退屈していた所なので早速オーバーを肩に掛けて出掛けた。家から五十米位行くと大勢の人が集つて『これが鹿の足跡だ』とか『ここから藪に入った』とか言いながら藪の中に入つて行くので一諸になつて竹藪の中に入った。だいぶさがしまわつたが遂に鹿の姿を見ることが出来ずに下の田圃に



修学旅行

田中 功

中学の時でこりた修学旅行だったので、あまりの気のしなかつたが、今考えて見ると行つて良かったと思う。中でもよかったのは、清水寺からのながめである。純色の黄、赤の紅葉につつまれた山、その中に五重の塔が見える。空は青くすみ、山、雲、空との調和

降り、まだ藪の中をさがしまわっている人達の声を聞きながら、日向ポツコをしていると、鹿が藪から飛び出して僕達の方に走って来た。夢中になって追い掛けたが（脚には自信があり当時県下中学校短距離のナンバーワンだった）数米前を風のように走り去ってアツと言う間に土手の向うへ消えていった。僕は十米位走る間に鹿は百五十米も走っていたと思う。その時の白く輝く大きな角が実に見事で印象的だった。今一度鹿を見たいと思い、足跡を追って他の人達と一緒に軒ばかり行つて林の中をしばらくさがしたが駄目だった。

鹿は見たし、もおとつくに遠くに行つてしまつただろうと諦めて四、五人の友達と一緒に一段高い崖の上に登つて遊んでいた。鹿をさがしていた人達の声も遠ざかつてしばらくたつた頃。突然誰かが『鹿だ』と言つて体を伏せた。鹿は十四、五米位の所を僕達の方に向つて直進して来た。僕は突嗟に肩に掛けていたオーバーを投げ捨てて夢中で鹿に向つて崖から飛降りた。気がついた時には両手で鹿の角を持ち顔に馬乗りになったまま鹿に運ばれていた。これはいけないと思つて、体をゆさぶると浮いていた足が地についたので、瞬間持つていた角を力一杯捻ると、鹿はものの見事に仰向きにひっくり返つた。そのまま全力で角を押えながら、一人は押えるのに手伝つてもらい、外の人にはバンドをはずさせて、がむしやらに暴れている脚を投げ縄の要領で一本ずつかまえて、ついに四本とも完全に縛りあげてしまつた。ホツとして立ち上ると両手とも手首の奥から血が流れているのに気がついた。まわりには多勢の人が集つていろいろ言つていたが、しばらくは口もきけなかつた。大人の友達が部落まで丸太でかついで運んでくれた。ひとまず部落の中央の火の見櫓の下におろして、皆に見せることにした。さてどうするかと言う事になつたが、自分ではなんとも決めかねるので家に帰つて両親に相談すると、『お前一人で捕えたものではなし、昔から鹿は鹿分けと言つて皆で分けるものだそうだから追い掛けた人達みんな分けたらどうか』と言うので、そうすることに、後の事は父に頼んで傷の手当をして炬燵に寝ころがつた。どうして鹿に飛びついて行つたのか考えてみたがわからない。夕方父が鹿の頭と皮と一片の肉を持つて帰つて来た。鹿は体重二十二貫の大鹿で、角の長さは五十糎余り、角の事はよく知らないが右側が四枝、左側の先が分れて五枝ある。二、三日後に新聞に出たので動物園に寄付してくれと言う話があつたが後の祭りだった。頭と皮は今も僕の家にある。

つたが、あの夜がしらじらと明けて、だんだん八ツの広大な丘陵が姿を現わしてくるのが良かつた。今年はファイトを出して松原湖まで行つた。

修学旅行の一番印象に残つたものには、東大寺の大仏殿だ。正四角形の建物はどっしり安定していて全くすこかつた。広隆寺のミロクボサツは繊細ですんなりとしていた。どこかの学生が指を折つてしまつたそうだが無理もない。薬師寺の東塔の白壁をくつきりと浮ばせ印象的だった。また薬師の中にある堂には三つの像がグロテスクな形で黒光がしていた。このような印象を高校時代に受けた事は良かつた。

オリ ン ピ ッ ク

平井忠彦

東京オリンピック これは日本人であるならばだれでも知っている事である。秋晴れの国立競技上に世界の若人が、胸を張り、未来へのはて知らぬ力を持つて入場して来たのである。それから二週間、各会場では熱戦が繰りひろげられ、日本人である私達は、必死に選手に応援をおこつた。しかし、おしくも敗

けることがある。その時、日本人は選手を暖かいわりむかえた。勝つた時には、涙を流して心からよこび選手をたたえた。

この国際的行事のおかげで私達日本人は、自然に愛国心を持つたのではないだろうか。また外国選手、役員等から、「この大会が、オリンピック史上最高の出来でありましたよ」という声が私達の耳にはいった時、私達は世界に対して一つの自慢話の種がふえたことをよろこんだ。一方悲しい事もおこつた。

それは、インドネシアと北朝鮮の選手が、日本へ来ながら参加せず、開会式当日に帰つたことである。理由として新興国スポーツ大会があげられている。私は、はっきり理解は出来なかつた。しかし、私は、四年に一度世界の青年が、政治的な関係をのり越えて、技を争い、友情をそだて、未来への夢を語り合うこれこそ世界平和に結びつく、まことにすばらしい場所ではないか。なぜその場所へ参加しなかつたか。世界の人々に対して、あやまるべき行為ではなかつたか。だが世界平和を目ざしている人類が、この行事があることによってすこしずつ目的地へ進んでいくことはよろこばしい。

はすばらしく、天然の美はとても絵筆では表わせるものではない。又西芳寺の真赤な紅葉と緑の苔との対比は目のさめるごとく、あざやかであつた。

強行遠足

市 村 一 人

この一年間の行事の内、強行遠足と修学旅行がはつきり頭に残っている。強行遠足だが今年中は込まで行こうとした。なぜかは、去年中込までいった者はみな途中でいろいろもらつたと聞いたからだつた。町や村の人達が川の水でリンゴを洗つて投げてくれる風景が頭に浮かび自分もそれを受けたかつたからだ。それだからやたら走つた。野辺山では88番くらいだつたと思う。ここで初めて休んだ。夜も明けてきた。先頭はとつくに通つたと先生が言つた。少し休んでまた歩きだした。ところが2キロくらい歩いた頃足がいたみだし、休んだり歩いたりした。しまいには正面を向いては歩けなくなり、横を向いた。リンゴでももぎとりにいくのか、トラックに乗つたたくさんの女の人がこれを見て笑つていった。とうとう松原湖で止めた。去年は野辺山だ

オリ ン ピ ッ ク

若 林 宏

一九六四年待ちに待つた世紀の祭典、東京オリンピックが開かれた。これは四年前「ローマ」から「東京」へと決まつたときから始まつた、日本人の努力の成果である。またこの大会は史上最大の参加国と、テルスター宇宙中継などの近代科学のオリンピックでもあつた。その努力の祭典に対して日本選手団は入場行進から開会式の退場までりっぱにやってくれた。

数えればきりが無いが、日本女子バレーの選手団の活躍、マラソンの円谷の根性の力走、体操選手団の活躍、ヘーシンクに敗れたものの柔道の活躍などが今でも思いだす。日本選手が「日の丸」をメインボールにあげると涙がいまにも出そうな感激を覚えた。柔道、バレーなどは、試験の前であつたが始めから、息を殺して手に手をにぎりながら見ていたほどである。しかし、オリンピックはそれだけの感動だけであつたらうか。いやそうではない。「我々に日本人としての自覚、頑張り、団結、祖国愛」を心から発揮したと思う。ま

た世界の人々が手を取り合って平和を守ることにのいかに大切な事を教えられたであろう。だからこういうことは世界の団結のためにも毎年各国をまわって開いても意義あることだと思ふ。

不注意

小林 弘

残り時間もあとわずか。これは難問だぞ。どうしたら解けるかな？ この公式を……：こちらの公式なら……：ア、そうか。あの公式をあてはめればいいんだ。苦心のすえ、やつと思ひあたった公式だが肝じんの具体的な式が浮かんでこない。シャク／＼ 時間が気になる、公式をよく覚えておけばよかったと反省してもはじまらない。雑念が頭をかすめる。落ちつかない心を落ち着けて、その公式の出どころから公式を引き出す。やつと公式ができた。ア！この式この式。解けたゾー「答〇〇ジュール」

数日して答案が帰ってくる。アレー！例の答が×になっている。オヤオヤMISとCGSがまじっているよ。シャク！ むずかしい所をやつと終えてもやさしい所で間違っ

てしまりては何にもならないか自分の不注意に腹が立つ。試験で最もクヤシイのはこんな時であり、強く印象に残っている。

さえない 記

保坂正視

一高へ入学してから早二年。この二年間俺は一体何をしたつていうんだ。何を。真じめに静かに考えるとすぐじめじめした、さえない反省が浮かんでくる。くだらないことばかりに思いをはづませ、他愛もない出来事に心を奪われる。まあそうはいっても大学入試の頃になると何とかなつてどうとかなるんだろ。こんな事書いてもつづり方にはならないから「謙虚」？な気持ちになつてことし一年間の反省を試みた。一番まづかったのはやはり学習成績。従つてこのさいこれは考えないことにした。となると一番下手なことをしたのは友達のこと。俺はどうしてこうおつちよこちよいなんだろう。もちろん今に始まつたことではないのだが。一学期の終りの時の球技大会あの時、俺はソフトボールに出場した。しかしキャプテンの作戦にちよつとした疑問を感じた俺はあまり協力的な態度を取

七賢

辻 順次

こんなに寒い教室の北隅で顔を青くして勉強しろというんですか。これでは学校へカゼをひきに来るようなものですな。おまけに黒板の字も困難な所、苦勞しますよ。

球技大会ソフトボール優勝。やはり練習量には勝てませんかな。勉強もきつとこうなんでしょう。それがわかっているのに……：。

強行遠足。長野のある場所で老婆が話しかけてきた。そのうちに「わしもありくよ。」と言つて後を追つてきた。「おばあさん大いに歩いてくれ、俺は先に行くから。」歩け歩け運動でしたか。

東京オリンピック。全く偉大なものであり世紀の祭典でした。学校では寒い中を夜中に起こされ馬術競技を見てきた。本当にすばらしい聖騎の采展でした。

修学強行。古い文化を見聞に行くにもあ

の駅前のタワーのように近代的なものが建つていてはね。あれでは気分が変わりますよ。

こうして今年もまたこの季節になり、今宵も前のアスファルト道路は静まり返り、その中を時折上弦の月に照らし出され暖かそうに肩を寄せ合い長い影を残して消えて行く二個の人間の姿は美しい。明朝この道はまたあわただしく学校に急ぐ一高生のための道になるのである。いつまでもこの道は一高生に愛されることを願っているのだろう。

しかしこの一年思い切つたことを色々やつてしまった。印象深い年である。今になつて疲れが出てきた。若さというんだつたんですかね。

ラグビー

平林智雄

運動またクラブ活動（今はよくクラブ活動の是非が論議されるのであるが）、それ自体が人生において重大な意味を持つとは、僕は考へない。僕自身、ラグビーを二年間やり、それ自体がプラスになったことは考へていな

らなかつたようだった。さあれはまづかつたむあの作戦は結果的には見事功を奏した。そんなことを考へないまでもチームプレーであるという事を忘れたオノレの愚かさ。チームメイトに悪い感情をおこさせたことは誠に申し訳ない次第であつた。しかし反面愉快な友を得たことは幸せであつた。残り少ない日数を胸に彼らとうまくやつていこう。「寛容と調和」の精神をもつて。

また全てのことに於いて中途半端の事が多かつたようだった。この一年間に入れるはずであつた知識の量が計画どおりではなかつた。凶作とまではいかなくても、平年並の水準には遠かつた。

いいことはなかつたかなあ。考えるだけ……。俺もうまきつたら来年は最上級生。新入生がはいつて来る。カッコイイ先輩であるにはその条件をそろえんといけん。来年こそは楽しい一年であつてほしいと思うな。

そのためにはいつも「謙虚」な気持ちであるように。僕はこの言葉が大好きだ。今まで自分自身の態度に責任がもてなかつたようだから。成人の日を迎えた今ここに宣言をする。

い。内面というのか、ラグビーの精神というのか、そんなものが、美しいと思うのです。

人はよく、ラグビーを闘牛のように、いやがります。ラグビーは、闘牛のように生命をも奪われほしません。他のどんなスポーツよりも厳正なルールがあり、不正な行為に對しては、ペナルティが与えられます。そしてそのジャッジの判定は絶対なものなのです。

現代社会はすべてが高度に発達し、とくにその科学の発達には驚くべきものがあります。そしてこの二十世紀後半の我々の生活はすべてが合理的にでき、人間の生活は日増しに要領よくなつています。こういった社会に身をおく我々は時に、孤独になり、うつろになり、行きづまります。そしてそんな時に、新興宗教が栄え、あの奇妙な踊りが、たいこが鳴り響きいき神様が出現するのです。僕はそんな時に、一人で生き抜く人間でありたい。たとえそれがどんなに苦しくても。黙つて絶え抜く人間でありたい。

僕に絶望を教えたのはラグビーであり、僕に勇気を与えたのはラグビーです。

遠くに立つた二本のゴールポスト、そこにトライする事が望みであり、鉄壁の敵のディフェンスを破つて、進む。味方の十五人の阿

志と共に、それを阻止する敵の十五人を破って。また攻めてくる敵に対して、捨身のタツクル。走ってくる敵に正面から、後ろから。そして、ドリブルしてくる敵にセービング。自己にいとしさが残っていたらできないスポーツです。ラグビーは男のスポーツです。

僕は二年ばかりラグビーをやりました。それは人が一日位で修得できる程度の技術でしかありません。人はそんな程度の事に二年間を費した僕を馬鹿と思うかもしれませんが、僕の考えるラグビー精神は、僕の精神に貴重な骨組みとして生涯に残り、何か事のあった時に発揮されると思うのです。

喜びと憂うつ

渡辺孝

二年になって十ヶ月過ぎた。この十ヶ月は永久に僕の思い出となる。それは「心」に一大出来事が起きたからだ。今思うと始めて人間らしくなった気持だ。すなわち、「考える」ことを知ったのだ。

去る五月の前半であった。体育の時間、A君が、「君は線が細く長いが、B君は太い。今の世には君のようなやつがいい。」と言っ

た。はめたつもりかもしれないが、なんとなく反発したかった。だがよくは理解できなかった。そんなことがあって、一ヶ月ばかりたった頃、桑原武夫の「文学入門」を読んだ。それと関係あつてか、偶然前のことを思い出した。そして、そこに「なるほど」と言える点を見つけた。今まで僕には、「文学」とか「趣味」とか「考える」ことについて欠けていた。それに対し、B君は「文学」に親しみ、よく考えていた。そうだ／彼は幅広い人なんだ。そんなことを思いつつ夏休みに入った。

この夏休みは不思議なことに、読書ということを知ったのだ。なにしろ以前は「読む」ことに地球と太陽ぐらい離れていた僕が（国語の教科書さえろくろく読まなかった）「読む」ことが好き（？）になってしまったのだ。遅手ながらやつと心の目ぼえが来たかとも思つて見た。うれしかった。そして、今まで自分のして来た事が恥かしくなった。なぜもっと早くこのことをつかまなかったのだろう。もう受験準備期間に入りつつあるのに、読んでもいられない。しかし、少しでもいいから読めるだけ勢力しようと思つて見たりした。

これと同時に、人を「見る目」が變つて来た。みる人皆うらやましく思えた。そして、環境に絶望した。この変化も前に言つたことと関係ありそうに思えた。

しかし、この後には苦難の時限（そう願いたい）が待っていた。中学時代にも時々あつたんだが、医者にもそのうちなおると言われていた頭痛が起きた。それも以前とは違い年中続いた。直るか直るかと思つているうちに二学期を終え冬休みの今になつてしまった。

この間、随分いろいろ考えさせられた。この高校時代頑張らないと、現代社会においては一生がだめになる。気持はあせる。悔しい。

特に休み時間も余さず勉強しているのを見ると一層くやしかった。その上、自身の人間の幅の狭さが痛烈に感じられた。それで、時々雲の間から日は射すにしても、常に憂うつだった。

しかし僕は馬鹿であつた。こういう場に立たされた時はじめてその人の人間が現われるのである。いかに早くこの苦しみを克服するかが人格の分岐点である。人を気にして悩むでもしかたがないではないか。しかし僕にはそれが出来ない。なんと弱虫なんだろう。

今までのいろんなことを思い浮かべて、次

の三つを今年のモットーとしようと考えた。

- 一、今までの様に、過度に人を気にせずにもっと自分を強く持ち、自身の道を進む強い根性（マイペース）
- 二、幅広く深い人格。



されど我が日々

石原修

髪は乱れて落つるとも、ベルの鳴る駅までひた走り。発車寸前に飛び乗って、安堵の胸をなでおろす。学校に五分前に着く。まだチラホラとしかきていない。二校時の休み時間弁当を開くもの数人あり。某氏の統計によると、二校時の休み時間に弁当を食うもの十七・八％、三校時は盛況で七三・六％昼休みに食うものわずか八・六％である。三校時の休み時間に僕等のクラスに来たら昼休みだと思ふだろう。先日一部の人から「昼休みにお茶がほしい。」という意見が出たが、大部分の人は「その必要なし。」の意見で、その提

案は受け入れられなかった。統計を見ればこ

ういう結果になつたことを納得されることと思う。さて四校時になると、満腹したものがコックリコックリとやり出す。先生の声は心よい子守歌と化して耳にはいつてくる。四校時終了の鐘がなる。気持ちよく寝ていたものもガバツとはね起き、体育館に急ぐ。昼休み時間をフルに活用することができ。このように休み時間をむだに使わないのがクラスの特徴であり、唯一の長所である。五校時が始まると昼休みの疲れが出てくる。しばらく睡眠にはかなき抵抗を試みるが力尽き、腹減りといった体でベタリと机にうつ伏す。さて五校時、六校時と終つて最後に掃除となる。つづく「良」にさすが掃除のきれいな我々も「優」をとうとうと必殺に掃除をしたが、朝黒板をみると相変わらず「良」であつた。この間の二学期最後の試験のとき掃除当番となつたが一日目は「良」であつた。二日目は掃除をしなかつたが、「良」となつていた。掃除をしなかつたのだから一日目よりきれいになつていゝはずはないわけだが。最後に憂鬱の毎日を送っているものに言いたい。「くるしむなかれわが友よ、しばしわがクラスへ来てくれ。」

二人の自分

山口富夫

みんなしーんとしている。何か寒々しい活気のない教室である。ふと、一人の自分がもう一人の自分に話しかける。

「おい、あいつえらく眠そうだな。ゆうべ遅くまでやつたな。」

もう一人の自分が答える。

「そんな事どうでもいいさ。そんなにやつてもしょうがねえや。おれはおれの道を行くさ。」

「そんな事ないぞ。やつぱり勉強しなきゃあだめさ。だいたい、今の調子じゃあ大学へなんか入れんぞ。」

「この大切な青春時代を灰色に塗りつぶしてガリ勉して大学へ行つたつてしようがないじゃないか。若いエネルギーを使つて運動したり、人生や政治や思想や宗教等を話し合つたりした方がよっぽど役に立つ。試験の為の詰め込み勉強よりよっぽど重要さ。だいたい僕等の時代にそういう事をしなくて、試験の為の勉強ばかりして大学へ入り、門前のマージャン屋やパチンコ屋なんか卒業した奴が社

会の上へ立つから今の社会が悪くなるんだ。」

「だけれどな、いくらお前がこんな所でりきんだって、上へ立たなきやあ誰も認めちやあくれんだぞ。『へん、何を負けおしみ言っているだ。』」ってな。だから何しろ大学へ行かなきやだめさ。まあ、この一年沈むだな。」

「……………」

相変らず教室の中は活気がない。ただ先生の声だけが通る。

「この所は非常に重要ですよ。よく試験で聞かれますから……………」

今考えている事

広瀬春男

高校生活二年目も後少しで終ろうとしている。高校時代は、伸び伸びと自由に過す事が理想だとばかりは思うが、今の世の中では、そんな事は言っていられない。有名大学を目標にまっしぐらに進んで行かなければならない。学校生活は灰色だ、受験の為の学校生活それも今の段階では、なんともする事が出来ない。しかしもう少し入学難を緩和するようにしてもらいたいものだ。まったく受験ノイローゼになって自殺するやつの気持ちも良く

分かるような気がする。毎日毎日試験に追い

まわされているような気がするのも無理ない事だ。しかしぼくたちは負けてはいない。ぼくたちは若いエネルギーがあるんだ。ぼくたちにはどんな苦しい事でも切り抜ける、若い力がある。若いエネルギーをクラブ活動に分散させ、試験勉強に燃やしてこそ、次の時代を創るたくましい若い力が養われるのだ。さあ、はりきってこの難関に、からだごとぶっかって行こう。そうすればきつとその道は開かれるのだから。

クラブと仲間

小沢藤雄

私は、高校生活においてクラブ活動というのは実に大切な集団活動であり自己訓練の場であると確信する。私は今書道部に属しているが、今から考えてみるとよくここまで続けてこられたのが夢のようだ。というのも私は中学時代において一学期にクラブを五つもかえて結局は無所属として、友との交際もあまりないままに一高へはいった。私は小学校のときから習字が好きだったので芸選として書道をとった。私は先輩に勧められて、狭い水

色の室へ連れていかれた。実はこれが書道部

仲間にとつて絶対かかせられない笑いとユーモアにみちた楽しいこいの場所だったのだ。この二年間いやの事も、楽しいことも、なやんだことも数多くあった。しかし私のそばにはいつも仲間がいた。やさしくたくましく若さに満ちあふれた仲間だ。私はこんな仲間がいることを誇りになりたい。それは私にとって最大の励みだ。それというのも父の職業の関係で中学校入学以来三回も移転し一、二年でもう別れ別れになってしまおうので真の友、仲間はできず残念に思っていたことが解消せられたからだった。

我々は書を通して友を知り、大学受験における注意を先輩から聞く。彼らは実に生字引達だと言える。ここで忘れてならないのは、顧問K先生だが彼は我々の字引にさらに知識を書きこんでくれる。毎日部室へきておもしろい話をしてくださる。二年生部員として最大の経験は甲一書道展だった。これについては一年のときから勉強とクラブ活動が両立することができると問題になった一大事業というべきものであったが私自身にとつては大体両立できたと思う。しかし、大体ではという人がいるかもしれないが、こんなことを

のである。

また、朝教室に入って席に座わる時に、別に何といつて解答を求めるわけではないが、

「きょうは調子はどうだい。」というのが常であった。私の朝のあいさつであった。友は心得ていて、「おお」と調子よく返答しながらほへみかけた。私も笑う。時に、友が何かを考えていて、調子がくるうことがあった。友が考えていることは、その時の様子で大体推察できた。また、友が悩んでいるのを見ることは、私自身の悩みともなった。私は友の悩みを、軽く、もしくはなくす為に話合った。

このように親しい友をも敵にまわして、『この次には、あいつよりいい点をとってやろう。』などと競争心をもやしたことがあった。しかし、友を敵にまわさなければならぬことが、しのびなかった。友よりいい点を採って、友を見おろすようになりたいなどという自分の心が、いやらしかった。残念でならなかった。

高校生活とクラブ活動

深沢稔

言う人は私はよくばりだと思う。たしかにそれを理想としているのであるが……………。私はあの重労働の中に勉強の大体の成立というものが、実現したことだけで、大きなプラスになったと思う。これからも、この得がたい経験を線として、残り一年間を絶対悔いなきものにし、日々前進の生活をおくろうと思う。

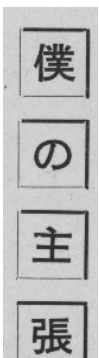
友

雨宮弘治

始めにどんなことを話したかは、はっきりとは覚えていない。テストについてか、ただの雑談であるのか。おしゃべりの私には二言もしやべらずに一日を過ごすことは、とても苦痛であった。ただこの苦痛を取り去る為に話をしかけたことだけは確かである。紅―

それから話をする事が多くなった。休み時間には、彼と何か話さねばいられないようになった。ある時には話をしている、もう少しで欠席になりそうになったことがあった。その時は、友に「返事をしろ」といわれて、何のことかわからず、ただ「はい」と返事をした。出席調べで二度も名を呼ばれていた

十五、十六、十七才の青春時代の最も心身ともに充実した時を過ごすのが高校時代である。この時は、未来のすばらしい生活を送る為の（今の社会では）第一条件である大学入学への学習をする時期である。青春の力を勉強へぶちつけることは、実にうれしく、すばらしいことである。しかし未来のすばらしい生活という条件は頭の中だけで築き上げられるものだろうか。ぼくは、高校時代には、学習も必要だが、しかし、体も必要だと思う。教室の中でとかく親友だとかいうが、それは平面的なものであり、また全然勉強という壁を問に入らずクラブという中でおもしろく、親しくするのも人生の一過程の充実した生活ではないだろうか。



高校の意義

清水幸雄

私達の高校時代は精神的・肉体的な面から見ても、人間形成の上で最も重要な時期では

なからうか。それなのに私達は入学すると同時にもう大学受験のことを頭にたたき込まれたのである。その頃は入学したばかりなのにまた受験のことかとうんざりしたことであつた。だから頭の中には「受験」という文字がこびりついて難脱しようとしないのである。

勿論、受験ということも人間形成の上で大切なところが、ただそれだけでは成しえないだろう。ただもう今となつては、私達は受験という壁をのり越すために前進するだけなのである。そして、その壁を破壊することができると心配なのである。その壁までどうにかこうにか来たものの、それに少しも触ることなくたちまち倒れてしまうかもしれないのである。

私達は私達の目的を達するためには、誰をさしおいても私達の最善をつくさなければならぬのである。そして、私達は自分の道は自分で切り開いていかなければならないのである。その点では大勢の人々と競い、争うこともよいであろう。ただそうするだけであつては、私達の高校時代は健康的で、明るく快活なものを造りあげることとは困難ではないか。

期待される人間像

山下汎樹

青春。何だ？受験勉強、友情、恋、それもいいだろう。いやもつと重大なことが。しかし、それらがいちがいに悪いとはいえない。むしろ、必要かつあたりまえだろう。受験勉強、非常に結構。それは我々にとつて必要かくべからざるものだろう。基礎知識・思考力がなくて何がなせるというのだ。それほその知識・思考力を育てまた作るためには少くとも今の我々として最低の手段であろう。勉強という中で受験勉強というものについていろいろ言われるが現代の社会環境ではしかたがないことである。

友情。これまた必要かくべからざるもの。これなくして我々のような砂利を何が、まただれが直すぐに育ててくれようか。

恋。勉強にもいろいろ種類はあるように恋にもいろいろある。我々のような大人とも小供ともつかない人間の恋、大人の恋から小生の恋、まあそのほかいろいろあるのが、ここではその問題は還りよさせてもらう。何事についても若い間にする方がいいといわれている

るけれど、恋も学生時代に大いにやる方がいいと言う諸先輩の話だ。また、それは灰色の生活に一筋の光線を投げかけるだろう。しかし、それ自身灰色の生活になることもある。その他いろいろ青春時代にやるべきこと、なるべくやった方がいいものは多くあるが、あらためて説明することもないので省略する。

最初に「もつと重大なことが」といったが受験勉強、友情、恋、その他、それらをやるなどいうのではない、くだいようだがそれらは、若い間にしかできないものや若い間どうしてもしなければならぬことばかりだ。大いにハッスルしよう。

さて、とかく勉強熱心で大学のこと、遊ぶことも熱心で、あの娘のことなどばかり考えている我々学生をはじめとする、ハイティーンが忘れがちである明日の日本、われわれの社会のことであるが、これの方が前にのべたことより重大だろう。近ごろ国では、この文章の題と同じ「期待される人間像」についていろいろ思案中でもう七分通りできているそうだが非常に結構。

少くとも我々は大学を卒業して五十・六十六ごろまでは社会の一員としてまた我々の後輩

贈物

安部道弘

付き合つても付き合つても他人に飽きられない人間になれ／

己の欲せざる所、他人に施すことなかれ／
何んて価値ある言葉であろうか。現在の一高生に贈る最高の言葉であろう。だれ一人として、どうしたらこんな人間になれるか。わからないだろう。しかし一步でもこんな人間に近づくように、努力し、頑張ってみようではないか。

『意志の重要性』

萩原睦幸

人間の意志とは重要なものである。「意志」というところを辞書でひくと、思慮し、選択し、なし遂げようとする心とある。実はこれほど人生にとつて重要なことはないのである。人生に意志なくして人生が成り立つであろうか。たとえ成り立つとしても、それは無味乾燥な非人間的な世界と化すであろう。どんな小さなことでもいい。他人から偏見の目

アマチュアスポーツ

本 沢 誠

最近僕はある友人から、こんな話を聞いた。彼のいうには、その友人は、あるスポーツにずばぬけてうまく、そのため某大学から入学の勧誘をうけたそうである。この時僕は憤慨した。つまり大学が何のためにあり、アマチュアスポーツがなぜあるのかわからない。

最近の学業も満足に行なわずにスポーツのため卒業する人もあるとか聞く。また社会人でも各種のスポーツで、アマと名のりながらその職場では十分でない仕事で十二分の月給をもらう人も少なくないだろう。オリンピックだって白熱したゲームを行なっても、彼らは一人の学生・社会人としてより一人の偉大なスポーツマンということを重要視しているのではなからうか。アマチュアとは職業としない人のことを言いプロフェッショナルとはその逆を言うのだ。つまり以上の例から彼らはプロ化したアマではなからうか。勉強・仕事のあいまに趣味としてスポーツをする喜びを味わい、より明かるい人造りのためのスポーツ、そのアマチュアスポーツの根本精神を

もう一度考えなおし、より健全なものとしてほしい。

冷たい世界

遠山和男

私にとって、世界で一番大きな社会的問題は、米ソ関係ではなく、人種差別問題である。同じ人間でありながら、何故白人は、黒人を見下すのだろうか。南ア連邦では、白人の町と、黒人の町とを区別している所があるという。アメリカでも、白人専用の映画館とかホテルというように、分別していると聞く。何故白人は黒人を嫌うのだろうか。

先日、キング牧師が、ノーベル平和賞を受けた。キング氏と云えば、人種差別反対の先導者である。しかし、彼は黒人だ。黒人なら人種差別反対を唱えるのは当然であろう。何故彼のような白人が現われないのだろうか。リンカーン。彼は偉大だった。しかし彼は過去の人であり、過去の問題の人である。私が欲しているのは、人種差別の事みに力を注ぐ人だ。もしそのような人が居たら私は尊敬せずにはいられないだろう。大統領などは別である。彼らは職務上それをするの

が当然であるし、もしそれをしなかったら、大統領の座はないであろう。

しかし人間なんて解らない。言葉では、他人を納得させていながら、裏ではどんなことを考えているのか解らない。人間は考える動物である。しかし、利点であるその考えるということが、どれだけ同じ人間を傷つけていることだろう。まさに、社会は、「クール・ワールド」である。

自然への観察と思索

清水憲治

自然はあまりにも大きすぎる。偉大すぎる。超越してすぎる。この俗世間に生きる僕らにとってその比ではない。しかし僕はそれにおじけていてはならぬ。断えず自然を見つめる目を持たねばならぬ。自然を凝視し、それに勢いよく挑んで一つ一つその本質を解明していくところに人間の真の生きる姿があるのではないか。

水の流れ。それは上から見ただけではただ単に水の流れにすぎぬかもしれない。しかしその一見単純なものの裏には絶えず僕たちの想像もおよばぬ自然の神秘感がじゆう満して

いるかもしれない。流れる川の水にもなんらかの心があるかもしれない。もつともつと自然に対する鋭い観察力、思考力を養おう。

理事たる者

土 橋 洋

自分は二学期の理事となった。もちろん一高にはいつてはじめてのことである。なったのではなくて無理やりにさせられたのである。個人としての自由はほとんど無に等しい。理事会に出席する、「理事ニナツタクラブ活動グライシテモラワナクテワコマル。」冗談じゃない。俺はやりたくてやっているのではない。しかし何のためにやらねばならぬんだ。クラスの為に学校の為に――人々はいう。なくてはならぬものらしい。しかし自分にとっては単なる飾り物にすぎない。(国でいえば天皇である。もつとも天皇は国の重大なる位置をしめ、その役割もあるにはある。)だからその選挙自体も実にいい加減なものである。或る老曰く「オイ／奴ニイレロ」これでは二、三の者に集中してくるのは当然だ。日本の一非民主主義の野蠻の一面をますます助長するばかりである。自分は「理

事」を否定する。自分の心の中には「ヤリタイ奴ガヤレバイインダ……。」

いま考えていること

芦沢千洋

文集の文を書こうと鉛筆を握っても、いざ書くことがない。そこでいま思い浮かぶ事ととりとめもなくつづつてみた。

私が何の為生まれてきたのかは知らない。

目的があつての生存であるや否やもわからない。自分の存在というものすら考えれば不可思議な感じである。しかし自分というものがこの世にあり、かつ一個の生命、一個の肉体を持つているという事は事実であり、それである以上は自分の人生というものを自分の全力で力いっぱい生きて行きたい。＂生きて行く＂と言うからには何か目的があらねばならない。それはやはり幸福であると思える。誰もがみな幸福に向かつて進んで行く。利己の＂幸＂を求める者、自己の＂幸＂を求める者。幸福とは精神的なものではあるが常人である限りはある程度の物質的の幸福の裏づけも必要である。そして幸福は人によって千差万別である。同じ＂青い鳥＂でも捕えた人に

よつて色が変わつてしまうように、

幸福についてもう少し書くなら幸福とは、やはり主観的なものである。世間的にどんなに幸福であるとされても、主観的に幸福でなければ何の意味もない。反対に世間的にどんなに不幸に見えても主観的に幸福であるならその者は生れてきた事を喜び、かつ神か何かに感謝するであろう。なおかつの僕の考えを続ける事を許すのであるならば、私は「ナイチンゲール」も「シュバイツァー」も結局は主観的なものを求めたのだと言おう。人々は救い主のように呼ぶが、彼らは自分の心の底から沸いてくる「愛」によつて自分自身をおさえられなくなり、結局それが良い方法だと考えた。良い方法とは他人にとつてであり又それをする事によつて自分にとって良い方法であるという事である。つまり他人の為にして為す事によつて自身を満足させるのである。一種の幸福追求ではなからうか。私はそれを偽善とは呼ばない。そしてそれが尊敬に値いしないとも言わない。つまり本人にその意志の有や否やを問題としないからである。

また我々の人生は無限である。例え社会的には有限であつても人生が幸福を目的(もちろん幸福そのものを目的として得られるもの

ではないが」とする以上その者の人生は無限であるように思える。

幸福追求という事になると難かしい問題である。「青い鳥」でもいつているように幸福というものには形も色もない。幸福が主観的なものだからだ。つまり喜び、幸福といったものはやはり苦勞、悲しみがあつた後に味わえるものであると思える。それは砂糖が塩の味を知った後、はじめて甘いと感じると同じ様に。もし人生が何の苦もなかったとしたら全く無意味なものである。つまり何の苦もないという事は、同じに何の喜びもないという事を意味するからである。

もし仮りに全世界が自分の意のままになつたとして。かけをすれば必ず勝つ、やる事なす事すべて成功する。そこには何のスリルも興味もない。そんな人生はあきらかに地獄のようなものだ。つまり人生は思い通りにならないからこそおもしろいのだ。もちろん自分から進んで煩いの中に飛び込んで行く必要もないであらう。しかし自分に課せられた試験くらいは、自分の手で何とか解決して行きたいものだ。現在僕らの眼前には夕暮れの中にくっきりと

狭き門が立っている。その門は一刻く我々に近ずきつつある。その門は我々にとつて重大な門である。否一生を決める門であると言つても過言ではない。その門は寂しい門である誰もが無事通れるか否かは保障できない。そんな高校時代を人は「灰色だ」と言う。でも僕はそうは思わない。確かに勉強は辛い。単調だ。寂しいでも決して灰色ではない。僕らには夢がある。何にも敗けない若さがある。そして、かの狭き門すら見ようによつては色が違い、形が異なるのではないだらうか。どうせ同じやつて来る門ならば、その向こうにある無限の未来を信じ、やつて来るのを待たずこつちからその門に突進してやろうではないか。

(二月十二日)

思ひくま

鳴

笹本森堆

真黒なからすと紺色をしたからすが、朝になるとどこからともなく来て小屋に集まる。

我が理想とする人物

原 敬 二郎

身長百八十。体重七十五。視力一・五。自分が正しいならば、上級生でもなぐり、自分が間違っていたならば、下級生でもなぐら

そして夕方になると、おもいおもいのねぐらへ帰っていく。この光景は一年中ある期間をのぞいては毎日みられる。春になると幾百かのからすは去り、代りに新しいものがやってくるのである。新しいものが来て彼らのやっていることは毎年同じであり変化しない。彼らをよくみると、まだくちばしの黄色いやつばかりである。彼らには若いという翼があるのにもかかわらず、彼らはそれを使おうとしない。彼らが使おうとするときにはそれはいうことをきかないだらう。それにそのくちばしの黄色い連中は決して普通のからすのようにはカアカアと鳴かない。耳をすますと彼らが、ダイガク、ダイガクと鳴いているのがきこえる。今日もどこからともなく集まつたからすが、ふけたからすを前にして何やら知らないがくちばしをつつき合い、またねぐらへ帰って行く。

れる。バスを待っている時、順番を守らない奴がいたら、首をつかまえて後に並ばせる。

不可能な事を可能にするように努力し（ただし、自分の能力にはとうてい及ばないとわかる事には努力を払わない）、

困っている奴がいて、そいつをせせら笑うような奴がいたら、そいつに助けさせる。

本を読んでは、心を動かし、音楽を聴いては、昔を思いだす。

男の人を見ては、たくましいと思い、女の人を見ては、美しいと思う。

皆に付き合いくく、いやな奴だと言われ孤独を愛し、自然を愛する。私はこんな人になんてなりたい。

美那子

浅川料夫

姉は二年前の冬生まればかりの赤ちゃんを失なつた。十日間その子は泣いていたが原因も判明もしないまま死んでいった。その子はいやに大人びた顔をしていた。女の子だった。姉は泣いた。次の日もその次の日も。初めての子を失なつた悲しみに私は何といつてなぐさめて長いかわからなかった。それから

一年後姉は再び懐妊した。去年の三月今度は丸々とした子が生れた。やはり女の子だった。美那子と名づけた。姉の生活は笑いの毎日だった。美那子を抱えている時の姉は、私が煩を殴つても笑っているだろうと思われるくらいであつた。

姉の家は私の家のすぐそばのアパートであつた。学校から帰ると、私はまず美那子の顔を見に行つた。私が行くといつても、その其赤でまん丸なほつぺで笑んでくれる美那子であつた。「美那ちゃん、美那ちゃんが大きくなつたら、僕と動物園へ行きましようね。ゾウさんてうんと大きいんだよ。」大きな目はいかにもそのことばが解つたふうだった。美那子を抱く私は、やはり幸福だった。

しかし、それは去年の十一月の末、二、三日様子が変だといつただけで、美那子は、やはり原因がはつきりとせず死んでいった。美那子を前の子のわきに葬つた日の夜、私は姉と二人きりになった。姉は私の胸にしがみついて泣いた。姉は二十一才の少女だった。「わたくしが間違っていたんだわ、おとうさんのいうことをきいておけば、こんなに……こんなに泣かずに済んだのに」ふるえる声で何度か美那子にわびる姉だった。姉は、彼女が十

八の春突然結婚した。家の猛烈な反対も姉にとつて何者でもなかった。姉は、今は私の義兄であるが、相手にある病氣のあることを知らなかった。「おねえさんは自分で選んだ自由な結婚をしたんだ。美那ちゃんは死んだ。でも、きつとおねえさんを恨んでやしない。東の間でも美那ちゃんはおねえさんたちの愛の子だったんじゃないか。あのまっかな頬で笑つてくれているよ天国で」私はそう言つた。しかし複雑な気持であつた。

姉たちはどうなつても、美那子だけは生きていてほしかった——そう思つた。(虚構)

一九六五年——

昭和四〇年

斉藤省三

(自分にとって今年こそ)『無駄があつてはならない年』、まずそう思う。とかく、マスコミだけにとらわれがちな今までの自分の甘い考えを、たたき直し、理想の一高生に近付くことだ。考えてみると、僕の今までの生活は、穴だらけ、悪いことだらけのように思われる。およそ本校に入學した頃、夢にえが

いた、理想的一高生とはあまりにもかけ離れていたものだ。こうした過去の（悪い）実績を、今さら取り去るというのは、とうてい無理なズルイ考えであろうが、過去の体験を少しでもこれからの生活に生かすことは可能なことだし、また、今の自分にとって、とてつもなく大きな野望を、はかない夢だけにお知らせないためには、そうするより他にない。自分に対するなぐさめかもしれないがそういう生き方も、青年らしい生き方ではないかと思う。また、その時のその姿こそ社会の要求している、理想的な高校生らしい姿だとも思う。

以前はよく、「ガリ勉」なる人々を嫌った僕ではあるが、今となってみると、彼らをたのしく、うらやましく、尊敬したいような気さえする。よく彼らの生活を灰色と称したもののだが、見方をかえると、必ずしもそうではなくて、ある雑誌のことばを借りると、「はるかかなたにきらきら輝く星に向かって、まっしぐらに前進する若者らしい姿」を考えると、僕のような人になった。僕の性格からいって、「ガリ勉」になることはとても無理だから、せめて自分自身で納得のいく程度はやりたいと思う。

た。やはり大人になったのだろう。時計を見た。「8時35分。」「朝の頃はいいらないよ。」「いつてきます。」外は雪が降っていた。これが夜だったらなあと思いが、急ぎ足で学校へ行った。

今日から三学期がはじまる。始業式を終えて外に出るともう雪はやんでいた。あちこちの屋根の雪はとけて所々里で見える所がある。あまり好きな景色ではない。やはり白色のほうが好きだ。家に着いて戸をあけた。「ただいま。」返事がなかった。奥へ入って行くと母が鏡の前にすわっていた。女の人って年をとると化粧したくなるのだろう。昼食後、こたつにあたってラジオを聞いていた。外はどんよりと曇っている。眠たいような感じがした。

「おやすみなさい。」

ある友情

足 達

久

「僕は本に直面している時ひとりだ。そして今までに一番そこで学んだと思う。人生に処する勇気を。」

「本には他人が考えたことが書いてある。

とにかく今年はあの有名な「少年よ大志をいだけ」のことばを信じて、夢を捨てずに、地道に進みたいと願うだけである。

新年

窪田 幸治

このごろは、新年といっても昔ほどうれしくなくなった。今考えると、小さい時は何があんなに楽しかったのか不思議な感じさえもする。去年の末は例年になく忙しく非常に疲れたので正月から眠くて今年の計画は立てられなかったけれども、初夢だけはちゃんと見ることができた。しかし内容は、「富士……には程遠く、やっぱり学生にはびつたりの事で普段ならそんな事は少しも好きではないが心の奥ではやはり、どうしても避けられない事というのがよくわかってるので多少は安心？した。とにかく今年は大事な年なので悔いのない年にしたいのが計であるようにしたい。しかし去年の冬休みに比べるとはるかによい休みだったと思っている。何といっても良く食べ、良く寝、良く遊んだ。今年は第一に勉強二に勉強三も……と思っているのには思っているのだが、結果は来年の正月によく

そのことを代弁しているだけだとは思わないか。」

「ちがう、あきらかに違う。本を読むとき僕はひとりだ。自分の心が直接に接する。本の心に接する。自分の心に蓄積されたものが本の心の中にあるものを正當に批判する。それは自分の心に対してなのだが、正當に批判して、心に入れるものと、今まで心にあつたもので捨てるものや、本の心の中の捨てるものを判断する。実体験しているんだ。」

「それも本にあつたのか。」

「…僕は…絶望している。」

「逃げるのか。」

「そんなことをいって君は、僕を殺すつもりなのか。君だってことばをつかつてるじやないか。」

「………。」

「僕は…絶望している。」

「三木清は仮説だといったよ。」

「亀井勝一郎は陣痛だといった。」

「ん……。」

（二月十五日）

わかると思っている。とにかく計画というものは破れるために作るようなものである。と僕が初めて考えた様に言った。つまり書いたけれどもこれは昔からある有名な（もちろん知らない人は知らないけれども）ことばで、実際にとてもあてはまる事だと思う。これは全然新年には関係ないので元に戻ると、今の日本の社会の現状では試験というものは避ける事のできない物なので何につけてもつきまとってまったくいやになって社会逃避をしてみたいような気持になるときとときがある。しかしどんな事があっても今年は勉強中心に行こうと思っている。これが唯一の計画であり望みでもありたい。又学校が始まるのかと思うとうれしいような、（やっぱりいやになってしまいうが）感じがしないでもない。

一月 八 日

浅 川 一 也

「8時25分」。母の声が目がさめた。枕もとの時計を見た。「しまった。」急いで床を出て、ふとんをたたんで戸をあけた。外は雪だった。一瞬妙な気持になった。小さい時に感じたことのある感じた。でも、すぐに消え

死

小田切 純

私は死というラインを越えた後の状態はどんな感じがするのだろうか考えてみた。つまり、事故死でも、病死でも、老衰でもいい、生命の灯が消えた途端どんなだろう。死人に語ってもらわなければ、わからないかも知れないけれど、不可能なことだ。

ある人が死地をさまよっていた。そして、人々の悲しみの中に息を引きとった。誰もが彼女の死を疑わなかった。が、どのくらいだったか、息を吹き返し、語った。「三途の川まで行くと、向う岸で先に行つた夫が待っていた。早く来いと言わんばかりに手招きをしている。しかし、私は行かなかった。夫は悲しそうな顔をして呼び続けたが、行かなかった。そして、帰って来た。」と。こんな話をどこかで聞いたことを思い出した。

結局、自分で体験し、感じてみなければわからない事だろう。しかし、何度も体験できることではない。できる時、すなわち自分の死を意味するのだ。誰でもいい、経験した人1 死人でも、教えるにきてくれないかなア。

道程

志村二郎

それはよく晴れたある日曜の昼下りであった。どこにでもいそうな男「彼」は今まで彼自身を背後から悪意的にじわじわとおそっていた不快感の為に、続けていた規則的な作業を止めて、半分いかれた下駄をはくと、強いひさしの中に出て行った。今まで暗い部屋にこもっていた彼は、その直接的な光線の為、一瞬、目をしばたいたが、気にもせずほとんど無意識のまま歩き始めた。小さく余りきいではないが、年輪とでもいうのか、どこか味のある家々を通り抜け、黄色味が出はじめた稲穂の小道をすぎ、いつしか満々と水をたたえてゆつたりゆつたり、まるでさつきまで彼の胸裏をおおっていたものの如くじわじわと流れる川にそった、石と雑草におおわれた堤防にきていた。

川は川底の水草や汚物の為に多少よごれてはいたが、まだまだ「清流」の名を保持し、つり糸をたれている光景が点々と続いていた。その中にくわえタバコでつり糸の先をじつと見入っている男がいた。「おけやのおや

じだ。」私はそれをすぐ認めた。彼は子供づれであった。彼の家はすぐ近くのなにわざわざバイクに乗って来ていてその荷台には小魚が四、五匹入った大きなバケツがおいてあった。この人の良いおやじは、私をみとめるとほほえみ「やあ」といった。それからすぐふり返って、又もとのように糸の先に見入った。快い微風がつり糸をこきざみにふるわせ赤い色をした卵形の浮きが奇妙な曲線を描いていた。「ここで小学校入学の写真をとったつけ。」彼はそんなことを考えながら、つり師達の長いさおやバケツを一つ一つよけながら、なおも歩いていくのであった。

ある日の新開から

田中

秀

◎去年一年の間に交通事故によって命を失った者が一万数千人にのぼるという。また生命を失わないまでも不具になった人の数を考えると恐るべきものになることが想像される。現在ヴェトナムやコンゴで行なわれている人殺し専門の戦争以上に激しいものであると思われる。まさしく『交通センソウ』そのままである。

野分

前田弘

秋も終りに近いある日八ヶ岳の高原を歩いていた。空はうす青くしみいるような感じでした。さらさらとした晩秋の光がみなぎっていた。

その日は見渡すかぎりの赤茶けた枯野を野分が強く吹きすさび、名も分らない丈が高い草が風にざわめき、松は不気味な声をたてた。歩む足もたらは黄褐色の葉が青い空に吸いこまれるように、狂って謝っていた。

そして風が枯葉を連れ去った方角遠く薄く富士がその姿を白い霧雲の上にかすませていた。丘の頂には真新しい展望台ができていて中に入ると、建物に突き当って渦巻く風がゴ

ーゴーいうすさまじい音をたてた。そして八ヶ岳の峰々はその赤茶色の山はだをさえ渡る空気に、いつもよりいっそう近く迫らせているようだった。

僕は高原——それも一面枯野原となったあのやつが——好きだ。歩いていると何か落ちついた気分になってくる。街で考える憂鬱な事柄もここではさわやかな安らぎの中で考える事ができるから……。

さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花乱れて秋かぜぞふく

愚痴

河野清二

つぶらな瞳、けなげな手、ものいいたげに我が身を気づかう少女、何もいわないでいい何もいわなくたってわかってるんだ。僕はそんな少女をいつも夢見ていた。

若干17にして、人生必須なるものまで犠牲にと体裁のいい誤魔化しをし、その価値を醜いまでに認めつ、信ずるものは何一つもてず一瞬の享楽をも求め、さまよい歩く僕の姿を誰も振り返りません。

グーダラの、酔っぱらいの、田舎オヤジの何もわかつちやないのに政治を論ずる、わめく、みつともない様よ／。

変な夢

千野宗雄

にぶい音のする戸をこじあけて入っていくと、どこか抜けているが、がめつそうな顔のおかみさんが掃除をしていた。三十五円の電池を五つ買って五百円札を出すと三百九十五円のおつりがきた。七十円得をしてすぐ店を出て自転車でその場を立ち去った。しかし、世の中はうまくいかないもので、後からおかみさんが自動車で追いかけてきた。「しまった。気がついたか」と残念ながら立ち止まろうとしたが、何かがそうはさせてくれなかった。追ってくるのをふり切ろうと、山を越え川を渡り逃げた。途中ゴジラや火星人にも出会った。いつの間にか見知らぬ町に出て来てしまった。五十階建てのビルが立ち並んでいる。ふと後方を見るとまだおかみさんが例の顔をして見つめていた。私は心身ともに疲れきっていた。しかしペダルはまわされていた。そして信号も赤になってしまった。「も

◎中学・高校新卒者ひつはりだこ。求人は卒で四・四倍ということである。高校を出てさらにその上をのぞもうとする私の心にある後悔にいた気持ちは走った。

◎東京の住宅街で向こう三軒両隣の郵便受けに千円札が投げこんであつたという。世の中には変わった人間がいるものである。それほど金の使用法に困るのなら施設にでも寄付した方がよほど喜ばれると思うが……。

何であろう？ 俗悪根性がそうしたのであるうか。又追いかけてきたのは何だろう？ 彼女の靈魂かもしれない。自分の良心かもしれない。店を出てすぐおかみさんが追いかけてくるのが目に入った。胸の中の恐怖感が又動きました。おかみさんが近づいてくる。破裂しそうだ。神よ！ ア！……母が二階へ上ってくる音が聞えてきた。いやな夢だ。

ある会話

名 取 孝

「お前はだれだ。」 「俺の名は名取孝だ。どうしてこんな名前をつけたのか知らない。俺はいい名だと思う。」 「お前は何者だ。」 「俺は一高の生徒だ。だが俺は一高生を好まない。一高のやつら生意気だ。彼らの心はなんだ。つめたい死人みたいではないか。」 「お前の心はどうだ。」 「俺も確かに生意気だが、しかし俺は一高生という名を傷つけないで進む。と同時に温かい心をもつ。」 「お前もふけたなあ。」 「全く／俺も気が付かなかったぜ。こんなにひげは濃くなるしよ、でもよ、大人になったと思うと愉快だぜ。」 「お前勉強はどうだ。」 「俺は苦しいよ。何しろ同僚が多いからな。でもよ、人数の少ない中から晴れの舞台を踏む方が感じがいいよな。じゃ、ガンバロウナ。」 と僕は（鏡の中の俺）と会話をしたことがあった一年だった。終り

四季の女達

浜 佳寛

ガラス窓からギラギラと熱い光をあび、外は触れると水分を吸いとられそうな地面と、焼いたセッコウのはだを持つアパートの壁とそれから、コバルトガラスを通して見たような空が、高く建物の背にそびえていた。そんな頃、心象を映す網膜は乾いた壁によりかかり砂の上にねそべり、それでいてうるおいのある皮膚と目を持つ女を映ずる。それは多分女だったろう。それは夏中俺につきまとった。西湖へも裏磐梯へも実験室へもテレビの中にも、又俺の小さな部屋へも。しかしそれをものにもできず、男の意気地を尽くすこともできなかつた俺はつまらない季節をすごした。それは夏だった。紅葉とともにやって来た秋の女は、その短命さを悲しみ、早くも勢いをみせ始めた冬のそれをうらやみ姿を消した。次のものは巷を吹き抜ける風と共に来て、酢酸をいとも簡単に氷らせ、足の指をいたく固くし。旅をもおつくうにさせ、風の音にその笑いをたくす。俺は小さな部屋のガラス窓の内からそれを聞き、考え、抵抗することを覚



ゝたるひそして今は春を迎えようとし、春の女を待ちそれが自分であることを望み、男の意気地を出し尽くすべきことを感じている。俺の闘争の為に。

灰色の高校時代

中山 浩一

この素晴らしい青春
だが なぜつまらないのだ
「受験」 「合格」

このことばだけは
いつも頭の中の一角に存在する
まったく灰色の高校生活だ

山は言う

俺のところへ来い

空気はうまく

夢も希望もわいてくる

勉強はそれからだ

湖は言う



俺のところへ来い
湖畔の静けさを脳裏に秘め
冷静かつ迅速に
高校時代をばく進せよ
高校生活は楽しくなり
思い出になる
でも やっぱり「受験」 「合格」
このことばは消えない
高校時代は灰色だ

あのことばのこと

幡野 芳久

春

萌える緑の中でそよ風が甘かった

小鳥はのどかにさえざり峡が踊った

若さが大地に満ちていた

夏

空と海の青さに太陽がまぶしかった

朝の香が鼻をくすぐり海鳴りが遠く聞えた
けれど俺はなぜか暑苦しかった

秋

すすきの椿が白く終れ虫の音がさみしかった
月の光に草の露が冷たく光った
あの露は涙かもしれない

冬

凍てつく寒さに俺の心は痛々しかった

風が体を吹き抜けていった

風が俺を知らない所に連れていった
白い静かな世界だけが残った

烈風

伊藤 豊

からっと晴れたるある日の午後

にわかに吹き出したる烈風

電線を鳴らし木立を揺さぶり

この地球上のすべての物を吹き飛ばす

ような烈風

この物静かな平穏な世界に飛びこんできたお前よ

俺はお前にこう叫ぶ

「烈風よ吹きまくれ、烈風よ吹きまくれ」と。

この平穏な世界一面をおおっている

灰色のそれを吹き飛ばして欲しいのだ。

目の前に俺の青空が見えているのに

たえずそれをさえぎっている。

灰色のそれを吹き飛ばして欲しいのだ。

そしていつもこの俺にお前の強大な

エネルギーを与えてくれ

からっと晴れたるある日の午後

にわかに吹き出したる烈風よ

天地異変を起こすかのようなお前よ

お前はこれからも自分の青空を

捨てようとしているものに一吹きあびせてやれ

『烈風よ吹きまくれ、烈風よ吹きまくれ』

そしてお前はその強大なエネルギーと、

男らしさを持つて絶えず吹きまくれ

からっと晴れたるある日の午後

にわかに吹き出したる烈風よ。

絶望

内田 清

華は

はるかはるか彼方

行き着くことの出来ぬはるかはるか彼方

濁流は渦巻き

幸は押し流された

ああ

幸よ私に帰れ

絶望は

私の前に億万

交差する苦しみ

口をあけた奈落

ああ

私は何故に苦しまねはならぬのか

.....

.....

夜行列車

宮川 安法

カタコトカタ、カタコトカッタン。

カタコトガタ、カタコトカタ。

お前の名は夜行列車。

灯一つ見えぬ林を、

星一つ顔みせぬ中を、

カタコトカタ、カタッコトカタ。

単調なリズムで

二本ひかれたその上を

その通りに走っているお前は、

自分自身に飽き出して、

胸につのったつまらなさを

「へんに吐き出した。

「ボ」

お前の叫びは暗闇を切った。

と、その途端、

お前は巨大な怪物に呑み込まれた。

「アッ、アー」

声にならない叫びをお前は、はっした。

長いようで短かった恐怖が過ぎると

我儘な自分をお前はいさめた。

カタコトカタ、カタッコトカタ。

改心したお前は再び飽き出す。

そして又、「ボ」.....恐怖.....

こんなことを繰り返し、繰り返し、

若いお前は目的地に急ぐ。

幾度の危険を冒し、

時折の風雨にさらされても

お前は急ぐ。

でも急ぐことはない。

夜明けにはまだ早い。

まだまだ道は続いている。

灯一つ見えぬ中をお前は走る。

カタコトカタ、カタコトカタ。



12

旅行雑感

組主任 寺田和男

々素人にはなかなかむずかしい。しかし祖先の時代の動きに接し得て、何か知ら心打たれるものを感じとることができる。感覚を通しての古都との接触は、東洋的な静けさ、美しさ、また偉大さに、文句なく日本人としてのほこりとあこがれを抱かせたいと思っている。

またその反面、長い歴史を秘めて静かに保存されるべき古都が、雑沓に渦巻き、ほこりつばい観光地と化してゆく姿を見て、まことに情なく感じた。うつかりしていると観光気分の浮虜になりかねない。こんな処まで現在社会のひずんだ影がさし込んでいるのかと思うと惜しい気がする。

短い日程でせわしい関西への旅であったが、時を経て心に残るものを整理してみると、いろいろの角度から各人各様の収狂があったことと思われる。それは教室ではなかなか得がたいものだ。

この学力評価を離れての旅の数日間、真に友人としての、のびのびした語らいの中に明日を背負う若い人生が育っていることを、たのもしく感じた。多くは平凡ながらも平和な人生を望み、明朗、現実的で積極性があると云われる反面、利己的、利己的で責任がなく、自制に欠けるなどと、現代高校生がとやかく苦慮されているけれど、車中や宿舍での冗談話とか人生論にふれてみると、結構立派に純粋な若人として育っているのに驚いた位だ。勉強の明け暮れに、見逃し易い忘れ勝ちだが、人間充実の毎日が意味深く過されていったとは事実だ。旅のよこはこはこんな処にあるのかも知れない。成果を期待しての勉強よりは、その途中の尊い努力に目を向けてみよう。そこに旅の語らいの延長があり人間の進歩がある。友人と共に、汗にひたし涙にむせぶ時、其の若人が育くまれていることを忘れてはならない。

今日もまた、どこかの学校の生徒が、いろいろな思いを感じながら苔寺の庭を訪れていることであろう。



12組

山本 好人

12組は、実に楽しいクラスである。授業が少し、うるさい感じがするが、先生方も、クラスの良さをみとめてくれている。テラチンを先頭に、みんな固まっている。強行遠足の時も学校中で一番成績がよかったのだろう。

休み時間は、それはうるさい。トイハツ、オッスイ、等声がかかっている。他の人がみると、このクラスは、みんな狂っているのかなと思うだろう。でも中のやつらは、実に、いいやつばかりだ。僕は、12組は好きだ。僕の性格に合っているのかもしれない。でも一年間このクラスで何をつかんだろう。今は、よくわからないが、後になって、省りみてからどのようなものが残るか、楽しみだ。

夜警

伊藤 昭

師走の空気は冷たかった。夜空には凍ったような星が輝いている。月の白けた冷たそうな光が寝静まった小さな谷間の里一面に照り

輝いている。空は本当によく澄み渡って青に墨を流したような色とその底知れない深さがある。お一層寒さを感じさせた。「ジャラン」。

ジャラン。「あまり感じの良くない高い音が空の奥深く浸み込んでいくようだ。ずっと遠くの山の方から「ジャラン、ジャラン」とかすかな音が聞えて来た。始めは少し驚いて、ドキリとした。「ああ、こだまか。」と判って始めて安心ができた。こんなカニの巢のような谷間ではこだまが帰ってきても不思議はないのだ。時計はもう午前三時を回っていた。当番にあたるのは二人で、近所のおじさんと一緒に回っていた。その人は懐中電燈を持って、僕は鉄の棒を持っていた。それを土に叩きおろす。そうするとまわりに付いている鉄輪がぶつかり合っ

てジャラン、ジャラン、と高い音をたて「火の用心、火の用心。」という言葉が発した。犬がしきりに鳴いた。でも最初の時には今よりもずっと激しく、恐しく大きな声で鳴いて、その声が多々に無気味に響いた。夜警は今夜から始めたので異様な音に驚かされたのだろう。そのせいでだろうか。遠くから鶏の鳴き声が聞こえてきた。朝なら感じがいいのだが、今の時刻には場違いの感じて気持ちがいいものではないな

た。その感じの後にはこっけいさが湧き上がった。

もう少しで終りだ。今夜一晚火災などの騒ぎすぎがなくて本当に良かった。もし火災でも起ったなら「夜警は何をしていたか」と責められ、部落中の人に憎まれ悪く言われた事だろう。そんな事をしきりと考えて少し憶病になっていたのだった。でも今はもう少しつつ緊張が解けていくような感じだった。

始めての経験なので少し不安だったがでも結構おもしろかった。近所のおじさんとの話も興味深かった。でも夜はあまり感じが良くなかった。

猫から犬へ

清水幸彦

雪やこんこん霞やこんこん...という歌にもあるが僕の家は二匹が抱き合っ

はずがない。これに劣らないのが僕である。これが猫的人間の決定版という所だ。この一年間の怠惰ぶりは全く見事であった。いや猫をしのぐかも知れない。つくづく後悔している。でも後悔先に立たず。である。今年こそは大になるう。犬は喜び庭かけ廻る、の犬である。

勉強大好き 宿 沢 修

「リリリリリーン。」下で電話のベルの音がしたようだ。「修クン電話ヨ。」と母の声が聞こえる。久しぶりに勉強しようと思うとこのくらいのことだ。「チェツめんどうだなあ。」とつい大きな声を出してしまう。受話器をとると「市川の老人クラブでたのまれたんだけど、明日あいている？」とズーゾー弁のかかったところよい声がした。わが奇術クラブ会長高橋のおじさんからである。せつかく今日から勉強しようかなあと思っていたところへ誘惑の電話だ。誘惑にはまけまいと思うものの、その声を聞くと今しがたまでの勉強しようという意欲も魔法のように消えさつてしまうのだ。返事はもちろん「OK」

時間の方向（ $\rightarrow$ の方向）に移動したことで、タイムマシンの話もまざらウソでもなくなる。しかしこのことは、光速でとぶこと、三次元からとびだすことの二つの不可能がたしはだかつている。しかるにこれに近い状態、例えば光速の 0.99996 倍においては、時間の経過は 1.50 両空間も 1.50 に圧縮され（もちろん乗組員には分らない）質量は 50 倍になる。つまり長さ 50 倍、質量 10 トンのロケットは長さ 1 質量 0.001 トンになるわけだ。このロケットで 50 光年遠くの星に行くとすれば約百年かかるわけだが、乗組員たちにはその 1.50 の 2 年にしか時間の経過はないわけだ。未来版「浦島太郎」という現象が起る。書けばいくらでも続くが紙面の関係で筆をおくが、このように時間というものは、目にも見えず、さわれもしない、つかみどころのないもので、超三次元的な存在？（この存在という意味も考えて見る必要あり）である。全くもって不可解千万である。

がんばれ忠一君

間瀬敬明
僕の親友に忠一君というのがいる。

である。さつそく練習開始……
こんな日々ともそろそろ本気でおわかれしなくてはならないようだ。そう思うとちよつとさびしい気もしてくる。

雪の上

石川文生

白馬岳を背景に、毎日続くきびしい練習。雪けむりを上げて、豪快に突進する。旗と旗の間をくぐり抜け、より速く次の旗に向う。次の瞬間、惜しくも転倒。すぐ起き上がり、又旗に向かって突進する。来る日も、来る日も、旗、旗、旗。

元旦だというのに、正月気分を味わうことができない。山での生活は、毎日同じ事を繰り返す。ようやく十日間の練習が終る。ため息が出る。家へ帰れる喜びを感じる。合宿は、つらかった。

不可解なもの

志賀雅人

今、僕が最も不可解だと思っているものは

彼が先日こんな話をしてくれた。
「僕は中学三年の末に同じクラブの女性と交際を始めた。そして卒業直前、ついに僕は彼女に将来結婚してくれと言った。すると彼女は、好きな人とは結婚しないことにしているからと奇妙な断わり方をしたんだ。彼女と共に、戸山高校に入学してまもなく、僕は中学時代に彼女と同級だった人から彼女が東京の検事のむすこさんと婚約している事を知らされたんだ。その時彼女が僕の求婚を断わったわけが分つてあきらめたんだ。」

これが忠一君の初めての恋だったのだそう
だ。婚約者がいる女性を愛した彼に同情すると共に、それを言わずに交際していた女性を彼と共に、にくんだ。

彼の話は続く。

「僕は高校一年の時、母校の中学三年生の女子から手紙をもらつた。そして五月から文通が始まり、最初のうちは、前の人の方が好きだったけど、演劇部の一級下の女子の方がだんだん好きになってきた。そしてこの人こそ将来の僕のお嫁さんになつてもらう人だと思
い彼女を幸福にしてやるため経済力のある人になろうと思い、志望校を教育大から東大に変えたんだ。ところが彼女に僕以上に好きな

「時」である。時は金なり、でもいいが、もつと原理的な次元においてである。尊敬するアインシュタインの説によると時間の単位は光速 c （ 3×10^{10} ）であるそうだ。とは四次元の方向を示すもの、つまり三次元（我々の世界）においては垂線は三本（縦横高さ）であるが、四次元ではこれに $\rightarrow$ の方向が加わつて四本になる。これがまさしく時間の方向だといふらしい。そして物質は早く移動すればするほど、時の経過が少くなるらしい。そしてその速度が光速に達した時、時間の経過は 0 になるらしい。しかるにその時、空間は進行方向に圧縮され厚さは 0 になる、そしてその物体（ロケット）の質量は無限大になる。アインシュタインはここで質量の無限大ということをとらあげて、物体が光速以上でとぶことは不可能と断定しているらしい。ちよつと僕の思いつきで、いささかの裏付もないが、光速で物体が飛ぶと厚さが 0 になる。（これは止っている人が見た時で飛んでいる人は気がつかない。）このことは三次元の物が我々が見る二次元と同じようなものになつたということでも、もし、そのロケットの乗組員がその平面的なものから脱出できたら、その人は四次元の世界に出れたことになり、即

昇れできたらしく、今年の七月にあつさり振られちゃつたよ。」

ここで彼の話は終る。

見かけによらず忠一君はすでに二度も失恋していた。一、二年の間はかない恋をしていた彼は、ようやく失恋の痛手も回復し、今は東大理1をねらつて逆襲を開始した。彼が彼のライバル達に追いつき追いこし、東大生となるのも、もうすぐだろうと思う。

彼の部屋には、太平洋戦争中の有名な日本の司令官の名言がかかっている。

——天佑我二在レバ攻撃可能デアル——

それともう一つ

——愛して失う方便れり、絶えて愛せざりしよりは——

病 気

長田正広

脳におできができる、という思いもよらなかった病気になる死寸前の所を我が学校の皆様の愛の輸血でたすかり、今はありがたいありがたい毎日を送っています。今考えれば、あの日のつらさ、せつなさ、身の縮まる思いでした。その中でクラスの人、またクラス以

外の一高生、昔の級友、男女を問わず御見舞に来てくれました。一日に三回も来てくれていろいろ激励してくれた友達へ親身になって心配してくれた先生、いつまでもあの時のうれしさは忘れないでしょう。

しかし僕はこの病気で自分としては、一段と進歩したと思っています。今は、今自分のやっている事がだれよりも幸福である、そんな気持ちで毎日を送っています。今でもいろいろなやんでいますが、しかし不幸だと思わない、それが一番自分として進歩した点だと思っています。

またこの楽しいクラスとも、もう別れなければなりません。

僕が静養中作った俳句を紹介します。日本の俳句の大家（大火）ともいわれている僕のおてなみを一つ

つつがなく秋の一日が暮れにけり
秋風にのつていききたい地平線

偶成

佐田 要

友と話をしているとき、さわいでいるときフーツと空虚な感じが胸に入りこむ。その場

をする。「やあすみません」と口先で言っていて乗り込んだ。すでに二人の娘が乗っていた。小さな小型四輪である。乗ってから考えた。このおやじなかなかいところがある。乗れと言って乗してくれるだけの好意を持っている男だと感心していた。ところが反面、乗してくれたこと事態が気に入らない。そして乗り込んだ俺自身の行動も今になってみて自分の惨さを認めたことになるような気がして面白くない。とはいうもののなかなか具合がいい。伊勢町まで乗せてもらった。俺は礼をいっておりた。他に娘も一人おりた。ここからバスである。ちよつと待っていると湯村行のバスが出た。そこへガラッパが乗り込んで来た。ガラッパとは中学時代の英語の教師の通常の呼び名である。生徒を五・六人連れていた。そこで俺は一応挨拶をした。車内で教師が生徒に一言促がした（言葉は覚えていない。）その言葉が例のガラッパの声であり確かにガラッパがそこにいることを感じさせた。何だかやたらに懐しかった。久しぶりに聞いた中学時代の声である。

からぼくの魂がスーツとぬけでて、後から、笑いこけている一人一人を、そしてぼくの後姿をそつとみつめる。なんとさみしそうな背中だろう。前かがみになって、縮こまった背うつむいてそつと息をしている…。

これが、今のぼくの究極の姿なのだろうか…。

少年易レ老学難レ成

一寸光陰不レ可レ軽

未レ覚池塘春草夢

階前梧葉已秋声

朱薰

所以

三枝栄三

昨夜も遂に通った。あんなに「もう止めよう。もう止めよう。」と固く決心していたのに。俺の夜には自制心がないらしい。あの陰鬱な眼ざし、青白い月夜の下で白く光るマフラーであごまで包み、ジャンパーのポケットに手を入れていた。暗い路地を一步一歩近づく、かすかな興奮を覚え、のどのかわきを感じる。サラサラと、赤い肉魂からの紅炎とそのまわりを白い煙、まさに冬の悪魔だ。

中学時代の友達

渡辺弘之

久しぶりに私は中学時代の友人に会った。彼は工業高校生である。私から彼を見るならば、ずいぶんヒマ人に見える。「おっす。」と来たから私は「ヤー」と答えた。「久しぶりだな。」「まったく」とぼくらの会話は決まり文句から始はった。会った所はバスの中であつた。「今年もクラス会やるかい?」と尋ねてきた。「何言ってるんだい。今年はやらないぜ。」と私はそつてなく答えた。「どうして?」「どうしてもさ。だいたい去年のクラス会を見ろよ。半分以上の人が出席したけれど、みんなおとなしく黙っていて、司会をやったぼくは冷や汗が出るほどだったんだよ。」「それだけ」「まだあるさ、みんなもう心がバラバラさ。中学時代と違うんだ。だからお互いに言おうとすることがよく通じなくなつて黙つてしまふんだ。それに中には不心得者がいて、余分に菓子を持って帰ったんで赤字になつて困つたよ。」「そんなもんかな。」「それからもう一つ先生とも気が合わないようだったな。時間とは恐ろしいよ。」

だいたいより何らか赤めいた所、そこが俺の立ちどまる所以だ。俺はここでも：つと近づく。罪悪だ。卑劣だ。静かな波音、高爆な滝音、浮遊する泡、なげかかる熱気。恐怖にののき、敵の館をあとにする。乾きはひどい息もとまりかける。結局理性の勝利なのか。いや理性が俺にあるはずがない。人間性が俺にあるはずがない。夜の世界は、青光りのする卑屈な精神をやどしたにすぎないのだ。見かねた自然が俺を召されたのだ。

日記から

市川直道

愛用のベンツが昨日いかれてしまった。クラッチの線が切れたのだからお話しにならない。ところがどうだろう。辺地のバスめ、ツンと澄まして俺の前を通り過ぎた。勤めの娘達は後から来た車に乗してもらつた。野郎は全く損をする。怒りと反面みじめな感じとが変な具合に混ざり合つて妙な気持ちだ。ところがすぐ後から来た車が俺をかわいそうだと思つたのだろう。「乗れ/」と言つた。無礼な奴である。だがかんしやくをおこすと俺が損

と私は反省を述べた。「たしかに御苦労な役だったな。おまえの言う通りかもしれない。ぼくらの学校には女子が少ないんだ。だから中学の同級生。特に女の子なんか会うと、少しオーバーだけど、なつかしいんだ。ところがよ、彼女ときたら、つんとしているんだからがっかりするよ。中学の時と全然違うんだ。男子だつて言えるよ。学校止めて遊んでるようなやつもいるからどうかと思うね。男どうしだつて、いやな目つきでにらんたり、あいさつしないのだっているからな。」と実直な意見を述べた。「そうなつていくのも仕方がないな。世の中にはいろんなやつがいるからな。まあ、気の合つたやつとだけつきあえばいいのかもしれないぞ。」「やつぱし、中学時代は良かったな。またいつかもう一度みんなが集まる時があればいいな。みんな変わるだろうな。」と彼が結論を言つた。「やはり友達はいいな。いつまでも私の心の慰めであつて、言いたいことが言えるからな」と。私は思つた。



アルバム・湖・高原

宮野 政彦

僕は全部で六冊のアルバムを持っている。

暇さえあれば、きつそく開いて自分のすばらしき人生の歩み？をながめ始める。○才から現在にいたる、うら若き十七才まで写真は物語ってくれる…。

僕は湖とか高原がすきなので自然そんな所の写真が多い。アルバムの大部分がそれでうめられている。

湖もいくつか見てきたが、一番印象にのこっているのは「西湖」。ここにはもう四回来ているが、いってもいい所だ。澄みきった青い水、木々の緑、新鮮な空気、ここにいると生きかえったような気がする。また湖の近くには紅葉台（もみじ台）があり、ここからの西湖と富士のながめはすばらしい。それにま下には樹海が広がっている。風が吹けば緑の木々が波のようなうねりを見せなにもかものみこんでしまうようだ。

高原といえば、そうーこんな詩を思い出し。高原のもつ美しさを表わしたような…。

くて力が出せないとなげいている。その点すまないと思っている。

この辺で彼女のスタイルについて言う。こんなことを書くとき怒るかもしれないが、バスト、ウエスト、ヒップ、身長とも10センチ（ぼくが実際に計ったわけではない念のため）のずんどうで顔の割に口が大きい。生まれは日本。「さんしょは小粒でピリリとからい」とだれかが言ったが彼女にびったりあてはまる。

以上のように彼女をはめてきたが欠点がないわけではない。前にも言ったが口が大きいこと、それにアルコールが好きなことである。しかし、これから後いつまで彼女と友だちでいられるかわからないが、とにかくやさしくていいねいに振かっていつでも歌を歌ってもらえるようにしていきたい。

彼女はかわいいヤツだ。

真夏の夜の死考

前村 幸男

一年のときもそうであったが、もう一年、年をとるとさらに死について考えるようになった。冬の寒くて暗い夜、勉強を終えて床に

ただひとりだ——そう思ったとき私はほんとうの私の力が

私のうちにあるを感じた

そうして思いきり、高原に背伸びして山の嶺を見つめる

私はさびしさに涙している

孤独の力はさびしい力だ

さびしいが強い強い力だ

いつわりないほんとうの力だ

あの夕はえる山の嶺には

ふたり、三人は立てないにちがいない

嶺はそれほどせまくて険しいにちがいない

それはただひとり、さびしく強く行くところ

そうだ、私も、あの山の嶺、山の嶺

ただひとり、さびしく、強く——

高々と、沈む陽に手をさしのべて——ああ、私は高原にただひとりだ

ここまで書いてきてこまってしまった。文がバラバラで題を何としたらいいか、まあ三

つく。きょうもこれで終わったかという安堵

と睡魔が僕を襲う。いや睡魔が襲うのはむしろ勉強中であって、もはや床につくと、あと

眠るだけだからかえって別のことが頭をうば

う。あるときチカツと頭の中で光って、燃えて、ずつとくすぶるものがあつた。それは、

「自分は死なねばならない。」という恐怖感を伴った言葉だった。そのくすぶった煙は心

の中を闇にした。MAN IS MORTAL。ああなんて悲しい言葉なのだろう。この

現実の世界から自分という存在がなくなるな

んて、意識を失って冷たくなって一個の人間

として扱われなくなるなんて、そんな恐しい

ことがあつたまるものか。悲しくもあり、

恐ろしくもあり、不思議でもあつた。しかし

死は前代の人々が証明しているように不可避

的なものである。いくらあがいても事実は事

実である。そこで、「どうせ死ぬなら。」と

一吹き風がくすぶった煙を追いついて心に

別の炎が燃え出した。「どうせ死ぬなら社会

のためになることをして死ぬ。おまえは生ま

れてこのかた社会という集団と共に、そして

それに見守られ、鍛えられ、恩を受けて来た

のだ、その恩返しに社会へ今度はおまえが貢

献するのだ。」くすんだ煙はいまはもう一す

つ書いておけば間違いないだろう「アルバム・湖・高原」てね…。

彼女のプロフィール

官本 兼明

彼女はかわいいヤツである。ちよっとおだててやれば歌いだすし、いじわるをするときブスとしてだまってしまう。どこかのだれかによく似ている。しかしいったん歌いだすと熱気をおびてくる。彼女の兄弟はみな歌が上手である。一番下の弟はアメリカ生まれのチビッコギャングでたぶん変声期前だと思ふ。

夏の夜の力を連想させる。その上の妹はむずかしい年頃のせい、すこしひねくれていてぼくが頼んでもなかなか歌ってくれない。手をにぎつてもだめである。兄は兄でカミナリ族のような歌い方をする。その点、彼女は頼めばすぐミツパチの音のように歌ってくれ、手をにぎればすぐ反応を示してくれる。

たいへん力持でジャジャ馬娘でもある。一口半ぐらいの物ならば軽々とひっぱり回す。彼女は口が大きいのでぼくといっしょにいるときはいつもマスクをかける、かけるといふよりかけさせているそのため彼女が息苦も

じもなく、この炎が赤々と燃えて心中を暖めていた。確かに漫然と死がくるのを、「アアコワイ。」と手を扶いて待っていたのでは、

「正月は冥土の旅の一里塚。」などという言葉が表わすように人生はつもらないものでしかない。死の恐怖をも吹っ飛ばすような積極的な言葉を吐き出すには、「この短い一生の

ことだ、どうせ死ぬなら何か世のためになることをして死んでやろう、悔いのない人生を送ってやろう。」という意気込みを持たねば

ならない。この仮説が着実に証明できるよう努力しようと決めたとき、瞼が閉じた。

空っぽ

本多 政元

「何時？」

「あと十分」ああいやだ、腹もへってきたし。・窓に映るハダカのイチオウばかりが、おもいつきりあくびをしていたいくつそう。空っぽになって牛乳ビンがさかだちして後のコーナーに2つ。だれか後で舟をこぎだした。末だ春も遠いのに何てうららかな空なんかしら。鉛筆のシンが丸まって、ねぼけた昨日の芸術家。「どうしたんかしら」まだ鐘が鳴らない。

無題

井上和男

言同生活二年目も、あと二ヶ月たらずになつてしまった。今年もまた学年誌の原稿を、書けといわれて困っている。今年みんな、旅行のことを書くだろうから、僕はみんなと同じようなことを書きたくない。と言つても別に書くこともないが……

締切は今日までだそうだが困ったことだ。この一年をふり返つてみるといろいろあるが一番印象に残っているのは強行遠足と、修学旅行だ。強行遠足は中込まで行けたし、旅行もまあまあだった。

もうすぐ三年、三年になるか不安もないでもないが、とにかく、パンツのゴムヒモでもしめなおして一ちょうやるか。

おお／＼きびしい

西村憲一

今の生活は地についていない。自分が悩んでいながら、その結果がない。ぼくのすることに自信がない。ぼくと生活とが互いにしつ

かりと反応しないのだ。楽しみのない、一瞬の喜びしか感じられない生活、人間が何となく暮していく、それでも生きる価値があるのか。ちよつと前までそう思つていた。これからもそう思うことがあるかもしれない。でもよくには難しすぎるかもしれないが将来の目標が出来た以上は努力しなければいけない。それだけのファイトがなければいけない。楽しいはずの、たつた一度きりの青春を悩み、苦しんでも生活しなければならぬ。生活に人生に勝たねばならない。生活に笑みかけられる其の人生を築け／＼弱い人間であつてはならぬ。

京都の感想

保坂憲治

これが日本の古都？ネオンの輝き、事のラッシュ、でにぎわっているこれが？まったく私が思つていた京都の町とは違つていました。京都というところは静かで落着きがあつて京都弁の聞くことの出来る名所であるとはかり思つていました。たしかに寺社、仏像などはすばらしいものでしたがそれは近代的な建物の中に古いものだけが孤立した状態でボ

ツリと取りのこされているという感じで日本の象徴ともなるべき名所としてほあまりにも近代化されすぎたと思います。これから何十年かの後にはこんな。現象がますますはげしくなっていくのではないかと思うとなんだかやたら惜しい気がします。

修学旅行に思う

名取敏夫

私たちの修学旅行は東京オリンピックも終つた、十一月の中旬に行なわれました。気候的には少し寒かつたようにも思われましたが、秋深く落着きはらつていて、奈良を見物するのには最適だつたと思ひました。特に最初に訪れた所の法隆寺はその点非常にマツチしていたと思います。今にも枯渴しそうな寺内の松と土塀、それに日本最古の建築物と云われる金堂、五重塔、夢殿との調和は、見た人でなければ決してわからないことでしょう。又車窓からのながめもなんとも言えない風情があるように思います。この広い奈良盆地の遠くに、こんもりと緑濃くなつてゐる所に、五重塔や大きな建物の屋根が高くのぞかせ早いる。やはり昔の貴重な物は自然のままの

でかいこの夢

角田末治

私の好きな小説家の一人源氏鶏太がいいます。彼のサラリーマン物に出て来る主人公は、心憎いほどの正義感を持ち、さらに尊敬出来る人に対しては、絶対の信頼を持ち、また間違つた考えを持つた人なら、たとえそれが上役であろうと、其向つうから非難する。そんな今の世の中では有り得ない心を持つた人が活躍する小説を読んでみると、まるで自分がその話の主人公になつたようにうちようつんになつて、その本を読みふけるのが私の常なのです。

その本を読み終ると、俺も実社会に出たら少し位いの出世を考えず、必らず自分の持つてゐる正義感を一生貫こうと思うのです。しかしこの正義とか義侠がどんなに愚かでこの世の中に通用しないものか、自からの体験で知つた人は、この俺の考えは非常に幼稚で世間をまだよく知らない馬鹿が考えることだと言うでしょう。しかし最近になつて思つた事ですすが、この世の中でこんな馬鹿も必要じゃないか」と考えるようになり、よつしや、や

姿であるのが好ましいように思いますが、今の時代ではそうはいかないように思います。だが、後世にいつまでも残してもらいたいのです。

小さな力

山本正敏

私はある日埠頭に立つていた。横浜でも神戸でもよかった。雲低く、波静かである港は山国育ちの私にはとても印象的であつた。私はそこで初めて「ひき船」を見た。港外から港内へ「ひき船」は何万トンもの大きな船をひっぱつていた。それはマンモス・タンカーでもあり、ある時は豪華客船でもあつた。ペソキは剥がれ黒ずんだ「ひき船」は大きな船のかげになり見えなくなる時でさえあつた。私はいつまでも「ひき船」に見とれていた。夢は不思議なものである。私はかつてこのような夢を見たような気がした。「ひき船」は何か私に教えてくれるようである。



「友情」を読んで

中田博久

現代は「生存競争の激しい時代だ」とよくいわれている。ここから、自己本意の考えが起こり、柔和な人間関係がとかく失なわれがちである。こういった今の時代について、「友情」を読んだ時、深く考えさせられるものがあつた。

まず、其の友情とはどんなものか、ということが問題になる。大宮が野島に示したような、自分を犠牲にしてまでふたりの友情を守りぬこうとしたこと……これは確かにりつはなことではあるが、其の友情とは、単に助け合い、かばい合うことではない。野島は大宮の友情のみに生きていく人間、つまりあやつり人形にすぎなかつた。こんな状態の野島と杉子が結婚しても、はたしてふたりが幸福になれるか、大宮は疑問に思わなかつたのであるうか？

しかし、野島の抱いていたうつろな友情が破れざる時は、意外に早く訪れてきた。杉子

は大宮を愛していたし、彼もまた杉子を愛するようになっていた。ふたりの告白を聞いた野島は「僕は傷ついた孤独な獅子だ。そして吠える。君よ、仕事のうでで決闘しよう。君の残酷な荒療治は僕の決心を固めてくれた。：見よ、僕も男だ、まいりきりにはならない」と叫ぶのである。この時、野島は自分の抱いていた友情が一方的なものだったこと、またそれによって友に裏切られたことを悟ったであろう。しかしまた大宮のとつた行為は自分のためであるが、野島を強くするために、真の友情によってなされたのだと思うと晴ればれした気持になる。「友情」は深ければ深いほど、大きな悲劇を伴うものであり、その悲劇を生み出すのは、友情であり、自分自身である。

映画「鎖の大陸」を見て

板垣 和芳

この記録映画を見て、文明国日本に住んでいる私は、今だにアフリカで奴隷売買が盛んに行なわれている事実を知って、がく然としてしまった。

奴隷市にかけられた子供達は、アラビヤ商

る。恋で人を殺したのが本当かどうかは知らないが、ここには一回限りの人生の恐ろしさがありありと描かれている。人生は偶然である。確かに筋だけを追うと厳然たる真実がのぞかれる。しかし不思議な事にビゼーの造り上げた音楽からはそういった物より人生賛美の輝くばかりの歌が聞こえてくる。狂乱の男も放埒な姫婦も、人間の美点の結晶に昇華されている。そこにはこの世とはまるで違った世界が開け、これが音楽——芸術なのだと知らせてくれる。しかし僕がもっと言いたいのはこのレコードにおける再生芸術の素晴らしさである。ロマン・ロランのカルメン評「全てが光り、全てが全生命」をそのままこの演奏に捧げたい。僕がこのレコードを初めて耳にしたのは中学二年の時と思う。その頃僕は入院していたが、両眼に包帯をした暗闇の中でこのラジオ放送を聞き、本当に心にしみ込む様な感動に浸ったものだった。あれからというものの、このレコードを手に入れるのが僕の念願になった。レコードに恋をしたのである。事実、僕の精神はこの演奏によって大きく形造られて行った。演奏の質はうまく説明が出来ない。ただ言えるのは音色の美しさと活発なリズムである。それが全てであり、そ

人達によって買われ、代金は体格や、きりょうに依じてその親達に払われた。中には、あきびん数十本と交換するものもいた。商人は商品としての奴隷をトラックや飛行機に乗せたり、歩かせたりして、アフリカ大陸を横断して、さらに紅海を渡って、アラビヤ半島へ上陸して、その金持に売るのである。それを物語る物として、こんな場面があった。

「最近しばしば夜になると附近の野原の方面から飛行機音が聞える。」と言う住民のうわさを耳にした撮影班が、数日間その野原近くで待機して望遠レンズをつけて映したということであつたが、古い型の旅客機に乘ろうとしている何十人かの黒人の子供達がいてその中に白い布で身をくるみ、サングラスをかけたアラビアの商人らしい姿が見えた。

アフリカの各国の政府は、奴隷売買を禁止して、ヘリコプターまでを使って警察に監視させているが、国があまりにも広大のため、手が届かないため、今だに行なわれているのである。

また中にはアラビヤ半島の一国であつたが石油のおかげで金持ちになった者が、我が子や、外交官の子供達のために建てた特別の学校でアフリカからきた奴隷少年達が、同じ年

れが最高なのである。随所の効果的な演出、うつとりする様な音色、圧倒的な強奏、異常な熱気。これらはみな青春の夢と情熱であり人間性の賛歌である。僕はこの演奏を聞いて初めて生命の美しさ、理想の尊さが認識できたようだ。そして今日このごろでは、加えて目の前の芸術家とそれを聞く自分との距離——自己の練磨の必要を感じ始めてきている。

中宮寺の弥勒菩薩

甲 谷 宏

砂礫の敷かれた小さな庭の前に、小じんまりしたただずまいがあった。これが中宮寺だ。いかにも尼寺といった感じの本堂は畳数で薄暗く、本尊の如意輪観音（弥勒菩薩）は垂帳の裾に台座を覗かせている。狭苦しい厨子の側面から拝観すると、像は温い色調の黒い光を放ってちぢこまっていた。さきほどの法隆寺では見られなかった完全彫刻、稚拙感のないこの像は、千三百年の昔から変らぬ微笑を浮べていた。そして、像の持つ本来の美しさと知性の美しさ、直に観る者の目を変えてしまった。客観視できなくなってしまう掌を合わせたい気持ちになる。それにしても何と

頃の生徒達の身近の世話をしていた、迎えの高級乗用車まで生徒達の持ち物を持って行き見送りをしている場面があった。

私は、この場面を見ていて目頭が熱くなった。同時に、同じ人間であるのに文明国では義務教育を受けている年頃にどうして彼らだけが金で売買され、両親や兄弟のいる祖国を離れなければならないのかという怒りをこめた疑問がわいてきた。これについて私は、今なお奴隷売買の行なわれている国での文化水準の低さや、経済力の弱さにも原因があると考え、その国の政治力や、先進国の援助の拡大を願った。

僕の愛蔵盤

遠藤 博之

近くマリア・カラスの「カルメン」が発売になる。現代のこの大ソプラノによる新盤もきつと名演奏であろう。「カルメン」といえば去年の僕の誕生日に買った愛着この上無しのレコードがある。スペインのソプラノ、ロス・アン・ヘレスとトーマス・ピーチャムの指揮による盤である。そもそも「カルメン」の特徴は旋律の豊富さと異色の筋書きとにあ

いう美しさだ。その奥底の知れぬ微笑は、一瞬アルカイックの彫像を想い起させた。昔からこの永遠さに魅せられ尼僧となった人も少なくない云々。幾分伏目がちな眼の見所は永遠の彼方だろうか、それとも自らの内だろうか、物の本体を知り尽した知人の想い。秀でた額にうすく消える髪の毛の生え際に、衣に、優美さが溢れている。衆生に対する慈悲の心は明らかにないが、この表情を見ていると本当に心の安らぎを感じる。和辻哲郎の言う「陶醉と情熱」が感じられるのも、このほえみと眼、軽くほほにそえた右手、それにすんなりした姿態からであろう。しかし、柔雅でありながらも、右足首にかけた左手はきゅっと引き緊り、台座から伸びた蓮の柄に置かれた左足の指はぴんと跳ねて「力強さと威厳」を表わしている。この斜め前に出した左足と自然に曲げた右手の果す役割は「空間の美」であつた。二日後に拝顔した法隆寺の弥勒菩薩は、端正で、高尚で、素朴ささえ感じられた。その左手は、衣を押え、足の指は跳ねていない。右手とほととの連結はぎこちなく、ポーズしている様な感じである。だから弥勒菩薩は半加思惟像と言われるが、思惟という感じがびつたりするのは中官尊像の吾

ある。広隆寺像に素朴さが見られるのは、材質がアカマツのため黒いつやがなく、年輪を浮き上らせていることが原因だろう。同じ微笑にしても微妙な違いが見られる。「快活さと硬さ」の相違だ。この様に小さな、部分の違いで、全体の趣きが変わってくるのは舶来と国産の相違ばかりだろうか。箔は剥げ落ち、昔の面影を偲ぶべくもないが、千有余年来の思想は今日でも生き生きとしていた……ふと我にかえると、像はあいも変らぬえみを浮べ狭い厨子に納まっていた。五分はどの時間を非常に長く感じながら、何か神秘的な気分になって私は靴脱へおりた。

或る日の授業

林 義人

○月○日△曜日×校時

A 先生がもそつとは入つて来る。

理事 起立……礼……着席

A 先生授業を始めんとする

生徒 先生、寒いから少し別の事しましょう

皆ガヤガヤやりだす。突然

B 君 一人一人女性観を述べる。

皆笑う

から何んとも思わない。さつぱりしてる

(しつこいくせに――蔭の声)

先生 そういう交際はいいね。君はえらいよ

今の年頃はなるべく多くの人と交際するのがいいと思うね。

皆に向かつて

先生 君達だって女の人と交際したいと思つてるんだろ、今は女の子より大学に入る事が先決問題と思つている人が多いだろうけど

皆ニヤニヤしている

先生 僕の学生時代はね、いまの二高に行つてた○○○の○○ちゃんといつて皆マークしたものだつたよ

皆笑う、皆声をそろえて

生徒 今度はこの道の専門家のE君に修学旅行の時の話

E 君前に出る。頭に手をやって

E 君 僕は冬休みに東京の予備校に行つて向こうの女性と少し話をしたけど、こつちの女性と少しちがつていてと思った。皆私服で来て大人ばいけれど、格好つけることに気をつかつてばかりいて勉強についてあまり考えていないように思った。私立学校の生徒だったけど。

先生 じゃ、君ここに来て述べなさい
B 君 少しためらうが、先生にうながされ覚悟を決め前に出る。(皆拍手する)

先生 さあ言いなさい。

B 君 てれてだまつている

先生 さあ早く言いなさい。

B 君 何んにも言う事なんかねえじゃん。

先生 じゃ君は女性観を持つていないのか。

B 君 そうじゃねえけんど。

先生 じゃ言えよどんな事でもいいから

B 君 ついに曰く

B 君 えー僕は現在女性に対して憧れの時代です。

皆笑う

先生 どんなものに憧れているんだ。

B 君 すべてです

先生 どんなタイプの女性が好きですか。

B 君 どんなタイプたつてこまるじゃん。

だれかがひやかす

生徒 おまんは女でありやだれでもいいから

皆笑う、B 君頭をかいて

B 君 ふんじゃ：こんだC 君。

先生 それではC 君述べなさい。

C 君 立とうとしない

B 君 先生、こいつはすごいだよ

これで一通り終つて授業に入る――

曳

佐野 衛

二太郎君は夏目漱石の本を机の上に置いて勉強していました。どうも問題が解けないのでその本を手にとつてパラパラしながら開かれたところを読んでいた。「解からぬものに解る道理はない。」と書いてあるのを視て勉強をやめてしまいました。やつぱりやつたほうが良いと思いましたが、なかなか解けません。またパラパラしました。「我豈試験の点に関んせんや。」また視ていましたがのそりと立ち上がりました。

二太郎君はこれに同意しました。やめる気色はさらにありません、どうしても三太郎にはなれないと思いました。またなれても面白くないと思いました。そうして庭に出ました。カラリコロリ石畳の上を歩きました。シユロの葉がのらりくらり。二太郎君はしばらく見ていましたが「フフフ」と笑いました。そうして「バックか」と言いました。

皆笑う、C 君どうしても話さない
先生 では現在特定の女性と交際している人手を上げなさい

手を上げたのはD 君一人だけ

D 君 何だ、一人か、やばい／

先生 前に出て言いなさい

D 君 前ですた前に出て、少し考えてから

D 君 えー、僕は今までに二人の女性とつきあいました。現在二人目です。

先生 君はどこでデートしますか

D 君 甲府は狭くてすぐ友達に全うから困っています。いい場所を教えてください。

皆笑う、D 君少し得意顔

先生 前の人とはどんな気持で交際してたのか

D 君 前の人は英和の学園祭のとき知りあつて、話をしているやつだなと思つてつきあい始めたのだけど、男の友達同様につきあつていたから好きとか嫌いとかいう気持ちにはなかつたです。

先生 君は交際している女の子が別の男と交際したらどうかね。

D 君 女の子も一人の人間だから別の人を好きになろうと交際しようと、僕にはそれをとやかくいう権利はないと思つている

世界主要国寸評

(アイウエオ順)

志賀雅人

アメリカ合衆国

世界中の財産をしよつて立つて立っている国。ベトナムなどにムダに等しい金を湯水のごとくつぎこむくせに、ドル防衛などと妙にけちくさくなる国。国民は性格があかるいが、ちよつと抜けたところがある感じで、おかしな腰ふりダンスの大半はここから。

イギリス

むかしの王座からすべりおちても誇りだけは忘れない国、貴族がはばをきかせる国。

インドネシア

なんでも脱退してしまう国。

ソ連

アメリカと仲よくやろうとしている。カーテンはうすくなったが、寒いのか、まだ取り切れない。フルシチョフは愛すべきおっちゃんだつた。いろいろな自治国をまとめ、その時のつごうで、一国になったり、十五国になつたりする巧妙な国。

日本

中共と握手しようとする国府にツネられ

国府にお愛想すると中共にドヤされる哀れな国。国民は勤勉で世界でも優秀な方。戦後自信喪失気味。政府と教育者の考え方が全く逆の変な国。原子力と戦争に過敏の国。革新団体の平和運動がなくなれば国内が平和になる国。ヘタな少年歌手が売れる国。国土が美しく祖国と呼ぶにふさわしい国。中共

自国の言うことのみが正しいと信じ込んでいる国。自国のすること「おごそかに」などという副詞までつける国。排他的。着実に発展している国。ズボンはなくても原爆を作ろうとする国。ハリコの虎で強くなった国。フランス

首相の顔はシェーベルトに化けそこなったキツネの顔。東ドイツは認めないクセに中共はサッサと認める商売人。アメリカ人にケチをつけたがる国民。イギリス人と仲がわるい

夏の思い出

笠井智明

このごろやけに寒いのでふと夏の事を思い出した。毎年夏休みともなれば四尾連湖へずつと行つてゐるのに去年はいろいろあつて短期

の鬱合、二年生として、もう一步の兼虚さが必要であつたのではなからうか。そして我々は、この精神的分裂という言葉をよく考え、来るべき未来にそれを正すべく努力する必要があるのではないだろうか。

俺は

窪田隆夫

人間はどうしてこう苦しまなければならぬのか考えて見れば、短い一生を毎日あくせくして生きる。どうしてだろう。人の目にこだわり、体裁をよそおい、みづから自分を聞きしい境地に追いこむのだろうか。この俺もこの境地に自分自身をおいこんだ者の一人だ。苦しい苦しいジゴクへ。

この気持ちにはだれにもわからない。いやわからなくて当然だ。孤独で不安な毎日。だけど救済の道はあるのだ。自分のみずからのすがたをかくさず、人目にこだわらない。これが救いの道だ。だけど人間というもののはなんて弱い動物だろう。それすらできないのだ。変な所に注意をはり、虚勢を張る。

だけど人間なんてなるようにしかならない。自分がいくらもがいてもいくらわめいて

問でくり上げてきたが、そのある日もう柳はあきてまわりの山へきのこがりにいった時一枚のノートの切れ端を見つけた。それにはこんな詩が書いてあつた。

さまよいくれば秋ぐさの

一つのこりて咲きにけり

おもかげ見えてなつかしく

手折ればくるし

花ちりぬ

この詩はいまでも忘れられない。記憶力のあまりよくないおれがいまでもおぼえてゐるなんて不思議なことだ。

二十一世紀へ

長田 功

倫理の時間に、ある雑誌に掲載された「世界は日本をどう見ているか」と言う記事の中の（奇跡の国の二つの顔）と言う部分の紹介があつた。オリンピックも行なわれた折なので妙に印象に残つた。これはあくまでも一ドイッ人の書いた記事だ。それにはある日本人の言つた「あなた方ドイツ人は幸福な人で

も、とうていどうしようもないものなのだ。

もがけばもがくほど、自分自身を窮地に追いこむばかりである。

だから俺は今の自分でいいんだ。気の弱い短気でコセコセした男で俺はいいんだ……。

そこに強い心が生まれるんだ。

平和な社会

弦間秀仁

「世の中に絶えて犯罪のなかりせばこの世の中は味気なし」まさにこれでは病的であるが犯罪はなかなかこの世から姿を消さない。かえつて犯罪方法が巧妙化しつつあるようだ。そして警察力の拡充はますます必要になつてくる。しかし犯罪はいうまでもなく社会の一員としての人間がおこすのであつて、社会全体の問題である。よつて罪人を罰することは社会全体を罰することになる。人間は平和な社会建設のためにいかに苦勞することか

す。なぜならあなたの祖国は地理的に分割されているだけに、私の国は精神的に分裂している。」が書かれ、日本国民は感覚的に右翼だが思想的に左翼だと言い、さらに菊と刀に代表させ、日本は片足だけで立っていると述べていた。この事は私には明確にはわからない。だが昨年の生徒総会もこれに近かつたかではなからうか。未来の日本をおつて立たねばならぬ我々が、世間の無責任無関心という気風に同調し、年に数回しか与えられないこの会を放棄し流会としてしまうようなことでは、今後の進歩発展は頭うちになつてしまふのではないだろうか、これと前後し、又多少さしさわりがあるかもしれないが、新聞部の出した議題が進展し、高校生の学生運動と言う事まで進んだのは行き過ぎだと思ふ。未熟で未経験な我々が、ただ単に紙の上から得た知識だけで、今結論を出すと言う事は畳の上の剣法にも等しいのではなからうか。大東亜戦争でさえ見方によれば肯定論となつてしまふ。私に何主義が良くて何主義が悪いなんて言えない。ただ一時の反動ではなく、深い経験と多くの角度から物事をみつめ、はじめて結論を出すべきではなからうか。でなければ「恋は盲目」と同様になるであらう。あ

雑感

志村育雄

私は時々考える。「高校生活をより楽しくより有意義に」と勉強・運動・文化活動、高校三年間の教育の目的は「人格の形成」と言うが、私達は具体的にどのような人格が形成されているのだろうか、数学、国語、英語……これらの授業が何を私達に教えているのだろうか、それが私達の人格をどのような関係を持つているのだろうか。定期的にくりかえされる試験において私達の学力が評価される。自分でも試験の点数でだいたい自分の実力がわかるつもりだが……それでは「実力」とはいつたい何なのか。今の社会に対応し、あるいはその発展に寄与し得る実力の養成……体力、頭脳、人格……私は文学を学ぶが科学を、歴史を……今の社会についてどれだけのことを教えられているのだろうか。私達の楽しい生活とはいつたい、どんなものだろうか。その点に関して私達はどのように生きべきなのか。私達は自力でどんなことができるだろうか。

私達高校生の生活はあるわく内に閉じこめ

られている。私達はそのわく内で将来に対する夢を抱き、自己の発展と社会の発展とを結びつけて考え……そして楽しく生活する。それは可能だろうか。よく見聞し、よく考えれば、今の学校のあり方に恐しいほどの矛盾を感じる。今の社会にも……。この学校にある「自由」とは、この学校で教えられている「自由」とは主体性を捨てた服従の範囲における自由なのではないのだろうか。時々ぼんやりとそう考えるのである。

今の社会体制がどうなっていて、将来自分がそのどの部分にもすわり、どのように社会と関連して生活するのだろうか。

ジレンマに陥いった勉強の中で考えて見ると、この様な複雑多様な感情が浮ぶのである。よく考えて見たい。そして、その解決は必要な運動の中にこそあるのだと云うことを。

心の足跡

角田 裕

私がこの学校へ入ってから二年。今に至る迄の心境の変化、大なるものがある。

親に対しての考えについて述べると、入学

当時は、私の成長を、私自身のことを、心から心配してくれる尊厳的存在として認め、現在においては、その私への愛情を不変の事実として認め、一方においてはその人間性について判断をし、その私に対する人間的、また社会的価値を無意識のうちに考えるようになっていた。しかし、その判断は、愛情という推し難いものを判断するため、その判断の結晶である考えには、私は確信がもてない。とまれ入学当時と現在とでは、着眼するところが大きく違ってきている。

また、学習面についてみると、権威尊重的な受動的な態度から、自分で考えていく能動的な態度へ変わろうとしている。しかし、短期間に多くのことを覚えなければならぬということから、時間のかかる後者の態度は、現在或る程度慎まなければならないのは遺憾としているところである。だが、学問に対してもその考え方の着眼するところが大きく異なってきたことは否定出来ない事実である。

では何故着眼点が大きく変わったかということである。これは、明らかに心の成長のなすところである。以前は、ある物をみても、そこに存在する事実だけを認め、その意義に

ついでには考えなかった。しかし、今は違う。今は、その意義を考え、さらに推しすすめてその意義に対する考えをもつようになった。日常に起きる出来事についても同様である。まったく、この短期間に、こう大きく変革していくとは実に驚くべきである。

人生における大事な時期といわれる故は、実にここに存すると思うのである。

人生

田中 洵

人生。其の人生。ようやくこれがわかるようになってきた。それが故に過去を後悔するようにもなってきた。過去。二度と戻って来ない過去。いったい有意義に過ごして来たろうか。今こうしている内にも、時はみるみる内に去っていくのである。無駄な生活を送ることが実に惜しく思われてくる。老い果てた後に、自身の過去を不足に感じて手おくれである。やるなら今の内。万事にガムシヤラに手を出し、時間を食い尽して余すところがないように生活することだ。今を人生の再出発点とし、この事をこれから先、実行して、不足のない生活を送るよう努めるつもりだ。

時の課題

堀内 康雄

時間は、すべての人に平等に与えられたもので、人生は、その24時間をどう使ったか、その総決算報告書であると朝日の社説に書いてあった。確かに、この世で成功したという人は、時間を有効に使い、自分のやるべき事に集中・努力した人であろう。自分のやるべき事をよく知り、時間をおろそかにしないでそれを有効に使って努力した人がこの世では人を制するのである。が、僕は、何事も無計画で、なりゆきにまかせているような人間である。こんな事では、無責任で、利己主義な考える事をしない現代人の悪い所だけを集めたような人になってしまいうだろう。こうなってしまう原因は、時間の使い方の問題だけではないだろうが、それが根本の問題である事は確かだろう。時間は人生の根本をなすものである。これに追いかけて右往左往したりしてはいけない。より良い時間の利用法を考え、それにそって計画を立て、実行して充実した生活を送る。これが、僕の念願する『時の課題』である。

人間ども

田村 一晴

人間は何故生まれてきたのだろうか。神は何故に人間を創ったのだろうか。人間は死ぬのだろうか。意識する時間は何に支えられているのだろうか。一日一日過ぎてゆく。そのたびに死は近づいてくる。何を自分はしたらよいのだろうか。何をしたらいいかって、それが何のためになるのだろうか。金？名譽？学問を蓄える。もともとと積み。しかし死が待っている。いままでの労の結晶はどうなるのだろうか。何のために積み蓄えるのだろうか。わからない。わからない。神は人間を創っておきながら、一向に答えようとしてない。なぜだろうか。人間は生きたいのだろうか。どうして。何もわからないものを見つけないためだろうか。ばかな奴だ。そんなもの見つかるとは思えない。そんなものはないからだ。

……おわり……

自戒

深沢 保憲

幸福とは、おそらく、自分で生みだしていくものである。だから、自分の生き方でできるであろう。しかるに私はどうであろう。自分で築くべきであろう幸福を、正しい努力によってうまれるであろう幸福を、積極的に求めないではないか。そして、運命（あまりすきなことばではないが）の偶然にまかせる幸福にたよっているではないか。

また、事実の幸福をもてないため、考え方の幸福でごまかしているではないか。たとえば恋愛の不自由さを、一年後の入学の喜びのためだと、ごまかしているではないか。はたして、二度と帰らない青春を、こんなごまかしの生活ですごしていいんだらうか？

私は正しい努力をしていなかった。私は今からでも遅くないと確信し、正しい努力をして、私の人生が幸福に向かって進んでいくようにしたいと思う。

アジアの日本

守 屋 一 博

「戦後二十年、日本は経済的に大いに復興したが、人々の心の中には深い空洞ができあがっている。」と言われている。しかし一方若い層に、戦前と違った「新しい日本」についての考え方ができあがりつつあるという事実は否めない。

私はこの冬休みに東京の予備校へ行ったがその帰り道で友達と「日本」について話した。彼は非常な民族主義者で、現在の日本を積極的に肯定した。彼は、日本の行き方として「アメリカとの連携を深め、自由国家の一員として経済を繁栄させるべきである。」と言う。私もこの考えの大綱は賛成である。が、少しさびしい気がする。つまり次の様な疑問である。「我々はアジア人ではないのか。アジアの貧しい後進国は、あまりに西を向きすぎた日本をどう考えているのだろうか。確かにアメリカは日本にとって大事な国である。が、日本がアジアの一員であるという点において、アジアはより大事なのではあるまいか。二十数年前に太平洋戦争があつた。

た。日本人の大部分はこれを一方的に悪かったと思ひこんでいるようだが、植民地であつたアジアに民族主義の息吹を吹き込み、白人に対する現地人の劣等感を幾分でもなくさせた点で意義を認めるべきではなからうか。この戦争で日本は、大東亜共栄圏という思想を打ち出したが、今こそアジア共栄圏のビジョンを打ち出し、誠意を持ってアジアに工業化のインシアチブをとるべきではなからうか。ある首相は、『日本は大国である。』と言ったが、軍隊を持たない日本が真に大国として認められる為には、『アメリカの。パートナー』であるより、しっかりと外交を確立し、経済援助（アタイドローン）を通じて、『南の国々』を助けることではなからうか。」

私は日本が好きである。日本人ならだれでもそうだろう。しかし、多くの人は現在の日本に満足していない。日本収まだ発展する余地が残っているからだ。よりよい未来の為に各々が自分の能力をフルに発揮しようではないか。それが我々に課せられた義務だろう。

愛国心について

山 田 忠

今日、愛国心についていろいろいわれ、特に「現代の若者とりわけ高校生は愛国心を持つてはいない」といわれているが決して多くはそうは思わない。

では愛国心とはいかなる物であろうか。「戦争・右翼・天皇等」を連想する人が多いだろうが、しかしそれだけではないのである。

日本という国を立派にし、人類発展に協力して世界の人々に対してこの祖国である日本の真の価値を認めさせる。そういう一面もあるだろう。今は良くなっただろうが、数年前までは外国の地理の教科書には日本という国は「人力車が一般的な乗物で、人は皆、着物をき、下駄をはいて歩いている」という風に紹介された所もあるという。そんな話をきく度に、ぼくは非常なくやしきをおぼえるのだ。日本の今の姿はそんなんじゃないやなくて、もっと進んでいるんだぞ、と。

又、オリソピックの際、日の丸を見て漠然とではあるが皆感激した事だろう。いつもは国旗を見ても何の感じもしないが、外国の旗

にまじつての日の丸を見い出すうれしさ。これらは日本という国を愛しているからこそ、あの様な感じが生ずるのではなからうか。

以上の様な面からいっても決してぼくたち高校生が愛国心を持っていないという事はないのである。ただ愛国心という単語からの「戦争・右翼・天皇」のイメージが強すぎる為のことである。だからぼくたち高校生はこの様な愛国心をもって、日本を住み良い国にして世界に日本という国はこんなに良い国なんだとはこれる様に邁進するのが使命ではなからうか。

無 常

山 本 順 二

人生無_レ根_二根_一 瓢_レ如_二階上塵_一
分散逐_レ風_レ 此已非_二常身_一
落_レ地為_二兄弟_一 何必骨肉親_レ
待_レ歎_レ作_レ樂 斗酒聚_二比隣_一
盛年不_二重来_一 一日難_二再農_一
及_レ時当_二勉勵_一 歲月不_レ待_レ人

人生というものは無常で変転きわたりのないものである。だからこの世に生を受けたものはすべてが兄弟のようなものである。したが

僕 の 善意観

横 森 万

僕は人間の善意親切に対して否定的な考えを持っている。

たとえばこうだ。歳末助け合い運動へ協力を呼びかけられると、協力する気持ちはおきず政治の理想はいいんだ。政治の貧困がこんな運動せわはならなくしたんだと思うだけだ。又新聞などに善行者の名前がのるとその人達の純粋な気持ちを信じる事ができないでただの偽善者だときめつけたくなる。

赤い羽根を胸につけた人を見ると10円で免許符を買った偽善者ときめつけたくなる。

どうしてこうなんだろう、僕の考えは異常ではないだろうか、いつになったらこんな考えから脱けだすことができるだろう？

友達はどうなにか考えているだろう。

僕は今までこの考えを直すように勉めてきた。しかしまだ直すことができない。

僕は一生この考えを持ちつづけるかもしれないが、この考えを直すよう今後も努力していくつもりだ。





逆 転

河西政和

彼は寝返りをうった。
と、そのとたん
不思議なおこった
地球が逆に回りはじめたのだ
と、そのとたん
世の中のすべてのものが逆になった
「上」は「下」に
「右」は「左」に
すべての不等号は逆に向き
プラス、マイナスは一変し
価値判断は逆になった
人々は言った
これこそ其の姿だ と

家 路

数野清治

十時過ぎの町
その静けさ破って動きだすオンポロ車
容赦なく身を刺す風。
信号の煩わしさ以上の警察の停止合図
御苦労さんの言葉も出ない
この気持。
免許証持つ手も震えてる
人の気持ちも知らず
疲れたと言わんばかりのエンジン
力まかせに踏みめば

京の夜に空はない

金 原 栄

京の夜に空はない
白いコートをなびかせる
都の風には夢がない
さつき見かけたボックリの
だらりの帯に魅せられて
故郷の母さん思い出し
故郷のあの子がしのばれる
五色のネオンに泣かされて
落とす涙のしずくの中に
輝く夜空の星はない

山

斉藤茂樹

朝日にキラリ／と冷めたく
輝いている山を眺めた。
刻々に色彩を変えて、

美しく静かに、死する如く、
又けわしく、きびしくたけり狂う

猛獣の如く、

生／と死／と 静／と動／を

きびしく教えてくれる山ノ

しかし山は僕等を限りなく魅惑する。

大きな夢と希望を持って／と

強く明るく生きろ／と

大自然の中に今朝も神秘をたたえて

冷めたくそびえている

寒 風

田中紀夫

グイッと氷のベタルを強く踏む
しかし風も負けまいと体当りする
やつは俺の耳と鼻を凍らし
手をハンドルにしぼりつけ
氷の足の回転を止めようとする
やつは首から腹にしのび込め
この俺様をして肩をすばませようとする
「畜生めこのやろう」／
俺はいきなりどなりつけてやった
しかし依然として風は突進してくる
しかも俺をあざけり笑いながら

帰 路

広瀬孝嘉

そこは私の帰路
畑中の一本路
いつもの時間に
いつもの路を
私は帰る、一人で、
冷たい風にうたれながら
私は考える
今日一目の生活を
良かったことあり
後悔することあり
そして私は思う いつもでも
希望に満ちた明日の生活を
そこは私の帰路
空気のおいしい田舎路
西空のほんのり赤い夕焼けが
私のほおを染める頃、
私は帰る、一人で
果てしない大空を見上げて

柿

中 込 純

或る朝
ガラス戸を開けてみると

竹の棒に

真新しい柿がさがりていた

昨日の夜

家族全員でむいた柿なのだ

母のむいた柿、自分のむいた柿

全て、その人の特徴が

一つ、一つの柿に表わされている

朝日に映った柿は

これから出かける自分に

何か良い事が起るかのように

祈っている感じを与えている

この柿の命も

あと数日であろう

柿、柿、柿

この柿を

そのままここに下げておきたい

日新鐘

中楯 洋

北館の北側に小さくつるさがっている鐘が

ある

彼は、今はならされず

廃物同様になっている。

しかし、

彼は、僕に親しみをあたえ、

そして、

勇気を与えてくれる。

又、いつも、

高い理想を追う、足がかりとなる。

彼は、口ぐせのように、いつもこう私をい

ましめる。

「むかつてくる一日一日に、意義を与えな

さい。」

と

そして、

彼は、今

赤い夕日の中に、堂々と

その肢体をうずめていく。

雲の上

林 幹雄

白い感傷を

突切って

かけ上った

雲の上

体に一杯ふりかかる

まぶしい光に向って

僕は

ちよびり

挨拶を送る

白いスポンジに

寝そべって

下界の

人々を見つめる

皆、常に幸福であれ

と、願いながら

僕は

雲の上から

笑顔を送る

インドネシア墓参 シヤレコウベの歌

樋口 一

シヤレコウベが一つ

うつろなまなこを見ひらいて

遠い昔を夢みている

その顔いつばいに笑をうかべて

シヤレコウベが

背骨が 骨盤が

大たい骨が ろつ骨が

いまにもくずれ出しそうに

いまにも踊り出しそうに

踊って日本へ帰る日を

今も夢みて踊ってる

踊ってる……

銀の玉の哀歌

山岡 政興

禿頭のじいさんも

体をふりふりやってます

パシッ パシッ てね

君 どこへ行くの

わからないや

こっちへこいよ

こちらへいらつしやい

ああ どうしようかな

って話してますよ

四角の奇妙な箱の中で

せわしく動く銀の玉と

待ち構える不思議な穴と

オス よってけや

ん 頭が重いんでね

って まっすぐ落ちてったよ

不思議だな ほんとうに

そんな様子ですよ 禿頭さんも

君 何を悩んでるんだい

うん これからずつと

ずうつと何をすればいいのかなってね

きまつてるさ

禿頭が喜ぶようにすれば

それでいいのさ

いア そんなもんかね

銀色の玉が私にもたずねましたよ

これでいいのかつて

これを生甲斐とするべきか つてね

ウホッ 大きなでっかいお目さんが

ビルディングの上でほえんでました

(修学旅行京都の夜の想い出)



“ 高校生活二年間の回顧と新三年への期待 ”

去る一月三十日（土）午後から一高校長室にご父兄七名に御参集をいただき、学校職員をまじえて標記のテーマで座談会を催しました。二時間半にわたる座談のすべてを紙面の都合で掲げるわけにはいかなかったがその要点を編集子がまとめました。出席者は左のとおりでした。

父 兄 側

飯島 暫氏（十一組・学年委員長）
荒木 文男氏（七組・学年副委員長）
花輪 暹氏（三組・〃）
丸山 重平氏（二組・生活指導委員長）
許山 明子氏（十組・生活指導委員）
依田 省吾氏（四組・委員長）
横塚 氏（一組・進学指導委員）

学 校 側

校長・教頭・保坂（忠） 守山、沢登、寺田
望月の各先生
司会 渡 辺

司会 この二年間を回顧して、子供の学習

面、生活指導、学校行事の面から、お話をお願いしたいと存じます。まず入学当初からみますと、二年の間に、そうとう成長なさったと思いますが、とくに変わった点は。

A 入学当時は、純真な子供でしたが、この頃は、自覚して、家のあとつぎをしなければというようなことを考え始めているようです。たのもしく感じられるほど気持ちが大大人になってきたようです。

B 私の子供は、女の子で、しかも末子ですから、とても子供っぽい感じをうけます。でも、この頃、反抗期を脱したのでしょうか、少し大人になったようにみえ



ますし、だいぶ落ち着いてきました。

A 反抗期、たしかに母親に反抗しなければメンツがたたないという時期もありましたね。

C 二年になると、そういうところをぬけてたわけですかね。

D そうでしょうね。私の子供は、家業の自覚ということはないようですが、一年生の時に学校に慣れたのでしょうか。最近進学の意識をつよくもってきたようです。自分で、どういう方向に進もうかというところに、焦点をしばっているようです。

A 私など中学生のころは家業など考えませんでした。実質的になりましたね。

E そうですね。私たちの頃は、何とかして良い学校にと考えたのですが、今の子供は、自分の力に合った学校をというふうになり自覚していて、高望みをしない傾向になりましたね。堅実ですが、青年らしい夢もなく、スケールが小さくなったような感じがしますね。人生は長事んだから、一度や二度落ちても、将来目的を上げればよいという気概が欲しいですね。

D 反抗期は過ぎたのか、「お前の方向は無理だ」というと、父親のいうことをよく聞きその方面の勉強をしますよ。



A 能力を自覚しているんですね。

E 私のところは、反抗期でも反抗らしいことは、しなかったのですが、末っ子やすから、いつも兄や姉をみならっているようです。

司 反抗期を抜け出して自覚がでくると自分のことも自分で考えて、進路などを始め、いろいろなことに迷いを生じて悩むので、精神面では、何かにすがろうとする傾向がありませんか。たとえば宗教的な傾向なんか。

C 社会が悪いから青少年が悪くなる」と

この前の意識調査にありましたが、YMC Aに一生懸命になったり、社会奉仕に芽生えたり、宗教的な意識なども生じてきているようです。

E しかし実際は、学校のことに追われて何にもなくて過す方が多いのではないのでしょうか。

D とくに信仰のある家庭の子供を除いては、宗教に無関心ではないですか。これは、日本人の特徴でしょう。

E 親が無関心だから子供も——というのが現実ですね。

F でも文学的な関心をもった子供さんにはそういう傾向はあるでしょうね。何か精神的にすくわれたという気持で。

司 そうですね。特定な神というもののへの信仰ではなくて、観念的に宗教的なものを求めるという傾向が芽生えてくるようですね。

F うちの子供なんか宗教ということに関心を示さず、今のところ受験勉強に専念しているようなんですけれど。

B 高校時代に宗教的なものの芽生えがでて、大学へ行ってから、真剣に考えるようになってくるじゃないですか。そうでしょうね。高校時代は名作を読



む時間も
ないが、
大学に入
ると、多
少ゆとり
がありま
すので、
いろいろ
な本を読
んで精神
的にも成
長するよ
うですね
G 私のク
ラスでも
非常に人生の問題に悩んでいる生徒があ
つて、生とか死とか考えています。性急
に結論をだすのはひかえるようにいつて
いるんですが、そんな時成績が落ちたり
しますが、こういう点をどう指導したら
よいでしょうか。
E 親としては、そういうことは大学へ入
ってから考えてもらいたい。今の時代に
しっかりした考えをもつように、そうい
う芽を育ててやらねばならないので
す。
D そうですね。しかし現実をみますと、

今の二年生は数がたいへん多く、それだ
け進学も重荷です。いろいろのことを考
える暇がないでしょう。やはり人生の悩
みへの芽生えは大切ですが、自分なりの
結論は将来でしょうね。勉強はたいへん
ですから、
F ほんとうに勉強することは苦しいこと
で努力がいると思うんです。ですからそ
ういう努力は、精神的に何かプラスする
面があるんでしょうか。はたで見えてい
てもとてたいへんですね。
H これくらいやったら大学に行かなくて
もいいんじゃないかと思うほどですね。
E それは入試制度が悪いんですね。今の
子供には、もう少し人生をエンジョイさ
せてやっていいと思うんですよ。大学を
出なければいかんといった考えから、そ
れ勉強だ試験だと。全くいけませんね。
大学に行くことばかりが人生ではないで
すから。
B 私の子供は、勉強しなくて困るんです
が特に興味のある科目とかは入りたい大
学もないせいかなと思うのですけれど、も
うちょっと勉強をと、そればかりです。
E 勉強しなくても成績の良い子供もい
す。でも知れませんが、普通の頭の子供だ
つたら、よほど努力しないと、高校の課理

はマスターできませんね。
司 反抗も過ぎて自覚的になりつつあると
いうことですが、学校行事で、とくに修
学旅行とか身延山はいかがでしたか。
H とてもいいんじゃないですか。友人関
係も円滑になって、たがいに教えあつた
りして。集団生活は、たしかにいいよう
です。
E できるだけああいいう機会を作ってもら
いたいですね。
D 何時も勉強に追われていてクラブ活動
もしない、学校と家との往復ばかりです
から接触する機会もあります。親父や
おふくろなど話しあつてたいへんよかつ
たようですね。
C 集団的行動によって精神的にふれ合
うていいことですね。
司 先きごろ終った修学旅行はいかがです
か。お子様方のプラスになった面とか、
変つたと思われる面とか、お話しねがい
たいのですが。
E 二年生は割り合いに節度をわきまえて
いますから、若さを発散させることも必
要でしょうね。ある程度はめをはずして
A 悪い影響はなかったようですね。
司 非常に仏像などに関心をもちまして、
私などは、「負うた子に教ええられる」と

いう感じを受けました。
G 旅館での話し合いは、ちよつと懸念し
たのですが、生徒の方では、とても喜ん
でいる傾向がありました。
F うちの子は、流行歌などにあまり関心
がなかったようですが、旅行でずいぶん
覚えてきたようです。
B 家の子は、旅行の前にレコードをかけ
て覚えていましたが、長女とちがつて仏
像なんか関心を持ったかどうかわかりま
せん。とにかく楽しそうでしたよ。
P 今の二年生は、ベビーブームで何でも
競争で育ってきたせいか、情緒的な面が
一番かかっていますね。兄弟の中でもちよ
つとかわいそうです。
E 修学旅行の目的はいろいろあるでしょ
うが、あまり盛沢山にしないで、「あの
時は楽しかった」という思い出があるよ
うにしたいと思います。ですから見て為にな
つたというよりも、知らないところへ行
ってきたという楽しさ、友達といろいろ話
しができて楽しかったというふうには。
C 今年の旅行は、時間的余裕をもって計
画したので、疲れてどうしようもないと
いうことはなかったようです。生徒の感
想ですが、仏像や寺を見て、よくこれだ
けのものを作つたなあと感心したようで

す。ご父兄方で風紀の上でお気づきのよ
うなことはなかったですか。
H 何も問題があったような点はきいてい
ません、私たちより今の子供の方がおと
なしにいいんじゃないですか。
E 昔の子供は喧嘩したり、新聞沙汰にな
るほどあらつぽかつたようです。それに
比べると今の子供は節度をわきまえてい
ますね。
C 最後の晩など、ほとんど寝ないで話を
したりして、結構、青春のエネルギーを
爆発させるようなこともありました。し
かしよく規律を守つたと思います。
E ふだんの教育がよかつたからでしょう
ね。
D 旅行にはあまり期待をかけてはいけま
せんね。子供に何が一番楽しかつた聞い
つたら、うなどんが……笑、とにかく車
の中で皆で歌つたとか、知らない土地で
友達と話し合うとか、それだけでもいい
じゃないですか。友達と話をする場合で
も、甲府の旅館へ泊つてやつたんでは、
そうはいきませんですからね。
E いろんなことを話し合うことはいいこ
とですね。私は三年間、寮にいましたが
文科のやつもいれば、理科のやつもい
て」いろいろ話し合いましたよ。それが

私の人格をつくるのに大変役立ちました
よ(笑)
校長先生は、二年生をどう考えていらつ
しゃいますか。
校長 今の二年生は数が多いだけでなく、
とても足並みが揃つている：感じがしま
す。まずいたとえですが、蚕がみんな揃
つて桑を食べていると実に夕立ちのよう
な音がしますけれど、そんなふうに、み
んなが揃つて進んでいるような気がしま
す。
E そういう傾向は大変結構ですけれど、
みんなが一つの枠にはまつてしまつたよ
うなかたちでは困ると思いますが。
校長 御心配のようには、決して枠には
まつておりません。ただ二・三年前にく
らべると、みんなが勉強しようという気
構えは、そろっているようですが、そ
ういうことは受験校の本校としては当然の
ことではないでしょうか。勉強の中に押
し込んでいいるのではなく、生徒自身が自
覚して、揃つて勉強態勢に入っているよ
うです。
司 新三年生に対しては、どんな希望をも
つていらつしやるでしょうか。
I 三年生になつても、この持ち味をもつ
て進んでほしい。大学受験をひかえた子

供たちをみると、可哀想な気がします。

それは自己を知り、夢をあきらめ、現実につきすぎているからか。とにかく、子供ののために喜ばれる親になりたいですね。

A そうですね。現実を割り切って自覚しているんですね。

I ですから、昔のように英雄、豪傑のような人は望めませんね。

E 時代ですね。善良な人間しか生まれないうんです。まあ親が期待をかけすぎないことが、私たちのつとめではないでしょうか。ところで、校長先生は、どう考えですか。

校長 特色のない生徒たちとは思っておりません。将来性のある大器もありますがこの学年は、いい意味で足並が揃っています。それは先生方の足並みがそろっているからでしょうか。とにかく私は、1、今の調子を落さない努力を続ける。2、もう一度、合宿をしたい。3、年度初めから、理科、社会の学習にも力をいれる。4、クラスの生徒と教師の交流。など四項に努力していきたいと思っています。

B 私は親の立場から、まずいつも家にい

て子供の相談相手になろうと思っています。そして子供の、勉強、悩み、健康、志望校の決定などに、干渉ではなくて、あたたかい気持ちで手助けしてあげたいと

と考えています。

F 子供の勉強は大変ですから、期待をかけすぎないように、圧迫をあたえないよう、雰囲気を作ってあげたいと思います。

司 まだまだお話ししたいことばかりですが、今日はこの辺で。どうも長い間ありがとうございました。

昭和四十年三月二十日印刷

昭和四十年三年二十五日発行

あしおと

甲府第一高等学校第二学年

編集兼発行 学年誌編集委員会

甲府市美咲二丁目13番44号

印刷者 佐藤 森 三

印刷所 株式会社 又新 社

甲府市丸の内二丁目30-17
電話 ② 七二九五